少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究

平成15年5月

財団法人 シニアプラン開発機構

はじめに

日本の少子化は近年急速に進行し、平成13年の合計特殊出生率は、1.33と平成11年の1.34を下回り過去最低を更新、出生者総数も117万人と戦後最低となっている。直近の将来人口推計では、これまでの合計特殊出生率が回復するという見通しから、より現状に近い推移をベースにした見通しに転換を図ってきており、厚生労働省が平成14年9月に発表した「少子化対策プラスワン」も、これまでとは異なった切り口で少子化対策に取り組む姿勢がみてとれ、いわゆる少子化問題は新たなステージに入った状況にあり、今後の社会保証等に大きな影響を与えることが必至となっている。

そこで当財団では、このような社会的状況を踏まえて「少子化」に関する課題や問題点を浮き彫りにし、具体的な内容を盛り込んだ、生活実態に基づいた提言書を作成することを目標として、金子勇北海道大学大学院文学研究科教授を座長とした研究会を組織し、「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」を実施した。

研究手法としては、現在の子育て世代の抱える問題点やニーズを明確に捉えるために、グループインタビュー形式での聞き取り調査を実施した。調査対象は、現在の子育て世代である30～40歳の男女で、参加者に偏りが生じないように、性別、婚姻の有無、妻の職業の有無、子供の有無に留意して1グループ約8名で構成した。インタビューは各都市で3グループを対象に実施し、札幌、福岡、東京と政令指定都市の中でも少子化が進行している3都市で実施した。

本報告書は、定性的調査として上記3都市で実施したグループインタビュー調査結果、及び定量的調査としてサンプル数に制約があり試験的調査の性格にとどまるもののグループインタビュー参加者を対象としたアンケート調査結果を踏まえてその成果を取りまとめたものとなる。

本報告書の視点や構成を以下の通り説明する。

第1部は、本研究の出発点として、急速に進行している少子化の現状と研究方法を解説している。

第1章では、日本の合計特殊出生率の低下の状況、将来人口推計を確認し、そこに内在する問題点について考察している。

第2章では、社会調査手法として本研究で採用したグループインタビュー法の特徴、目的、具体的な方法について解説している。

第2部は、グループインタビュー調査を踏まえ、子育て支援方策の諸問題をそれぞれの観点から考察する。

第1章では、新旧エンゼルプランに代表されるこれまでの少子化対策についての問題点を確認し、また少子化対策プラスワンについても考察している。

第2章では、少子化対策プラスワンで打ち出された働き方の多様化について実現可能性を探り、また世代間の支えあいの観点から「子育て基金」制度（仮称）について考察している。

第3章では、地域における子育て支援について、グループインタビュー調査から得られた地域における子育て支援ニーズを分析し、今後の子育て支援策の展開について考察している。

第3部では、3都市（札幌・福岡・東京）合計9回（モニター数73名）で実施したグループインタビュー面接記録の内容を要約して掲載している。

第4部では、付属資料として、グループインタビュー参加者属性一覧、アンケート調査票及び「少子化対策プラスワン」の要点を掲載した。

最後に本報告書が今後の少子化研究及び対策について考察を深める際に多数の方々にご活用いただければ幸いである。また、お忙しい中、今回の調査に快くご協力下さった皆様方に心から感謝申しあげる次第である。

平成15年5月

財団法人シニアプラン開発機構

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」
研究会メンバー（敬称略）

座　長：	金子　勇	北海道大学大学院文学研究科教授
	安梅　勅江	浜松医科大学医学部教授
事務局：	佐藤　仁之	厚生年金基金連合会上席調査役
	矢合　健一	財団法人シニアプラン開発機構主任研究員
	喜田　勇作	財団法人シニアプラン開発機構主任研究員
	築田　功二	財団法人シニアプラン開発機構主任研究員（～平成14年9月）
	上野　雅司	財団法人シニアプラン開発機構主任研究員（平成14年7月～）
	内田　雅美	財団法人シニアプラン開発機構主任研究員（平成14年10月～）

目　次

はじめに

第1部　少子化の現状と研究方法

第1章　少子化の現状とその進行要因 …… 1

（執筆：北海道大学大学院文学研究科教授　金子　勇）

第１節　日本新記録が続く少子化関連データ …… 1

第２節　少子化の原因としての未婚率の上昇と既婚者の出生力の低下 …… 5

第３節　小家族化のなかでの子育て負担の共有 …… 8

第2章　グループインタビュー法の特徴 …… 13

（執筆：浜松医科大学医学部教授　安梅　勅江）

第１節　グループインタビュー法とは何か …… 13

第２節　グループインタビュー法の目的 …… 15

第３節　グループインタビュー法の特徴 …… 16

第４節　グループインタビューの方法 …… 19

第５節　グループインタビュー法の活用に向けて …… 21

第2部　子育て支援方策に関するグループインタビューに基づく意見と提言

第1章　従来の子育て支援制度の特徴と問題 …… 23

（執筆：北海道大学大学院文学研究科教授　金子　勇）

第１節　少子化対策小史 …… 23

第２節　少子化対策プラスワンへの意見 …… 27

第2章　働き方の見直しと世代間の支えあい …… 34

（執筆：北海道大学大学院文学研究科教授　金子　勇）

第１節　「少子化対策プラスワン」と短時間労働 …… 34

第２節　労働時間の実態と参加者の意見 …… 39

第３節　子育て負担の実態と評価の問題 …… 41

第４節　世代間の支えあいの現状と課題 …… 45

第3章　地域における子育て支援について …… 54

（執筆：浜松医科大学医学部教授　安梅　勅江）

第１節　地域における子育て支援の現状と課題 …… 54

第２節　グループインタビューより得られた地域における子育て支援ニーズ …… 55

第３節　地域における子育て支援の今後の展開に向けて …… 68

第４節　結論―少子高齢対策としての地域における子育て支援 …… 70

第3部　グループインタビュー記録…… 71

第4部　付属資料

資料１：グループインタビュー参加者属性一覧…… 197

資料２：アンケート調査票…… 199

資料３：少子化対策プラスワン（要点）…… 205

第１部　少子化の現状と研究方法

第１章　少子化の現状とその進行要因

第２章　グループインタビュー法の特徴

第1章　少子化の現状とその進行要因

第1節　日本新記録が続く少子化関連データ

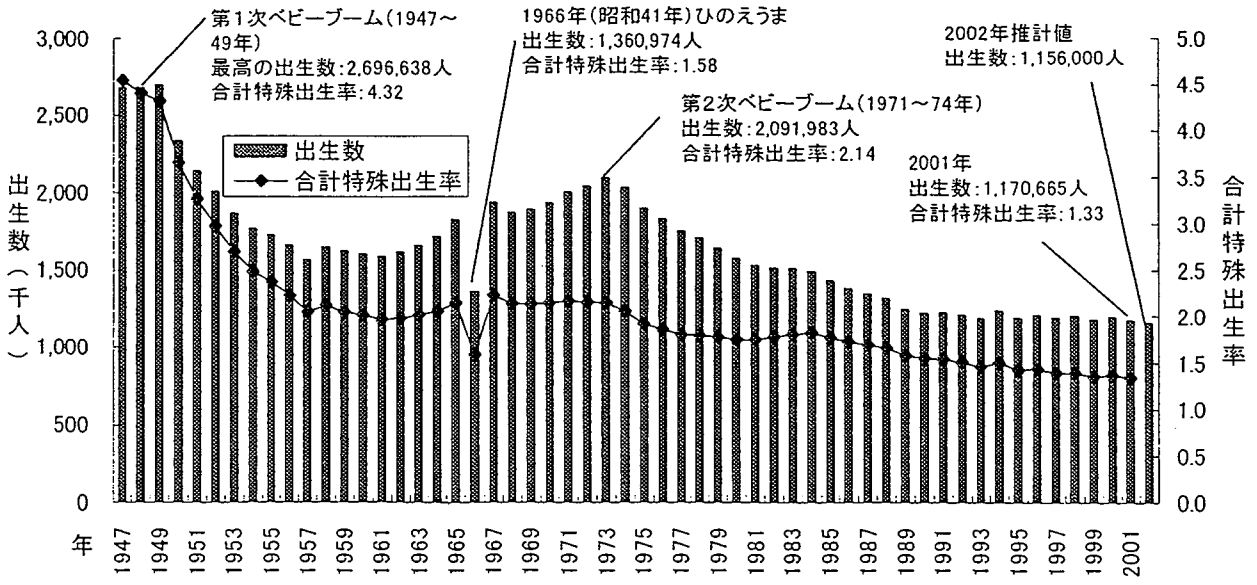
少子化は合計特殊出生率、人口千人当たりの普通出生率、年少人口率、単年度の出生総数の4指標が軒並み持続的に低下していく社会的現象を表わす。たとえば2002年6月に厚生労働省から発表された2001年の合計特殊出生率は、史上最低の1.33であった。普通出生率も合計特殊出生率と同じく減少中であり、2001年では9.5まで低下した。また、2002年の年少人口率は14.3%、高齢化率は18.5%となり、両者の比率の格差は増大しつつある。出生総数117万人も日本での統計記録が残っている1899年以来の最低であり、しかも2002年の出生総数（速報）は115.6万人になり、どちらでも日本新記録が更新されつづけている。表1は低い順からの都道府県別の合計特殊出生率一覧である。

表1　低い順からの都道府県別の合計特殊出生率（2001年；%）

東京	1.00	兵庫	1.29	秋田	1.40	山梨	1.42	青森	1.47	山形	1.58
京都	1.20	福岡	1.31	茨城	1.40	高知	1.42	大分	1.48	鳥取	1.58
北海道	1.21	宮城	1.33	富山	1.40	栃木	1.43	長野	1.50	福島	1.60
神奈川	1.22	愛知	1.36	石川	1.40	山口	1.43	岩手	1.52	島根	1.60
奈良	1.22	岐阜	1.37	静岡	1.40	香川	1.43	福井	1.52	宮崎	1.60
埼玉	1.24	広島	1.37	愛媛	1.40	新潟	1.45	長崎	1.52	佐賀	1.62
千葉	1.24	三重	1.38	和歌山	1.41	滋賀	1.46	熊本	1.52	沖縄	1.83
大阪	1.24	徳島	1.39	群馬	1.42	岡山	1.46	鹿児島	1.53	全国	**1.33**

また、図1は出生数と合計特殊出生率の推移を整理したものである。この傾向を延長して分析すると、2050年以降では「50年周期における人口半減」という社会法則が成立する。

図1　合計特殊出生率と出生数の推移



国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研と略称）が2002年1月末に発表した『日本の将来人口推計』では、これまでの伝統を踏襲しつつ、高位、中位、低位の3種類の仮定をしたうえで、合計特殊出生率をはじめとした各種人口動態の推計結果がまとめられている。合計特殊出生率の結果だけを抜き出すと、まず高位予測では2000年の1.36がただちに上昇に転じて2049年には1.63になるとのべられる一方で、中位予測では1.39への横ばい、低位予測では漸減が続いて1.10にまで低下するとされている。しかし2001年の結果は中位予測を裏切り、低位予測に向かう日本人口の方向を明瞭に示している。

その低位推計では、2050年の日本の総人口数が92,031,000人とされ、また2100年には46,450,000人と見なされている。2002年の総人口は127,000,000人であるから、50年間で3,000万人、100年間で8,000万人の減少になる。まさに空前絶後の人口大減少である。このままでは急速に日本社会の活力は低下して、政治、経済、文化を含む社会構造の衰退は免れ得ないであろう。もちろん福祉の構造にも劇的な影響が予想される。

しかもこの人口大減少は、達成された社会的・個人的豊かさを防衛しようとする先進国における人間の価値意識と、それに方向付けられたライフスタイルに原因があるので、ひとまず先進国の宿命といってもよい。日本と同じくＯＤＡを拠出してきた21の先進国の大半、たとえばイタリア（合計特殊出生率1.18)、ドイツ（同1.36)、イギリス（同1.68)、フランス（同1.77）などでは、2000年前後には軒並み少子化が鮮明になってきた。しかし、アメリカだけが例外的に合計特殊出生率が過去30年間で2000年は最高になり、2000年の合計特殊出生率が2.13となった。

この出生率増大の背景には人種別の相違がある。米疾病対策センター（ＣＤＣ）が2002年2月に発表した合計特殊出生率関連データを見ると、白人とアジア系が2.1、アフリカ系が2.2、そしてヒスパニック系が3.1であり、アメリカ社会の構造的難問である人種的な相違が出生率にも鮮明に反映している。年代別では10歳代を除き、すべての年代で出生数が増加した。全体の33.2％が結婚していない女性（非婚の母）による出産であり、この比率は1999年に比べると33％も増加した。スウェーデンやデンマークの常時50％を超える「非婚の母」割合ほどではないが、アメリカでもこの「非婚の母」の増大がすべての出産年代で確認できる。アメリカの現状には人種の影響という独自の条件が存在しており、少なくとも日本の少子化克服のモデルにはなりえない。

では日本の合計特殊出生率1.33から、私たちはどのような思索が可能か。社人研の高位予測でさえ、2050年における日本社会の合計特殊出生率は1.63の推計値でしかない。しかも、

表 2　1999 年出生率、死亡率を一定にした将来の人口指標(%)

年	総人口(人)	0 - 14 歳	15 - 64 歳	65 歳以上	75 歳以上
1999	126,686,324	14.79	68.48	16.72	6.71
2000	126,865,545	14.58	68.17	17.25	7.02
2050	88,379,464	10.72	55.58	33.70	18.76
2100	42,828,899	10.64	55.89	33.47	18.85
2200	9,934,747	10.57	55.73	33.70	19.21
2500	123,570	10.56	55.80	33.64	19.24
3000	83	10.56	55.80	33.64	19.24

(注)社人研編『人口の動向　日本と世界 2000』厚生統計協会、2000:47。

2001 年現在の東京都の合計特殊出生率が 1.00 であることを考えると、高位予測が希望的観測を交えた数値であることは明白である。何しろ、甘いと批判された 1997 年の前回推計に基づいた 1999 年試算の社人研の『人口問題研究』でさえ、表 2 のような推計結果を公表していたのであるから。これは合計特殊出生率を 1.34 と仮定し、死亡率を男の平均寿命が 77.10 歳、女のそれが 83.99 歳とした予測値である。そうすると、2050 年には 8,838 万人になり、2100 年も 4,283 万人となり、今回の場合よりもともに 400 万人ほど少なかった。合計特殊出生率のどの数値を使っても、人口再生産水準の 2.08 を大幅に割り込んでいるのであるから、2050 年からの 50 年ごとの「半減の法則」で、いずれにしても日本社会は 1000 年後には消滅してしまう。

ただし、われわれの関心は、人口学が得意な将来推計人口数や合計特殊出生率の予測数値の当たり外れにあるのではない。どの仮定に立脚しても 50 年後には日本人が 3,000 万人も減少すること、しかもそれ以降は 50 年で必ず半減するという予測に接した場合の想像力を、国民ないしは学界がどのように発揮するかにむしろ興味がある。社会学的想像力の意義をこのような人口予測値が教えてくれる。1000 年後の 3000 年には日本人総数が 83 人になると政府の機関が予測したのに、当時の政治も行政もマスコミも鈍い対応であった。そして今回の新予測値でも事情はあまり変わらない。

たとえば、「少子社会はゆとり社会」として「少子化メリット」論の主張は今もある。要は住宅事情が好転し、交通混雑が緩和され、「受験地獄」が解消するというに尽きる。加えて、相変わらずの「自分の夢を追う、自分の価値観を大事にする、ライフスタイルを大切にする、こんな世の中に子供を産めるのか」といった「子育てフリーライダー」を擁護する記事が掲載される(『朝日新聞』(2002 年 6 月 13 日)。この「子育てフリーライダー」は高山憲之が繰り返し例示する「子どもは自分では産まず(つくらず)、他人に産んで育ててもらう。そして年をとったら他人が産んで育てた子ども等に面倒をみてもらう」(高山、2002 : 100) ライフ

スタイルから私が造語した概念である。

しかし、少子化で市場が縮減した企業でのリストラは必至であり、失業率は上昇し、年金制度や健康保険制度は壊されて、「ゆとりのなかの貧困」とそこから派生する「犯罪」が蔓延する社会が到来するはずである。少子化はデメリットが大きい。地方の過疎はいっそう進み、現在の過疎指定地域社会には、高齢化の究極の地点に無医村ではなく「無人村」がたくさん誕生しているであろう。

2002年3月に社人研が発表した都道府県別の2030年推計人口はこの予測を裏付ける(表3)。産業構造審議会小委員会の試算では、表4が得られており、この推移から、経済成長率は半減し、負担が倍増する「ゆとりのなかの貧困」が目に浮かぶはずである。

表3 日本と北海道の将来推計人口(総人口;千人、年齢別;%)

		2000年	2010年	2020年	2030年
	総人口	126,926	127,473	124,107	117,580
日	0−14歳	14.6	13.4	12.2	11.3
	15−64歳	68.1	64.1	60.0	59.2
本	65歳以上	17.4	22.5	27.8	29.6
	総人口	5,683	5,541	5,227	4,768
北	0−14歳	14.0	12.2	11.1	10.1
海	15−64歳	67.8	63.8	58.0	56.3
道	65歳以上	18.2	24.0	31.0	33.6

(注)社人研が発表した都道府県別の2030年推計人口より。

全人口は確実に減少を始め、少子化と長寿化により、高齢化率は急上昇して、日本全体では29.6%、北海道だけでも33.6%に達する。北海道社会の高齢化の平均値が33.6%であるから、道内自治体によっては50%を超えるところがでてくるであろう。2000年3月の「住民基本台帳」によれば日本で最高の高齢化率は山口県東和町の50.0%であるが、30年後の日本では「東和町」が激増する。

表4 少子化の推移をそのままにした場合の諸指標の変化(%)

	1995年度	2000年度	2010年度	2025年度
経済成長率	2.3	2.6	1.8	0.8
国民負担率	36.7	39.7	47.4	60.0
所得伸び率	1.5	1.9	1.0	−0.3

(注)人口は低位推計値を使用。所得伸び率は勤労者一人当たりの手取額。

少子化の筆頭先進国は日本であるので、適当なモデルを紹介して、それに準拠した対策を練り上げれば何とかなる性質のものではない。北欧型は人口規模が日本の5〜7%しかなく、社会システムの規模の相違を考慮すると、参考にはなるがお手本にはならない。人種間の出生力に格差が鮮明なアメリカの事情も日本がモデルには違いが大きすぎる。日本の社会シス

テムの規模と文化に適合した独自の少子化対策が各方面から提示される時期が到来した（金子、2003)。しかし最新の雑誌でも「国や自治体の少子化対策は、後手後手か、まったくの無策に過ぎない」(堤伸輔、2003：10）とさえ酷評される。われわれは国民の正確な意識とニーズを把握して、実効性のある少子化対策が必要であるという立場から、2002年に3都市でグループインタビュー調査を実施した。これらの結果を活用しつつ、具体的な提言まで本書で行うことを課題としたい。

第2節　少子化の原因としての未婚率の上昇と既婚者の出生力の低下

さて、日本全体でも札幌市でも少子化の最大の原因は未婚率の上昇にある。象徴的には表5に見るように、1975年ころから急上昇を開始した25－29歳の女性未婚率の高さが指摘できる。特に平成になってからの上昇が目立つ。1990年の札幌市のそれは45.2%、日本全体でも40.2%になり、2000年札幌市では58.2%、全国平均でも54%に達した。

表5　25－29歳女性未婚率の推移(日本全体と札幌市;%)

	1975年	1980年	1990年	2000年
日本全体	20.9	24.0	40.2	54.0
札幌市	25.2	29.4	45.2	58.2

(注)国勢調査結果(%)

そして女性だけではなく、表6のように男性の未婚率も同じような上昇傾向を示している。

表6　男女の未婚化(%)

	40歳代前半		40歳代後半	
	男	女	男	女
1950年	1.9	2.0	1.6	1.5
1970年	2.8	5.3	1.9	4.0
1980年	4.7	4.4	3.1	4.4
1990年	11.7	5.8	6.7	4.6
2000年	18.4	8.6	14.6	6.3
2005年	19.5	11.8	16.5	8.2
2010年	18.8	13.7	17.3	11.0
2020年	23.5	14.1	23.8	13.4

(出典)2000年までは国勢調査。それ以降は社人研推計。

要するに、1975年の国勢調査から今日まで、20歳から39歳までの男女の未婚率の増加が著しく、2000年では30－34歳の男性の2.5人に1人、女性の3人に1人が未婚であった。

「婚外子」が常時50%を超える北欧と異なって、2000年のそれが1.6%であった日本社会では「未婚の父母」への国民的な動機付けに乏しい。したがって、未婚率の上昇と出生率の

低下は正の相関を示す。この事実への目配りと比較文化論的な立場からの理論化が、今後の少子化対策には不可避である。

もう一つの少子化の原因は、既婚者の出生率の低下である。表 7「年齢別有配偶出生率」の 20 歳代の女性有配偶者では、札幌市も北海道も東京都も日本全国の平均よりかなり低いが、30 歳代では東京都のみ増加している。しかしそれでも 2001 年の東京都の合計特殊出生率は

表 7 女性有配偶出生率の推移(日本全体と札幌市、北海道、東京都;%)

有配偶出生率	20 - 24 歳	25 - 29 歳	30 - 34 歳	35 - 39 歳
日本全体	0.3462	0.2243	0.1328	0.0397
札 幌 市	0.3066	0.1892	0.1200	0.0392
北 海 道	0.3293	0.2024	0.1184	0.0358
東 京 都	0.2988	0.1958	0.1341	0.0504

(注)社人研『日本の将来推計人口』2002 年 1 月。

なお、有配偶出生率＝出生数／有配偶女性である。

1.00 であった。2002 年 1 月における社人研の推計では、「夫婦完結出生児数」を 1985 年出生コーホートで見ると、高位推計では 1.93 人、中位推計では 1.72 人、低位推計では 1.49 人としている。ただし、2000 年時点で出生を終えている世代（1948 - 52 年）の実績は 2.14 人であった。社人研の推計を考慮すれば、夫婦の出生児数が減少し、結婚すれば 2 人の子どもを持つとの前提がかげりを見せはじめている。とりわけ大都市の有配偶出生率低下が進み、現代日本社会で少子化が進む第二の理由になっている。

その背景には、結婚して家庭を築き、子どもを持つことで生じる様々な負担感が、子育てに抑制的に作用していることが挙げられる。加えて今回のグループインタビューでは負担の複合化がのべられている。「介護されている方、ご老人の方にもとても住みにくい世の中になっていると思います。小児科の先生もはっきり減っています。病院すら今潰れている状況だったりします。悪いことばかりです。もっと国として、小児科の先生に手厚くしてほしい。実は、都立の病院が 1 つ、潰れてしまったのです。このとき私は潰してほしくないと署名運動もして、都知事にもメールを打ったのですが、担当の方から一方的に『もう閉院です』というお返事しかいただけませんでした。やはり行政こそ、赤字をしてでも門戸を広げていってほしい。それができるのが行政ではないかと思います。もう少し言いますと、実は幼稚園も減っているような状況です。近くには 2 倍の競争率の私立幼稚園が出てきました。その原因は、他の幼稚園が閉園になったからなのです。笑い話かもしれませんが、幼稚園浪人という心配もあります。また、公立保育園については定員割れの場合には、その数がどんどん減

らされていく状況にあります。少子化の時代には、定員割れでも園児の門戸を広げてほしいのです。不安は数多くあります。いったいどこにこの気持ちをぶつけたらいいのかよく分かりませんが、保育面でも改善してほしいことが多々あるなと思います」(東京・女性)。

周知のように、一人の子どもに大学教育を受けさせ22歳まで育て上げるために、親が負担する経済的費用は平均して3,000万円程度になるといわれている。この経済的負担に加え、幼年期における子育ての精神的負担、子育ての時間的拘束による負担と肉体的負担があり、合計で子育ての4負担が嘆かれるようになった。それらは複合的に絡まりあい、マイナスイメージが増幅された結果、いわゆる「産み損」や「育て損」なる用語が未婚者層に浸透してしまった。

「今、もしもう一人と考えると、体力的なことだけではなく、経済状況を考えると無理なのです…。子どもが来年中学で、いろいろお金がかかることを考えると、やはり、今の私の家では一人が限界かと思っています」(札幌・女性)。しかし、「子どもを持つことのマイナス面ばかりが強調されるきらいがありますが、私の姉などを見ると、結構幸せそうなのです。だから、お金で買えない、お金には代えられない、子どもを持つことの幸せというものもあると思います。具体的には、子どもか仕事かという選択をしなければならない社会を変えるとか、税制を変えていくとか、単に給付するのではなく、何かお母さんの子育てを助ける仕組みを作るとか、国のやることはいくらでもあると思います」(札幌・女性)というような意見は、グループインタビューでも3都市で平均的に出された。これは重要であり、国民の意識とニーズが少子化傾向の容認ではないことの証明になるであろう。その意味で、原因を特定化して、その解決を目指した対策を速やかに実行することが望ましい。

未婚率上昇の複合要因として、結婚や出産に対する個人の自由が広く承認され、親との同居で未婚のままの快適な生活への欲求が若い世代に強いことなどがあげられる。また、親世代も含め結婚に関する社会規範が変化し、結婚に対する世間の圧力も減少した。しかしだからといって、60歳を過ぎれば次世代の支援を受けるはずの現在の未婚者が、次世代の育成に子育て費用を含む4負担の面で無関係であっては、世代内でも世代間でも不公平性が強くなる。子育てフリーライダーの増加は社会的不公平性を増加させる。やはり介護保険の理念の共有が今後の少子化対策では優先され、将来世代の育成にも子育てフリーライダーの貢献が得られてこそ、子育て4負担の世代内世代間の協力が展望できる。

第3節　小家族化のなかでの子育て負担の共有

さて、都市化は伝統的な価値観や行動様式を変容させる。とりわけ激しい社会移動がそれに拍車をかける。1960 年代から、日本全国の大半の都市では、村落型の価値観である「イエ規範」や大家族が消失した。それはとりわけ北海道都市では著しい。その代表が札幌市である。本州や九州から家族と離脱して人々が集まってきたという歴史的な事情から、札幌市は「家制度」にこだわらない北海道独特の「家族観」を示す都市になった（表 8）。

表 8　家制度に関する考え方（%）

	札幌市 市　民	札幌市 若年層	北海道 有権者	北海道 若年層	横浜市 市　民
a）夫婦別性に賛成	50.3	55.3	39.2	46.1	44.5
b）未成年の子どもがいても 離婚はやむをえない	71.2	75.6	66.0	51.3	65.5
c）結婚しても必ずしも子どもを 持たなくて良い	64.9	75.8	47.8	77.1	57.8
d）乳幼児期の子育ては母親だけが するのでなく保育士に預けてよい	44.0	47.1	45.4	48.2	35.5

（注）札幌市児童家庭課資料より。

これには、過去からの育児知識の継承や家庭内での子育てへの援助が可能である三世代同居率の低さなどが作用している（表 9）。類似の都市形成史をもつ横浜市と比較してみると、表 8 の基本的な指標でさえも、家族結合が緩やかな札幌の独自性が表されているように思われる。日本全体が都市化して高齢化した今日、札幌での弛緩した家族結合の姿は日本社会の 15 年先を先取りしたものである。

表 9　平均世帯人員と三世代同居率の推移（人・%）

	1970 年	1980 年	1990 年	2000 年
平均世帯人員（日本全体）	3.41	3.22	2.99	2.67
平均世帯人員（札幌市）	2.91	2.72	2.55	2.32
三世代同居率（日本全体）	16.10	14.60	12.10	8.50
三世代同居率（札幌市）	8.10	5.40	4.20	2.70

（注）各年の国勢調査結果。平均世帯人員は一般世帯の平均値。三世代同居率は「その他の親族世帯」のうち、「夫婦、子どもと両親」、「夫婦、子どもと片親」、「夫婦、子どもとその他の親族」が一般世帯に占める割合。

札幌市では、他の政令都市と同じく世帯規模が縮小しており、三世代同居率も激しい低下傾向にある。三世代同居率とは「その他の親族世帯」のうち「夫婦、子どもと両親から成る世帯」、「夫婦、子どもと片親から成る世帯」および「夫婦、子ども、親とその他の親族から成る世帯」が一般世帯に占める割合である。小家族化が進んだ典型的な大都市の姿がそこには存在する。加えて札幌では、平均世帯人員で全国平均よりも 0.5 人少なく、三世代同居率

に至っては日本全体の3分の1しかない。これでは育児力や介護力を含む「家族力」は減退せざるを得ない。

こうした小家族化という背景のなかで生きる若い世代にとって、ともすれば当面の生活の安定を優先し、敢えて大きな負担を伴う結婚や子育てという選択を行うことを先送りし、回避する傾向が生まれることもやむを得ない。ここに短期的な損得勘定が芽生える必然性がある。その結果、政令指定都市における合計特殊出生率は日本全体よりもはるかに早いスピードで低下して行く（表10）。中でも東京都区部と札幌市は非常に低い。

特に高学歴化した若い女性は、結婚・育児に伴う家事と職場における仕事の両立の負担感及び育児そのものの負担感が根強い。「自分の周りに小さな赤ちゃんとか学齢期の子どもがいないので、子どものかわいさとか夢みがちな感じが想像できないのです。もっと周りにそういう楽しい子どものコミュニケーションが広がっていれば、多少、経済的なコストは覚悟してでも子育てをしてみたいという情熱に変わるのではないかと思います。それから、経済的なこと以外にも、結婚するまでなら2人だけですが、子どもが生まれると親がからんできます。保育園の送り迎えがある。仕事があって定時で終わらない場合、親に面倒をみてもらう。休みの日に2人で出かけなければならないときに、親に来てもらう。要するに、夫と妻以外の人間関係が広がっていってしまう。そうすると、いくら親戚とはいえ、いろいろややこしい問題が最後にはなきにしもあらずですから、そういうお金に換算できないようなコストがあります」（東京・女性）。親戚まで巻き込む人間関係のわずらわしさはそれぞれでしか解決できない。

さらに、日本の職場における男性偏重、長時間労働、育児休業制度等への理解の低さへの苛立ちも女性にはある。日本における少子化の遠因には、子育て期間中でさえも残業をいとわない日本的な企業風土、それを許容する従業員意識、単身赴任をものともしない家族意識などが、それぞれ密接に関わっている。

表10 政令指定都市における合計特殊出生率

	1995年	2000年		1995年	2000年		1995年	2000年
札幌市	1.17	1.05	横浜市	1.30	1.22	広島市	1.41	1.33
仙台市	1.34	1.26	名古屋市	1.35	1.22	北九州市	1.41	1.36
千葉市	1.29	1.22	京都市	1.23	1.21	福岡市	1.28	1.17
東京都区部	1.05	1.00	大阪市	1.29	1.23			
川崎市	1.34	1.29	神戸市	1.29	1.22	日本全体	1.42	1.36

（出典）総務省統計局『社会生活統計指標 2002』2002年2月。

大都市統計協議会編『大都市比較統計年表／平成12年』2002年3月。

こうした、企業・従業員・家族の態度は何れも短期的な効用拡大の観点からは合理的選択であるが、少子化の進行に伴う将来の人口減少は、長期的には少子化として非合理的な結果を全ての企業・従業員・家庭に及ぼす。したがって、現在の個々の選択が、将来の国家と国民全体に望ましいとはいえない結果をもたらし、全員がその負の影響を受ける。これは少子化に伴う典型的な社会的ジレンマである。このように、社会的ジレンマは個人の合理性が集合的非合理性、すなわち、個人的には合理的な行動が、社会的には非合理的な状況をもたらすことである（金子、2001）。

もっとも、少子化は一方的に進んでいるが、「いずれ結婚するつもり」とする若い未婚者が国民全体に占める割合も 80％を越えている。たとえば、社人研がおこなった全国の 18 歳以上 50 歳未満の独身者を対象にした「第 11 回出生動向基本調査・独身者調査」（1997 年 6 月）では、「いずれ結婚するつもり」は男性で 85.9％、女性では 89.2％に達した。逆に「一生結婚するつもりはない」では男性で 6.3％、女性で 6.0％となり、その相違は歴然としている。同じく札幌市の「少子社会に関するアンケート調査」でも、「すぐに結婚したい」と「いずれは結婚したい」などの合計は 90.1％になり、「結婚したくない」と「配偶者はいらない」の合計の 6.9％を引き離していて、日本全体も札幌市でも類似の傾向にあることが伺える。

したがって、制度的な結婚自体は依然として否定されていないという日本的現実を前提として、当事者である若い世代が出産と育児を選択した際に、その育児支援環境を社会的に整備することの重要性はなくなってはいない。

「私の働いている会社は結婚したら結婚退職が普通で、結婚退職をしなくても妊娠したら辞めるのが普通だったのです。ですから、同じ年のほかの同僚たちの目が冷たい。母乳の搾乳をするためにロッカールームに行ったら、結局、その時間はサボれるよねという感じで、同僚でもすごく冷たいのです。そこの会社は辞めたのですが、今は父親の育児休暇も認められていますし、もう少し長く勤めていても大丈夫かなと思えるような職場になっていますが、子どもを産んで働いている親に対しては社会全体が何か冷たい。もう少し子どもを産んだ人に対して、温かく優しい視線で報道し、社会全体で温かくしてくれたら、だいぶ違うと思うのです」（福岡・女性）。このように問題はほぼ出揃っている。

しかし、その対策として出された「新旧エンゼルプラン」や「少子化対策推進基本方針」それに「少子化対策プラスワン」などでは、未婚率の上昇も既婚者の出生力低下も阻止できなくなった時代である。なぜなら、前二者が強力に推進されてきたこの 8 年間でも、全国的にも札幌市でも出生数は低下傾向を続けており、これらの諸プランの有効性には疑問が残る

からである。その意味で、既存の少子化対策の総合的な点検評価が求められる時期になった。

これまでの少子化対策が必ずしも有効ではなかった原因は、①そもそも少子化の背景・原因のとらえ方が間違っていた、②少子化の背景・原因のとらえ方は妥当であったが対策が十分に対応していなかった、のどちらかであろう。そのうえで③種々の対策は講じられたものの、それ以上に少子化の原因が強力に作用した、のいずれかであると考えられる。

確かに、これまでの保育育児中心の少子化対策の効果が、出生率低下を阻止できていないからといって、保育育児支援策は直ちに否定される対象ではない。札幌市でも、保育所入所定員の拡大、各種保育サービスの多様化、および地域子育て支援事業などの家庭での子育てに対する支援の実績は存在する。しかし、それらは主に「有配偶出生率」を維持しようとする観点からの対策であり、間接な効果は想定されていたであろうが、少子化の最大の原因である未婚率の上昇に対して直接的な有効性が期待できるものではなかった。

おそらく少子化対策のポイントは 4 つある。第一は既婚者の子育て支援策をどうしていくか。第二には未婚者が増えたことを、少子化対策に関してどのように評価するか。第三には子育てに伴う直接負担の問題をどう社会化していくか。第四に、負担の社会化が可能であれば、税金でいくのか社会保険でいくのかという具体的な選択をするのか。この四点を取り込んでいかないと、結局は思いつき的な対策しか作れずに、うまくいかないといい続けていくことになる。

本研究での狙いは、従来の少子化対策が国民の意識やニーズと合致していたかもしくはズレていたかを具体的に検証して、実際に有効な少子化対策の樹立のための基礎的な資料を作成するところにある。その手法が政令指定都市札幌と福岡そして東京におけるグループインタビューであり、本報告書ではその成果を活かしつつ、21 世紀の少子化対策を各章ごとでも随時展望したい。

【参考文献】

金子勇　；1998,『高齢社会とあなた』日本放送出版協会。

金子勇　；2000,『社会学的創造力』ミネルヴァ書房。

金子勇　；2001,「都市の少子化と社会的ジレンマ」金子勇・森岡清志編『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房：308 - 324。

金子勇編；2002,『高齢化と少子社会』ミネルヴァ書房。

金子勇　；2003,『都市の少子社会ー世代共生をめざして』東京大学出版会（近刊）。

社人研編；2000,『人口の動向　日本と世界 2000』厚生統計協会。

社人研編；2002,『日本の将来推計人口』厚生統計協会。

厚生労働省；2002,『少子化対策関係資料集　平成 13 年度版』。

高山憲之；2002,「少子化対策における第 3 の切り札」金子勇編『高齢化と少子社会』ミネルヴァ書房、002：99－103。

堤伸輔　;「人口問題が爆発する」『フォーサイト』2003 年 3 月号:10 頁

第2章 グループインタビュー法の特徴

第１節 グループインタビュー法とは何か

グループインタビュー法は、グループダイナミクスを用いて質的に情報把握を行う科学的な方法論のひとつである。複数の人間のダイナミックなかかわりによって生まれる情報を、系統的に整理して「科学的な根拠」として用いるものである。したがって、グループインタビューでは、「なまの声そのままの情報」を生かすことができ、量的な調査では得られない「深みのある情報」と、単独インタビューでは得られない「積み上げられた情報」、「幅広い情報」、「ダイナミックな情報」を得ることが可能となる。

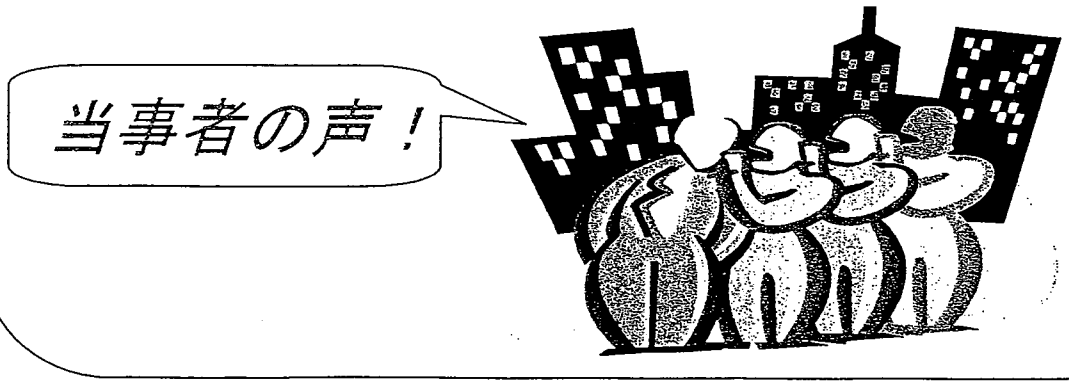
つまり、グループインタビューの特徴は、以下の４点である。

(1) 日常生活の延長線上での「現実そのまま」の情報に接近できる。
(2)「メンバーを主体」とした質的な情報把握である。
(3) グループダイナミクスにもとづく「情報の引出し」が可能となる。
(4) メンバーの「行為」（言語的、非言語的なものを含む）と、その行為に意味を与える「背景状況」（属性、生活歴など）の両方を把握できる。

● グループインタビューから得られる情報の特性

「積み上げられた情報」　　「なまの声そのままの情報」
「幅広い情報」　　「深みのある情報」
「ダイナミックな情報」

＊ これからのサービスの大黒柱



グループインタビュー法による情報把握の醍醐味は、グループダイナミクスにある。

グループダイナミクスは、クルト・レヴィンにより1939年の「場の理論」として提唱された考え方で、集団の力学的性質及び変化を観察することにより、理論化と実践を図るものである。

グループダイナミクスの3要素は以下のとおりである。

(1) 個人 (Interpersonal)

グループメンバーひとりひとりの性別、年齢、職業などの属性、身体的な特性、精神状況など。

(2) 個人間 (Intrapersonal)

グループメンバー同士の関係性。具体的には、メンバーの間に起こる、仲間意識、同一性、競合、葛藤、リーダーシップなど。

(3) 環境 (Environment)

ひとりひとりのメンバーのグループ全体との関係性。具体的には、メンバーのグループへの参加の状況、インタビュアーとメンバーのラポール(信頼関係)の度合いなど。

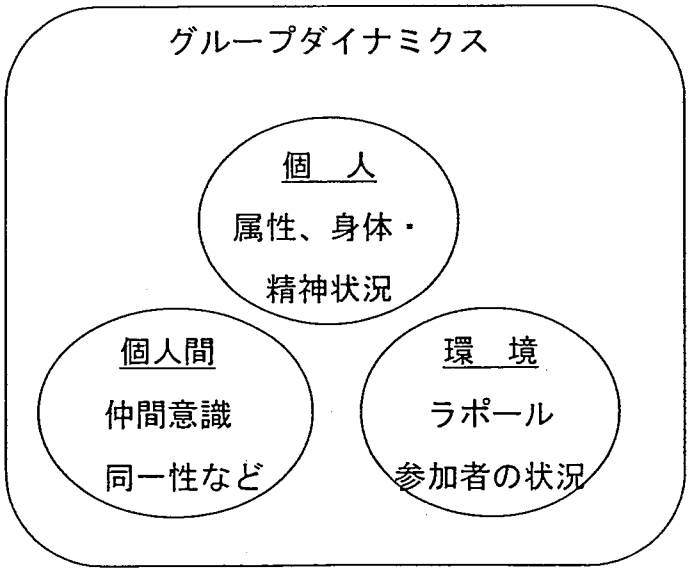


図1　グループダイナミクスの構成

第2節　グループインタビュー法の目的

質的な研究の方法として、グループインタビュー法はきわめて有効なもののひとつである。

グループインタビュー法はさまざまな目的で利用することができる。特にヒューマンサービスの領域で意味深いのは、対象者の「なまの声」を直接反映できる点である。利用者の主体的な参加や、セルフケアの重要性が強く求められる中、グループインタビューによる情報の把握は、今後ますます活用が期待される方法であるといえよう。

グループインタビューを用いる目的を大きく整理すると、以下のようなものが考えられる。

(1)　関係者の「なまの声」を体系的に整理する。

(2)　関心テーマの背景にある潜在的･顕在的な情報を把握する。

(3)　質的なアプローチを用いて、さらなる研究のための仮説を立てる。

(4)　新しい考え方や概念、やり方や解決の方法を創造する。

(5)　新しいプログラム、サービスなどの基本的な課題を明らかにする。

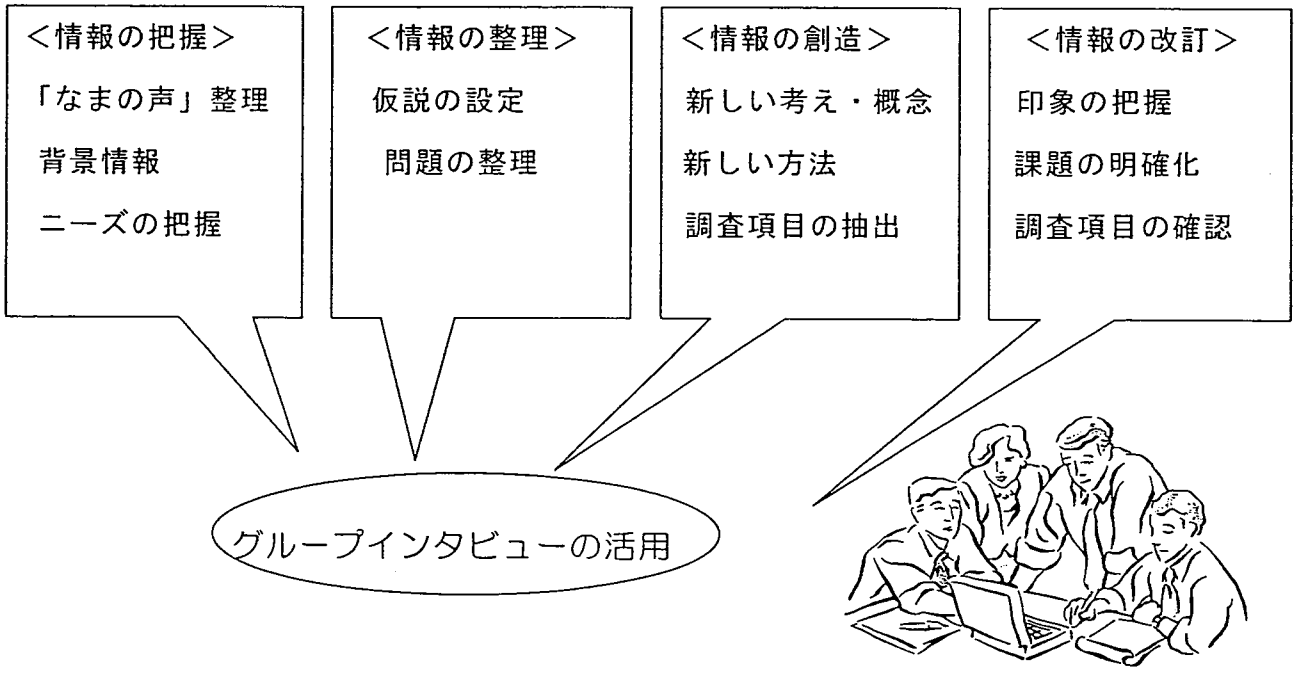
(6)　関心のあるプログラム、サービス、機関などについて、関係者の印象を明らかにする。

(7)　関係者がどのようなニーズ・意見を持っているかを明らかにする。

(8)　質的または量的な研究に必要な質問項目や調査項目を引き出す。

(9)　質的または量的な研究に用いた項目の適切性、妥当性について明らかにする。

(10) 既存のプログラムを評価する。　など。



第3節　グループインタビュー法の特徴

グループインタビュー法の特徴は、他の方法と比較することでより鮮明にすることができる。

そもそも、「データ」には２つの種類がある。

「エミック　emic」といわれるデータは「対象に近い視点」で、出てきたデータをそのまま使うものである。

一方、「エティック　etic」といわれるデータは「提供者に近い視点」で、データをなんらかの形で加工して、たとえば○×で回答したものを数字に変換して入力するなどして使うものである。

多くの場合、質的な方法により得られた情報は、「エミック・データ」であり、量的な方法により得られたものは「エティック・データ」である。

ここで強調しておきたいのは、この「両方の側面から情報を把握することが極めて重要」ということである。科学的な根拠のある証拠ということで、統計を用いて「有意水準５％で有意差がみられた」という形のエティック・データの報告が氾濫している。しかし、サンプリング（対象の選び方）、調査方法、分析方法などが実は不適切で、結果が誤りだったり、誤解を招きかねない量的な研究成果は少なくないのである。間違った数字がひとり歩きしないとも限らない。

そこでエミック・データの出番である。加工された数字の魔物（エティック・データ）からは読み取れない、生活者のナマの姿、ナマの声を間近に捉え、両者を掛け合わせることで、さらに精度の高い情報とすることができる。

社会調査法と比較すると、グループインタビュー法には以下のようなメリットがある。

(1) 調査期間が短期で済む。

社会調査法では、問題領域の設定から調査票の作成、調査票の配布、分析、報告に至るまで、少なくとも数ヶ月の時間を必要とするのが一般的である。

グループインタビュー法を用いると、実施するグループの数にも依存するが、ひとつのグループについて対象者の選定、メンバーの召集、実施、分析、報告にかかる時間は、社会調査法に比較すると短くて済むものである。

(2) 調査費用が安価で済む。

大量データを扱う社会調査法では、郵送料、データの入力費用、データの加工料などに多額の費用のかかる場合が多い。

一方、グループインタビュー法では、案内通知の郵送料、参加者の謝礼、茶菓などに費用がかかるものの、逐語記録の作成、分析、報告にグループインタビュー担当者自身がかかわる場合は、人件費を節約できる。しかしすべての過程を、専門のグループインタビュー実施会社に依頼する場合は、人件費が生じ、必ずしも安価で収まるとは限らない。

(3) 担当者や研究者が対象者と直接かかわる。

グループインタビュー法の最大のメリットのひとつとして、担当者や研究者が、対象者に直接かかわる点があげられる。面と向かった対象者の、「ありのままの表現」を受け止め、今後のサービスや研究に効果的に生かすことができる。

(4) 非言語的反応を観察による把握が可能である。

言語的な表現はもとより、訴え方、表情や身振り、話の流れなど、非言語的な表現から、幅広く奥深い、より真のニーズに近い情報と背景要因の把握ができる。

(5) メンバーの意見の積み上げが可能である。

グループダイナミクスに裏付けられた意見の引出しと蓄積ができる。

また、個別面接法と比較すると、グループインタビュー法には以下のようなメリットがある。

(1) グループとして意見を構築できる。

個人としての意見ではなく、参加メンバーすべての協働の作業の結果として、さまざまな角度から検討された意見を構築することができる。

(2) 相互作用による意見の引き出しができる。

グループダイナミクスが生じ、お互いのやり取りのなかで、自分自身でも気付かなかった点が見えてきたり、解決の方法を新たに見出したりし、潜在的な意見まで引き出すことができる。

(3) 相互刺激がある。

参加メンバーがお互いに関心テーマについて顔を付き合わせ、意見を交換することで、言語的にも非言語的にも刺激しあって、新たなものを生み出す促進剤となる。

(4) 3人寄れば文殊の知恵。

個別にひとりひとりに面接するよりも、他のメンバーの意見や態度に刺激されて、より有効な意見や新しい考え方が出やすくなる。

(5) プレッシャーが少ない。

ひとりではなかなか自発的な発言が難しい場合も、グループインタビューで一緒に参加しているメンバーの発言を聞き、それに相槌を打ったり、追加で意見を述べたりすることで、個別面接法よりも楽な気持ちで表現することができる。

(6) 自発的な発言を引き出す。

1対1で面接するよりも、同じグループメンバーの発言により討論が活発化すると、自発的な発言が促される。

(7) 専門性が高い。

グループダイナミクスを利用しながら、自発的な情報を発信することを促進したり、得られた言語的・非言語的な情報を体系的に整理したりするグループインタビュー法は、一定の技術を必要とする点で、個別面接法と比較してさらに専門性が必要とされる。

(8) 科学性が高い（密室性低）。

複数の担当者により実施、分析、報告されるグループインタビュー法は、多くの場合ひとりでこれらの過程を行う個別面接法よりも密室性が低い点で、客観性を保持しやすく、科学性が高いといえる。

(9) 構造的である。

グループインタビュー法では、インタビューガイドを作成し、おおよそどのような点についてグループダイナミクスを起こすか、あらかじめ半構成的に設定しておく。客観的な分析

を行うため、討論の方法、ルールについて、あらかじめメンバーの間で了解し、共有しておく。

(10) 早い。

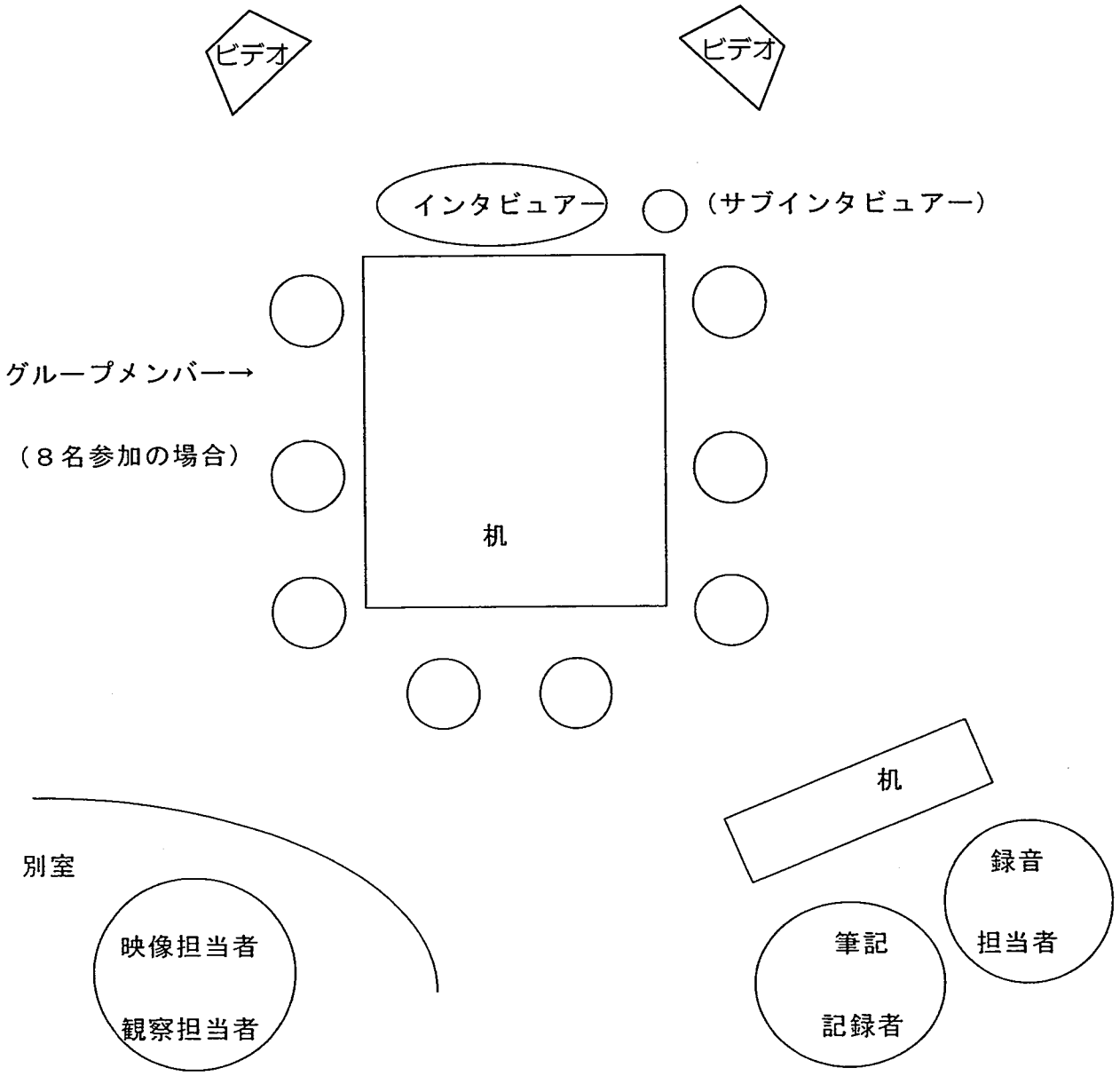
グループインタビュー法を用いて、10人を一堂に会して実施すれば、個別面接法に比較して時間の短縮になる。

第4節 グループインタビューの方法

グループインタビューを実施するときは、最低でもインタビュアー、筆記記録者、観察担当者各1名の3名が携わる。場合によっては専門の内容を担当するサブインタビュアー、アシスタント、筆記記録者や観察担当者が2名などの状態もありうる。

(1) 司会者：インタビューアー1名（サブインタビュアー　1名）
(2) 記録者：筆記記録、観察担当者各1名（録音担当、映像担当者各1名）
(3) インタビュー対象者：通常6～12名
(4) 所用時間：1時間半～2時間半
(5) 場所要件： 静かな個室、録音映像記録設備（ビデオを利用する場合2台で全員の表情を写すようにする）

図１　グループインタビューの実際



*別室がない場合、録音記録者の位置に観察担当者がすわる。

グループインタビュー法の進め方にはさまざまな方法があるが、「番号札」を名前の代わりとして使う方法が多く用いられている。これは、メンバーの名前が表に出ないことを保証するため発言に安心感を与えるとともに、知らない者同士が名前を記憶しなくても討論できる点で有効である。米国などではお互いのファーストネーム（名前）を呼び合うことが親近感をもたらしてよい、としている。日本の文化背景や、参加メンバーの特性を考えながら、「活発なグループダイナミクスが促進される方法」を選択するとよい。

第5節　グループインタビュー法の活用に向けて

グループインタビュー法は、グループダイナミクスを使って、個々のメンバーの持っている創造性や構想力を最大限に引き出すことを目的としており、いわば「強烈な個性のぶつかり合い」から新しい結果を生む手法である。

ヒューマンサービスの領域では、これまで科学的な根拠として、量的な研究法の利用が主流であり、その結果は平均的な全体像の把握に終始してきた感がある。

グループインタビュー法の活用は、住民や利用者の「なまの声」を活き活きとした形で反映するとともに、メンバー間の活発なやり取りの中から、個性に富む「新しいアイディア」を生み出すことができる。これは、ヒューマンサービスにおける原点、すなわち「当事者主体」、「当事者のエンパワメント」にもつながるものである。

一方、グループインタビュー法は、多数者にはなりえない少数グループの「声なき声」を汲み上げたり、言語的な表現が困難な対象についても、行動観察によりニーズを把握してサービスに反映することのできる点で画期的なものである。

もちろん、グループインタビュー法は、質的研究法のひとつであり、いわずもがな万能な方法ではない。しかし、多様化するニーズに対し、さらに適切に対応する必要性が高まる中、従来の「平均型」の情報把握に加えて、当事者による「創出型」の情報把握の方法を採用することの意味はきわめて大きいと言えよう。

【参考文献】

安梅勅江,2001,『ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法』医歯薬出版。
高山忠雄,安梅勅江,1996,『グループインタビュー法の理論と実際』川島書店。
梅沢伸嘉,1993,『実践グループインタビュー入門』ダイヤモンド社。

第２部　子育て支援方策に関する
グループインタビューに基づく意見と提言

第１章　従来の子育て支援制度の特徴と問題

第２章　働き方の見直しと世代間の支えあい

第３章　地域における子育て支援について

第１章　従来の子育て支援制度の特徴と問題

第1節 少子化対策小史

昭和が終わり平成になってから今日までの年間出生数は、120 万人前後で推移してきた。平成元年（1989 年）の合計特殊出生率が 1.57 となり、90 年には「1.57 ショック」という流行語が生まれた。それは 66 年（丙午）の 1.58 を下回ったからであるが、政府はこの時期から少子化対策への取り組みを開始した（表 1）。その象徴が 94 年に策定された「エンゼルプラン」であり、翌年から 99 年度まで実施された「緊急保育対策等 5 ヵ年事業」であった。並行して 96 年に「男女共同参画ビジョン」が発表され、99 年には「男女共同参画社会基本法」が成立し、同年末には「新エンゼルプラン」も策定された。

表 1 日本の少子化対策小史

年　月	事　項
1990年 6月	1.57ショック（1989年の合計特殊出生率が66年丙午の1.58を下回る）
94年12月	エンゼルプランの策定
	緊急保育対策等5ヵ年事業の策定（95 - 99年度）
97年10月	人口問題審議会報告
98年 4月	改正児童福祉法の施行
6月	『厚生白書』（少子化問題を考える）
12月	総理主催「少子化への対応を考える有識者会議」からの提言
99年 5月	「少子化対策推進関係閣僚会議」の設置
6月	「少子化への対応を推進する国民会議」の設置
7月	第1次補正予算「少子化対策臨時特例交付金」
12月	少子化対策推進基本方針の策定
	新エンゼルプランの策定（2000 - 2004年度）
2000年 4月	「国民的な広がりのある取組みの推進について」（少子化への対応を推進する国民会議）
2001年 7月	「仕事と子育ての両立支援策の方針について」（閣議決定）
2002年 9月	「少子化対策プラスワン」

（注）厚生労働省『少子化対策関係資料集　平成 13 年度版』2002:229 より金子が要約。

すなわち、2001 年までの政府や自治体での少子化対策は、結局のところ「新旧エンゼルプラン」と「男女共同参画社会づくり」に集約できる。両者の路線から膨大な国費の投入が行われてきたが、1990 年の合計特殊出生率が 1.54、95 年が 1.42、2001 年が 1.33 になり、各種の少子化対策は合計特殊出生率減少の歯止めにはなりえていない。

その理由は明瞭である。アメリカを除く先進国と同じく日本の少子化の原因は、未婚率の上昇と既婚者の出生力の低下に大別されるのに、一連の少子化対策はすべてが「既婚者の出生力の低下」の阻止に焦点が置かれすぎてきたからである。もちろんパラサイトシングル増

大への嘆きはあるものの、積極的な少子化対策のなかに未婚者を巻き込むという政策は皆無であった。

このような一面的な対応を批判して、本格的な少子化対策の理念は介護保険と同質であると私は強調してきた。自分や配偶者の親の生死とは無関係に、国民は40歳になれば強制的に介護（care）する側に回るのが介護保険である。今日の豊かさをもたらしたのは前世代の活躍であり、その世代が高齢化して、自立のための支援を求めるのならば、世代全体として前世代を支えあうのが介護保険の理念である。社会が本来持つ多世代関係の姿がここに集約される（金子、2003）。

この発想を少子化対策に応用すると、国民には結婚の自由はもちろんあり、子どもを産む産まない自由も当然あるが、次世代を育てる（care）ことの責務は国民に等しく存在するという考え方が生まれる。私の少子化対策の原点はこのような世代内と世代間の支えあいであり、これは「支え愛」につながる。世代論の観点からの少子化対策は未婚者の増大にも対処する理念をもち、既婚者の出生数の減少にも取り組める。この象徴が「子育て基金」の提唱である。「そういう基金というのは賛成です。人間が生きて死ぬまでの間で、健康なときは全く大丈夫なのですが、手がかかる子どもの時期と60歳を過ぎてからというのは、例えば、安心して子どもを育てられるという環境があれば、私の姉ももう1人産むと多分言うと思います。そのための負担なら20%の消費税でも私は賛成です」（福岡・女性）。「大賛成です。私は子どもいませんが、やはり隣に子どもがいますので、相互扶助という精神はとても好感が持てますので賛成です」（福岡・女性）。

世代論は基金面だけではなくもちろん父親の協力までも含んでいる。「小さいときに置かれた環境によって、子育てをするか、妻の育児に協力できるかできないかが、夫の考えの中に徐々に構築されていくのでしょう。だから、単身赴任をしている家庭に生まれた子どもは、たぶん子育てをしないのではないかと思います。父親がほとんどいないから、感覚的にそういう考えの子ができるのではないでしょうか。父親が子どもに対して面倒見がいい家ならば、男の子どもがいれば、その子は子育てに協力的な夫になるはず」（札幌・女性）。単身赴任が次世代の子育て意識を左右するというこの指摘は重要であるが、構造改革でも踏み込めない領域でもある。

この8年間、新旧エンゼルプランに見るように膨大なエネルギーが投入されても少子化傾向は止められなかったのだから、50年で人口が半減する法則を回避するためにも、介護保険のような理念を持つ新制度を、子育てに関連させて想定する時期にきていると私は判断する。

そして介護も年金も問題は同根である。「若い方々すなわち現役世代の保険料や年金保険料、税金などが増大するという状況に陥っています。これがまさに少子化の一つの現象面でもあるわけで、この年金の負担をどうしていくかということが、今、緊急の課題になっています」（札幌・女性）。

しかし今日でも、男女共同参画社会基本法は少子化対策の法律ではないという認識さえ共有されてはいない。「少子化の流れが止まることはないだろう。だからこそ、今、本格的な男女共同参画社会が求められている」（伊藤、2002：23）という象徴的な表現にそれがうかがえる。このような見取り図で10年後に落ちつく先の結論は簡単に予想される。それは男女共同参画社会づくりが不十分だったので、少子化傾向に歯止めがかからなかったというものである。その時には少子化による市場の縮小がもっと激しくなっていて、パラサイトシングルやディンクスにも失業者が増えているであろう。

たとえばレナウンが子ども服から撤退することは、売り上げ減少から失業者増大に続く道の氷山の一角である。この会社は1964年に子ども服に参入し、最盛期の87年には255億円の売上を計上したが、平成になってから少子化が続き、2001年には売り上げが56億円と激減し、6億7,000万円の赤字を出したので、撤退という決定がなされたのである（『朝日新聞』2001年11月10日）。

男女共同参画社会基本法は世代論を軽視し、第10条に垣間見られるように、ここでの「男女」は20歳から60歳までしか想定していないと考えられる欠点がある。なぜなら、その第10条は、「国民は、職域、学校、地域、家庭その他の社会のあらゆる分野において、基本理念にのっとり、男女共同参画社会の形成に寄与…」となっていて、「職域」が筆頭に置かれているからである。通常の配列は家庭、地域、職域、学校であろう。したがってこの法律は、最初から職域に関わる20歳から60歳までの男女を優先した理念を持ち、「両立ライフ」しか念頭においておらず、高齢社会では「職域」から離脱する男女が30％を超えることへの配慮に乏しく、老若男女を視野には収めていない。いつの時代でも、社会構成員は男女ではなく、老若男女である。私はこれを「クレヨンしんちゃんからキンさんギンさん」までと表現してきた。

このような精神が脈々と流れている男女共同参画社会基本法には、社会認識に根本的な誤解があり、世代間協力からの少子化対策の作成にとっては有効とはなりえない。多様なライフスタイルを保障する社会をといいつつも、専業主婦を貶めるような発言がこの支援者には多いが、グループインタビュー参加者のなかでも「専業主婦は子どもを育てていると一口に

言われますが、それは本当に一つの大きな仕事をしていると思うのです。一般的には家で怠けているような言われ方をしますが、決してそうではありません」（札幌・女性）という発言が「両立ライフ」実践者からも得られていることを知っておきたい。「私も産休中、2カ月間だけ専業主婦をしていました。外に出ていない分、外から情報が入らない。インターネットとかが家にあればいいのですが、それがない場合は月に1回来る広報を待っているという状況だと思うのです。行政レベルでもそうでしょうが、民間レベルでも、収入の面もありますから低料金でないといけないので、そういったサービスはどうしても働いている人優先の制度に実際はなっていると思うのです。でも、これまでの調査結果でも、専業主婦の人の方がより子育てのつらさを感じていることがグラフにありましたし、テレビでも専業主婦の方が孤独になるという報道もあったのです」（東京・女性）。

少子化対策は『平成10年度版　厚生白書』で取り上げられてから本格化し、政府も少子化対策推進基本方針を策定し、さまざまな取り組みを進めてきた。しかし、その実態は男女共同参画社会基本法の内容に忠実に、依然として少子化対策といえば、両立ライフを支援し、保育所の充実に代表される子育て支援（小松、2002）に現場の発想が止まっている。政府の子育て支援は既婚者の出生支援に限定されているが、少子化の主要な原因は未婚率の上昇と既婚者による出生率の低下の両方なので、育児と保育だけでは一面的にすぎる。

「実際、子育てで困っている人たちが、政策について行政の区レベルでも意見を出せるような仕組みを作ってほしい。偉い人たちだけで話をしていても、ただ単に机上の論議だけで終わる気がします。実際、もう何年も対策プランを立てても、何の効果も上がらずどんどん悪くなるばかりなので。結局、現実的に考えられない人たちが、こうだろうとしか考えていないのです」（東京・女性）。このようなかなり手厳しい批判すらある。

私の処方箋は、新旧エンゼルプランとこの法律の二本立てのみでは、もはや少子化対策は不可能という認識を基礎として、今後中期的に追求すべきは「子育て共同参画社会」であり、最終的には「老若男女共生社会」への変質を理念として含んでいる。

たとえば表2から伝わってくるのは、既婚者の子育て支援さえ充実させれば、少子化には歯止めがかかるという思い込みである。「育児が嫌になったりするんですよ。近くに祖母とかがいなくて自分ひとりで育てているので。そんなときに地域で託児付きの講演とか、話を聞くものとかがあれば、そこに託児で預けて自分だけストレス解消をしたり、そういう場が多ければ私の場合は助かるなと思っています。現実に2時間ぐらいですが、託児付きの講演会を聞きに行ったりしています」（東京・女性）。

表 2 保育･育児支援策として用いられる項目

【サービス】	【社会保険】	【現金給付】
保育所の整備	年金制度で優遇	児童手当
ベビーシッター・介護人派遣	健康保険の出産一時	児童扶養手当
公教育の無料化	不妊治療の健康保険適用	専業主婦手当
	スウェーデンのような親保険	保育バウチャー（利用券）
【税の優遇】	【その他】	
扶養控除	奨学金制度の充実	
配偶者控除	短時間勤務制度	
保育料の控除	学童保育	

表 2 の各項目はこのような既婚者向けの子育て支援策としての価値をもつ施策ではあるが、増大する未婚者への配慮を欠いている点で限界をもっている。「突飛な案ですが、私はポイント制にして、例えば子どもを産んだら 100 ポイントを与える。それを子どもが大学に行くときに、使いたい人はそのポイントを使って優遇されていくとか、親の介護に持っている人はポイントを使う。自分たちが子どもを産んだことによってプラス特典があって、使いたいときにその特典が使えるような何かがあればいいと思うのです。産みたくても産めない人もいるので、子どもを産んだだけというのではなくて、一生を通じて、ポイントを稼いで、使えることがあって、相互に協力できればいいなどと思います」（東京・女性）。グループインタビュー参加者はここまで踏み込んだ発言をしている。

第2節 少子化対策プラスワンへの意見

2002 年 5 月に小泉首相直々の厚生労働大臣への指示によって、時代に即応できる「少子化対策」の見直しが始まり、9 月 20 日に『少子化対策プラスワン－少子化対策の一層の充実に関する提案』（以下、プラスワン提案と略称）が出された。それは表 3 に要約されるような内容である。翌 21 日には、新聞各紙がその要約と簡単なコメントを掲載した。

表 3 はこれを見る限り、前節で要約した新旧エンゼルプランに代表される従来の少子化対策の一歩前進というまさしく「プラスワン」に止まり、根源的な対応は先送りされた感じがする。以下では、その特徴を要約しておこう。

まず、これまでより前進した点を挙げてみよう。それは

(1) 厚生労働省の枠を超えた広い分野で検討したこと

(2) 現在世代のための育児保育路線に加えて、社会保障における将来世代の負担を考慮する視点が登場したこと

表３『少子化対策プラスワン』の骨子

A　働きながら子育てしている人向け ・男性を含めた働き方の見直し ・母親の出産後、父親も最低５日間の休暇を取得 ・多就業型ワークシェアリング ・育児休業取得率の目標値（男性１０％、女性８０％） ・育児休業取得奨励金の創設 ・待機児童ゼロ作戦 B　子育てしているすべての家庭向け ・地域における子育て支援サービス推進 ・家庭教育への支援 ・子育て支援の生活環境整備 ・子育てバリアフリー ・社会保障における次世代支援 ・年金積立金活用の育英奨学金	C　次世代の親向け ・中高生が乳幼児と触れ合う機会の拡大 ・体験活動と世代間交流 ・若者の安定就労の促進 ・食を通した人間性の形成（食育） ・「いいお産」の普及 ・不妊治療支援

(3) 政府文書において「男女共同参画社会」ではなく、「老若男女共同参画社会」が初めて使用されたこと

(4) 子育てをする家庭の視点からの「少子化対策」に

① 男性を含めた働き方の見直し

② 地域における子育て支援

③ 社会保障における次世代支援

④ 子どもの社会性の向上や自立の促進

という４つの柱が出されたことにまとめられる。

①に関しては、特に「短時間勤務」や「隔日勤務」などの「多就業型ワークシェアリング」が注目できる。これが日本のマスコミ、官庁、企業、大学で実現可能であれば、少子化対策の成果はかなり上がるであろう。育児休業取得率の目標値も男性 10%、女性 80%と明記された。この数字に根拠はないものの、本格的に実施されれば、これもまた少子化克服の成果になるはずである。

②についての課題は、子育て家庭への世代内支援と世代間支援の実現可能性にあり、これによって評価される。たとえば帯広市には「子育て支援システム実行協議会」があり、「子育てはがき通信」も含めて支援策が実行されている。

③が新機軸であり、育英奨学金制度の充実も含めて、将来世代の負担の考慮は本来の意味で前進といってよい。

④はもちろん重要であり、子どもの「生きる力」を育む世代間交流の意味も意義も大きいので、「子育ち支援策」としての政策体系化が期待される。

さらに少子化が社会全体に及ぼす影響の大きさを考慮すれば、

(5) 社会全体が一体となって総合的な取組みを進めることも当然の主張である。

しかし、曖昧な点も残った。とりわけ (1) 大目標として、①子どもがいきいきと育つ社会と②国民それぞれが多様な生き方を選択できる社会が併置されたが、この①と②は整合しない場合が想定される。なぜなら、多様な生き方の中には産まない選択をするライフスタイルが含まれ、子育てする側の負担と苦労を共有しない子育てフリーライダーが増大すると見こまれるからである。そのような社会像と子どもがいきいきと育つ社会像とにはかなりな違和感がある。

次に曖昧な点の (2) として、子育て負担軽減の方針が読み取りにくいことが指摘できる。子育て負担を軽減することは少子化対策の出発点であり、これまでの全国世論調査や自治体独自の市民意識調査でもいつも筆頭のニーズになってきた。しかし、「プラスワン提案」では国民間で共有する方向性が出されていない。相変わらずこの負担は、国、自治体、企業、産んで育てる親から構成される 4 者間における共有でしかなく、そこには未婚者や子どもを持たない選択をした既婚者が含まれていない。結局それは (3)「社会全体」が未定義のため、解釈の幅が大きいことに原因がある。

ここから次のような主張がいとも気楽に出てくる。具体的な例をあげよう。「少子化対策プラスワン」が公表された翌日の『北海道新聞』「社説」(2002 年 9 月 21 日) では「子を産み、育てやすい環境をどう社会全体で築いていくか、私たち国民もあらためて問われている」と書かれた。また同じく『読売新聞』「社説」(2002 年 9 月 21 日) でも「子どもの養育に責任を持つのは、親だけでなく、社会全体であるべきだ」という結論である。しかし、おそらくここで使われている「国民」や「社会全体」には、未婚者や産まない選択をした既婚者が含まれていない。

それは「少子化」の原因の位置付けが間違っているからである。「プラスワン提案」では「少子化の主たる要因であった晩婚化」という表現が見られる。しかしこれは間違いで正解は未婚化率の増大である。この点は重要である。なぜなら、厚生労働省の白書では、たとえば「近年の少子化の主な原因としては、晩婚化の進行等による未婚率の上昇がある」という指摘が、『平成 12 年版　厚生白書』には 207 ページ、『平成 13 年版　厚生労働白書』でも 249 ページに書かれている。また、『平成 14 年版　厚生労働白書』の 207 ページにも同様な趣旨が明記されている。

「少子化対策プラスワン」が晩婚化のみを少子化の主な要因とした理由は不明であるが、先述の厚生労働白書よりも後退した認識であるし、組織における認識の整合性が得られてい

ないことにも疑問を感じる。今後とも「未婚率の上昇」を主要因とみなさない限り、有効な少子化対策案は作成できないであろう。

いうまでもなく、晩婚化と未婚化とは異なる。ヨーロッパやアメリカとは異なり、東アジアに顕著な「婚外子」の少なさをもつ日本では、出生数が持続的に減少してきたことと未婚者の増大とは正比例の関係にある。これを直視しなかったことが「プラスワン提案」の限界である。

その理由はほぼ同時に出された「少子化社会を考える懇談会」が提示した少子化対策「留意点」にあると考えられる。

①「子どもにとっての幸せの視点で」…子どもの数だけを問題にするのではなく、子どもが心身ともに健やかに育つための支援という観点で取り組むこと

②「産む産まないは個人の選択」…子どもを産む産まないかは個人の選択にゆだねるべきことであり、子どもを持つ意志のない人、子どもを産みたくても産めない人を心理的に追い詰めることになってはならないこと。

③「多様な家庭の形態や生き方に配慮」…共働き家庭や片働き家庭、ひとり親家庭など多様な形態の家庭が存在していることや、結婚するしない、子どもを持つ持たないなどといった多様な生き方があり、これを尊重すること。

が挙げられており、「プラスワン提案」でも「留意する必要がある」と書かれている。①はそのまま納得できる内容であるが、② ③の「留意点」は重要な論点を含んでいる。

なぜなら、「追い詰めたり」せずに「多様性を尊重する」ことは当然とはいえ、子どもを持つ意志のない人や結婚しない選択をした個人も家庭でも、「社会全体」に含まれるという判断が留保されたところに「プラスワン提案」の迫力のなさがあるからである。

私たちは介護保険ですでにこの問題は解決したはずである。すなわち、介護保険の根本理念は「社会全体」における介護負担の共有にある。40歳を超えた国民は、前世代としての自分の親が生きていても死亡していても、等しく介護する側に回る。そこには例外なく、全員がいわば「社会全体」で介護するという強力な理念が体現している。しかし、次世代の子どもを育成する場合には、この「社会全体」には届かない。むしろ、「少子化社会を考える懇談会」では例外をたくさん設けようという意図が読み取れる。

とりわけ子どもを持つ意志のない人や結婚しない人が吐く次のような意見に対しては、「社会全体による総合的な取組」という観点からは、大きな違和感を持たざるを得ない。

以下の引用は『日本経済新聞』(2002年6月13日)に負う。「自分の目標や自分らしさを

大切にする」、「大人の二人暮らしは楽」、「子育てに向いている人が産めばよい」、「社会が先行き不安」、「無責任に世に送り出していいものか」などの「産まない」理由は、社会への視点が皆無か後ろ向きであるために、自己中心的な言い分としか聞こえない。多様性を尊重する立場からは容認されても、子育て負担に苦しみつつ懸命に次世代を養育している側からすれば、むしろ育てている側が経済的には追い詰められている現状への著しい配慮不足が、このような発言に感じられる。

「大人の二人暮らしは楽」であると答えた二人は、他人が苦労して育てた子どもにただ乗りして、老後は「楽をしよう」とでもいうのだろうか。せっかくの介護保険の理念が、子育て理念ではきれいに忘れられている。

総合的に見ると、「プラスワン提案」は従来の新旧エンゼルプランにみる「保育育児」限定の対策を超えようとする総合的視野に達したこと、および男女共同参画社会ではなく老若男女共生社会（金子、2003）を見据えて少子化対策を開始しようとする姿勢が誕生したことで、まさしく「プラスワン」の性質を帯びている。

しかし、少子化の根本的な原因として未婚化を直視しないという欠点がある。病気治療と同じく根本的な原因の解決に取り組む用意がなければ、3000 年の 83 人の日本人に向かう少子化による日本消滅の克服は困難である。

その意味で、「社会全体」とは何を意味するのかについての議論から、次段階の「プラスワン」が開始されるであろう。それはすぐに始めたほうがよい。またすでに指摘されていることも多い。「保育園にかかる費用が高い。学童保育があまりにも充実していない。留守家庭もあります。小児科医が不足しているという話も聞きました。不妊治療がかなり高額です。分娩費がとても高いです」（福岡・女性）。

いろいろな工夫をして、負担を社会化して、社会的に負担を軽くするシステムをつくらないと、もっと少子化がひどくなって需要がそれだけ減って、マーケットが縮小し、企業の業績が落ちてくる。企業の業績が落ちてくると、失業者が増えるという悪循環の中に社会全体が突入する。少子化問題の抜本的な解決には、産んで育てる大変さを社会全体でどのように共有し、負担をどのような方法で社会化するか、特に教育費の高騰をどのように共有するかの決定がカギになる。そして、年金問題に象徴されるように、少子化は全国民の老後にも直結するテーマを構成する。非該当という例外はないのである。

同時に、専業主婦を「中立」の恣意的な解釈によって、「優遇」と決め付ける国の姿勢にも批判がある。「本当に頑張っているわねと言ってくださるお母様とかの意見、近所のおばさま

の方の声を励みにしている。そういう一言一言が胸にずしんとくると思います。今回の税制の改正を見ても、本当にがく然としました。専業主婦にとっては、本当に悲しいかぎりです。優遇されているとは思えないのです」(東京・女性)。

同時に女性の働き方にも問題は投げかけられている。「2002 年の 4 月から、本人が望めば無給ですが 3 年間職場を完全に休んで子育てに専念してもよいという制度が設けられました。やはり、みんな、無給ということと、3 年間社会から遮断された状況で育児に専念して、3 年後に復帰ということにすごく不安を持っています。自分がもしその立場になったとき、どちらがいいのか。仕事しながら子育てとなると、どうしても仕事も中途半端になってしまうような気がします。お金の問題よりも、3 年間全く職場と接点がなく育児に専念して、いきなり復帰ということに不安が残ります」(札幌・女性)。

「私も今日いろいろ話を聞いて結構勉強になったのですが、男性が育児に協力しやすい会社づくりをまず一番に挙げてもらうことが先決かなと思います。もう 1 つは、子どもを育てるには、教育費があまりにもかかりすぎるというのが今の現実です。国が一方的に決めた週 5 日制で、おけいこごとがかなり増えています。例えば、スイミングも子どもの 8 割が習いに行っていて、それは学校で全く教えてくれないから、全く泳げない子は本当に泳げない状況なのです。学校に聞くと、みんなが習っていてレベルが違うから教えられないと言われるのです」(福岡・女性)。これは本末転倒ではないか。

このように、乳幼児、小学、中学、高校、大学での教育問題もある。また、年少人口が激減するから、国内の全マーケットが縮小し、15 年遅れで労働者数が減少することも確実である。企業の業績低下は明らかで、失業率の増大と犯罪の発生率の上昇が引き起こす未曾有の社会的な混乱も予想される。

「まず、子どもを生んだらお金がかかるということ。それと、女性の社会進出が増えてきて、私の会社にも共働きの方が何人かいますが、どちらかというと、子づくりよりも定年まで仕事をしたい人が多い」(福岡・女性)。「このプランを読むと本当にいいことが書いてあり、自分が小さい子を育てていたときに希望していたことがたくさんあります。周りでも共稼ぎでお金を稼いで不妊治療を受けて、やっと 1 人できたという人を知っているので、欲しくてもできない人のことを考えると、行政の方で何らかのことを考えていただきたいです。介護している人のリフレッシュと同じようなかたちで、子どもを育てている人がリフレッシュするために預かってくれるところ、お母さんがホッとできる空間や体制を考えていただければ、また新しい気持ちで、子どもに八つ当たりせずに育てられます。今の人たちが子どもを殺し

てしまうというのは、年齢に関係なく、相当追い詰められている状態が多いので、リフレッシュできる場を無償ででもしてあげるのが緊急ではないかと思います」(福岡・女性)。

以上の前提に立つときに、3 都市でのグループインタビューで私たちが得た印象は、満を持して打ち出された「少子化対策プラスワン」のコンセプトが国民レベルでは浸透せず、対策自体が空転する危険性の芽生えである。平成 15 年 3 月 17 日に国会に提出された「次世代育成支援対策推進法案」も同じコンセプトであれば、決定打にはなりえないであろう。以下それを論証しながら、実行可能な少子化対策に必要な内容を考えていきたい。

【参考文献】

伊藤公雄；2002,「男女共同参画社会の見取り図」『都市問題研究』54－3、都市問題研究会：17－29。

金子勇　；2000,『社会学的創造力』ミネルヴァ書房。

金子勇　；2001,「都市の少子化と社会的ジレンマ」金子勇・森岡清志編『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房：308－324。

金子勇編；2002,『高齢化と少子社会』ミネルヴァ書房。

金子勇　；2003,『都市の少子社会－世代共生をめざして』東京大学出版会(近刊)。

厚生労働省編；2002,『少子化対策プラスワン－少子化対策の一層の充実に関する提案』。

小松聖　；2002,「仕事と子育ての両立支援策について」『都市問題研究』54－3、都市問題研究会：100－117。

少子化社会を考える懇談会編；2002,『子どもを育てたい、育てて良かったと思える社会をつくる―いのちを愛おしむ社会へ』。

第２章　働き方の見直しと世代間の支えあい

第1節 「少子化対策プラスワン」と短時間労働

2002年9月に厚生労働省が発表した「少子化対策プラスワン」では、家庭での子育て支援のために、とりわけ男性の働き方の見直しが強力に主張された。そこでは、子育て期間における残業時間の縮減、長期休暇の取得促進、子どもが産まれたらその父親は最低5日間の休暇を取得する、短時間勤務や隔日勤務などの働き方の選択肢を広げる、出産後も育児をしながら女性が働き続けられるような職場環境づくりを行う、などが例示されている。そしてそのうちの「仕事と家庭の両立のしやすさ」を普及促進させることが、いわゆるファミリー・フレンドリー企業への期待として強く謳いあげられている。これは男女共同参画社会基本法の「原則第5章」の体現でもある。しかし、実際には「短時間勤務」や「隔日勤務」などは夢物語に近い。

「主人がシステムエンジニアをしていまして、ものすごい労働時間で、本当に家にいないのです。朝、普通に出かけて、帰りは終電で帰ってくると午前1時半くらいですが、それでも帰宅は早い方です。何日も泊まり込んでということがあって、会社はみなそれが普通なのです。それで残業が全部つくかといえば、組合の方がうるさいらしくて残業時間も100時間を超えるとカットです。前は、100時間の手当てがついていたのですが、もう100時間どころか残業代も何時間さえもつけられなくて、主人は5時半にタイムカードを押して、それからずっと仕事をしています。土日も出勤で、本当に休みがない状態です」(東京、女性)。

「どこかに煙が立たないと、いつまでもやはり今と同じ現状で、皆の考えを少しずつどこからか変えていく必要があるのではないかなとは思いますが。ただ現実には難しそうです。私が働いている会社は金融機関で週休2日なんですが、週休2日の他にさらに毎月必ず休みを取りなさいという指導があって、一応は皆取られるのですが、『休み』と書いて私服で出てこられるんです。『電話があっても休みだから取り継がないで』と言って、自分の仕事をされています。それが何か当たり前になっています」(福岡・女性)。「煙を立てる」きっかけに「少子化対策プラスワン」がなれば幸いであるが、現実はこのようにかなり厳しい。

確かに今後の少子化政策では、労働時間の短縮をはじめとし、育児休業制度の取得促進、短時間勤務・フレックスタイム制・在宅勤務・ワークシェアリングなどの柔軟な勤務形態、子どもの看護休暇の導入などを進めるファミリー・フレンドリー企業への理解と推進を図る

ことが、可能な選択肢となりえるであろう。「次世代育成支援対策推進法案」の基本コンセプトも、「少子化対策プラスワン」と変わりない。

そこで打ち出されている政策項目は理解可能でも、その実現可能性の高低は別問題であり、今回実施した3都市のグループインタビューの参加者からも、実現可能性や有効性についての疑問が多く出た。たとえば、ワークシェアリングについての代表的なやりとりを以下に採録するので、30歳代の男女の平均的な意見を知って欲しい。ただしこのような議論を各方面で行うことにより、「社会全体」での負担が増大することを自覚する方が増えれば、グループインタビューの「意図せざる効果」が果せたことにもなる。

（札幌・女性）これからはワークシェアリングなどを導入していけばいいと思うのです。

（金子）ワークシェアリングすると、たぶん最初の男性の働き方を見直すところで、隔日勤務や短時間勤務という話に当然なってきます。そうすると1人分の収入が減るから、それは困る。それではこの制度は成り立たないという意見が出てくるわけです。

（札幌・女性）収入を減らすということではなく、減った分はやはり少し税金などでカバーしていく…。

（金子）その税金はみんなで払えばいいわけですか。

（札幌・女性）そうですね。

（金子）つまり、その場合は社会全体での負担が重くなることは当然だとなりますか。

（札幌・女性）負担は今よりは大きくなると思います。

負担の重さを社会化して、社会全体が共有できるかが最大の論点になる。

一般に、ファミリー・フレンドリー企業は次の特徴をもつ企業として理解されている。

① 法を上回る基準の育児・介護休業制度を規定しており、かつ実際に利用されている。

② 仕事と家庭に配慮した柔軟な働き方ができる制度をもち、かつ実際に利用されている。

③ 仕事と家庭との両立がしやすい企業文化をもっている。

内閣府の『時の動き』（2002年11月号）では「仕事と育児･介護とが両立できるような様々な制度を持ち、多様で柔軟な働き方を労働者が選択できるような取り組みを行う企業」（8頁）と説明されている。多くの場合、その典型的な事例として育児休業制度の運用状態が挙げられる。かりに育児休業が適用できない場合でも、育児のための勤務時間短縮などの措置（育児・介護休業法第19条第1項)、及び就学前児童全般に関わる、幼児期の子を養育する労働者に対する措置（同法第20条）が企業には努力義務になっている。だから、こうした子育てと仕事との両立のための配慮を企業に対して促がすことは、既婚者の出生力支援の目的とし

ては少子化対策としてももちろん意味がある。

しかし21世紀初頭の日本経済はその不透明感がいっそう深刻化しており、雇用主は企業の存続を最優先に考え、人員と人件費の削減を進めている。この状況での積極的な少子化対策は企業の短期的な利益を損なうという判断が、会社や社会全体にも認められる。たとえば、日本経済団体連合会は2002年12月9日に次のような内容の意見書をホームページで公表した。すなわち「少子化対策プラスワン」は、「企業への行動計画作成・届出の義務づけを通じ、雇用管理に関する一定の目標達成を求めることは、企業に過重な負担を課すものであり、賛成できない」。「本来、雇用管理に関する事項は、企業の実情に応じ、個々の労使が自主的・主体的に取り組むべき事柄であり、全面的に行政が関与することは問題がある」。加えて、計画期間終了後、所期の目標を達成する等、一定要件を満たしている企業に対し、『対策推進企業』の認定を行なう旨の検討がなされているようであるが、企業が自主的に取り組む事柄に関して、行政がその達成度合いを評価、認定する必要性はないと考える」。この3点に私も同意する。やるとすれば、行政組織も同じ条件で「評価、認定」しないと不公平であろう。

「社内でリストラしているので、そのしわ寄せがきています。どうしても期限が決まっていて、何月何日からそのシステムがスタートしなければならないということになると、それに合わせるために1カ月前くらい前からほとんど泊まり込みになってしまうのです。一方では、女性の労働で深夜労働の解禁をしている半面、一方で子育てとの両立も必要です。私も実際、すごく職場の人に私ができない分をみんなに振り分けて分担してもらっている状況があります。やはり職場に多少理解があるところだったので、続けられました。結局、育児休暇は1カ月だけ取って復帰したのです」(東京・女性)。

働き方を見直すことは少子化対策の必要条件ではあるが、そもそもこの視点は既婚者の出生力支援の意味が濃厚なのだから、経済情勢いかんではこの取り組みは後回しになりがちであることを銘記しておきたい。とりわけ、短時間労働が所得減少に直結するならば、国が指導したとしても、時短政策は国民の支持を得られない。かりに長時間労働でも、所得の現状維持や増加を国民の大半が願っているからである。だから、少子化対策の十分条件を別個に用意しておく必要があるであろう(金子、2003)。グループインタビューでも「子どもがいて残業できないと、昇給もしない。お金の面だけで言えば、休んでもらうよりは、夫には残業して稼いでほしいというのが本音です。たぶん共働きでないお宅は、ちゃんと8時間は働いて、給料を100%も貰ってきてほしいのではないかと思います」(札幌・女性)に象徴される意見が多数のべられた。

このあたりの事情を、さらに今回のグループインタビュー記録で明らかにしておきたい。「社内で設けられた制度休暇は消化するのです。しかし、それ以外の有給休暇というのは、上司にもよるのですが、なかなか取れるような状況ではありません。というのは、人数がかなり減らされてきているので。どこも経費削減で、1 人当たりの仕事の負担もかなり大きくなってきていますから」(札幌・男性)。「いろいろと競争が激しくなってきています。そういう中で仕事を第一にせざるをえないので、日本の男性サラリーマンは、精神的にも肉体的にも、かなり追い込まれている状況にあると思います。そこでさらに育児が追加負担となるのは、やはり厳しいかなというのが率直な意見です」(札幌・女性)。

「今の状態で育児休暇などを取ると、実際、その人の評価が落ちます。キャリアで仕事を築いてきた人が 3 年間休んだら、現状でははっきりいってはじかれ者です。そのポストを守るべく頑張ってきても、3 年間ブランクをおいたら、育児休暇の名目で休んでも、実際戻ってきたら今のランクは絶対に落ちます。競争社会である以上は絶対にそうなります。うちの会社でも、たくさん女性の方が出産休暇だ何だと 1 年ぐらい休んでいますが、やはり出世はしないと思います。だから、仕事を取るか、出世を取るかの優先順位です」(札幌・男性)。

「私の主人は毎日残業でいつも帰りがすごく遅くて、女の人よりも負担が大きいので、そういうふうに労働時間を短くというのは無理かなという感じがします。一人一人の仕事の量や任されている量が多いので、時間が足りません」(福岡・女性)。「当然、働く時間を減らしたら、その少なくなった時間で売上を上げなくてはいけないのです。それが可能かというと、そうではないですね。実際ほとんどの民間企業や中小企業ではサービス残業は当たりまえです。勤務が 9 時から 5 時となっていても、実際は 7 時 8 時、忙しいところは 10 時 11 時まで働いても残業手当などは出ない。それはどうしてかというと、そんなところに残業手当などを乗せていたら、会社自体の経営が成り立たないからです」(福岡・男性)。

「うちの主人は電力関係ですが、とても帰りが遅くて深夜 2 時のときもあります。会社内でも残業が多い職場と少ない職場がありますが、うちはとても多いところで、月に 100 時間を超えているときがありまして、『このままだと過労死が認められるね』と言っていました。ですから、そういう彼に育児の手伝いはとても期待できません」(福岡・女性)。「主人は朝早く行って夜遅く帰ってくるので、世間では男性も家事を手伝った方がいいとか、子育てをと言いますが、実際に朝早く行って夜遅く帰ってくる夫に手伝ってほしいとなかなか頼めません。ですから、私も全部自分で子どもの世話などをやっています」(福岡・女性)。

「ニュースや配布資料を見て、『そんな無謀な』と直感的に思いました。私の仕事は営業や

サービスです。社外の人との仕事が商売対象という形でやっていますので、例えば、子どもが生まれたら5日間の休暇を取るというのは、無理な話だと思います。テレビや新聞を見ていると、ここ数年、景気がどんどん悪くなってきており、民間企業では人をどんどん減らし、残った人でいなくなった人の分も抱えて仕事をやっている状況です。要するに、一人当たりの仕事量はどんどん増えてきているのが民間企業の実態だと思います。そういう中で働く時間を減らすというのはかなり厳しい話だというのが実感です」(東京・男性)。「男性が早く帰ってきたり、働く日数を減らしたりというのは、やはり現実的なことを考えると無理な話ではないかという気がします」(東京・女性)。「中小企業も含めて、企業で働く人たちは、基本的に企業の業績や利益がどのくらい上がっているかといった個別の事情で、かなり働き方も違ってくると思います。ですから、国が一律に数値目標を出しても、個々の企業にとって『うちはそういう状況ではない、利益が上がっていない』と言われてしまえばどうしようもない。私の会社も、『少子化対策プラスワン』が出たときに話題になり、『この会社は、男性に育児にかかわらせるような余裕ってないよね』というのがみんなの意見でした」(東京・男性)。

これらの意見およびそれを生み出す会社の方針や経営姿勢を批判するのは簡単であるが、おそらくこのような事情が一般的であるので、短時間労働だけの子育て支援策には有効性に乏しいといわざるをえない。これらは3都市の相違を超え、30歳代の男女の違いや既婚未婚さらに有職無職の相違も超えて、平均的な意見である。政治行政は国民ニーズを無視できないとすれば、男女ともに時短が困難であると判断しているような少子化対策の有効性は疑わしくなるのではないか。

「本当に浸透させていきたいのであれば、企業が共働きの人を補助していく、あるいは男性の育児休暇を取った実績が一定以上の会社には報奨金を出すとか、税率を低くするなどが必要でしょう。お金の外圧で企業を動かさないかぎり、変わらないのではないかと思います。『まず隗から始めよ』という言葉があるように、公務員からまずやれといいたい。公務員が、『仕事を定時でやめ退社しています。民間企業もやりましょう』と言えば、民間企業も動くと思います。そういった努力をせずに言葉だけでやっていると、非常に上っ面で、企業はこういうものを出されても『うちはできないね』で終わってしまう。そのような対策はあまり意味がないのではないかなという気がします」(東京・男性)。

その通りであり、厚生労働省からその短時間労働を実行すること、および好意的な報道をする新聞テレビで早急に時短に取り組んでみせなければ、「働き方の見直し」は画餅に化すであろう。本格的な少子化対策の筆頭を男性の労働時間の短縮に絞り込むような発想を

速やかに転換させる必要があることを、グループインタビュー参加者は指摘している。

第2節　労働時間の実態と参加者の意見

少子化には、子育て期間中の長時間労働、育児休業制度をとりにくい職場の雰囲気が大きく作用しているので、単なる助成金や奨励金を超えて、「両立ライフ支援」として、もっと積極的な働き方の改変が企業とそこでの社員に働きかけられるかどうかが成否の分かれ目となる。国がどこまで本気で少子化対策を考えているのかはこの「働きかけ」で証明される。単なる「表彰」とそのマスコミ報道だけのインセンティブでは効果には乏しいことは既述した。

男女雇用機会均等法から10年が経過しているにも関わらず、子育て中の女性を敬遠し、採用抑制、結婚・出産退職慣行などを残す企業が依然として存在することは事実である。その一方で、日本の製造業では目標とする年間1,800時間労働を達成した。ただしその実態は、長時間勤務の正規労働者と派遣・アルバイト・パートタイム労働者への切替えによる二極化である。もちろん労働面での課題も多く、過労死の労災基準の見直しや職業を持つ中高年男性自殺者の増加などの問題は解決していない。加えて女性の側では「子どもを産むから仕事を辞めなければいけない状況ではないということが一番だと思います。今いったん仕事を辞めて、子どもを産んだあとに再開するときには、子どもが熱を出したとかといったときに帰る、周りに迷惑をかける、居づらくなるというのが一番困ったパターンなのです」（札幌・女性）という発言がある。

この10年で、日本の25歳から34歳までの女性労働者のうち、3人に1人はパート・アルバイト・派遣・契約・嘱託等の非正規社員で占められるようになり、これらの女性労働力なくしては企業活動が成り立たない時代でもある。「最近はどこの金融機関も共通しているのですが、かなり正社員を減らして派遣社員で運営しています」（札幌・女性）。「40～50代の人でも会社をどんどん辞めてもらっている状態です。私たちは30代ですが、低賃金で走り回れる社員をどんどん求めている会社と、走り回らなくてもいいから能力で養っていきたいという、少ない人数で頑張ろうという会社とに分けられてきています」（札幌・男性）。

これらの非正規社員には子どもを持つ母親も多数含まれている。したがって、女性の活用は企業経営の点からも不可避のはずであるが、その職場環境はどこまで整っているか。家庭と労働のあり方を考え、職場環境の整備を行うことは、これまで、女性の雇用機会均等の確保及び労働時間短縮等に関わる労働政策として、国が責任を持って取り組むべき事項とされ

てきた。

そして自治体においては男女共同参画の観点から、職場における女性の役割の見直しと家庭への男性の参画が求められてきた。ただし、現実には全体としての労働時間の短縮は日暮れて道遠しの感が深い。「私が勤めていた会社は、どんどん人員削減をしていて、育児休業の話も、就業規則で規定されているますが、実際は、『子どもができたら、辞めてね』という会社でした。ですから、育児休暇など、女性も取る前例がなければ、男性なんてもってのほかという考えの古い体質の会社でした。男性に対する労働時間面での優遇措置というのは、今後も事実上は難しいというのを実感しているところです」(東京・女性)。

たとえば総務省が2002年7月に実施した「労働力調査」によれば、フルタイムの男性会社員3,119万人のうち週60時間(20時間の残業)を超えて働く人の割合は21.4%で、666万人に達した。2001年の同じ調査では21.2%であったから、わずかながらも男性の残業時間は長くなっている。さらに男性社員の残業のうち21.0%は月に80時間を超過していた。残業が月に80時間は厚生労働省が労災認定基準で過労死との因果関係が強いとした時間であり、さまざまな問題が発生しやすい。とりわけ30歳代前半での27.1%が80時間以上の残業時間であったことは、この年代の大半が子育て期間中でもあることに鑑みて、少子化対策の点からもゆゆしき結果といえるであろう。この問題に国はどのように踏みこむのか。

「先ほど、男性が子育てをするのに育児休業を取らなかったら罰金を取るとかいう話がありました。私もそれは賛成です。障害者の方を雇わなかったら、何%かの罰金を払わなくてはいけないですね。そういう感じで、対象者が育児休業を取れないならば、企業が罰金を払う。その罰金は国が全部子育ての方に使ってほしいですね」(福岡・男性)というところまでの意見もある。表彰だけでは企業における時短が成功するとは思えないので、このようなグループインタビューの結果は参考になるのではないか。

年代別では30歳代前半が最高の27.1%、次いで30歳代後半が25.7%になっていた。ともに子育て期間中に該当する年齢である。そして20歳代後半から40歳代後半までのすべての男性従業員でも、80時間以上の残業時間を回答した比率が20%を超えた。

「私は銀行員ですが、会社の制度においては時間短縮ですね。つまり、ノー残業デーを設けたり、早く帰ろうという運動は盛んなのですが、現実問題として、今の仕事の状況を考えればどうしても残業をしなければいけない。会社として制度は作るけれども、それは個々人の仕事のスキルというか、能力に依存しなければいけないところが多いものですから、やはり帰りたくても帰れない。9時、10時になってしまう。最悪休日出勤を必要とするような状

況が現時点では続いております」(福岡・男性)。これは例外的な働き方ではないであろう。

一方、パートを含む常勤の従業員が 30 人以上いる 5,300 社を対象に 4,254 社を調査し、79.7%が回答した厚生労働省調査によれば、2001 年の年休取得平均日数は 8.8 日にすぎなかった。このピークは 1995 年の 9.5 日であり、2000 年は 8.9 日であった。

「相互扶助という考え方は、基本的には非常に賛成です。ただ、それをやるにしても、今の不況は構造的な問題だと思うので、やはりみんなの意識、どちらかというと、みんな自分が厳しいので、『自分さえ何とかなれば』という考え方が蔓延しているところがあります。職業柄、取引先に会っても、今年はボーナスを出せないとか、たぶん給料も来月から 3 割ぐらい減少といわれたりします。失業率の増大だけではなく、仕事には就いているのだけれども収入が激減している人が山ほどいます。ですから、失業率だけではなくて、弱い立場になっている、厳しい立場に追い込まれている、でもここで辞めたら収入がゼロになってしまうから、我慢して生きているという人が背景にいっぱいいるので、そういうところをなんとかしないといけない」(福岡・男性)。不況と国際競争それに少子化による市場の縮小は、相互に関連しつつこのような悪循環の構造を日常化し始めている。

しかも 2001 年では、会社が与える有給休暇の日数 18.1 日のうち、その取得率は 48.4%となって、6 年連続の取得率の低下が続いた。ちなみに 2000 年は 49.5%であり、1980 年の調査開始以降で取得率のピークは 95 年の 55.2%であった。このような実態から短時間勤務や「短時間正社員」などは夢物語にすぎない。なぜなら、国民の大半が生活の苦しさを痛感しているからである。「今、リストラなどで働く時間が減って、その分、夜にアルバイトに行くお父さんもいるそうです」(札幌・女性)。「主人は早く帰ってきても家事に参加しないのが目に見えているので、仕事の終わる時間が早くなっても家事をやるという話には繋がらないと思います」(東京・女性)。

国民の大半はこのような状態にあるのだから、働き方の見直しを進めることはいいとしても、お手本を示し、単にファミリー・フレンドリー企業として表彰するだけの政策では、企業文化変容の動機付けには弱すぎるであろう。ましてや少子化対策の筆頭に掲げるような対策ではない。

第3節　子育て負担の実態と評価の問題

2002 年 8 月 9 日に厚生労働省が発表した「国民生活基礎調査」(概況) によれば、2000 年

の1世帯当たりの平均所得は前年比1.5%減少の616.9万円となり、4年連続のマイナスになった。とりわけ子育て世帯での家計の苦しさがデータから伝わってくる。今回発表になった「国民生活基礎調査」結果では、18歳未満の子どもがいる世帯の平均所得は725.9万円であり、全体平均よりも110万円程度は多いが、後に見るような多額の教育費支出があるために、「生活が苦しい」という回答が59.3%になっている。分類の中では平均所得が252.7万円と全体平均の40%にすぎなかったのが母子家庭であり、同じく子どもがいるために「生活が苦しい」回答は今回では最高の81.6%に達した。

合わせて東海銀行「子どもの教育費調査2000」を利用すれば、小中高の12年間でかかる一人の教育費は、すべて公立なら416万円、高校のみ私立で535万円、中高私立が685万円、そしてすべて私立ならば995万円にもなる。小中高の教育費だけでも苦しいうえに、4年制大学に子どもが進めば、間違いなく4年間の生活費と入学金と授業料などの教育費の合計は1,000万円になる。これは親が単独で支出しなければならない。しかし子どもがいなければ、もちろんこの費用はゼロである。ここから不公平感が社会全体に助長される必然性がある。グループインタビュー参加者は異口同音に「普通の習い事は年間10万円程度ですが、塾だと月約3万円かかるらしいのです。うちも習い事を2つずつくらいやっていて、3人で年間約60万円かかっていますが、塾になるともっとかかるし、塾に行かないといい学校に行けないし、今の公立中学は不安だし、という状況です」(札幌・女性)というような内容の発言をしている。

「両親が2人とも働くようになったとしても、収入に見合う大学しか行かせられない」(札幌・女性)。「長女が6歳で、習い事として体操教室に週2回、英語教室に週1回。次女もこれはやっています。あと、ピアノも習っています。一生懸命情報を探して安いところにお願いしています」(札幌・女性)。「うちは一人ですので、子どもの数の多い方よりは一人にかけるわけですから、今は塾ともう1つ習い事をさせています。塾も中学に行くと費用が上がるし、講習会一つにしても小学校とは違うようですごく高くなります。まして中3の受験期になると、もっと高いです」(札幌・女性)。これらはすべて平均的な子育て家庭であろう。

結婚や子どもへの価値観が社会全体で大きく変容しているので、新旧エンゼルプランに代表される既婚者の子育て支援に限定された保育育児支援と働き方の見直しといった少子化対策の必要条件のみではもはや不十分である(金子、2002)。やはりもう一つの原因である未婚率の上昇を踏まえて、高額の教育費を始めとして社会全体での子育て負担に未婚者層にも共同参画してもらう意義を訴えていき、社会全体における公平感を増すことが必要であり、こ

れが十分条件の内容になる。

「専業主婦として優遇されているとは思いませんが、私はもう少したてば働こうかと思っていたました。制度が変わり優遇されなくなると、がむしゃらに働くしかないと思います。そうしないと保育園の費用で収支がトントンになってしまいます。また、年齢からいって 2 人目も欲しいのですが、いま心が揺れています」(東京・女性)。「3%の消費税を導入した時点で、福祉に使うということでしたが、また足りないから 5%、足りないから 10%、またまた増えて 15%になるのでしょうか。結局、ちゃんとしたところには使われていないのではないかという疑問がある。『その会計報告をしてみろ』といいたい。あるいは『課税最低限を下げろ』とも。今回、それは上らずに、配偶者特別控除だけが廃止されてしまった。何か、取りやすいところから取られてしまっているという気がします」(東京・女性)。この女性の意見を男女共同参画社会会議のメンバーや賛同者はどのように判断されるか。

少なくとも少子化対策の十分条件には、30 年後や 50 年後それに 100 年後の日本の適正人口、市場、経済成長、労働力、医療制度、健康保険制度、年金制度、学校教育制度、国民負担の将来のあり方などが含まれる。少子化が進む高齢社会設計の理念自体が問い直されるのである。これは行政ではなく、当然ながら政治の問題である。

「子どもがいるとやはり働きづらいというか、例えば子どもが熱を出しても休みづらいのです。そういう会社の体制などをまず変えていっていただかないと、働くお母さんたちにとっては 2 人目や 3 人目は、今の状態では産みにくいと思います」(札幌・女性)。

2002 年 2 月の財務省見通しでは、2001 年の国民負担率は 36.9%だが、財政赤字の分を加味したら 45.3%になり、すでに 50%程度のイギリスに近くなる。また、『平成 13 年度版財政経済白書』では、政府と自治体の財政支出を行政からの「受益」とし、税金と社会保険料を行政への「負担」とした場合、平成 11 年度の構造が変化しないと仮定すれば、生涯を通しての現在の 60 歳以上は 5,700 万円の受益超過、20 歳代は 1,300 万円の負担超過になるとする。

表 1 国民負担率の比較(%)

	租税負担率	社会保障負担率	国民負担率
フランス (1997 年)	36.7	28.6	65.3
ドイツ (1997 年)	29.2	26.7	55.9
イギリス (1996 年)	38.2	10.1	48.3
アメリカ (1997 年)	26.1	9.7	35.8
日　本 (2001 年)	22.6	14.3	36.9
スウェーデン (1996 年)	48.9	21.3	70.2

(出典)『朝日新聞』2002 年 10 月 22 日。

しかし、一人当たり 3,000 万円になる子育て費用はここには反映されていない。表 1 に見るように、高福祉の国々での国民負担率は非常に高い。消費税も通常は 20％を超えている。日本社会と国民はこのような高負担になじまないので、青い鳥をヨーロッパに求める数十年来の言論手法の限界に気づいて、政治、行政、マスコミ、学界などは自前の試行錯誤を開始する時期に来ている。その改変の素材としても少子化対策が活用される。

今までのマスコミはとにかく「個人の自由なんだから、子どもはいてもいなくてもいいじゃないか」と書いていたが、「少子化対策プラスワン」が発表されて以来、何かやはりそれだけではうまくいかないということを書き始めて、例えばフランスがお手本で、「フランスは子供がたくさん生まれるような家族政策を実行しています」という記事が載るようになった。これも顕著な変化である。ただその場合に、休業すると日本の場合は大体育児休業は 4 割給付で最長が 1 年間である。2 年目に入るともうゼロになる。フランスの場合はそれが 8 割出るとか、その他いいことがたくさん書いてある。しかし、国民負担の問題に触れていない。例えばフランスの消費税は 20％を超える。だから、私はいつも尋ねるのは、消費税 20％の社会をあなたは認めるのかということである。かりに、20％がいやなら、やりくりの幅は非常に限られてくる。北欧で福祉水準が高く、福祉政策が軒並みうまくいっている国々では、国民負担率が高い。日本の 2 倍の負担をしている。そうすると、当然戻ってくるお金やサービスも多いであろう。

日本では 5％の消費税だが、20％にすると育児休業、育児休暇を取っても給料の 8 割は戻ってくるし、2 年目もある程度給付されるフランスの制度を、マスコミは好意的に紹介する。また、デンマークでは大学 4 年卒業するまで無料である。それはすばらしいと評価するマスコミは多いが、消費税が 25％であり、国民が 70％を超える負担をしているからできるわけで、日本のように 37％の負担では絶望的に不可能である。この点でマスコミは国民の健全な「知る権利」に答えていない。

以上の日本社会の実態についてグループインタビューへの参加者からは、「子どもを産めない理由としては、環境の部分ももちろんありますが、一番大きいのは経済面ですね。もう少し子どもを産むとか育てるというおもしろさ、楽しさがあってもいい」（札幌・女性）に集約される意見が多く出た。「子どもが少ないと経済がどんどん厳しくなるということを、私も今日ここで、『ああ、そうだ』と初めて気づいたような感じです。ミルク会社や子ども服会社だけでなく、私が勤めている電力会社でも、消費者が少なければ売上も収入も少ないですから、私も含めてそこら辺があまりよく分かっていません。今が楽しければいいと思っている

人がとても多いと思います。子どもが少なくなって人口が少なくなると、物も高くなるし、収入もそれだけ少なくなると気づかせてほしい」(福岡・女性)。この論点は20世紀末までの長い間一般化されなかったが、21世紀の今日ではむしろ普通になっている。

第4節　世代間の支えあいの現状と課題

少子化対策についての議論で、私は未婚者が社会全体に増えることを直接否定しているのではない。なぜなら、人生をどう生きるかは、個人の自由であるからである。ただ、子育てしない既婚者でも未婚者でも、「自由に生きる」ことと「身勝手に生きる」ことを同列視する人が多くなってきたことは事実のようであるから、どのような生き方をしても世代間の子育て支援に応分の協力を求めるという論点を展開してきた(金子、1998；2000；2002)。その理由は第1部でも明らかにしたように、少子化は子育て者にも子育てフリーライダーにも等しく社会的にはマイナスの影響を与えるからである。

同時に、子育ての負担をせずにその苦労への配慮が皆無の人が70歳になったときに、子育て者と同じ権利を主張することは平等なのか公平なのかも問いかけてきた。すなわち、機械的に平等に扱うことが公平ではない結果を生み出す事例としても、少子化現象を考えてきた。その意味では、「結果の平等」を声高に強調する男女共同参画社会基本法の精神にも批判を加えてきた(金子、2003)。

たとえば現行の累進課税方式では、たくさんの所得がある人の税金は高いし、少なければ税金を安くしているから、全員が平等の比率で所得税を払っているわけではない。これは所得額に応じて、不平等に扱うことが公平になるという政策の事例である。逆に消費税は、所得とは無関係に平等に商品にかけられている。所得が高い人も低い人も、同じ税率であることは公平なのであろうか。この問題はそのまま少子化対策にも転用される。男女共同参画社会基本法における「中立」の解釈も、幅広い文脈でいずれ見直しの対象になるはずである。

旧総理府が少子化対策のアンケート調査をしたときも、いちばん強いニーズには負担軽減の問題があげられている。そこから、お金の負担と時間の負担、加えて肉体的・精神的負担の社会全体での共有という主張には、グループインタビューでも納得する人が出てきた。つまり、子育てには親だけが負担する大別して4種類の領域がある。ところが子育てしない人は、それとは一切無関係である。しかしそれでも70歳から福祉介護医療すべてで全員が一律に同じだというのは、公平性の問題からみたらどのように評価できるか。

この解決のヒントは介護保険が与える。それは自分の親や配偶者の親の有無にかかわらず、本人が40歳以上になれば介護保険料を支払い、全員が支える側に回るというシステムである。私は介護保険と同じ理念をもつ制度として、30歳以上が子育て負担を共有する子育て基金制度を提唱してきた（金子、2002)。前の世代を現世代が支えるのが介護保険、次の世代を現世代が支えるのが子育て基金という分類である。子どもが社会システムの存続にとって不可欠という認識から、「公共財」として環境と同様に子どもを位置づけようと試みている。

この10年来、パラサイトシングルあるいは夫婦ともフルタイムで仕事をして子どもは持たないとの選択をしたディンクスが徐々に増加しているが、これらの人々も、将来は自己の選択とは関わりなく、否応なしに21世紀前半では人口減少社会に直面することとなり、その社会環境を受け入れなければならない。子育て負担を放棄しても、社会全体で育てられた子どもたちからの受益は共有するといった選択肢は、おそらく今後は社会全体における不公平感を増殖させ、社会全体の凝集性は落ちてくるであろう。「友達のところを見ると、子どもがいると大変だなと感じます。教育資金にしても、洋服とかいろいろなものもすぐ大きくなってしまって、いろいろお金がかかる」（札幌・女性）という話は聞いていても、現実には「うちは子どもがいないので、年に何回か温泉に一泊旅行に行ったり、東京に2人で行ったりとかしています」（札幌・女性）に行き着くことになる。結局は他人事なのである。あるいは「私は、働いて15年目になります。結婚は、10年目になります。典型的なディンクスの家庭として年に3回ぐらい主人と海外旅行や、温泉旅行を楽しんでいるうちに、子どもはいないが2人の生活をエンジョイできればいいと思いつつ10年経ってしまいました」（東京・女性）ということは現在では珍しくない。

このようなライフスタイルを横目に、「いろいろお金がかかる」家族では子育て優先になり、年に数回も温泉や東京観光に行くことはできない。「もし子どもが3人もいた場合は教育費やいろいろな面でどうしても負担が大変です。産みたくても産めないというのが現実ではないかと思います」（福岡・女性)。「子どものいない、産むか産まないかわからない人も、他人の子どものために税金を負担するようなことは非常に賛成です。というのは、やはり子どものいる側からすると、子どものいない人は贅沢ばかりして、という不公平感が常にあるわけです。お互い助け合いですから、その辺もあってしかるべきだと思います」（東京・女性)。「2人で生きていくということもいいとは思いますが、社会全体から見ると、介護のことなどを考えると、私たちの世代の人が今の70代、80代の人を支えなくてはいけない。今まではそう考えていたのですが、先生のお話を聞いて、私たちも今の子どもたちに支えられなく

てはいけないとのだと思ったら、子どもを産む産まないは自由なのだけれども、年金などはみんなで支え合わなくてはいけないと思います」（福岡・女性）という発言の趣旨には、今回の3都市グループインタビューでも複数の賛同者が登場した。

その意味で、もはや私が造語した「子育てフリーライダー」への許容限界は臨界点に達したと見る時代になった。現世代はまだ見ぬ将来世代にも責任があるから、環境問題による地球環境の保護と同じ文脈で、少子化による社会消滅をさけるための建設的な対応は当然である。以下では、少子化対策の十分条件として広く社会全体に対しての提言を行うこととしたい。

まず、国民への少子化デメリットに関する積極的な情報提供の実施である。少子化の進展は社会保障に関心を持つ人々にはそのマイナスの影響が憂慮されてきたが、多くの国民にとっては遠い将来の出来事と捉えられるか、あるいは近視眼的には直面する保育育児支援策への期待として登場するにすぎなかった。「若い方々（現役世代）の保険料や年金保険料、税金などが増大するという状況に陥っています。これがまさに少子化の一つの現象面でもあるわけで、この年金の負担をどうしていくかということが、今、緊急の課題になっています」（札幌・女性）という認識がもっと普遍化するまで、詳細な情報提供が必要であろう。

しかし、国民負担や働き方の問題などこれまでの国民全体が選択した結果として今日の少子化問題があるのだから、これからの選択次第では解決方向も含めて将来への対処を試みることも同じく可能である。グループインタビューでも「子どもを持って育てて、仕事もしている方が日本にはたくさんおられますが、すごいの一言です。子どもを育てるということは、単なる育児ではなく、日本のいわば未来を育てているわけですから、子どもを持っていない人にはできないことをしていただいているわけです。現在独身の私がこのまま結婚せずに、年を取って年金のお世話になるとき、今の子ども世代が働いてその年金を支払ってくれるわけです。そういう日本の未来を育てているという意味で、基本的に、子どもを育てる人たちにはたくさん優遇措置を付けるべきだと思います」（札幌・女性）は、すでに例外的な認識ではない。

そのためには、パラサイトシングルやディンクスも含め各個人が、自らの生き方と日本社会のあり方を考えるきっかけとしての少子化情報が望まれる。少子化の十分条件的対策の第一歩として、さまざまな機会を捉えて少子化デメリットに関する情報の提供を行政も企業もともに行う時期にきている。

たとえば子どもが生まれないから、産婦人科と小児科の開業医が減少中である。逆に子ど

もを産んだ人は、地域における小児科開業医の環境が悪化しているために非常に育てにくくなっている。同様に、有権者である高齢者は増えているので、議員や市町村長は高齢者向けの福祉施設を重視せざるをえない。子どもは有権者でもないので、子育て支援策は後回しになりがちである。これも一種の悪循環になっている。限られた予算の中で市町村の施設をつくるとき、例えば高齢者の福祉施設をつくるか、子ども向けの遊びの施設をつくるかという二者択一の場合、高齢者向けになりがちである。その結果、子育て条件が悪くなって、ますます子どもが少なくなって、施設も乏しくなって、小児科開業医は新規参入しなくなるいう時代になってしまった。

このような事情を理解しつつ、とりわけ育児期の女性の労働力率が高い都道府県のほうが、出生率も高いという結果があることにも留意しておきたい。表2にそれを示そう。その意味では女性が働く環境の整備はもっと進める必要がある。

表2 育児期の女性の労働力率(2000年国勢調査;%)

山形	76.2	高知	71.2	青森	66.4	山梨	61.6	三重	60.9	茨城	57.4	埼玉	52.6
富山	72.4	秋田	70.6	長野	63.9	岐阜	61.5	栃木	60.6	北海道	57.4	兵庫	52.1
鳥取	72.4	岩手	69.1	長崎	63.5	鹿児島	61.5	群馬	60.3	愛知	56.8	大阪	51.7
福井	72.3	熊本	68.1	香川	63.5	岡山	61.4	愛媛	59.5	京都	56.5	神奈川	51.2
島根	72.2	宮崎	67.9	徳島	63.4	静岡	61.3	広島	59.4	滋賀	56.2	奈良	48.3
新潟	71.6	佐賀	67.5	大分	62.0	宮城	61.1	福岡	59.2	和歌山	55.5		
石川	71.3	福島	67.1	沖縄	61.9	山口	60.9	東京	58.4	千葉	53.3		

子育て費用に関しては、様々な試算がなされているが、そのうちの教育費だけを取り上げても、世帯の年収に対する在学費用（世帯の全ての子どもにかかる費用の合計）の割合は、平均33.5%に達するとされる。これは国民生活金融公庫が2001年11月に発表した調査結果である。主に高等学校、短期大学、大学等に入学・在学する子どものいる世帯で、国の教育ローン利用世帯を対象としている。

各種推計では教育費を含む子育て費用の総額が、1人当たり2,500万円はかかるとされ、別の推計の教育費が最もかかるケースでは、養育費と教育費の合計が6,300万円に達するなど子育て費用が生涯所得に占める割合は相当な水準に達している。

このような負担が、専ら子育て家庭にのみ負わされている現状は、少なくとも将来の国民負担を考慮すると、必ずしも平等であるとはいえないと私は判断してきた。「新聞に出た配偶者特別控除の問題など偏った意見がマスコミに出ることや、新聞などを見ても偏った方向でしか出てこなくて、正確な平等な意見という形の出方をしないので、いろいろなことに関して曲がった印象を、みんな何らかのかたちで受け止めてしまうので、何が本当なのかといった部分がどうしてもわかりづらくなってしまっているような気がします」（東京・女性）。こ

の点で、保育育児だけを少子化対策と見なしたり、専業主婦の意見を取り上げてこなかったマスコミのミスリードの責任は大きい。

平等と公平は場合によっては等しくないことをきちんと理解するのが「老若男女共生社会」の出発点であり、少子化対策に介護保険と同じ理念の「子育て基金」を提唱するゆえんである。ちなみに30歳以上の国民に子どもの有無に関わらず、子育て基金への協力を求めるのがこの基金の趣旨である。これによって子育てフリーライダーを防止して、将来世代を「社会全体で」支援する態勢が可能になる。

「そういう基金というのは賛成です。人間が生きて死ぬまでの間で、健康なときは全く大丈夫なのですが、手がかかる子どもの時期と60歳を過ぎてからというのは、たとえば、安心して子どもを育てられるという環境があれば、私の姉ももう1人産むと多分言うと思います。そのような環境の中が出きるためなら、先ほど言われた 20%の消費税も私は賛成です」(札幌・女性)。

ただし、子育ての公平な負担を求めて、自治体単独で少子化対策のための基金や目的税を創設することは、市民理解の現状、他の自治体との均衡、導入後の使途等を勘案すると、当面は相当の困難が伴う。まずは、国レベルで、介護保険と同様の理念による負担のあり方を議論することから始めて、札幌市を始めとした政令指定都市において同様な方向での議論を開始する時期に至ったと見ておきたい。グループインタビューでも「皆さんもそうでしょうが、そういう使途のはっきりしている税金を払うことにはやぶさかではありません。将来自分たちが世話になる若い人たちを育てていくことは国の一つの事業ですから、そういう意味では、みんなで等分に負担して、自分たちも年老いてその社会のお世話になることを考えれば、むだなお金ではなくて、逆にすごく正当な投資だと思います。今、ああそういう考え方もという感じで目からウロコだったのですが、確かに介護保険と同じ考え方で、新しくつくっていくのも一つの案だと思います」(札幌・女性) ところまで来ている。なお、「教育費に関してはまだピンときていませんが、先程、先生が言ったシステムは、子どもがいない人には、強制的かどうかわからないのですが、負担というのは難しいのではないかと思います」(東京・女性)という発言もあった。

少子化が進行する21世紀の子どもは公共財として理解される (金子、2003)。公共財とは老若男女すべての人がそれから利益を受けることができる社会資源をいう。それは利用者を排除しないため、その維持や育成への貢献がなくても公共財の便益を受け取ろうとする誘惑を生み出すことがある。それをする人がフリーライダーと呼ばれる。

すなわちこの数年私が提起してきた「老若男女共生社会」では、個人の合理性が社会の不・非合理性を生み出すことがあるという社会的ジレンマ論もしくは「合成の誤謬」論の知見を活用して少子化対策を組み立てようとする。

表 3 年金制度の意識調査(厚生労働省 2002 年 3 月;%)

	年金制度に反対	賛成
20 歳代	42.1	54.6
30 歳代	40.9	55.4
60 歳以上	6.6	79.4

(注)20-69 歳会社員と配偶者対象 3,274 人が回答

表 3 に示したように、若い世代になるほど現今の年金制度の反対意見が強まる。60 歳以上の反対比率と比べてみると、その差は歴然としている。このままでは徐々に現今の年金制度不信が強まり、未払い者が増加し、制度そのものが存続しえなくなる。その結果は制度が破壊され、全員が損をして不安な老後がますます強くなる。だから個人レベルでの対応をせざるを得なくなる。「よい老後、安心できる老後、楽しい老後を迎えるためには、やはり自分で行動していくしか、方法はないと思います。ですから、個人年金関係はガッチリしています。給料からその掛け金を引き去られて、手取りは少ないという感じはしますが」(札幌・女性)。

「重要なのは経済的な面だと思うので、結婚しない人間も、結婚して子どもを持たない人間も、ある程度公平に負担をして、子どもを産んで育てることができる環境を作っていく方向しかないのかなと思います。今の社会全体の閉塞感というものも、この少子化と全然無関係ではないと思います。若い世代がどんどん減っていくことも、国の活性がどんどん落ちていくこととつながっていると思うのです」(札幌・女性)。

以上のグループインタビュー結果からも、少子化対策は地方分権の試金石と認識して，世代論の立場からの独自な「老若男女共生社会」を模索する時期に至ったと考えられる。その方向性は

(1) 必要条件として：男女共同参画社会づくりとエンゼルプランの推進

(2) 十分条件として：少子化の正確な現状理解，社会保障の将来像設計，世代内と世代間における平等と公正の新しい創造(時短・老若男女の多様な働き方・ファミリーフレンドリー企業の応援)、地域社会での支援体制づくり

にある。

「一方的ではお互いにどうしても嫌な感じになりますので、『今日は私が見るから、今度は代わってね』みたいな感じで、かわりばんこみたいな感じで。実際、公園などではあまり遊

ばせないというか、危ないとか、砂場が汚れて汚いとか、紫外線にあまり当たってはいけないとか、いろいろな理由で、出歩く人をあまり見ない。元気で遊んでいる子どもをあまり見ないような感じですね。ですから、幼稚園などで知り合う方が多いかな」(福岡・女性)。また「そうやって助けてくださったから、主人がほとんどいなくても、休めない時期でも、保育園が休みで預かれない時期を乗り切ってこられたという感じです。ですから、やはり子ども同士の友達で、みんな同じ働いている状況の中で困っているのがわかっているから、その代わり『怪我したらごめんね』という感じでやってこられました」(福岡・女性)。地域での相互扶助体制は曲がりなりにもここまで来ている。地域支援体制についてのやりとりも次のような感じで進んでいる。

(金子) 口コミというのは、例えば職場の口コミとご近所の口コミと、また幼稚園のお母さん同士からという3つぐらいあると思いますが、どれが一番多いですか。

(福岡・女性) やはりご近所が一番即戦力に富みますので、何かにつけ気になることがあれば、ご近所に自分はどういう情報が知りたいということを話題に出すしかありません。

という回答が一般的なようである。「同じ東京都の中でも、ある区はやって、ある区はやらないというのがあります。本当に元気なおじいちゃま、おばあちゃま、知恵を持っている方、お子さんが好きな方、たくさんいらっしゃると思います。本当に近所のおばあちゃまが遊びにきたという感覚で、保育園なり幼稚園なり小学校に定期的に訪れるという制度を作っていただけたら、本当にうれしいと思います」(東京・女性)。

その次には以下のＡＢＣの大原則を活かすことである。

Ａ．少子化対策費用での男女の個人的負担格差に配慮して、平等と公平について見直す

Ｂ．公平な少子化対策を、世代内負担と世代間負担の社会的共有を基盤として作り直す

Ｃ．対策の短期的利益を超えて、長期の社会的損失にも配慮する

「消費税のアップは、これ以上いわゆる需要が減るということになり、今の日本ではまず無理だと思います。今子供をつくるとお金がかかるというのが当たりまえですから、子供を数多くつくると少しは負担が少なくなるということでなければ、負金銭的な負担に絡んだ面での少子化対策にはならないでしょう」(福岡・男性)。

そして、最終的な案としては、表4に整理される10項目の小原則が都市の実情によって、優先順位をつけながら具体化されることが望ましい。私はこれに準拠して2002年3月に札幌市で答申を作成した (札幌市、2002)。

「私は荒川区在住です。荒川区はすごく福祉に力を入れている区です。今、都内でもバラ

ツキがあるとおっしゃったのですが、荒川区はかなりいい方だと思います。それで特に、小さい子に対する福祉と老人に対する福祉と両方二本立てでやっています。バランスよくという話があったように、例えばおじいちゃん、おばあちゃんのシルバーセンターのボランティアを募集しているのです。でも、逆に保育園とか、おっしゃったような子育てをしたり、赤ちゃんのことを助けてあげるボランティアの募集は見たことがないのです。だから、逆に60

表4 少子化処方箋の10原則

① 子育て共同参画社会理念の共有
誰もが参加する（性別・年齢を問わない）現状では子育て家庭と政府と企業だけが負担を負っている。
② 社会全体での支援が課題だから、パラサイトシングル・ディンクスにも応分の負担を求める。
結婚出産に対する個人の選択は自由だが、それなりの子育て負担はして欲しい。
年間教育費が年収の3分の1を越えた（「国民生活金融公庫」2001年11月発表）ので、子育てフリーライダーは認めにくくなった。
③ 福祉の産業化推進　行政が現物給付をするのではなく、民間の力で産業化を図る。
④ 都市独自の「子育て基金」の設置
⑤ 少子化対策に取り組む組織の設置（縦割りではなく横断的に）
男女共同参画室と子育て共同参画室を並べて，保育と育児にとどまらない施策を。
⑥ 十分条件を満たすには、まず、「わかってもらう」ための啓発活動から。
⑦ 「子育て支援計画」の施策は優先度に応じてメリハリをつける。
⑧ 対策の対象層を、少子化の背景・要因に応じて分類し、それぞれの対応する少子化対策を策定する必要があること。
⑨ 男女共同参画社会の形成イコール少子化対策とはならないと考える。「男女共同参画社会が形成できなかったので、少子化対策は失敗しました」とならないように構想する。
⑩ 多様なライフスタイルの保障
その理由：日本女性のほぼ7割はM字型労働批判を支持していない。
両立ライフだけが女性の生き方でなく、専業主婦の生き方も等価に見なす。

歳、65歳を過ぎてもインターネットできる人もたくさんいますし、新聞もみんな読んでいます。もっと高齢者の人で、パワーをもてあましているよりは何かお役に立てればという人がいるはずです。そういう若いお母さんを助けるためのボランティアとか、赤ちゃんの面倒を1人でみきれない人の手助けといったものをもっと募集したらいいのではないかと思います」（東京・女性）。

人間は社会現象を予測する能力をもつから、正確な予想ができる少子化のデメリットに対して、可能な限り誠実な知的対応をすることは学問的にも当然である。とりわけ2100年に4,283万人、2200年には993万人、そして3000年には83人という日本人口を推計するだけでは、知的な対応に欠けるといわざるをえない（社人研、2000：47）。この推計を受けて、理念レベルの平等と公平、平等と自由、さらに「中立」についての哲学的な考察を進めて、具体策レベルでは短期的利益を優先して、長期の社会的損失を見失うことを避けなければならない。それは次の世代に対する現世代の責任であり、まだ見ぬ世代に対しての責任でもある。

【参考文献】

金子勇　；1998,『高齢社会とあなた』日本放送出版協会。

金子勇　；2000,『社会学的創造力』ミネルヴァ書房。

金子勇　；2001,「都市の少子化と社会的ジレンマ」金子勇・森岡清志編『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房：308－324。

金子勇編；2002,『高齢化と少子社会』ミネルヴァ書房。

金子勇　；2003,『都市の少子社会ー世代共生をめざして』東京大学出版会（近刊）。

第3章　地域における子育て支援について

第１節　地域における子育て支援の現状と課題

地域における子育て支援の充実に対する社会的な要請は高まる一方である。核家族化をはじめ女性の社会進出の進展、子育てと就労の両立を求める者が増大する中、子育て支援機関など地域における子育て支援の役割の拡大が強く求められている。特に、保育時間の延長、学童保育、病児保育など、地域における子育て支援のニーズの多様化は著しく、子育て支援機関には、柔軟性に富んだ子育ち、子育て支援の拠点としての役割が期待されている。

1980年代のベビーホテル問題の発生、また未だ根深いいわゆる「母性神話」などによる無差別な他者による子育て支援に対する偏見は、つい最近まで地域における子育て支援への無理解と誤解を生じてきた。「子育て支援の質の評価」を考慮しない議論は、それ自体、サービスの本来有るべき姿、すなわち子育ち、子育てを支える専門的な支援機関として、常によりよいサービス提供のために切磋琢磨する理念を歪めるものになりかねない。米国の７年間の追跡調査では、質の高い子育て支援サービスは、在宅保育より子どもの発達によい影響を与えるとしている（NICHD，1998）。

今後さらに保護者の就労形態が多様化し、延長保育・夜間保育のニーズがより増大することが予測される。少子化の対策として、女性が仕事を継続しながら、あるいは家庭で子育てする女性にとっても、安心して子どもを産み育てられる社会システムとして、保育サービスの充実は必須である。さらに、夜間の学童保育、専業主婦も利用できる一時保育、軽度な子どもの病気で長期欠勤をしなくてすむ病児保育の仕組みの整備が、今後の大きな課題としてあげられた。

子育て支援は、子どもの育ちにとどまらず、保護者の子育てに直接かかわる重要なサービスである。子どもの発達に応じたかかわりや個性を重視した支援、保護者の負担の軽減,精神面へのサポートが求められている。

また、身近な育児支援者の少ない家庭やひとり親家庭の増加などにより、育児相談のニーズが高まっている。さらに、子育て支援の内容をできるだけわかりやすい、利用しやすい方法で保護者に伝えることが求められている。

仕事と育児を両立させるためには、経済的・時間的・精神的な負担が大きいと考え、子どもをもたないという選択をする夫婦も多い。子育て支援の拡大と経済的なものを含めた負担

の軽減、さらには職場における子育て支援体制の確立が求められる。

さらに、子育て支援の存在を社会に広くアピールすることも、社会的な理解の促進のために重要であるとしていた。深刻な少子高齢化への対応として子育て支援の拡大と同時に、社会全体が子どもの育ちを暖かく見守りサポートする体制整備が急務である。

第2節　グループインタビューより得られた地域における子育て支援ニーズ

9 回にわたるグループインタビューより抽出された今後の地域における子育て支援ニーズを整理すると、以下のようになる。

(1) 保育サービスの充実

仕事と育児の両立を図る手段として，保育サービスの充実に対する期待は大きい。保護者は、就労と育児に追われ時間的な余裕を持ちにくい状況にある。金額的にも制度的にも利用しやすく、安心して預けられる保育サービスの充実が求められていた。

一方保育サービスの充実により、保護者の精神的ゆとりが生まれ、それが子どもとの適切なかかわりにつながるとして、家事およびリフレッシュのための時間確保の必要性が訴えられた。これにより保護者の気分転換ができ、子どもの虐待など不適切なかかわりの予防、適切なかかわりの促進の効果があるとしていた。

(東京・女性)　子どもをもう１人ほしいなと思っても、今の保育サービスが充実していないので、もう１歩踏み出せない状態にあります。子どもがほしいという人に対してだけでいいので、そういう設備をもう少し充実させていただきたいと思います。

(東京・女性)　子どもを預ける施設の費用が、非常に高いということがネックになります。私は働きたいタイプなので、お腹の中の子どもが来年生まれたら施設に預けようと思っていますが、子どもを預けて、私の給料を全部施設に支払うことになったら、ほんとうに働く意味があるだろうかと考えてしまいます。もちろん、子どもとふれ合う時間が長ければ長いほど良いとは思いますが、メリハリをつけて、子育て中であっても外に出ていろいろな情報を得たり、赤ちゃんのときでも、お母さんが１人になる時間というのも大事だと思います。ですから、私も預けて働きたい気持ちがあっても、金銭的な面でどうなるかという不安はあります。

(札幌・女性)　私は働いていなかったので。でも、やはり今の方と同じように、いざ困って預けようと思うと、料金が高かったり。1 時間 600 円というところがあって、そこによく

預けていたのですが、そこの保育してくれる人に対する不安というか、安心して預けられるところではなかったのです。子どもがいつも泣いていたり。そういうことが少し気になっていました。

(札幌・女性) 24時間やっていて、近くで利用し易かったのですが、安心して預けられるところではなかった。安心して預けられるところは高すぎてどうしようかと、よく困りました。

(福岡・女性) 周りに頼める母などがいないものですから、お金で解決できることはしないと。ふだんは何も必要ありませんが、急なお出かけだとか。あるのに使わないのと、ないから全然使えないのとは大きな違いだと思っていますから。今でも無認可だといくらでも自由に使えるようですが、やはり無認可と認可の保育園では保育状況も全然違いますから、いろいろなところを選択できればいいと思っています。

(福岡・女性) 私の子どもは認可の保育園しか行ったことがないので、無認可も非常にいいところがあると聞いていますが、やはり園庭がなかったり、先生も資格のない方がいらしたり。子どもが好きだという熱意があれば何でもＯＫだと思いますが、はじめはどうしても条件で見ますので、認可の保育園の方が助かると思います。

(福岡・女性) 働いているにしろいないにしろ、本当に１人になりたいときがあると思いますが、お金を出してまで預けるのは贅沢だという目があるので、介護している人のリフレッシュと同じようなかたちで、子どもを育てている人がリフレッシュするために預かってくれるところ、お母さんがほっとできる空間や体制を考えていただければ、また新しい気持ちで、子どもに八つ当たりせずに育てられます。今の人たちが子どもを殺してしまうというのは、年齢に関係なく、相当追い詰められている状態が多いので、リフレッシュできる場を無償ででもしてあげるのが緊急ではないかと思います。

(東京・男性) 先日、新聞を見ていたら、W大学が学内に保育所を設けられるそうで、今までは、スタッフ用の保育園だったのがこれからは大学に社会人の人も入って来るので、そのための保育園を作るという記事が載っていました。民間だと、某出版会社の保育所が社内にあったり、そういう環境づくりは必要かと思います。

(2) 多様なニーズに対応可能なサービスの提供

延長・夜間保育、病児保育、乳児保育を含む柔軟性に富んだ子育て支援のニーズがさらに高まっている。また、増加傾向にある虐待や核家族の突発的な事態に対し、一時保育・緊急

保育のニーズは高い。今後、これらのニーズに対応可能な価格的に利用しやすいサービスの提供が必要であり、安全面にも十分配慮した体制の構築が必要である。

(東京・女性) 育児休暇は1カ月だけとって復帰したのですが、育児休暇は1回取ったらもう取れないので、ある程度、仕事が落ち着いたら分割して2～3回くらい取れるようになってくれるといいと思います。賃金の関係で1回だけときいていますが、正直、お金はその分はいらないので、育児休暇も例えば1年とか2年とか取れるのであれば、3カ月とって、3カ月復帰して、時間が余ればまた3カ月とるというかたちに制度が変わってくれることを、すごく今、望んでいます。

(東京・女性) 去年の5月に出産をして、当初、会社との契約で3カ月後には復帰するはずだったのですが、子どもを見てもらえるところがなくてパート扱いにされました。保育園も4月からでないと入れないということで、地域に「ファミリーサポートセンター」や「保育ママさん」などの施設はあり利用しようと思いましたが、途中からはなかなか入れません。いろいろ探して保育園に4月から入れたものの、熱があるからお迎えに来てくださいとしょっちゅう言われて、その都度ベビーシッターを頼んだりして、とても大変な毎日を送っています。

(東京・女性) 子どもができてからも、夫や子どもと離れて、「お願いだから、1泊2日、私を自由にして…。」と思ったことが何度もありますので、自由を得られるサービスがあったら欲しい気がします。

(札幌・女性) 例えば24時間預かってくれるところとか。ふだんのお迎え時間が午後6時だとしても、少し残業があって7時や8時になったら夕食を出すというように、臨機応変に対応をしてくれるところをと考えると無認可になるのですが、そうすると毎月5万円かかります。

(札幌・女性) 私は派遣に近いレベルの仕事なのですが、それだとほとんど保育料に消えてしまう感じになります。また、正社員となると責任ある仕事というように、どんどん仕事が増えるという状況です。

(札幌・女性) 子どもが熱を出しても預かってくれるところがあるかどうかです。聞いた話ですが、札幌にはどこか2カ所ぐらい、水ぼうそうなどの伝染病になった子どものための託児所があるということですが、それがもっと増えればいいと思います。

(福岡・男性) 私も転勤族で、出かけるとかそういう部分はまだいいとしても、困ったときは結構あります。特に子供の病気ではなくて、母親が病気したときですね。親戚もいませ

んから、こういったときはどうしようもなくて、仕事を休むか、困ったなということが何回もあったものですから。保育園の送り迎えもできないですから、来てもらってやってもらうということができればいいですね。先程の話ではないですが、安く（笑）。東京にいたとき一時的に預かっていただくところがあったのですが、民間ですから価格が結構高いですね。安くなるとそういう企業にとってもやはりいろいろ影響もあるのでしょうが、そういうのがあると非常に助かるし、少子化対策という意味からしても結構いいんじゃないかと思うんですが。

（福岡・女性） 私が子どもを産むと考えた場合、普通は保育所に預けると思うのですが、病気のときに預かってくれるところがあるときっと助かると思います。

（東京・女性） 病児保育に関しての視点が非常に抜けているというのが感じられます。病児保育に関しては、病児保育施設は非常に少ないし、周りで働いている友人などから子どもの病気が一番困るという話をよく聞きます。不安で働けないという人もいますので、保育園が病児保育施設を併設してもらえると、仕事を休まずに済むので不安もなくなるのではないかと思います。

(3) 保護者への精神的な援助の必要性

地縁の崩壊等により、保護者が相談したり話したりできる者が身近にいない傾向が広くみうけられる。そのため、精神的なストレスや子育てに対する不安も大きいと考えられる。また、父親は長時間労働と居住地の郊外化による通勤時間の延長により不在がちであり、子育て、家事が母親の肩にかかるとともに、その母親がまた仕事を抱えている場合も多い。核家族化している現代社会においては、かつてのように身近な育児支援者もなく、社会的に孤立するとともに、心身のストレスが増大しがちである。

今後、育児支援者の少ない家庭がますます増加するものと予測される。したがって、地域における子育て支援には、子どもの育ちに加え、保護者の精神的サポートの役割が求められる。

（東京・女性）「本当に頑張っているわね」と言ってくださるお母様とかの意見、近所のおばさまの方の声を励みにしている。そういう一言一言が胸にズシンとくると思います。

（福岡・男性） 勤務時間についても大体夜遅くて奥さんが１人でやっているというのが多いので、何かそういう集まる会とか、相談できるところがあればいいかと思います。私も赤ちゃんがいる友達は誘いにくくて、なかなか会うというのもできないことが多いのですが、

そういう公的な機関があれば苦労が少し減るから、少子化にちょっとだけでも歯止めがかかるということもありますが。

（福岡・女性） 私はときどき育児で悩んだとき、夜中でも電話で無料相談できるところがあるのですが、それで助けられたこともあります。ちゃんとした指導を受けた指導員みたいな人が相談に乗ってくれる電話もあるのですが、そこは12時までで、時間が少しオーバーしたら時間だからといって相談の途中で終わってしまったのです。もう少し早めに電話をするように言われましたが、子どもの起きている時間は電話ができないので、夜中でも相談できるようなところがあったらいいと思います。自分の母ぐらいの年配の人がゆっくり聞いてくれて、いろいろアドバイスをしてもらって、その一言で助かったことがありました。

(4) 専業主婦への子育て支援：一時保育システムの整備

専業主婦への子育て支援として、一時保育のニーズが増加している。講習会での託児機能や，身近な児童館でのサークル機能等が求められていた。一時保育実施にあたり、経済的な支援、物理的な環境の整備、人材の確保を含めたシステムの整備が早急に必要である。

（福岡・女性） 育児が嫌になったりするんですよ。近くに祖母とかがいなくて自分ひとりで育てているので。そんなときに地域で託児付きの講演とか、話を聞くものとかがあれば、そこに託児で預けて自分だけストレス解消をしたり、そういう場が多ければ私の場合は助かるなと思っています。現実に2時間ぐらいですが、託児付きの講演会を聞きに行ったりしています。

（東京・女性） いったいどこにこの気持ちをぶつけたらいいのかよくわかりませんが、改善してほしい面が多々あるなと思います。ただ、今、行政がいろいろ考えてくださっている部分もあります。子育て支援とかで、自分自身で積極的に出かけたり、児童館のサークルに入ってお友達を作って、なるべく同じ悩みを持つお母さんたちと話し合う努力をして、自分なりの子育てを自分で楽しんでいきたいと思ってはいます。いかんせん現実がこうなので、なかなか本当に楽しいと思える瞬間が半々かなというところです。この先、産んでよかったと思うところはたくさん出てくると思いますが、正直な気持ち、もう1人欲しいかというと、年齢的なこともありますが、考えさせられてしまうような状況です。

（札幌・女性） 子どもを託児して、その間に母親が講座を受けるようなものにも参加したことがあります。転勤がなく親の周りにいられればいいのでしょうが、今の地域はやはり転

勤族が多く、急にお通夜などとなっても、小さい子を連れては行くのはなかなか大変です。しかたなく連れてくる方もいますが、その預け先に非常に苦労します。ですから、地域で見てくれるとか。例えば小学生をいっぱい集めて地域の場などで勉強をちょっと教えてくれるとか、そういうことをしてもらった方がうれしいです。

(5) 学童保育の体制整備

従来学童保育は、就労する保護者の切実な要求と運動による自主運営や自治体への要請で実施されてきた。このような経緯により、平成10年4月から「児童福祉法」に基づく事業として開始されるに至っている。この法制化後、約600カ所増加したが、いまだ保育サービス卒園児の二割程度しか入所できない。また、国としての最低基準がなく、財政措置が不明確であり、自治体による格差が大きいなどの問題がある。今後、この法制化を基盤とした体制整備が強く求められる。

(東京・女性) 小学校に入ると、突然厚生労働省の所管から文部科学省の所管になってしまい、子育てのフォローが途切れてしまっています。小学校の低学年までは、ある程度親が残業しても児童を預かってくれるなどの仕組みづくりをして欲しい。そのためには、小学校が、文部科学省を離れて厚生労働省などと助け合って、小学校の保育施設のようなものを作るような視点を持っていただければと思います。

(札幌・女性) 保育園が終わって学校に入ってからの方がどちらかというと心配です。保育園ですと午後6時過ぎまで預かってくれますが、学校に入るとそれがなくなってしまうので、学童保育や児童会館に子どもをお願いすることになるのですが、働いている方が多いので、そういうところもいろいろ整えてほしいと思います。やはり実家に頼れる方ばかりではないと思いますので、そういうところからまず整えていってほしいと思います。

(札幌・男性) やはり小学1～2年生ぐらいは不安になって嫌がるでしょう。児童会館まで歩かせるというのも厳しいだろうなと感じます。今、地域の町内会ですごく交流を深めているところが多くなってきています。町内会で皆が集まって映画鑑賞をしたり、ゲーム大会や野球大会などいろいろ開催しています。それは子どもたちも交流があるらしくて、そういう流れで預ける、お願いするという状況がもう少し増えれば、多少は安心できる環境になると思います。

(6) 情報・企画機関の充実

子育て支援情報の充実は、サービス利用にとって必須条件である。どこに何があり，どのような利用が可能なのか，誰もが必要なときに必要なだけ入手できるようなシステムの確立が望まれる。

また一方で，子育てに関するニーズや意見の反映の場，評価の場の必要性があげられた。

（東京・女性） 実際、困っている人たちが、もっと政策を行政の区レベルでもいいので話して決められるような、意見をもっととり上げてくれるような仕組みを作ってほしい。インターネットで都知事にメールしたということもありますが、そういう仕組みが何かないかなというのがあります。

（札幌・女性） この間回覧板で「子育てボランティア募集」とあったような気がしますが、やはり今言われたようなものがあれば、預けようと思ったときに、どこに電話したらいいのかもわからないという状態ではなくて、地域にこういう人がいるということがあれば安心して預けられます。費用もそんなにかからず、空いている方にお願いできるのではないかと思うのです。地域でやるのはとてもいいのではないかと思います。

（福岡・男性） うちはパソコンでそういう母親どうしのネットに参加して、フリートーキングをやっているのです。ですから、情報誌などにないような情報、お母さんどうしで知りえている「ここは実際評判がよくないよ」という情報を収集しています。

（福岡・女性） インターネットを使わない場合はフリーペーパーや新聞などの広告媒体か、だれかの投書とか、あるいは子どもたち…。多すぎて取捨選択するのが大変ですし、それを読みくだく時間も大変ですが、プラスαではやはり何でも口コミ。情報をある程度知っていて、プラス口コミで気になるところを周りに聞くというふうに現在ではしています。よりよい方法が見つかればいいのですが。

（福岡・男性） 子育て情報のネットだけではないのですが、ああいうネット媒体でこういうことは、先程の話にもありましたが、情報が氾濫して、いろいろないい情報や悪い情報、たれ込み、誹謗中傷など氾濫してしまうので、やはりそこを交通整理してくれる管理者がいたらいいと思います。今回のこういう子育ての場合だと、アドバイザー的なことができる人もネットを見ながら多少交通整理ができるような。誹謗中傷のようなまずい意見ではないかと思うのは管理者が管理して削除するなり、訂正するなり、そういう多少の交通整理ができるようなネットであれば、またそれは評判が評判を呼んできちんとした書き込みをするような人しか登録をしないかたちになってくると思います。だれでも入ってきて、何でも１回きりになってしまうと、今度は、そういう興味本位で投げかけてくる人ばかり

登録して、とんでもないことになってしまう。妻も気にしていて、いろいろ登録した中で、ここはやめておこうと退会したり、ここは比較的まじめな意見を言ってくれる人がいるというところに登録して続けたりとか、今は情報を受ける側が自分で選択していますが、できたらネットを管理する方でもそういう交通整理をやっていけるようなものができたらいいのではないかと思います。

(福岡・男性) やはり、同じ共通の悩みを持つ人たちがフランクに話し合える、集まれるような環境があったらいいのではないかと思うのですが。家内ともよく相談するのですが、そういうのを作ってしまうと、またいろいろ変な人も来たりして、一概に、そういうものができたからほいほい入るのは難しいよというふうに…。

(7) 十分な保育サービスの担い手の確保

子どもの育ちの保障や、さらに保護者の精神的な援助の役割を担うには、質の高い充分な保育サービスの担い手の確保が必須である。身近な地域で、保育専門職、ボランティアを含め、子どもの心身の育ちに大きく関与する保育サービスの担い手の養成と確保が期待される。

(札幌・女性) 認可保育園となれば、もちろん職員は資格のある方だと思いますが、そうでない人たちもそこに混じって、預けられる人数をたくさん増やせばいいと思います。何よりもボランティア的なことでいいと言ってくだされば、料金も下がるのではないかと思います。そこに１人保育の資格者がいればいいのかもしれないと思います。

(札幌・女性) 地域のサポートは、あった方がいいと思います。うちはある程度大きくなっているので、さほどお世話になることはないかもしれませんが、やはりあった方がいいと思います。特に保育園は、お母さんが働いていなければ受付もしてくれないこともあります。年収でも月謝が上下すると思います。そういうことも少し考えればいいのではないかと思います。地域で子育てが終わったおじいちゃんおばあちゃん、おばさんおじさんがいてと。ただ、個人的には非常に難しいと思います。ご近所ならご近所で、近ければ近いほど難しい問題はたくさんあると思うので、その辺は考えて。個人的に本当に信頼があって預かるのは別でしょうが、個人的に何か始めてというよりは、きちんとしたところが管理してと。全くのボランティアの方が預ける人はいいですが、やはり多少お金を払った方が預かる側の責任も出てくるという気がします。人間性の問題とは思いますが、子どもを預ける側として、資格というよりも、信頼のできる人を見極めて集めて、そういう人がきちんとしてほしいと。今いろいろ託児所で事故があったりするので、親としては本当に安心

できるところを望みます。

(福岡・男性) 家内とよく話すことがあるのですが、ファミリーサポート制度ができたら、多分まちがいなく利用すると思いますが中身によります。ニュースを見ていると、本当にこの人は大丈夫だろうかという不安もあるので、制度があったとしても、その中身をよく把握して、例えば近所のお母さんの評判を聞きながら、「ここなら大丈夫かな」ということを見極めたうえで使うと思います。

(8) 地域に根ざした子育て支援システムの整備

高齢問題は深刻な少子化により生じるものであり、子どもの育ちに対するサービスを充実していくことが不可欠である。社会全体で、子どものウエルビーイングを保障する新たな展開が期待される。

子どもの安全と健全な育成の保障は、子育て支援の主たる役割であるが、地域の子育て支援の拠点が求められている。自治体によっては、ベビーシッター派遣などの子育て支援システムを開始しているところもある。子育て支援の拠点と、そこからネットワークとしてつながる地域の子育て支援システムの確立が強く望まれる。

(札幌・女性) 地域をうまく活用するということは、すごく大切であると思います。なかなか地域から草の根的に何かが盛り上がってシステムができるということは難しいでしょうから、やはり行政から何らかのサポートというか、土台作りが…。

(札幌・男性) 地域組織を作るという方向が一番いい方法ですが。それができたら理想の世界ですね。

(東京・女性) 私は渋谷区ですが、保育ママさんという制度があります。うちの保育園でも保育ママさんがすごく活躍されています。子育てが一段落した、40 代くらいの方、60 代くらいのお孫さんがいる世代の方が何人も登録していらっしゃって、お迎えに行ったりします。もちろんそれは区の制度で、保育園に何人と決まっていて、その人数はすごく少ないです。保育ママさんの争いがあって大変です。その辺は融通が利いてたくさんいればいいなと思いながら、あまり言ってはいけないのでしょうが、そういう方々が本当に困ったお母さんには陰で手助けしてくださっているのです。「どうしてもみられないときには見てあげるから、声をかけてね。そういう人はいくらでもいるから」と。それで土曜日、どうしても出勤になってしまったけれども、だれもいないというときには、ママさんの家に電話をしてみてもらうことが、私もありました。うちの子どもは今、小学校で学童クラブに

行っています。週休２日になって土曜日に学校がなくなったのですが、土日働いている親はいくらでもいるわけです。行き場がなくなっているので、学童館で土曜日も預かりますというときに、今度は「職員は休みだから出しません」と言われるのです。そういうときにお年寄りの方が地域のボランティアで、子どもたちも「シルバーさん」と呼んでいるのですが、おじいちゃん、おばあちゃんが来て、事故のときの責任は負えないとかいろいろあるのですが、おじいちゃん、おばあちゃんがその辺で囲碁を打ちながら、自分たちで遊んで、危険なことをすればどなられ、ご飯の食べ方が悪ければおばあちゃんに叱られみたいな、そういうところがあるのです。そういうことで、積極的に取り入れている自治体があるのです。それがもっともっと広がって、例えばたまたま子育てで、少子化が問題になっている都市部だから積極的にやっているのか、たまたま子どもが少ないから行き届いているのかということではなくて、それが地域でバランスよくいけばいいのではないかと思います。

（東京・女性） 今は高齢社会になってきています。昔のおばあちゃん、おじいちゃんの知恵とかをもっと社会や地域で活かして、もっと自然なかたちで子育てができたらいいと思います。自分にも、昔は隣のおばさんが悪いことをしたら、子どもを叱ってくれたとか、遊んでくれたりという憶えがあるのです。理想をいえば、お年寄りが増えていて、元気なお年寄りもたくさんいますので、それを活かして、もっと地域や社会に参加できればいいかなと思います。

（東京・女性） ある都市でやっていたのですが、おじいちゃま、おばあちゃまたちが、定期的に保育園なり幼稚園に訪れて、先生とは別に遊んでくださるのです。先生ではないのですが、一緒に遊んでくださるという保育園か幼稚園かがありました。区か市か忘れましたがそういう制度をとっているところがあって、これはいいと思いました。行政も、区なり市でだいぶバラツキがあると思います。そういう面では一本化してほしい。この区ではこうして、この市ではこうやっているというバラツキがすごく見えます。同じ東京都の中でも、ある区はやって、ある区はやらないというのがあります。元気なおじいちゃま、おばあちゃま、知恵を持っている方、お子さんが好きな方、たくさんいらっしゃると思います。近所のおばあちゃまが遊びにきたという感覚で、保育園なり幼稚園なり小学校に定期的に訪れるという制度を作っていただけたら、本当にうれしいと思います。

（東京・女性） 私は荒川区在住です。荒川区は引っ越ししてきて驚いたのですが、すごく福祉に力を入れている区です。今、都内でもバラツキがあるとおっしゃったのですが、荒川

区はかなりいい方だと思います。それで特に、小さい子に対する福祉と老人に対する福祉と両方２本立てでやっているのですが、先程バランスよくという話があったように、例えばおじいちゃん、おばあちゃんのシルバーセンターのボランティアを募集しているのです。でも、逆に保育園とか、おっしゃったような子育てをしたり、赤ちゃんのことを助けてあげるボランティアの募集は見たことがないのです。だから、逆に 60 歳、65 歳を過ぎてもインターネットできる人もたくさんいますし、新聞もみんな読んでいます。だから、もっと高齢者の人で、パワーをもてあましているよりは何かお役に立てればという人がいると思います。そういう若いお母さんを助けるためのボランティアとか、赤ちゃんの面倒を 1 人でみきれない人の手助けといったものをもっと募集したらいいのではないかと思います。

（東京・女性） 私は都内に勤務で、家は横浜なのですが、横浜は子育てサポートシステムがあって、1 時間 800 円で登録している一般市民のお家の人が預かってくれるのです。事前に会員登録を区役所に行ってやるのです。そうすると、近所の方を紹介してくれる。例えば「今日、遅くなるから保育園にお迎えに行ってください」というと、その人が 1 時間 800 円で自分のお家に預かってくれるのです。それは近所の人とも知り合いになれますし、わりと子育てが終わった自分の母親よりも上の世代とか母親世代の人たちがやってくださるので、結構、この制度は便利なシステムだと思っています。でも、都内はそういう制度がないようです。実際、子育てが終わっていて、おじいちゃんおばあちゃんで住んでいる人はほとんどが一戸建てで、家も余っているので、何人もその家に子どもたちがいて夜遅くても預かってくれているのです。結構、こういう制度が全国的に広がるのもいいのではないかと思います。あと私は働いていますが、働いている人はそういった制度があるかをすごく調べると思うのです。でも、働いていない専業主婦の方が、子どもと触れる時間が多い分、結構、子育てがつらいと思う人が多いと思うのです。だから、そういう人たちも利用できるような仕組みが広がれば、もっと子どもが欲しくなっていくのではないかと思うのです。働く方は必死なので、何とか預かってくれるところを見つけなければというのがあるのです。子どもを育てている人も、女だから子どもが産めるから子どもを育てられるかというと、全くそういうことはないと思うのです。実際、友達も結構ブルーになっていたりとかもするので、そういう人たちも利用できるような制度があれば、そういう人たちの声を生かして作るのが一番いいのではないかと思います。

（東京・女性） 突飛な案ですが、ポイント制にして、例えば子どもを産んだら 100 ポイントを与える。それを子どもが大学に行くときに、使いたい人はそのポイントを使って優遇さ

れていくとか、親の介護に持っている人はポイントを使えたら使う。自分たちが子どもを産んだことによってプラス特典があって、使いたいときにその特典が使えるような何かがあればいいと思うのです。産みたくても産めない人もいるので、子どもを生んだだけというのではなくて、一生を通じて、ポイントを稼いで、使えることがあって、相互に協力できればいいなどと思います。

(9) 世代間支援の重要性

少子高齢社会を迎え、世代間支援の重要性が訴えられた。具体的には，地域でシニア世代が子どもと触れる機会を通じて、子育て支援や教育の役割を担うことが求められていた。

その際、世代間の意識差や時代背景による阻害要因を加味しつつも、多様な世代とのかかわりから子どもの人間関係の幅を広げる促進要因となりうる点を充分活用する必要性があげられた。

(東京・女性) 子どもが少なくなっているというのは、子育てしにくい環境というのが一番だと思います。私は、練馬区に住んでいますが、武蔵関に子育てを終えた50・60代の方々がボランティアで、一日中小さい子どもを持った親子を対象に自宅を開放しています。子どもを見てもらっているお母さん同士が、お茶を飲んだり情報交換したりという場があるのですが、そういう場所をもっとシニアの方々に提供していただければ、子どもも増えていくのではないかと思います。

(札幌・女性) そういう育児のベテランの方などは子どもを何人も育てて、この場合はこうだという方法をたくさん持っていると思いますので、育児支援をしてくれたらいいなと思います。

(札幌・男性) やはり、今、高齢化でいっぱいいる年配の方々に物事を教えてもらったり、教育されるということがすごく人間にとっては覚えているのでプラスになると思います。しかし、例えばそれが親戚でない、肉親でないときに、預けられる勇気というか、何があるかわからない、自分の孫なのにどうするかもわからない状態の中で、そういった勇気がどこまで持てるかということはあると思います。しかし、どんどん老人が増えている、その人たちが集まる場所に今度は預けたい子どもを持つ親がいる。そういう子どもを集めて、老人ホームというのか、一つの建物に高齢者と子どもたちが集まっているような、そういう施設みたいなものがあれば回っていくのかなという気もしますし、それが一つの事業になればいいなとも思います。

（福岡・女性） 今は小学校も中学校も週５日制になってしまって土日が自由になったので、公民館などで地域の人たちと触れあう意味で将棋をしたり、いろいろなお年寄りの方と一緒に遊んだりする行事が増えてきているような気はします。

（福岡・女性） うちはしていませんが、行っている方は多いです。公民館とかで子どもが同じ地域のおじいちゃんたちと将棋を指しに。あと、お手玉とか、剣玉とか、折り紙とか、昔の人のそういうのを習って遊ぼうとか、毎月やっているようです。

（福岡・女性） 市政だよりに載っています。学校の方からも、できたら行くようにと。あと、今度もゲートボールをおじいちゃんとかと一緒にすることもあるようで、参加募集が来ていました。結構、市の方も頑張ってやっているみたいな感じはあります。

（福岡・女性） 私の地域も同じようにあるのですが、老人クラブの方で登録してくださいと募集したのです。老人クラブの方で２日制のために何か協力できることはないかということで募集したところ、登録がすごく増えたということを地域懇談会で聞きました。逆に子どもの登録はすごく少ないので、登録してくださいということだったのですが、将棋やお手玉を好きな子はいいですが、興味のない子は全く行きたがらないのです。クラブをやっている子もいますし。老人クラブの人がせっかく登録してくれているのに申し訳ないと思いますが、やはり、子どもが昔ながらの遊びに興味を示さないのに、登録して受けるようにとは言えないものがあります。考え方の相違というか、老人クラブと子どもたちのギャップが少しあるようです。

（福岡・女性） 私の地域も公民館で土曜日に、老人クラブの方がボランティアで出てこられて、小学生を見ています。私は土曜勤務がたまにあるので、ぜひ利用したいと思っています。私自身、小学生のときに妹が入院して母がつきっきりでしたから、隣のおばあちゃんにずっと預けられていました。最初はいやだったのですが、おばあちゃんが編み物とかお手玉を教えてくれると、自分にかまってくれる人がいるのがとても楽しくて、毎日おばあちゃんの顔を見に、隣のうちに「ただいま」と帰りました。テレビゲームとかほかに興味がある子たちも、行って遊んでみたら「ちょっと楽しいかな」と思ったりもするのかなと。そこにたどり着くまでに時間がかかるかもしれませんが、行ってみたら楽しいのかなとは思います。土曜日だけではなく、勝手なのですが、留守家庭が５時まで、もしくは４時半までなので、大体勤務は５時～6時ぐらいですよね。おばあちゃん、おじいちゃんは大変かもしれませんが、５時から７時ぐらいまで、公民館で、ちょっと簡単なおやつを一緒につくったり、遊んでくれたらいいなとは思っています。

(福岡・女性) 今の子どもたちはほとんど横社会で、縦の人とつきあう機会がないと思うのです。きょうだいや親戚も少ないですし。ですから、ベビーシッターはちょっとおいておいても、地域のボランティア活動などがもっと増えたら、最初は子どもが嫌がって行きたくないかもしれませんが、今、私が本当に年の離れた人と話していて勉強になることが一杯あるのです。ですから、子どものうちから違う世代の人と話す機会が増えたら、また変わってくるかなと思います。

第3節 地域における子育て支援の今後の展開に向けて

以上、グループインタビュー調査に基づく課題を整理すると以下のようになる。子どもの健やかな発達と子育てする保護者を支える「真に有効な子育て支援」を目指し、これら個々の課題解決にとどまらず、システム全体として向上する新たな展開が期待される。

(1) 子どもの育ちを支援する社会システムの構築

昨今、子どもの育ちが大きな社会問題となっている。その背景には、物質的な豊かさ・便利さの追求による精神文化の軽視や、地域における人間関係および家庭での父親の存在感の稀薄化などがある。このような状況の中、育児に対する負担感が増大し、それが少子化の要因の一つともなっている。

子どもは、人類の未来を支える重要な存在である。子どもの育ちは、今や子どもをもつ者のみの問題ではなく、社会全体で支えるという意識が必要である。そのためには、就労環境を含む社会全体の改革が必須である。また、今後の高齢社会と直結する少子化の問題に対し、高齢対策以上に重点的に取り組むことが肝要である。

本当の豊かさを求めて、社会全体が子どもや高齢者などの社会的に弱い立場の者に対し、やさしく支えることのできる社会システムの構築が強く望まれる。

(2) 地域における子育て支援環境の充実

子どもにとって生活リズムの確立は極めて重要である。また、心身の安らぎを得る家庭でのくつろぎ時間も必要である。しかし、仕事との両立が必要な保護者がいる以上、保護者の就労保障と同時に子どもの育ちの保障が必須となる。

子育て支援では、保護者の就労保障との間で、いかに子どもの生活リズムおよび安らぎを

守るか、各々工夫している。このような配慮のある保育環境の整備により、子どもの精神的な安定を十分に図ることができる。

(3) 保護者に対する精神的サポートの実施

地縁の崩壊や核家族化にともない、育児支援者が身近にいない家庭が増加している。時間的な余裕がなく、精神的なストレスを抱える保護者も多い。このような状況の中で、子どもとのゆとりある対応を行うことが困難となってきている。

今後、子育て支援には保護者の最も身近な育児支援者として、相談などのさらなる精神的な支援に加え、保護者のゆとりの保障も求められる。

(4) 多様なニーズへの体制整備

病児保育、休日保育、乳児保育、一時保育、緊急宿泊保育など、子育て支援に求められるニーズは拡大している。しかし、その実施には十分な体制整備が必須である。経済的な保障を伴う人員の確保、およびそれに対応する安全の確保が不可欠である。さらに、保育の場の確保や実施状況の評価などの検討が必要と考えられる。

(5) 地域子育て支援の質のさらなる向上

子育て支援にかかわる担当者は極めて高い専門性を要求される職種であり、子どもの育ちに直接かかわる重要な職務である。子どもの安全を保障し、各々の心身の発育を的確に捉え対応することに加え、子育て支援のプロとして、育児相談など、保護者の子育てをサポートすることが求められる。子育て支援の質をさらに向上するためには、専門職の専門性向上のための機会を確保するとともに、ボランティアを含む子育て支援に携わる幅広い人材の教育・拡充が不可欠である。

(6) 地域における世代間交流と子育て支援システムの整備

子育ては近隣の年長者や経験者の助言および協力のもと支え合いながら行われてきた。しかし現在は、核家族化さらには居住地の郊外化によって、地域社会でのつながりが稀薄化し、育児の孤立をさらに強めている。女性の社会進出の増加もあり、地域に根ざした子育て支援の拠点がより強く求められている。

世代間交流を含め、子育て支援機関は、地域に密着して子育て支援の機能を果たす拠点が必要である。また、就学前に加えて、学童保育における子どもの安全・健全な育成の保障は

必要不可欠である。

地域における子育て支援の利用を希望する者が、安心して気軽に利用できるよう、柔軟性のあるまた即効性のあるシステムの整備、さらには、利用者の負担が少なくかつ質の高いサービスの充実が強く期待される。

第4節　結論—少子高齢対策としての地域における子育て支援

現代は、一見便利で豊かに見える社会であるが、子どもの育ちの視点からは望ましいとは言い難い。また、物質的に豊かな時代に育った保護者の中には、親としての自覚の未熟な者も少なくない。子どもの育ちが危惧される昨今、物質的な豊かさ・便利さの追求から、心の豊かさの追求へと社会全体の変革がより強く求められる。

地域における子育て支援においては、「子育ち」と「子育て」を支える環境をいかに充実するかが重要な課題となる。物理的な環境、人的な環境、保育プログラムを含め、子どもの育ちに適合した環境を拡充する必要がある。

さらに、安心して子育てできる環境、すなわち、育児に関する相談相手となり、保護者の育児への余裕と楽しさを促進するなど、保護者に対する「子育てを支える」ための地域に開かれたサービスの充実が期待される。

【参考文献】

安梅勅江,1997,『少子化時代の育児支援と育児環境評価』川島書店。

NICHD Early child care Res earch Network,1998, 『Early Child care and Self-Control, Compliance, and problem Behavior at Twenty -Four and Thirty-Six Month, Child Development, 69(4)』。

保健福祉システム研究会,1998,『保健福祉のケア科学』ベネッセ。

第３部　グループインタビュー記録

グループインタビュー実施スケジュール

（1）札幌　第1回　2002年 9月28日　13時30分～
　　第2回　2002年 9月28日　17時～
　　第3回　2002年 9月29日　10時～

（2）福岡　第1回　2002年10月26日　13時30分～
　　第2回　2002年10月26日　17時～
　　第3回　2002年10月27日　10時～

（3）東京　第1回　2002年12月14日　13時30分～
　　第2回　2002年12月14日　17時～
　　第3回　2002年12月15日　10時～

（注）モニターの表示(見方)

【例】A:31・女・既・専・1

A　…　モニター(A・B・C・D……I)
31 …　年齢
女　…　性別
既　…　既婚（独は独身）
専　…　専業主婦（共は共働き、
　　モニターが男性の場合は夫人の職の有無）
1　…　子供ひとり（「0」は子供なし）

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」
札幌グループ面談(第1回)
日 時 ： 2002年9月28日(土)13:30～15:30
場 所 ： ホテルアルファ・サッポロ

(金子:司会) 最初に簡単な自己紹介をしていただいて、それから、少子化社会に対してのご自身の考え方を出していただきたいと思います。それでは、Aさんから順番に１人２～３分程度で、よろしくお願いします。
(A:31・女・既・共・1) 現在は仕事を持っていて、家庭では主婦と１歳９カ月の子どもの母親です。少子化についてですが、子どもを持ってから仕事を再開したわけですが、子どもを持つということがいかに一大事であるかということがわかり、子どもを持つという方向もあるし、持たないという方向もあるなと感じました。一般的には30歳になったら結婚して子どもがいるのがあたりまえという目で見られがちと思いますが、子どもを持って育てるということはとても大変なことで、あたりまえでしょうと言われるほど簡単なものではないと思います。専業主婦は子どもを育てていると一口に言われますが、それは本当に一つの大きな仕事をしていると思うのです。一般的には家で怠けているような言われ方をしますが、決してそうではないと思います。そういう生き方もあるし、そうではなく子どもを持たずに仕事をしていくという生き方もある。それは自分で選べばいいことだと思うので、人からこれがあたりまえでしょうというような決めつけ方をされるのは間違いなのではないかと思います。
(B:31・男・独・ー・0) 31歳の会社員で独身で、一度も結婚はしていません。少子化については、昔と違って今は結婚する年齢が遅くなっていることと、私が子どものころと違う経済状態が出てきていると思います。共働きになっていたり、趣味にお金をかけたいとかということがあります。我々30代が子どもだったころはバブル期で、結構自分たちもお金をかけてもらっていた時期で、大学に行くのもあたりまえという環境でしたが、自分たちがこれから子どもを産むときに、出産費用だけでびっくりする。やはり自分たちがしてもらったと同じぐらいのことを子どもたちにしてあげるとすると、計算するとびっくりするのかなと。そういうときはやはり子どもは１人、多くて２人という考え方になってしまうのかなというのが実感です。ただ、自分は結婚してどうしたいかとなると、やはり１人では寂しいだろうし、私は２人兄弟ですが、２人いてよかったなと考えるので、自分の将来も考えたら２～３人はほしいかなと思います。
(C:33・女・既・共・0) 結婚していて、子どもはまだいません。派遣社員として働いていて、共働きです。私たち夫婦は今のところ子どもを持とうという考えは持っていません。今後どう考えが変わるかはわかりませんが、今のところ２人の時間を楽しもうと考えて生活しています。今の生活環境が子どもにとって幸せな環境と思えないこともたくさんあるし、さまざまな危険とか事件に巻き込まれたらということもあります。また、子どもを持ってこれから先どれだけお金がかかるかということも問題です。子どもを預けた場合に月にどれだけの額がかかるかということも人づてに聞いているので、そのことも考えると、自分には今自信がありません。
(D:31・女・既・専・1) 31歳の専業主婦で、もうすぐ10歳になる小学生の子どもが１人います。少子化ですが、もう１人兄弟がほしいなとすごく気にしたときがありましたが、正直言って金銭的にかなり…。今だとそれなりに余裕があり、たまに遊びに行ったり、旅行に行ったりという程度のことはできますが、２人目をつくるとなると、少し厳しくなるかなと。それと期間が開いてしまったので、これから２人目をつくるか、つくらないか悩んでいるところです。
(E:38・女・既・専・0) 専業主婦で、仕事をしているときもありましたが、今は仕事をしていません。子どもはいません。一応自然に任せて、いつ産まれてもいいという感じで２人で話して楽しくやっていますが、友達のところを見ると、子どもがいると大変だなと感じます。教育資金にしても、洋服とかいろいろなものもすぐ大きくなってしまって、いろいろお金がかかるのだな、よくやっているなというのはよく感じます。あと年金とかを考えると、少子化が進むときっと大変だろうなというのは感じます。
(F:35・男・独・ー・0) 35歳で、まだ独身です。結婚経験はありません。金融機関に勤めていて、３カ月前に東京から札幌に転勤になりました。少子化に関してですが、私は会社では若手から中堅に入ったという世代です。バブル期の入社で、生まれてから日本経済は拡大、景気は高度成長期にあって、何不自由なく子どものころは生活してきて、それなりの学校に親に入れてもらったという部分があります。しかし、社会人になってからは経済が下降線をたどる中で、同業他社でも金融機関の破綻が起こったりして、将来設計が狂ったような友人もいます。そういった不安から現在、資格試験の専門学校へ通っていて、自分の将来の生活設計を今から検討していかなければならないと思っています。今、私の学生時代の友人は、大体４人に３人ぐらいは既婚者で、４人に１人が独身という形ですが、やはり少子化は晩婚化が１つの原因になっていると思います。最近は我々の前の世代に比べると、趣味や娯楽が多くなってきて、そういうものを十分にエンジョイしたいという方が増えてきたというのも一つの原因かと思います。
(G:35・男・既・共・1) 会社員で、結婚して約２年半です。子どもは１歳９カ月になりますが、結婚した年齢は30歳を過ぎていて、妻の方は30歳になるぎりぎりでした。１人産まれて、もう35歳ですから、早めに２人目をつくらないと将来は厳しいので何とかしたいとは思いますが、２人とも今仕事に責任を持つ形で、大事な仕事を任される場面もあります。子どもを２人つくる計画が可能だとしても、産むタイミングが仕事が大事なときに重なるかもしれないし、それで２人目はどうしようかということになります。こういうことも少子化の１つの原因なのかなと。遅く結婚して、早く

兄弟をつくってあげたいという人たちが多くなってきて、ただ、仕事に責任があるため悩むというのが、少子化の原因のひとつではないかなと感じています。
(H:36・女・離・ー・1) ３カ月ほど前に６歳になる女の子を連れて離婚しました。それまで東京に住んでいましたが、それを機会に札幌の実家に帰ってきて、帰ってきてから仕事を探して、子どもを保育園に預けて働いています。離婚する前までは東京でも働いていましたが、１年ぶりの仕事でいろいろ大変です。子どもがいるとやはり働きづらいというか、例えば子どもが熱を出しても休みづらいのです。そういう会社の体制などをまず変えていっていただかないと、働くお母さんたちにとっては２人目、３人目は今は産みにくい状態だと思います。
(I:34・男・既・専・1) 34 歳で、子どもは４歳の男の子１人です。少子化ということですが、自分が子どものときは不自由のない生活で、ある意味で好きなことをしてこられたのかなと思います。そういう好きなことをずっとやってきた延長で自分が親になる世代になってきているということで、やはりまだいろいろなことをやってみたいと考えている方も多いと思います。そういう中で、やはり子育が非常に負担になっている。負担というと言い方が変なのでしょうが、大変なことなのかなという思いもあります。やはり年齢的に親になるという経験もしなければいけないということもあるでしょうし、自分でやりたいことがこれからもあると考えている方も、私もそういうタイプですが、結構多いのではないかと。妻ともそういう話をするのです。妻はやはり仕事をしたいということですが、なかなかできるような環境にはないのです。転勤族で地方を転々とする中で、だれかに預けてということも、身内がいる場合はいいのでしょうが、知らない方に預けるのは非常に不安を感じるところもあるので、現実問題として働くのは難しいのかなと話をしています。世の中の環境が、我々が子どもだったころと比べて、だんだん夫婦２人だけの生活になってきていることも大きな影響があるのかなと思います。
(金子) Dさんのお子さんは10歳なので、まもなく中学校に行って、塾や教育費の問題が出てくると思いますが、そういう点はどのようにお考えですか。
(D) 教育費というか、生まれるころからもう子ども用の学資保険を掛けていて、今は大体は大学か専門学校まで行くというので、ある程度貯めておいて、足りない分はそのとき働いて出すしかないというのが正直言ってあるのです。まだ塾や習い事はたくさんさせてはいないのですが、たぶん中学に行ったら塾に行かなければならなくなるかなと。でも、これから子どもの数は少ないのです。私たちのころと比べて半分ぐらいですね。私のころは小学校のときで 40 人で６クラスぐらいありましたが、今の子どもの学校は３クラスで、人数も 30 人ぐらいです。だから、学校は余ってくるので、ある程度は選べるとは思うのです。でも、どうしてもやりたいもの、専門的な方に行くと思うので、専門的な勉強だけはさせてあげたいと思っています。
(金子) 私は昭和 20 年代生れで、一番子どもが多いときの一番多いクラスで、12 クラスもあって、55 人の教室で、何もない時代に育ったのです。本当に今言われたたように、３クラスで 30 人ぐらいしかいないので、授業参観に行って寂しいなと思った経験があります。だから、30 年ぐらいでずいぶん時代が変わったと思います。その分教育費は着実に上がってきているような気がするので。Dさんの友達も、生まれてすぐ学資保険みたいなことを…。
(D) 周りは大体掛けています。私のころはまだもう少し利率もよかったのです。でも、ここ何年かに生まれたお子さんたちがいる方たちは、あまりお得ではないと正直言って思います。
(金子) Aさんもそういう学資保険などは。
(A) 私は掛けていません。それほどメリットがないので。
(金子) 貯金した方がいいと。それは利率の問題ですね。Eさんは先ほど２人で楽しくやるのだと。しかし、友達のところで教育費が大変みたいだと言われたのですが。
(E) うちは子どもがいないので、年に何回か温泉に一泊旅行に行ったり、東京に２人で行ったりとかしていますが、やはりお子さんがいるところは、修学旅行があるからとか、話を聞くと大変なのだなというのは感じます。子どもがいたらそんなに遊びに行けないのかなと。
(金子) お友達のところは教育費をやりくりするのでいろいろと…。
(E) 習字を習わせたり、公文式に通わせたりとか結構習い事もさせています。また、今は土曜日もお休みなので、塾などに行っているので、教育資金もかかります。具体的にいくらかかるのかまでは聞いていませんが、大変なのだと。
(金子) 万の単位でかかっているかもしれませんね。
(E) 幼稚園入学でも数万円という話を聞くので、お金がかかるのだなというのは感じます。
(金子) Hさんのところは今、保育園ですか。教育費はまだ特にかからないですね。でも、小学校に来年入られたら、そういう方面のことを考えなければいけないということですか。
(H) やはり生まれたときから学資保険を掛けていたのですが、子どもの父親の名前でそのまま今も掛け続けています。中学に入る、高校に入る、大学に入るというときにお金をいただくことを楽しみにしていますが、それだけで足りるかどうかもわかりませんので、そこら辺はこれから考えていかなければならないと思います。
(金子) 例えば、昔、小学校で朝始まるときにドリル、小さな１枚のテストみたいなものが毎朝配られてやらされていたのですが、そのドリルの会社が倒産してしまったのです。なぜかというと、今までたくさん売れていたのが、少子化で売れなくなって、ある程度人を抱えていて、結局成り立たなくなって、倒産することになったと。あるいは、道内で

も短大や私立の大学ではほとんど全員入学になりかかっていて、受ければ大体通る時代になってきているわけです。そうすると逆に今度は、どこでも受けられるので教育費はもう掛けなくてもよくなると。そうなると学校だけではなくて、塾や公文式などへも行かなくなるので、そういうところで働いている人も経営者も非常に苦しくなると思うのです。ですから、少子化になると、子どもが少なくなることを越えてたくさんのプラスマイナスの影響があるので、自分が経験したこういうよさもあるし、マイナスのところもあるというような話を是非聞かせていただきたいと思います。
Ｆさんは金融機関にお勤めということですが、例えば入行されたころと10年経った今を比べて、何かそういう雰囲気というのはありますか。例えば金融機関は職員は女性が多いですよね。
(F) 最近はどこの金融機関も共通しているのですが、かなり正社員を減らして派遣社員で運営しています。
(金子) でも、多くは女性ですね。
(F) 私の会社の場合は、銀行といってもいわゆる窓口業務を持たないのです。一般のいわゆる窓口機能を持っている銀行などは女性が多いですね。
(金子) 働いておられる方の間で、例えば独身の方も、子どもがいらっしゃる方も、それぞれ事情がありますが、例えば10年前に比べて働き方をこういうふうに変えたらいいのではないかという話は出ますか。働く時間というか。育児休業や育児休暇などはありますよね。
(F) なかなかそれは…。私が入社したころから有給休暇自体が取りにくいような環境にはありました。
(金子) 今もあまり変わらないですか。
(F) そうですね。景気のいいころは忙しい部分と、当時のいわゆる課長クラスや部長クラスが、高度成長時代ですから、「俺が若いころは休まなかったのになぜ休むのだ」というような形になって、我々も休まない。社内で設けられた制度休暇は消化するのです。しかし、それ以外の有給休暇というのは、上司にもよるのですが、なかなか取れるような状況ではないのです。また、最近は取りたくても取れないような状況です。というのは、人数がかなり減らされてきているので。どこも経費削減で、１人当たりの仕事の負担もかなり大きくなってきています。
(金子) 先週、新しい少子化対策を厚生労働省が出して、その一番上に男性の働き方を変えないといけないということが書いてあります。具体的には隔日勤務、１日おきに働くか、早く帰ることを制度化しようということです。とにかく男性の働き方を変えないと、女性に子育ての負担をみんな押しつけるような構造は変わらない。変わらなければ少子化も続く、そういうことを厚生労働省の対策案の筆頭に書いてあるわけですが、そういう点についてはいかがですか。
(F) これからは民間企業は人を減らすことになるので、理想はそうでも、現実問題としてはやはり仕事の負担が以前に比べるとかなりきつくなってきています。人を増やしてくれと言っても、なかなか…。
(金子) 働き方についてお尋ねしたいと思いますが、Ａさんは共働きですが、例えば今お話ししたように、男性が１日おきに働いて１日おきに家にいるかもしれないとか、午後４時には帰りなさいというような制度が言われはじめているわけです。かりにそういうふうに男性の働き方が変わるとすると、Ａさんの場合、家の中での子育てにとってはどうでしょうか。それは非常に役に立ちそうですか。あるいはゴロゴロされていても迷惑ということですか。
(A) 迷惑ではなくて、それはうれしいことです。お給料が減らなければ。
(金子) お給料は当然減るでしょうね。給料のことは書いてなかったのですが。
(A) それだったら給料はそのままで、帰りが遅くても頑張った方がいいと思います。
(金子) その分、自分の子育てというか。
(A) 頑張れといっても限界がありますので、やはり人間らしい生活を送るためには別のところに助けを求めるしかないと思います。今、保育園でも認可と無認可がありますが、認可保育園は大体午後６時がお迎え時間なのです。何年か前までは、今の職場の人の話を聞くと、６時になると外に出されて鍵を閉められたそうです。信じられない話だと思ったのですが、そういうことをしていると女性が仕事をあきらめる可能性がありますので、外でいかに助けてくれるかということだと思います。
(金子) 何か外部支援みたいなものですね。子どもを一時的にでも面倒を見てもらえるような。
(A) 例えば24時間預かってくれるところとか。ふだんのお迎え時間が午後６時だとしても、少し残業があって７時や８時になったら夕食を出すというように、臨機応変に対応をしてくれるところをと考えると無認可になるのですが、そうすると毎月５万円かかります。
(金子) 今のところ、その費用は結局自分たちが稼いで出すより方法がないわけですね。
(A) そうです。そうすると、私は派遣に近いレベルの仕事なのですが、それだとほとんど保育料に消えてしまう感じになります。また、正社員となると責任ある仕事というように、どんどん仕事が増えるという状況です。
(金子) そうするとますます子育てしづらくなる。
(A) そうですね。
(金子) Ｇさん、短時間勤務とか隔日勤務とか、そういうように男の働き方を変えないと、この少子化がくい止められないということを厚生労働省では最初に書いて発表したわけですが、実際に働いておられる現場からはいかがですか。例えば悪く言うと、隔日勤務で給料が同じだったら、家に帰らずに遊び回る男もいるのではないかと。そういう不安はあるわけです。

（G） 今の日本の状況であれば、休むことによってお金がかかる。その間、子育てをするという考え方をする人はなかなかいないのではないかと思います。ヨーロッパでは男性でもそういう育児休暇を取っている人はいますが、今の実状ではやはり考えられないことだと思います。政府や厚生労働省が言っているかもしれませんが、私はあまりそういうふうに考えられない。会社優先になっていて、生活優先にはなっていないと思います。
（金子） Ａさんが言われたように、給料が減らなければ、当然隔日勤務でも午後４時に帰るようなやり方でもそれはかまわない…。
（G） そうですね。
（金子） 給料が８割ぐらいに下がるのだったらいいですか。
（G） 微妙ですね。
（金子） みんなぎりぎりでやっているので、時間が増えても収入が減ると困るという方は多いですね。Ｉさんはどうですか。働き方を見直そうという意見に対しては。
（I） 男性が育児休暇を取るという社会環境になっていないとか、会社の体制が整っていないとか、そういうことは感じます。妻が言うには、例えば私が会社を辞めて妻が働いたとして、私と同じ給料を取るのは現状だと難しいと言うのです。結婚して何年もたつ中で、妻は結婚したときに辞めているから、それまで働いてきたキャリアが切られているし、私はそれ以降も働いているから、自分のキャリアが伸びて今の収入になっているということなので、やはり会社自体が共働き可能とか、男性でも休めるような体制をまずつくることが重要と思います。ただ、やはり責任のある仕事につくと、途中で途切れさせることができなくなってくるというか…。
（金子） 仕事の継続性みたいなものですか。
（I） 継続性の部分が非常に難しくなってくるということがあると思うので、社内的な体制が整ったとしても、皆がそれを利用するかどうかというのはまた別の問題になると思います。普通に休むのもだんだん休めないというか、仕事がたまってしまって。
（金子） 結局あとで自分の仕事が増えるだけという感じですね。
（I） そうですね。
（金子） Ｂさんはいかがですか。同じ質問ですが。
（B） やはり少子化から経済的な話になってくると思いますが、実際、今の雇用状況を考えると、高校生で就職できるのはもう３人に１人で、10数％ですね。大卒でも、同じようなことになってくる。40～50代の人でも会社をどんどん辞めてもらっている状態です。私たちは30代ですが、低賃金で走り回れる社員をどんどん求めている会社と、走り回らなくてもいいから能力で養っていきたいという、少ない人数で頑張ろうという会社とに分けられてきています。そのときに１日おきに仕事をして、その内容や、その仕事量でその会社が満足するのかということと、それを補うために、ほかの人に負担がかかる。それと、休暇が増えたらどうなるかというと、やはりお金を使うのではないかと思います。例えば、先ほど８割の給料ならどうでしょうという話がありましたが、仕事をしている最中はお金を使わないという部分もあります。しかし、早く家に帰ると、余計に電気代がかかったり、家で飲み食いしたりとか、子どもとは一緒にいられるが、その分お金がかかって、実際は７割ではないかという考え方もできます。
　もちろん子どもと一緒にいたいと思うし、夫婦が助け合っていけるのが一番いいと思いますが、結婚した段階で何らかの制度というか、民間の企業でのレベルがそういうことが可能なレベルまで来ないと。今回、国家公務員は少し給料が下がりましたが、地方公務員はどうかというときに、民間と国家公務員との間をとるような、大きく超えていたら地方公務員の給料を下げるというような給与体系に政府はすると言っていました。実際この前、お腹が大きかった札幌市の職員がしばらくいないなと思ったら、子どもを産んで、育児休暇があって、１年間は午後３時になったら帰れて、給料は同じという状態で、何と羨ましいことだろうと。それが民間でできるかというと、辞めてくださいと。子ども中心に勤めるのは辞めていただいて、もっと違う社員をと。人が余る状態になったときの危機感がどんどん出てくるのかなというところで、休みたいけれども休まないということになっています。
（金子） それは自分のためでもあるし、周りの人に自分の仕事の分の負担をかけるからと。
（I） やはりお金も減るというのが…。生活費用が子どもができたことによって増えているのに、お金が減るというのはきつくなるということです。
（金子） Ｃさんは共働きですが、仮にご主人がそういう形で短時間勤務みたいになったらいかがですか。
（C） 家にいる時間が長くなるのはうれしいのですが、やはり今までの給与水準が下がるということになるとすごく…。今はかなり余裕がある生活で、年に何回か旅行に行ったりということも可能ですが、そういうこともやれなくなるでしょう。給料が下がるというのは大変だなと。
（金子） 時間が増えるよりも給料が下がる方が嫌だということですね。
（C） ただ、人間らしい生活は絶対だれもが送りたいので。
（金子） 人間らしい生活というのはいろいろあるでしょうが。
（C） 最近、朝のニュースで話題に出たりして、見た方もおられるかもしれませんが、ヨーロッパではやはり育児制度が大変整っているし、国全体が育児をする体制を整えていることがとてもうらやましいなと思いました。日本ではまず現

在は考えられない。
（金子）同じことを新聞で見ましたが、それはヨーロッパの方が負担がすごく大きいのです。いわゆる国民負担で、日本は一応公的で38％ぐらいですが、イギリスは50％ぐらい、フランスは60％ぐらいで、北欧は70％なのです。ですから、負担率が違うので、当然戻ってくるものも違うのかなという話になります。そういう負担をみんなですれば、おそらくもっと育児手当なり家族手当が増えるのでしょうが、その分、みんなで負担しなければいけないということに当然なるという難しさがあるのでしょうね。Ｄさんは専業主婦ということですが、ご主人が早く帰ったり、１日おきぐらいに働くような働き方についてはいかがですか。
（D）やはり給料が結果的に下がるというのは困ります。
（金子）下がらなければいいわけですね。
（D）そうですね。
（金子）だれかが別枠で出してくれればいいわけですが、なかなかそういういい話はないでしょうから。そうすると、働き方を変えようということは、厚生労働省の「新しい少子化対策プラスワン」の一番上に書いてあったのですが、なかなか苦しそうな感じがしますね。次に、子育て支援について考えていきたいのですが、Ｈさんは保育園に預けて働いておられるということですが、実家に帰っていても、親や近所の方や保育園の方など、いろいろ周りの支援を受けながら育てていくというのは当然なのでしょう。例えば今の状態の中で、こういう支援があればいいなというのはありませんか。
（H）今のところ実家の親とは一緒に住んでおらず、子どもと２人で住んでいます。子どもに何かあれば親を頼ることはできますが、保育園もうまく認可のところに入れましたので、今のところは順調にいっています。保育園が終わって学校に入ってからの方がどちらかというと心配です。保育園ですと午後６時過ぎまで預かってくれますが、学校に入るとそれがなくなってしまうので、学童保育や児童会館に子どもをお願いすることになるのですが、働いている方が多いので、そういうところもいろいろ整えてほしいと思います。やはり実家に頼れる方ばかりではないと思いますので、そういうところからまず整えていってほしいと思います。
（金子）例えば小学校が３時半か４時に終わったときに、少なくとも６～７時ごろまでの２～３時間を、希望すればきちんと面倒を見てくれるというようなイメージですか。
（H）東京の小学校だと、同じ小学校の中に学童保育があって、希望しなくても学校に６時過ぎまでいられたのです。私も札幌に帰ってきてそのつもりでいたのですが、やはり札幌は少し遅れているのか、そういう学童保育がないのです。ですから、学校から少し離れた児童会館まで歩いていかなければいけないとか、やはり小学１年生だと結構負担だと思うのです。
（金子）児童会館はあるわけですね。
（H）あるみたいです。
（金子）来年からお使いになるということになると。
（H）せめて東京と同じレベルにもっていってくれれば、だいぶ違うという気持ちがします。
（金子）他に、例えばご近所で知り合いがいるとか、そういうような形の、制度ではなくて、非公式だけれど、あそこのおばさんだったら頼めるとか、そういう関係がかりにあるとすれば、それはそれでまた使えそうですか。
（H）でも、やはり他人で…。たまに今日はどうしてもというときなら頼めるとは思いますが、毎日は無理だと思います。
（金子）そうすると、公式に、制度としてつくられているような児童会館なら児童会館を適宜増やしていって、そこは自由に使えますよというような支援の仕方が一番なじめそうですか。
（H）それがいいと思いますが、実際に使ってみないとわかりません。
（金子）Ｄさんのところも今は子育て支援というのは受けておられますか。
（D）受けていないです。
（金子）専業主婦でやっておられると、受けていないですか。
（D）でも、一時は仕事をしていたときがあるのです。パートをしていたときがあり、そのときはよく学校から電話があって、子どもが熱を出したから迎えに来てくれと。主人は仕事をしているので、結局私が早退をして迎えにいったりというのがたまにありました。たまたま近くに私の実家があり、祖父と祖母が家にいるので、最悪の場合、どうしても行けないときは祖父に頼んだりして、他の方に比べれば楽な子育てをさせていただいていると思います。
（金子）そういう環境を自分で作っておられる。
（D）そうです。もともと手がかかるというのはわかっていたので、住むところも実家のそばにして、いざというときには頼れるようにと。24時間保育のところは幼稚園までで、小学校に入ると預かってくれるところはないのです。たまにはお友達のところに預かってもらえますが、やはり気兼ね無くいつでも預かってくれるところがないと厳しいかなと。
（金子）友達のところでも毎日というわけにはいかないでしょうしね。
（D）余ほどでないと無理ですね。それでもやはり火事になったときに１週間ぐらい預かってもらったことがあるのです。友達はお礼はいらないと言ったのですが、やはり衣食も一緒にしますので、お礼として商品券などを差し上げたりしたのですが、やはり気兼ねもありますし。

（金子） 喜んで来てくれる祖父母もいらっしゃいますからね。孫の面倒をみるのは嫌だという方も最近は増えてきていますが。
（D） あとは学童保育のことで、どうしても残業のときには行きなさいと言うのです。うちの学校はたまたま学校内に学童保育があるので、先ほどの話を聞いていて本当に恵まれていると思います。でも、学校内にできたのはわりと最近です。結構離れたところが多いようなので、うちの学校はまだいい方だと他のお母さんに聞いていますが、行っている子は少ないのです。子どもが行きたがらないです。
（金子） 大きくなって。
（D） そうですね。小学４年生なので、１～２年のうちだったらたぶん行ったのでしょうが。もう少しいろいろ工夫をしてくれれば行きたがるのかなと思っています。
（金子） Ｉさんは子育て支援のことはあまりご存じないかもしれませんが、仮に奥さんがもっと人の手がほしいといったときに、地域の側からの応援があるとすればいかがでしょうか。
（I） それはあった方がいいと思いますが、子どもを預けて遊びに行ってしまいそうな気もします。妻が働いていてそういう状況であれば、夜まで預けてというのもいいのでしょうが、子どものことを考えると、それが環境としていいのかどうかという別の側面もあるという気もします。
（金子） 例えば毎日でなくてもですか。
（I） 子ども本人にとって親と一緒にいるのがいいのか、そういう同じような環境の子どもたちの中にいるのがいいのかということもあるだろうし。ただ預かってテレビなどを見せられて、ある意味場所だけ提供しているような環境であれば、あまり意味がないかなと思います。もちろんコストがかかれば、仕方がないのかなと思いますから、やはり内容等の話をしないといけないかなと。だんだんそういう整理ができていく中で、施設を見学しながら、ここならばというのがあれば利用するかもしれません。今、緊急にほしいというものはないです。
（金子） Ｇさんはいかがですか。お父さんの立場から、地域における子育て支援というようなものは。
（G） まだ１歳９カ月なので保育園に預けているだけですが、やはり小学１～２年生になった場合は学校にあった方が。
（金子） 学校にあるかどうか。Ｈさんがおっしゃるように、札幌の場合は学校の中というのはあまりないのではないかと思います。
（G） やはり小学１～２年生ぐらいは不安になって嫌がるでしょう。児童会館まで歩かせるというのも厳しいだろうなと感じます。今、地域の町内会ですごく交流を深めているところが多くなってきています。町内会で皆が集まって映画鑑賞をしたり、ゲーム大会や野球大会などいろいろ開催しています。それは子どもたちも交流があるらしくて、そういう流れで預ける、お願いするという状況がもう少し増えれば、多少は安心できる環境になると思います。
（金子） 昔はそういうのはなかったけれども、子ども会などはきちんとあって、そこで野球をやったり適当なことをやっていました。そういうことはあると思います。
（安梅） 私は子育て支援ということで、全国の短時間保育や夜間保育のことを調べています。それから、主婦の方でずっと家でお子さんと向かい合っていて、虐待ということでどうしようかという相談とかもしています。やはり子どもを持った喜びを覚えるような状況を作らないと、なかなか少子化というのは止まらない時代だなと思います。今までの考え方だと、子どもがいれば楽しいではないか、楽しいと思えよと親が思っているような考え方がありました。でも、今はそうではなくて、自分のキャリアを磨く、自分の趣味を追求するということもすごく意義のあるすばらしいことなのだと。できるだけそれを両立したいと思う親が増えてきた。もちろん子どもがいたら子どものことを最優先に考えなければいけないということもあるのですが、やはり親が充実していないと子育ても充実しないという考え方もあって、その両立をどのようにサポートしていくかというのが子育て支援になってきています。例えば保育サービスの中でも、親がたまには夫婦でどこかへ出かけようというときにも一時保育を利用してくださいと。親がすごくハッピーになって帰ってきたら、子どももきっとハッピーになるというような発想の転換が生まれてきています。というような観点から、親も輝き、子どももハッピーになるような子育てサポートというものはどのようなものかなと。いいアイデアがいただけたら大変ありがたいのですが、どうでしょうか。
（金子） 年に１回でもいいわけですね。
（I） 難しいですね。住んでいる地域格差もあるでしょう。やはり地域レベルでそういう施設があるかとか、どれだけ皆が使うかということもあるでしょうし。もちろんそういう団体なりそういったものをつくるのはコストがかかるとか、いろいろ出てくると思います。あまり皆が使わないようであれば、維持費の面からやめることになるでしょうし。各家庭というか、皆の考え方もだいぶ違う気もしますから、ある意味わがままなのでしょうが、ほしいときにあればいいということなのでしょう。やはり身内の近くにいられる環境が一番いいのかなと。私は転勤族ですから、私の両親も妻の両親も東京なので、子どもを預けてどこかへ行こうというわけにもいかないし、たまにこちらに来たときに預かってもらって行こうとか、そのようなことになってしまいます。なかなかいいアイデアがないというか、大変難しいと思います。
（A） 先生もお子さんはいらっしゃるのですか。
（安梅） いいえ、私はいないです。結婚して12年ぐらいになるのですが、女性の選択とおっしゃいましたが、プロにな

るまでは産めないなと思っていたらあっというまに時が経ってしまったという感じです。これからまた産めるかもしれませんが。私のところに来ている大学院生は、これまで以上にプロになりたいと思う女性が入ってくるのです。

(A) 先ほど親もハッピーで子どももハッピーが一番と言われましたが、そういう部分で１歳になるころまではずっと家に２人でいたのです。主人の帰りがいつも夜９時ごろなので、朝の９時から夜の９時までずっと２人きりのときもあって、大変な時期でもあり、本当に行き詰まったのです。でも、満１歳になるまではと思っていたのです。マンションに住んでいて、子どもの友達が全然できないのです。近所付き合いが全くないし、公園に連れていっても、お母さんに連れられてきた子どもが子ども同士で遊んでいるという感じで、これではお互いによくないと思って、思いきって仕事をすることにしたのです。子どものためにもなるということで。最初２週間ぐらいは、やはり保育園に預けるときに泣いていました。しかし、その後は本当に楽しそうで、夜７～８時になってもまだ帰りたくないと言うぐらいで。私も好きな仕事でしたので毎日楽しくて、夏の間は特に忙しくて１カ月間ほとんど休みがない状況でしたが、それでもとても楽しかったです。でも体力的には想像以上につらくて、家の中も片付かない状態で。一番大変だったのがやはり保育料で、働いた分、手元に残るのはほとんどないくらいでした。今はもう父も退職して母と２人で家にいて、お金に関係なくても何かしたくて。よく私の母が、「孫もできたし、子どもはかわいいから面倒を見てあげられるけれども、どうしていいかわからない」と言うのです。そういう手の空いた育児のベテランの人はたくさんいると思います。そういう人が町内会単位で、私は何曜日はいいですよとか、保育してあげてもいいですよと言ってくだされば、高い保育料を払わなくても、そういうベテランの方に是非お願いしたいと思います。そういう育児のベテランの方などは子どもを何人も育てて、この場合はこうだという方法をたくさん持っていると思いますので、育児支援をしてくれたらいいなと思います。

(金子) 先ほどHさんやＩさんが、ご近所に頼んだり、友達に毎日頼むのは大変だという、毎日という形での支援は難しいという話をされていましたね。ですから、必要なときにそこにも行ける、あそこへも行けるという選択肢を増やした方が一番いいのかなという気がします。毎日ご近所の40～50代の子育ての経験者や熟練者に頼むということだけではなくて、他のところにも預けられる方がいいのかなと思いますが、それはいかがですか。

(A) 詳しくはわかりませんが、認可保育園となれば、もちろん職員は資格のある方だと思いますが、そうでない人たちもそこに混じって、預けられる人数をたくさん増やせばいいと思います。何よりもボランティア的なことでいいと言ってくだされば、料金も下がるのではないかと思います。そこに１人保育の資格者がいればいいのかもしれないと思います。

(金子) そうするとボランティアではなくて、少し料金を払ってもいいというイメージですね。ご近所に頼む場合は、どうですか。少しはお金を払ってもいいけれども、そういう地域での40～50代の子育て経験豊富な方にお願いするような仕組みというのは。

(H) 基本的には子どもを預けるのならお金は払うべきだと思います。やはりその方が自分も心おきなく預けられますし、預かる人もいろいろ思ってくれると思います。Gさんが先ほど、有資格者の中に資格のない人も混ざってもいいと言われました。それも確かにそうだとは思うのですが、何かあったときに困ると思うので、やはり資格を持った人に私は預けたいし、払うべきものは払って、きちんと自分のかわいい子どもを責任を持って見ていただきたい。ボランティアみたいな形で預かって、無責任なことがあると困ると思います。

(金子) Ｉさんはどうですか。

(I) 私もある程度対価を払った方がたぶんきっちり見てくれると思います。ボランティアはそれはそれでいいのですが、預ける側からすると、そういうことをお願いする以上は対価はやむを得ないと思います。水準がどれぐらいかというのは別問題です。

(金子) 例えば親が払うのは負担がそれだけ増えるので、みんなで払おうというような考え方があります。例えば子どもがいない人もある程度何らかの形でそういうお金を出すような仕組みを作りましょうというようなことが考えられるわけですが、それについてはいかがですか。

(I) これ以上、例えば税金や保険料などのような形で払うようになるというのは、関係のない人も含めてかなり負担が増えることだと思うので、受け入れられにくいという気がします。例えば年金などは今後掛け金が上がるかもしれないので、例えばおじいさん、おばあさんみたいな年金受給者が、年金をたくさん貰っているから預かってあげるよとか。我々の世代だとどうしても掛けたお金分は返ってこないわけですから。何のために今、年金の掛け金を払っているかというと、先輩の人たちのためであるし、これからの子どもたちが今度は我々の分を積み立てていくわけですから、そういう負担の歪みもあるわけです。これ以上子どもがいない方も含めて負担を上げるのは、決まってしまえば仕方がないでしょうが、事前にそうやるという話をするのだったら、それはあまり意味がないのではないかと思います。

(金子) そうすると、産んだ親が、子育ての支援を含めて、払う方がいいということですね。

(I) それは各家族レベルの問題なので、それを逸脱するのはどうかなと。

(金子) 少子化によって年金が非常に厳しくなるだろうと。だれが考えても、我々が年金を受給する年代になったときに、支える子どもが少ないとしたら当然窮屈になりますが、それについてご意見をいただきたいと思います。年金のアウトラインだけを簡単に解説してください。今の世代が払っているけれども、払っていれば全て戻ってくるわけではないという辺りを。

（佐藤：事務局）今の日本の年金制度は、自分の年金として積み立てていくというものではありません。生命保険は自分で拠出して老後にそのお金が戻ってくるようになっていますが、年金制度が始まったときにはそういうことだったのですが、だんだんお年寄りが増えてきて、そういう積立方式ができなくなって、要は、毎年お年寄りにいくらかかるのか、それに到達するために保険料はいくらにするかという考え方に変わってきたわけです。極論では、自分たちの子どものときには年金が返ってこないと考える方もいるのです。働いている場合には事業主負担というのがあるので、事業主負担を除けば将来的にはきちんとペイはするということですが、だんだん高齢化するに従って、ますます若い方々（現役世代）の保険料や年金保険料、税金などが増大するという状況に陥っています。これがまさに少子化の一つの現象面でもあるわけで、この年金の負担をどうしていくかということが、今、緊急の課題になっています。

（金子）ということで、今の70～80代の人は非常にリッチなのですが、我々はもうリッチになれない。長生きすれば元が取れるが、そうでなければ元が取れないということははっきりしているわけです。ですから、年金制度を維持するには、早い話が子どもが増えるか、増えなければ一人一人の掛け金が増えるという非常に単純な話です。あるいは、思い切って今の70～80代の人たちが貰っている年金を半額にするとか、そういうことしかないわけです。

（佐藤）もう少し補足しますと、我が国は少子化により労働力となる人口が減ってくるのです。そうすると支え手がどんどん減っていく。厚生労働省が今検討しているのは、労働力が不足したらどうしたらいいかということです。それは、高齢者に働いてもらう、女性に働いてもらう、外国人に働いてもらうという、３つの考え方です。しかし、外国人の場合は、たぶん日本のこういう国土で、外国人の犯罪などが多い現状では、移民がどんどんやってきて支え手になるのは難しいだろうと。そうすると、高齢者の雇用もあるのですが、皆様方でさえ働くのが大変なときに、高齢者の雇用の場があるのかという問題です。いろいろな案が新聞で取り沙汰されていますが、なるべく働き手になってもらって、保険料を払う人を増やしていこうというのが厚生労働省の姿勢です。だから、先ほどから問題になっているように、女性の就業の場をどう確保していけばいいのかという問題が非常に大きくて、こういう意識や考え方があったら女性が働きやすい環境になるのではということを、もう少し皆さんに教えていただければと思います。

（金子）それでは、Ａさんにとって、働き方の今以上に理想的というか、今よりももっと働きやすいというイメージの働き方というのはいかがですか。どういうイメージですか。それは時間でもいいし、給料でももちろんいいし、何でもいいのですが。

（Ａ）子どもを産むから仕事を辞めなければいけない状況ではないということが一番だと思います。今いったん仕事を辞めて、子どもを産んだあとに再開するときには、子どもが熱を出したとかといったときに帰る、周りに迷惑をかける、いづらくなるというのが一番困ったパターンなのです。例えば年に10～20日は自由に年次休暇のように休めて、その中で遣り繰りをして、「子どもが急に熱を出したので休みます」となっても、それは有給休暇で休めるとか。

（金子）別枠の。育児休暇とはまた別に。

（Ａ）はい。育児のためというか、そればかりではないかもしれないですが、そういうものを夫婦がお互いに持っているということもあれば便利だろうなと。

（佐藤）それは、夫婦の場合、それぞれ１年間に10日間とかそういうポイントをためておいて、いつでもそれを使えると。

（Ａ）使えるということです。あとは子どもが熱を出しても預かってくれるところがあるかどうかです。聞いた話ですが、札幌にはどこか２カ所ぐらい、水ぼうそうなどの伝染病になった子どものための託児所があるということですが、それがもっと増えればいいと思います。

（金子）それは何というのですか。

（安梅）病児保育。

（金子）Ｂさんはまだ独身ですが、職場の女性をご覧になって、こういうふうにすればもっと働きやすい、こういう人も子どもを育てながら働きやすい、そういうご経験はありませんか。

（Ｂ）今勤めているのは広告代理店です。社員約200人のうち約120人が男性で、約80人が女性です。皆さん結婚するのが遅いというか、する環境にないというか。仕事を一生懸命やりすぎると結婚できないのか、結婚したくないのかはわかりませんが。私が働いている環境で言うと、早い人は早く、20～22歳で入ってきて、25歳までに結婚して辞める方もいる。しかし、ある程度仕事がおもしろい、責任を持たされるとなってくると、どんどん年齢が上がっていく。でも、病気がちになったり、精神的にくじけたりして辞めていく人もいます。それから、結婚を機にやっとこの業界から抜けられるという人もいます。また、本当に好きで勤めている方は、仕事優先の生活を送ると、恋愛面や結婚面でどんどん遅れるということで、30～40代の女性社員はいまだに独身でいます。正直、結婚してからも続けられる業界かと言われると、かなり厳しいと思います。やはりその人の責任において世の中に対する告知が変わってしまうという存在になってしまうと、寝ないでもやらなくてはいけないということになりますので、仕事をしながら子育てなんてと。だから、結婚したら辞めるときというような仕事場になっていると思います。実際に今、子どもがいて働いている女性は、１人か２人です。その中の１人は同じ会社内の結婚で、お互い協力して、今日は早く迎えにいく、この仕事は私がやっておくとか、そのような人もいます。基本的には辞めていく方が多いと思いますが、ではどうしたらいいのかということでは、やはり仕事の内容になってくると思います。女性が働く場、好きな仕事とか業界はあると思いますが、女性が働く

仕事の内容を増やしていかなくてはいけないかなと。

今、年金の話が出ていますが、先ほどの話にあったように、子どもが少なくなっているから、子ども向け業界の会社がどんどん潰れていったり、大学も減っているような状況の中で、これから経済面でプラスになるような何が考えられるかというと、少子化の影に高齢化があって、年齢が高い人にどんどん商売の目を向けていっているというのが実際です。働いていない人間というのは私たちの世代以外だと65歳以上の年齢の方と、あと学生以下というところですね。学生たちには援助がなくて、老人たちには援助があるというのが年金の状態であると思いますが、今のこの流れでいってしまうと、結局年配の方々にもお金を使わせないと年金が回っていかない。どんどん皆さん貯めていく。今、働かないでフリーター若しくは無職の若者が増えていて、だれに養ってもらっているかというと、50代ぐらいの父親や母親という形になっている。また、年金を貰っている人にも養ってもらっているようなフリーターもいるのかもしれないというのが循環の中でおかしいというところです。今、女性の話になっていますが、そういうお金が払える年齢の方々に対して女性ならではの仕事をすれば、それが介護なのか、それともどういうものかはわかりませんが、もう少し女性ならではの仕事ができるのかなと。だから、そういう環境があってあたりまえと。早退を急にしなければいけないとか、何かあったときの対応ができるような職場をつくっていけるのではないかと。昔は金融機関の窓口は女性でなければいけない、だから女性が多かったということもありましたが、そういうのではなく、女性だけの会社がもっとあってもいいのかなと思います。現実的にはどうかわかりません。

（金子）わかりました。そのとおりだと思います。お金を持っている高齢者世代に少しお金を吐き出させるような産業構造の転換というか。しかも、そこに女性の労働力をつぎ込めればベストかなということですね。

（B）そうですね。実際に65～70歳以上の方々が何にお金を使っているのかなと。例えば自分の食べるものとか、趣味を持っている方とか、あとはほとんどが貯めているのかもしれない。みんなで息子たちや子どもたちと暮らしている人もいれば、一人で暮らしている方もいると思いますが、その年金の出ていきどころが現状どのようになっているのか詳しくはわかりません。そこから家賃を払っている人もいるかもしれない。そういう負担もありますが、例えばお金を出してでも若者と話をしたいとか、そういう会のようなものがあって、若者や女性が集まっているところにお金を出してでも自分から入り込んでいきたいとか。そのようなことはないでしょうか。そういうことを考えるのも私たちの仕事でもあるみたいな。しかし、皆さんが年金をいくら貰っているかという目安も私はわからないので。

（金子）年金プラス退職金と考えると結構…。少なくとも貯金は多いですね。60代の世代の人が一番お金持ちですね。

（B）ただ、家を建てた方は、そこにつぎ込んでいます。だから、この後の支払いは一緒に住んでいる息子に任せたとか言えればいいのですが、一緒に住んでいないのが現状ということになっていくと、自分で35年のローンの支払いを継続しなければいけない。

（金子）Cさんはいかがですか。同じような。

（C）女性がこれだけ社会に進出してきているのに働きにくいというのは、私は子どもがいませんが、子どもがいる女性に聞くと、やはり子どもを預けられる環境があまり整っていない状態だと。現実にできるかどうかはわかりませんが、もっと民間の企業がお金を出して、企業内に例えば子どもを預ける施設をどんどんつくっていって、その中で働いている女性社員が気兼ねなく預けられる環境を整えてあげれば、そういう心配もなくなります。残業しても安心して子どもを預けられると思えば、もう少し働きやすい環境ができるのかなと思います。

（金子）それは企業が出さなくも、例えば厚生労働省が補助金みたいな形で出すことはあるわけですね。それは税金でやるのか、要するにだれが負担するのかという話になるわけです。

（C）それによってまた私たちの税金が増えるということは、とても大きな問題です。

（金子）ヨーロッパ並みにはなりたくないという人が日本人の大半です。つまり、50%以上の負担はしたくないという人なのです。ですから、負担が増えるということはみんなが嫌がっている中で、どうやりくりするか。

（C）国は使えないと思います。だから企業。

（金子）企業は企業で国際競争をしないといけないので、そういうようなことになかなかお金を回そうとしない企業が多いですよね。ですから、そこのところをどういう形で変えていくか、変えられるかどうかが問題でしょうが。要するに子どもを育てる社内環境なり地域環境なり、とにかく何かやっていかないと。それはBさんの話の仕事の内容とはまた別ですね。どんな仕事をしていても、例えば経理にいても、営業にいても、どこにいても、とにかく子どもを預けられるようなものを企業内なり、地域の中でも作るという、そういうイメージですか。

（B）今、私は結婚していないし、子どももいないので、自分の経験でしか考えられないのです。私が生まれたのは札幌ですが、3つ上に兄がいて、生まれたときに両親は自営の八百屋でした。それで、私は朝起きて少し離れた父方の母のところに預けられて、気がついたら家に戻されているというか、帰りに親が迎えに来るということで、ずっとおばあちゃんに昼間は育てられていた。今度は保育園に行こうというときに、働いている近くの保育園に朝連れていかれるのです。保育園に寝ているときに連れてこられて、気がついたら朝になっていて、八百屋の仕入れに行かなければいけない親父の顔はほとんど見たことがないという状態で、月曜日から土曜日ぐらいまでは、ほとんど親の愛情が少なかったのかもしれない。ただ、その分、週末になると親の愛情が一気に来るのです。ただ、その辺で、おばあちゃん、祖父としての立場で叱ったり教えるというのと、親が教えるとか叱るというのとは少し違ってくるということもあります。やは

り、今、高齢化でいっぱいいる年配の方々に物事を教えてもらったり、教育されるということがすごく人間にとっては覚えているのでプラスになると思います。しかし、例えばそれが親戚でない、肉親でないときに、預けられる勇気というか、何があるかわからない、自分の孫なのにどうするかもわからない状態の中で、そういった勇気がどこまで持てるかということはあると思います。しかし、どんどん老人が増えている、その人たちが集まる場所に今度は預けたい子どもを持つ親がいる。そういう子どもを集めて、老人ホームというのか、一つの建物に高齢者と子どもたちが集まっているような、そういう施設みたいなものがあれば回っていくのかなという気もしますし、それが一つの事業になればいいなとも思います。

(金子) 基本的に年齢が60歳違うわけですよね。

(B) そうですね。それは全然違うと思います。今はその祖父は曾孫を見ています。80数歳ですが、その分元気なのです。自分が呆けていられないというか。何がそうさせているかというと、わざと孫たちが祖父の近くに住むのです。何かあったときは見てもらおうということで、どんどん自分の親や祖父のところに引っ越していく、または近くに住んでもらうということがあります。極論ですが、例えば転勤になった場合、親や親戚の人も一緒に引っ越しさせるぐらいの制度みたいな、そういう援助をすれば、高齢者の方に預けたり、高齢者も子どもと一緒にこれから生きていけるのではないかと。それはお金がかからないですね。肉親ですし、勝手に。

(金子) Hさんは働きながら子育てされていていかがですか。働きやすい、子育てしやすいということで言えば。

(H) 意識を変えていくしかないというのは思うのですが。

(金子) どんなレベルで。

(H) 例えば子どもが熱を出して迎えにいかなければいけないのに、「あの人はまたいなくなってしまった」みたいな気分が漂うだけで嫌というか、いづらくなってしまうのです。実際のところ、してほしいことは結構いっぱいあると思います。しかし、母子家庭になってみてわかったのですが、意外といろいろな補助が多いのです。その補助は、子どもがいない、税金をたくさん払っている方からくるのかなと思うと、あまりわがままも言えないという気もします。医療費とかも無料ですし、ああだこうだと言いすぎるのもどうかなという気持ちもします。

(金子) 税金は確かに子どもがいないというか、一人で暮らしている場合は少し高いですね。結婚して子どもがいない場合にはいわゆる手当がないですね。それで少し割高なのでしょうが、子どもにかけるお金はそういうレベルの金額をはるかに超えるわけです。そのところがこれからたぶん問題になるだろうという気がします。

(H) 難しいと思いますが、例えば子どもは自分が望んで産んだものですから、お金がかかるとか大変だということもある程度覚悟して子どもを産んだわけです。つくらないようにしようと思えばつくらないでいいわけですから。だから、やはり周りに頼ってばかりではなくて、自分の責任でやっていかねばならないのではないかという気持ちは強いです。

(金子) 少子化がこのままずっと続くと、2050年から人口が50年毎に半減すると言われているわけです。今は1億2,700万人で、50年経つとそれが8,000万人になって、それから半減していくということです。これは私の推計ではなくて、社会保障人口問題研究所による、国が唯一行っている人口予測です。その予測を使うと、西暦3000年には日本人は83人になっている。ということは、もうなくなるわけです。今から1000年前は『源氏物語』が書かれたころですが、650万人いたと言う研究者がいます。今から1000年後は83人です。83人に向けて日本の社会はばく進しているわけですから、いろいろなトラブルが発生して、例えば失業が増えたり、年金をもらえなくなったりというマイナスの現象が多く見えてくるのではないかと思うわけです。ですから、少子化については何か対策をした方がいいということで、この仕事を始めたのです。

その原因ははっきりしていて、2つあります。1つは結婚しない人が増えてきた、未婚率が上がってきたこと。もう1つは、結婚をしても子どもを産まない人が増えてきたこと。これしかないわけです。なぜかというと、日本の場合は、北欧のデンマーク、スウェーデンと違うところがある。つまり、デンマーク、スウェーデンでは常時未婚の母、結婚以外の関係で子どもを産む人が半分いるわけですが、日本では1%ぐらいしかいないわけです。だから、日本は結婚しないと子どもを産まないという文化の国なので、シングルマザーを最初から狙うという人は非常に少ないということで、これはなかなか変わらないだろうということが言えるわけです。

そうすると、日本の人口が西暦3000年に83人になると国によって予測されているので、それに対して何とか83人にはならない方がいいだろうという立場からすると、少子化をどこかでくい止めなければいけない。そのために何がどこでどういう形で手を打てばいいかということを、私たち研究のレベルでも、行政の実践のレベルでも考えているということです。

それで、順番に一言ずつで結構ですが、そういう将来像を見た場合に、今の少子化現象を少しでもくい止めるようなアイデアがあれば、是非言っていただきたいということです。

(I) すぐには思い浮かばないのですが、今もたぶんあると思いますが、子どものいる家庭には何か補助金というか。

(金子) 補助金というのはいわゆる児童手当みたいな。

(I) そんな感じですね。そういうものを手厚くするとか。

(金子) それは税金で。

(I) 結局そういうところにつながっていってしまうので。

（金子）負担が増えると。
（I）だから、負担を増やさずに今の税収の中で国の方で配分を変える。本当に真剣に悩んでいるのであれば、使うべきお金がはっきりしてくると思うので、優先順位をつけてやってもらえればいいことです。かなりの税金を我々は払っているわけですから、もう少しフィードバックのような形できちっとディスクローズしていく中で、そういうものに使っているということが見えてくれば、納得性を得られるものになるでしょう。また、それでも足りずに税金を上げるしかないということになれば、多少なりとも仕方がないという意見が出てくると思います。
（金子）そういう説明がきちんとあれば、ある程度なら増える分は仕方がないという感じですか。
（I）そうですね。ただ、今の税金で十分できるのではないかと思ったりはします。何に使っているのか我々にはよくわからない面も結構あるので、まずきっちりわかるようにしてもらったうえで、使い道がおかしいところがあれば、それを正していただく。本当に少子化で国として大変な問題だと思っているのであれば、そういうものに税金の配分を増やしていくことを考えるべきで、何でもかんでも税金を増やすというやり方はよくないのではないかと思います。
（金子）年金制度はどうですか。
（I）年金制度は税金ではないですが、年金を支えるために子どもを増やそうというのは違うという気がします。要は自分が掛けたお金が返ってくるような制度にする。物価スライドで価値が上がる、経済が伸びて価値が上がるという世界は過去の世界であって、今はデフレになっているわけです。要するに受け取る年金額もそのときの経済状態に合わせた形でスライドして、増えたり減ったりするものにすれば、話はわかると思います。でも、結局年金額は伸びていくのだと、右肩上がりなのだという考え方から、支える者を増やさなければというわけですから、そこはもう少し受け取る方も、痛み分けではないのですが、そういうことを考えないとだめなのかなと。
（金子）今の70～80歳の人たちに20万円は多いから15万円ぐらいに減らそうということをとにかく言いはじめる。
（I）でも、そういう議論はあまり出ていないですね。だから、なぜ出ていないのかなと。
（金子）たぶん選挙で困るから。
（I）そう思います。しかし、やはりそういうところに手をつけないと、本当の意味での改革にはならないのではないかと思います。
（H）よくわかりませんが、やはり子どもはかわいいですよね。子育てはまず大変だというイメージがどんどん示されているようで、それで子どもを産むのを躊躇している夫婦もかなりいると思うのです。
（金子）「子育ては楽しい」みたいな…。
（H）そういうことがもっと皆さんにわかっていただければ。
（金子）自然に増えるだろうと。
（H）増えてくれれば一番いいかなとは思います。
（金子）確かに大変だからどう支援するかという話をすぐしたがるわけですね。
（H）だから、大変だというイメージだけができてしまって。
（金子）大変だけれども、楽しいこともあると言えば、もっと違うかもしれませんね。
（G）簡単かどうかわかりませんが、子どもの誕生日を休暇にしてもらえれば。今、子どもとの接触時間というか、誕生日も父親が帰ってこない、そういう家庭が多い。やはり少し愛情を注ぐことによって子どもと接する時間が多くなって、２人目、３人目という流れになるのではないかと思ったのです。小学校、中学校になっても誕生日に休みというのは難しいかもしれませんが、小学校に入るまでの子どもに関しては会社が誕生日をきちんと聞いて、国できちんと休暇にするという制度ができればおもしろいなというのが率直なところです。
（佐藤）その子どもの国民の休日みたいなものですね。だから、その子も学校は休みにする。
（G）そうです。
（金子）もう何年か前ですが、いわゆるニューヨーク大停電というのがあって、翌年子どもがたくさん生まれたのです。ですから、いよいよとなったら全国の電力会社に話をして、権力的に一晩電気を流さないと、少子化は瞬時的に回復はするのではないかと私は思っているのです。しかし、それは権力を使わないといけないのでそういうことはできない。ですから、地道なことしか。例えばHさんがおっしゃったようにアピールする。楽しいということを言ったら、10人のうち１人ぐらいはそうかなと思う人が出てくるということを期待せざるを得ないのかなという気もするのです。Fさん、いかがですか。
（F）もう少し世代間の不公平を是正する必要性が。
（金子）それは具体的にはどういうことでしょうか。
（F）よく温泉などに行ったときに思うことですが、世の中にはこんなに裕福なお年寄りがいると。
（金子）中高年というか、高年齢層ですね。ＪＲ特急に乗ってもグループで楽しんでいるのはみんな私よりももっと年上の人たちですね。わかります。
（F）我々は一番いい時期、バブル期のころに入社して、その後、経済は下降線をたどっていった。その中で、我々の入社時に今の私の年齢ぐらいの人が貰っていた給料・ボーナスと比べて、自分がその年齢になったらかなり減った水準になっている。企業業績が伸びない中で、会社を退職してＯＢになって企業年金などをもらっている人の中には、企業年

金の部分には全く手をつけていないので、働いていないのに我々より収入が多いのではないかという人がたくさんいます。自分たちの世代は国の年金はいつになったら貰えるのかという不安もあります。国の年金は例えば平成６年にいわゆる部分年金が導入されました。その５年後の平成11年の改定では、今度は部分年金をやめて65歳までは年金は支給しませんと。今までの勢いでいくと、今度の平成16年には65～70歳に貰う年金が報酬比例部分だけになるかもしれないというところで、まずいつになったら年金が貰えるのかということと、もう１つは給付水準がどんどん下がってきていることです。今のお年寄りは給付乗率で1,000分の10ぐらい貰っている方々がいる。我々の世代は1,000分の7.125ですから、今の水準の７割ぐらいしか貰えないことが確定しているわけです。今後５年毎に見直していって、いったいどこまで引き下げればいいのかと。将来の生活設計が全くできないような状況です。

（金子）今の70～80代の年金給付水準を引き下げたいということですね。

（F）そのためには、もっと若者が選挙権を行使しないとだめだと思います。いわゆる今フリーターといわれている人々は政治に対する期待は全くないですから、選挙があってもその権利を行使しようとしない。そういう人々がもっと選挙に一票を投票する気になれば、政府も考えるのかなという気がするのです。お年寄りは何となく暇だから、選挙に出てきて投票する。やはり若者ももっとそういうものに興味を持って、投票してほしい。

（E）日本の将来の人口を考えたら、個人レベルでは少子化対策というのは無理だと思うので、国と企業とが一緒になって協力していかないと絶対に無理だと思います。

（金子）どんなことですか。

（E）例えば、難しいですが、働いている人も産みやすいような環境というか。

（金子）それはいろいろ今まで出てきましたが。

（E）個人レベルで少子化対策といっても…。

（金子）例えば、Eさんが外国に行く頻度を減らして、その分を地域の子育て支援に回そうとか、少しそういった負担は…。

（E）個人的なものではなくて、会社ぐるみで、日本全国キャンペーンをやっていかないと。

（金子）どんなキャンペーンですか。子どもを増やしましょうという少子化対策キャンペーン。

（E）将来の人口のために何かアイデアを集めるとか。

（金子）いろいろやってはいるのですが。

（E）将来の人口のことを考えている人もいないかもしれない。

（金子）まずは考えてくださいというようなところからですか。

（E）そうですね。個人レベルではちょっと。働いていても子どもをほしい人はいると思うので、そういう人たちが子どもを本当に産みやすくなるような環境が整えられて、一人ずつみんなが産めば、きっと増えてくる。

（金子）年金問題はどのように感じますか。

（E）年金はもう枯渇するのではないかというか、貰えないのではないかと。だから個人で年金を掛けます。

（金子）個人年金に入る、そういう選択をする。

（E）あてにしていないけれども、一応自分でも掛けます。

（D）税金の優遇がもう少しないかなと。

（金子）子育てに対して。

（D）家族がいる、子どもがいるということで多少貰っているのはあると思うのですが、すごく安くなっているという気がないのです。税金が安くなればもう少し生活に余裕が出て、子どもをもう１人持ちたいなと実際私も思っているし、周りにももう少し子どもにかけるお金をつくれば、２人目をつくりたいと言っている方は結構多い。

（金子）私も安梅先生も大学にいますが、４年間の大学生活で大体1,000万円を子どもに使うわけです。授業料プラス生活費で１年間に約250万円かかり、４年間で1,000万円で、２人だったら2,000万円いるわけです。そういう負担が親としてあるわけで、当然そういう子育て支援というか、お金の面でも何とかしてほしいという声は非常に強いです。

（D）子どもが生まれて２人、３人になって、将来働いて普通に税金を納めるといずれは返ってくることを考えたら、それぐらいしてくれてもいいのではないかなと。

（金子）今度の新しい制度では、児童・生徒の学生全員に１人年間50万円の奨学金を貸与するという方向で厚生労働省は考えています。

（佐藤）構想では年齢制限なく、すべてに一律50万円。

（金子）800万人いるので４兆円かかるのだそうです。

（D）現金を支給するよりも、制度を整えて、税金を安くした方がいいかなと。

（金子）お金をもらうのではなくて、払うのを…。

（D）払うとなると、たぶん足りないのではないかなと。

（金子）もちろん矛盾もあります。大学生は年間250万円かかりますから。50万円というのは国立大学の授業料ですから、生活費は別にいるので。もらうよりは出すのを減らした方がいいということですか。Cさんはいかがですか。

（C）西暦3000年に83人になるということを聞いて、びっくりしてしまって。

（金子）私が言ったわけではなくて、国が責任を持って言っているわけです。
（C）そんな知識を持っている人が全国にどれだけいるかと考えたら、もっとそういう危機意識を国民全体に持ってもらわないといけないと思いました。そのためには広告やメディアを使ってでも国民全体に知らせる必要があると思います。あと、子どもを持っていても暮らしやすい環境という意味では、子どもと接したいという老人の方々との場を持つという先ほどの意見はすごく大事だと思います。地域振興券みたいなものを発行している地域があると思いますが、そういうものをもっと広めて、お金ではなくて、ちょっとしたことをお願いするのにそういうクーポン券を発行して、お互いにちょっとしたお手伝いができればいいのかなと思いました。
（金子）「地域マネー」みたいなものですね。
（C）そうですね。
（B）子どもを産めない理由としては、環境の部分ももちろんありますが、一番大きいのは経済面ですね。もう少し子どもを産むとか育てるというおもしろさ、楽しさがあってもいいのかなと思ったときに、以前中国などで産みすぎると税金がかかるというような調整を図ったことがありますが、逆にどんどん子どもを産むと国や企業からボーナスが入るような、楽しみな部分があってもいいのかなと。それは税金になるのか、国が払うのかですが、そういうのがあったらおもしろいなと。その中で特に宝くじ式にして、誕生日なり番号みたいなものを付けて、年間に例えば10人を「国の子」として選抜して、国からある程度の援助をそのファミリーにしますと。そういうことをすると毎年ドキドキできていいのかなと。
（金子）札幌はやっていませんが、道内の３分の１ぐらいの過疎町村では、３人目の子どもからお金を支給しているのです、実際にボーナスとして、例えば３人目が50万円、４人目が70万円というふうに支給しているところがたくさんあります。でも、それは３人目からだからほとんど有効ではない。１人目からだったらこれはもう破綻するだろうなという気がします。
（B）そういった部分と、産んだ親が子どもがある程度の年齢まで生きていくためのお金を払っているわけですが、これを産んだ者勝ちということで、生まれた子どもに将来的には負担させようという…。生まれたときから奨学金みたいな。義務教育まではいいと思うのですが、高校へ入るときからは自分の意思で将来的に自己負担になるというような。今の給料の中で生まれてくる子どもを育てようと思うからお金を心配しているのですが、高校や大学へ行くか行かないかは本人の自由ですし、将来的に自分が払っていくのだというような仕組みみたいなものが…。例えば2010年から生まれた子にはそうさせるというような形にすれば…。もちろん物事を教えるとか、育てるのは親の役目ですが、その子どもにかかる費用は将来大人になった子どもたちが自分たちで払っていく。その前提で自分が今後どのような勉強をしていくのかを決める。例えば国立へ行けば安いから国立に入るために勉強するとか、それとも行かないで働くとか、そういう意識のもとに制度みたいなものができれば、どんどん産めるのかなと。
（A）何年も前から男女の雇用は平等だとか、女性も男性と同じように自立しなければと言われて頑張ってきて、それで今、少子化が問題にされています。これは来るべくして来た問題のような気もするのです。
（金子）それは雇用が平等になったからですか。
（A）平等になったからというか、やはり先ほどＩさんが、父親が稼ぐだけのお金を母親が稼ぐのは難しいといわれましたが、同じ会社にいて同じように働くものだから、女性も男性と同じように働く能力を求められてきています。私も独身のころは同じようにということもあって、一方では女性ならではの仕事を是非したいと思って、女性だからできる仕事というふうに頑張ってくると、一人前になるまでは結婚できないとか、まして子どもを産んでいられないという方はたくさんいると思います。そして、それが少子化の大きな原因になっていると思います。つまり、一人前にもなりたいし、子どもも産んで育てたい。それが両立していける世の中になるには、そこを解決できれば解決できる問題のような気もするのです。少し前の新聞に、女性と男性の意識調査で、女性が結婚しても社会に出ていくことはどうかというと、女性も男性も大賛成なのですが、では家事を男性と女性がどう分担するかというと、やはり男性の８割は女性がやりなさいという意識だったのです。そこを改善していかないかぎりは…。
（金子）いわゆる男女共同参画社会。
（A）でも、そこは大きいと思います。テレビで欧米を見ても、やはり父親が積極的に育児に参加したり、会社も積極的に育児のための休暇を取らせたり、早く帰してあげたりしています。うらやましいなと思うだけではなくて、それを日本でも実現できるようにしていくことだと思います。個人レベルでは意識を変えていくことぐらいしか今は思いつかないです。
（金子）それでは、時間になりましたのでグループインタビューを終わらせていただきます。どうも長い間ありがとうございました。

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て方策に関する調査研究」
札幌グループ面談（第2回）
日 時 ： 2002年9月28日（土）17:00～19:00
場 所 ： ホテルアルファ・サッポロ

（金子:司会） まず最初に、１人２～３分で結構ですので、簡単に自己紹介をしていただきたいのですが。それではＡさんから順番にお願いします。
（A:34・女・既・専・2） 34歳で子どもが２人います。上の子を連れてくる予定でしたが、主人が約束の時間に帰ってこなかったので、急遽実家に子ども２人を置いて走ってきました。
（B:34・女・離・ー・0） 独身です。10年ぐらい前に結婚して、離婚しています。保育科出身ですが、その角度からもいろいろ思うことがあるので、意見を言ってみたいと思います。
（C:30・女・独・ー・0） 独身で、まだ実家の親元にいます。兄弟は姉が既に嫁いでいますが、どちらかというと、自分本人というよりは、姉が子どもを持った後の生活の変化などを、客観的に、冷静に見られるかと思いますので、その辺から述べられたらと思っています。
（D:31・男・既・専・1） 娘が１人いて、一家３人で暮らしています。少し緊張していますが、何か意見等を考えて言っていきたいと思います。
（E:37・男・離・ー・1） ８歳になる男の子が１人いますが、私も離婚しています。本拠地は札幌ではないのですが、会社の都合で、転勤でこちらの方に今一人でいるという状況です。いろいろと仕事柄関係していることもありますので、積極的に意見を述べていきたいと思います。
（F:36・女・既・共・3） 子どもが３人います。私もフルタイムで働いていますので、共働き家庭です。いったん退職して再就職しているので、子どもがいることの困難さが身に染みましたので、そういうことも話せたらと思っています。
（G:30・男・独・ー・0） 今年 30 歳になったばかりですが、結婚していなくて、悠々自適の生活をしているという状況です。こういうグループインタビューは初めてなので、どういう意見を言えるかもわかりませんが、いろいろお話ししたいと思います。
（金子） いくつかテーマがありますので、それに従ってご意見を頂戴したいと思います。先週、厚生労働省から新しい「少子化対策プラン」が出ました。「少子化対策プラスワン」という従来のものにプラスしようという案ですが、その一番最初に、男性の働き方を変えようということで、具体的には短時間勤務、子育ての時期だったら男性も早く家に帰りなさいという、例えば午後４時に帰すというような話が書いてあります。それから隔日勤務、「月・水・金」の１日おきに働けばいいのではないかと。そういうことをやれば、例えばＦさんのような３人子どもがおられる女性でも、少しはご主人が助けてやれるのではないかということで、そういうことを国が提言したのですが、まずそのあたりから、男性の働き方、女性の働き方を、子どもを育てるという観点から見てどのようなものかということをお尋ねしたいと思います。Ｇさん、男性の働き方を、国はそのようにしないと少子化対策にならないと言っているのですが、いかがですか。
（G） たぶん無理な話なのかなと思います。
（金子） どういうところが無理でしょうか。
（G） 結局、国はそう言っても会社はいっぱい働けという。国の制度が変わりました、では会社の制度も変えましょうというようにはならないですから。自分がやはり会社に勤めているということもあるので。今でも会社の言うことに従わなければいけないというわけではないと思います。会社の福利厚生も充実してきていると思いますが、そうはいっても、まだそれを享受できていない状況があると思うので、その点を考えると無理なのかなというイメージです。
（金子） Ｅさん、いかがですか。
（E） 今、Ｇさんが言われたとおり、確かに男性が積極的に育児に絡んでいくことは必要と思いますが、逆に今、世間一般にいわれているとおり、リストラ等があり、職場の労働環境は非常に厳しくなっているのが実情で、いろいろと競争が激しくなってきています。そういう中で仕事を第一にせざるを得ないということで、日本の男性サラリーマンは、精神的にも肉体的にも、かなり追い込まれている状況にあると思います。そこでさらに育児が追加負担となるのは、やはり厳しいかなというのが率直な意見です。この前、ＮＨＫの朝の番組の特集で、スウェーデンでは子どもが生まれたら、男性はその直後１カ月休みが取れるということを報じていました。これは、給料の８割を国が支払って収入を保障して、会社もそれに対して非常に理解を示すというように、国全体でやっています。ただ、その８割の給料を国が負担する財源は何かというと、日本の消費税に相当する付加価値税で、その税率は 25％です。そういう福利厚生が充実した国で、かなり進んだことをやっていました。日本もそういう思い切ったことをやらないと、社会的に、人の気持ちの面で浸透するのは、正直なところ難しいのかなと思います。
（金子） 問題は、その消費税25％を国民が受け入れるかどうかということですね。
（E） そういうことです。
（金子） 現在は５％ですからね。やはり日本という国のやり方や国民性が違うところがあり、たぶん消費税を 10％にするのも大変かなという気がするわけです。Ｄさん、いかがですか。

（D） 正直言って、子育てに参加しようということで、男性が育児に協力するというようなことをやっていたCMはすごくよかったと思いますが、今回の国の案というのは全くお粗末で、はっきり言って、そんなことで少子化がと。もっと他に対応なり考えがないのかなと。
（金子） 男性の働き方で、今のように長く働く、たくさん働くということを変えれば、少子化対策になるというわけではないと。
（D） そんな短絡的な発想をすることに、私としては笑ってしまいました。
（金子） 働き方の面でいえば、どうすればいいのでしょうか。
（D） 働き方の面では、私も、やはりお客さんによっては残業もあるわけです。ただ、ひとつは、残業も会社からやらされる部分もありますが、自分で調整できるところもあります。それと、土日や休日なども、できる範囲でそういう子育ての協力はできるのかなと。私も子どもが生まれたばかりで、非常に、仕事が終わった後ということもありましたが、やはり個人個人の意識をもっとそういった方に向けること一つ考えても、何か他にないのかなと思いながら…。
（金子） 少なくとも１日おきに働くとか、午後４時に帰るからといって、少子化対策にはなかなかならないという感じですか。
（D） そういう気もするのです。
（金子） 仕事は相手がいますしね。それに、Eさんが言われたようにリストラの時代で、会社が人を減らそうとしているので、「いや、１日おきでいい」と言ったら、「お前辞めろ」と言われかねないですね。
（D） そういう感じがありますね。
（金子） そのあたり非常に辛いですが。Fさんは共働きをされていて、女性の側からみて、まず男性の働き方ということについてはいかがですか。
（F） ふだんはいいのですが、子どもが病気とか、子どもの学校行事などのときに、交代で出てほしいという希望はあるのですが…。
（金子） 大体はお母さんとして、ご自身でお出になるのですか。
（F） そうですね。まず私がやらなければいけなくて、私がどうしても都合が悪ければ、夫に出てもらうという感じです。世間の意識もそうです。でも、第１子が10歳ですが、その子が幼いときに比べたらだいぶよくなって、今は平日の学校行事でもお父さんがたくさん来ているし、保育園の送り迎えもしているお父さんも多いので、意識面ではだいぶ変わってきていると思います。ただ、問題は収入面で、私と夫は同じような仕事をしていますが、年収は倍以上違います。それは、残業手当のこともあるのですが、昇進スピードなどで…。やはり子どもがいて残業できないと、昇給もしないということで。お金の面だけで言えば、代わりに休んでもらうよりは、夫には残業して稼いで欲しいというのが本音です。たぶん共働きでないお宅は、残業して、ちゃんと８時間は働いて、給料を 100％もらってきてほしいのではないかと思います。
（金子） なるほど。むしろ隔日勤務や短時間勤務では困ると。
（F） それはその分減ると思いますので。もし減るとすると、減るぐらいならちゃんと働いてという考えになり、手伝ってもらうよりはという感じではないでしょうか。
（金子） 収入が減るのは、とにかく困ると。
（F） そうですね。今より減ったらもう大変ということですね。
（金子） そうすると、非常に理想的なことを言えば、隔日勤務であり、短時間勤務だけれども、収入が同じだったら、もう言うことはない。
（F） そうですね。ある時期は保障してくれて…。
（金子） 例えば、子どもが０～３歳の時期は、隔日勤務や短時間勤務にしようと。
（F） そうですね。そういうことをしてくれたら、母親としても楽ですから。１人で３人の面倒を見るのは非常に大変ですが、夫が手伝ってくれるのならもう１人産むかもしれないということですね。
（金子） そうすると、やはりその原資をどうしようかということで。例えばEさんが先ほど言われたように、25％の消費税なり、とにかくどこからかお金を持ってこなければいけないわけですが、それがはたしてうまくいくかどうかはまた別の問題としてありますね。
（F） ただ、自分が今負担はあるけれども、自分はいつかまた受け取ると思えば、消費税率が 20％ぐらいになっても我慢できる部分もあると思いますが、独身の人が多くなってくると、やはり自分が絶対に貰えないような利益に対して、払う分だけ払わなければいけないというのは、不満があるだろうと思います。
（金子） むしろ独身の人の方がね。Cさん、いかがですか。今、働いておられますが、職場の男性の働き方も含めて、今のFさんのお話に対して。
（C） 言葉は悪いかもしれませんが、国は、どうして今、少子化という問題が起きて、子どもが減っているのかという根本をまるで考えていないのかなと。先ほど男性の方もいわれましたが、非常に短絡的な方法をとって、こうすればまた子どもが増えるだろうというような、安易というか、根本を何もわかっていないのかなという気が、正直なところしています。

（金子）その根本とは何でしょうか。
（C）わかりやすい面でいくと、やはりお金の面が一番大きいのではないかと思います。
（金子）お金というのは子育てのお金ですか。
（C）はい。やはり今、育児にものすごくお金がかかり、これだけ不況なのに、１人子どもを持てばこれだけかかるという…。
（金子）たぶん3,000万円ぐらいかかるのですね。
（C）はい。私の友人にも、もう子どもを持っている人もいますが、話を聞くと結構子どもをたくさんほしいと考えている人が多いのです。ところが、収入の面などを考えると、まだ旦那さんもみんな若いし、とてもこれ以上子どもを持つのは無理という状況が立ちはだかってしまう。男性の短時間勤務については、そうすれば男性が家にいるようになって子どもが増えるという、本当にお粗末というか、どうしてそちらの方に発想がいくのか、すごく不思議です。私なら、逆に税制を変えて、子どもを持った人は税制面で優遇するなどという、マイナス面を減らす形で持っていった方がいいという気がします。今、民間企業でも家族手当をなくすという動きが大きく出てきています。正直言って、家族手当をあてにされている方はたくさんいると思うのです。それをいきなり民間で「はい、やめました」という…。もともとこの家族手当は、民間がやるよりは、本当は国が保障すべき問題だと思います。子どもを持って、それだけお金がかかるのであれば、国である程度保障してあげる。だから、プラスで何か付加するよりは、マイナス面を少しでも減らしてあげるという考え方で、例えば税金を少しでも減らすとか、そういうわかりやすい形で国が保障してくれた方がいい。お子さんを育てている方が今の段階で助かるという意味では、おそらく旦那様が早く帰ってくるよりは助かるのではないかと。
（金子）それは、早く帰ってきても何の役にも立たないと。むしろ早く…。
（C）子育てを手伝ってくれと言っても、たぶん男性には難しいと思うのです。
（金子）パチンコ屋か何かに行くかもしれないという…。
（C）私も結構考え方が古いかもしれないのですが。
（金子）いえいえ。少し私の理解が違うのか、家族手当をやめようと言っているのは、国の方だと思います。
（C）そうなのですか。
（金子）違いますか？　男女共同参画会議などが、そういうことを言っているでしょう？
（佐藤：事務局）国というか、企業でもそういう…。
（C）企業の動きとして、私は捉えていたのですが。
（金子）国というか、政府の審議会で、そういうことを言っていると…。
（C）それではますますそうですね。もともと、むしろ国がやらなければいけないことを企業が代わりにやってくれていたので。
（金子）そうではなくて、その審議会あたりで、国がそういうことをやらない方がいいということを言っている人たちがいて…。
（佐藤）家族手当を支給しないというのは、今、年功序列型賃金というものがどんどん崩れてきて、成果給でやっていこうという場合に、今までの扶養手当や家族手当など、家族に着目した手当の部分はむしろ廃止して、実績本位というか、そういう方向に…。
（金子）家族ではなく個人に対する給与…。子どもがいてもなくても。
（佐藤）ええ。だんだんと企業はそのような方向に向いているのではないでしょうか。
（金子）そうですか。わかりました。では、むしろ逆だと。企業がやめるのであれば、むしろ国の方がそういうものをもっと支給する…。
（C）企業がやめるのは論理としてはわかるのです。企業は、あくまでも利潤を追求していくものですから、それは当然といえば当然と思います。ですから、そういう利益にならないところを保障することが本当は国の働きではないかと考えているのですが。
（金子）そうすると、ファンドの問題として、どこからお金を持ってくるかという問題が当然次に出てきますね。
（C）はい。
（金子）働き方で、同僚の男性社員の方、職員の方を見ていて、働く時間が長いなという感じですか、短いなという感じですか。
（C）そうですね。はっきり申しあげると、必要以上に長く働いている方もいれば、逆に少し足りないのではないかという方もいます。その少し働きが足りないと考える方は、たぶんもう小さいお子さんはおられないのではないかという方が多いのですが…。
（金子）もう少し年配の方。
（C）わりと子育てに大変な世代の方ほど、無理にサービス残業などで働かされています。
（金子）年齢的にね。むしろ逆がいいですね。
（C）そうですね。

（金子）若い人は少し早めに帰る。そして、中高年は残業してもいいよと。
（C）しかも、報酬にならないような残業が今すごく多いので…。報酬になれば、まだ奥様も喜ぶのでしょうが。
（B）私は昔、信販会社や銀行などで働いて、そのあと外資系の会社で働きました。ですから、たぶん感覚が違うのかもしれませんが、先ほど言われた男性の働き方については、スウェーデン以外にも、ノルウェー、フィンランド、そして今、ドイツも結構頑張っているのですが、完全にワークシェアリングという形でそういうことをやっています。先ほどの育児休暇１カ月はほとんど80%以上の人が取るという形で、あと申請次第では２年間延長が可能です。
私はそのやり方はとても賛成です。ただし、そのことが同棲でも認められるという国の決まりがあるので、結婚してという部分ではどうなのかなと思います。

先ほどの付加価値税に関しては、これは日本や東南アジア以外はすべて25%とか28%という形で取り入れられていると思います。ただ、この部分に関して言うと、老後の保障などがかなりしっかりしているし、年を取ってから、例えば芝を刈る、家の屋根を直す、庭をきれいにしてもらうなどということが、これは米国マサチューセッツ州の話ですが、日本円換算で１万円かからずに１年間庭を全部きれいにしてもらうことができます。そして、その１万円の収入は、国や州の収入になりますが、そこからシルバーの方たちへの報酬としても出ています。

あと、ヨーロッパやアメリカでは共働きが多いのですが、保育園などへの援助金が高額です。だから、子どもを１人預けても日本のような大金はかからないのです。それもすごくいいやり方だと思います。また、スペインなどではシエスタという時間があり、その時間内は家族団らんの時間になるとか、国柄ですが、サッカーなども夜遅くやるので、家族みんなで出掛けていき、家族サービスができるという機会を持っていると思います。

男性の短時間労働は、やはり実施していく必要があると思います。ワークシェアリングの必要性に関しては男性に限らず、子どもを持っている方も、持っていない方も、それなりの収入を得ていくという部分なども含めて、国として対策をとっていくべきと思います。

私は外資系で働いていて、残業代というものはありません。女性でも、男性でも、会社を盛り立てるだけのプランニングがあれば昇給しますし、その能力がなければもちろん昇給もしませんし、解雇もあります。私は残業をやる人たちは能力がないとはっきり思っています。ただ、必要以上の仕事を強いられている会社もあるので、それは絶対論ではないと思いますが。

働く部分でいうと、公務員の受験資格の枠を年齢で25、27、32歳などと区切っていますが、そのように若い世代しか受験できないようにしていることが、ある意味で国の活性化、いろいろなものの考え方の活性化を図っていないと思います。それ以上の年齢の人たちが動かしている部分が多く、若い人の意見が反映されているとは思えないので、一般の人間や一般企業で働いている人から見ると、意外に思うことが多いのではないかと思います。

家族手当に関しては、私も必要ないと思う部分もあるのです。例えば同じ会社で働いていて、両方に家族手当が出るということもあると思います。あと、男性は家族手当が出るけれども、女性でも母親や兄弟などを扶養している場合もあるのに、出ないということもあるのです。
そのように、奥さんと子どもがいるから支給するという形ではなく、例えば、奥さんがいても働けない状況であれば出すとか、子どもが何歳までであれば出すとか、あと、家族を扶養している人であれば出すとか、そういうものは申請制にすべきだと思います。

年功序列ももちろん反対です。信販会社で働いていたときに、いろいろな方の、例えば債務が多くなってという相談などをいろいろと受けていた際に、そういう今の方々は、やはり贅沢ではないかと思います。妻でいて、子どもがいて、働いていないのに、男性の収入が低いといって、それでブランド品を買うとか、そういうこと自体がおかしいと思うのです。買えるだけの支払能力のある男性と結婚した人は買ってもいいのです。しかし、消費者金融などを利用することになって、そのときにどうしようとなる人がすごく多いのです。

それに、今、主婦の出会い系サイトなどが多く、男性と不倫をして貢いでしまい、消費者金融会社からも借りて、信販会社のローンもあり、払えなくなり、家族崩壊につながる。やはりそのような部分も意識改革が必要ではないかと思います。10年前にいろいろ実習などをやっていて、母親が生活保護を受けているのに、ブランドものの服を２～３歳の子に着せて、「泥遊びをさせないで」と言うのがまず理解できませんでした。そういう部分でも、それぞれの意識の改革を工夫していかなければいけないと思います。本当に言いたいことがたくさんあるのです。
（金子）Ａさん、専業主婦としてはいかがですか。
（A）最初に男性が家庭に早く帰るということを聞いて、えっ、私が昼食まで平日も作るのかという…。やはり収入が変わらないのであれば、早く帰ってきてもらって、留守番ぐらいのことはやってもらえるかなぐらいしか期待していないのですが。
（金子）収入が減るのであれば、とにかく帰ってこなくてもいいと。
（A）そうです。これ以上減るとちょっとやっていけません。主人が家にいる間に、例えば私が働きに行くということならまた話は別ですが、それほどうまくはいかないですし。
（金子）そうすると、とにかく収入が減るのだったら、男性の働き方を、少なくとも国が言うように縮めるとか短くするということについては、あまり好意的ではないと。

（A）あと、先ほどCさんが子育てに3,000万円ぐらいお金がかかると言われましたが、それは大学まで出てということですね。
（金子）はい、卒業まで。
（A）ですから、結局私たちのような一般人はそんな私立大学まで娘を入れようとか…。
（金子）いや、国立でも同じなのですが。
（A）うちはお金をかけてそんな大学まで出てもらおうなどとは思っていないので、それほどかからないのですが、結局この高学歴社会というものが、子育てにお金がかかるものと。
（金子）男性も女性も、短大や大学に行く人がもう50%近いですから。
（A）私も短大までは出してもらいましたが、結局今、専業主婦で、稼ぎはゼロですし。
（金子）稼ぎはゼロですが、子育てをされているので、それはそれで評価されるでしょうが。
（A）高学歴とか、Bさんが言われたブランドものですが、私も少し耳が痛いのですが、やはりそういう意識というか、ブランド志向が、結局子育てにすごくお金がかかることになる。ブランド産院、お産までブランドなどといって、今、雑誌などに載っていますが、お金がそれほどかからなければ、私も今２人子どもがいますが、もう少し産んでもいいかなと思います。
（金子）そのお金がかかるというのは、ブランド志向もあるでしょうが、もう少し大きくなると、教育費だろうと思います。
（A）高学歴社会でなければ塾も必要ないし、山で遊んでばかりいた子でも可能性があって、いろいろ経験を積んで、例えば厚生労働省に入れるとか。でも、それはあり得ないですね。
（金子）半分は短大・大学に行くようになって、もう20年ぐらいですから、それをいきなり「いいよ」というようにはなかなか。それはそれでまた意識が変わりにくいだろうと思いますが。
（A）ですから、何か「どうにもならないじゃない」というのが、私自身の結論です。
（金子）どうにもならないというのは、少子化がどうにもならないと？
（A）そうです。というか、産んでいる人は産んでいるのです。上の子が４～５歳で４人連れている方などもいるのですが、そういうお母さんは、生きていればいいというと表現が悪いですが、もう食べて元気でいればいいという、そこまで割り切れるかどうかという…。
（金子）私が少子化問題に関心を持ったのは、厚生労働省の機関である社会保障人口問題研究所が数年前に、このままでいくと2050年から人口が半減しはじめて、西暦3000年には83人になるという予測を出したことです。私は社会学という、社会のあり方を考える学問をやっていますが、西暦3000年に83人というのは論外だろうと。人口がなくなることがわかったところにばく進している社会というのは健全ではないだろうということで、少子化問題を手掛けるようになって４～５年です。大きな問題の１つは子育ての負担です。子育ての負担は教育費、お金の負担が一番大きいのでしょうが、小さいときは赤ちゃんは２時間おきに起きるので、母親も父親も眠れず、肉体的、精神的な負担が結構重い。そういういくつかの負担があるため子どもを産まない人が多いという気がしますが、教育費の負担について考えたいと思います。Fさんのところは３人おられるので、まもなく教育費をどうしようかということが当然話題になると思いますが、どのようにお考えですか。
（F）上の子が小学校１年ぐらいのときに、私は私立中学に行かせたいと思って調べたら、年間100万円以上学費がかかり、うちのように３人いる家庭ではとても無理ということで諦めましたが、１人だったら行かせただろうと思います。今小学５年生ですが、去年ぐらいから塾に通わせるお子さんが多くなってきました。普通の習い事は年間10万円程度ですが、塾だと月約３万円かかるらしいのです。うちも習い事を２つずつくらいやっていて、３人で年間約60万円かかっていますが、塾になるともっとかかるし、塾に行かないといい学校に行けないし、今の公立中学は不安だし、という状況です。ですから、どうしたらいいのかということです。
（金子）その場合、どうしたらいいでしょうね。
（F）お金をかけて私立へ行かなくても、きちんとした、安心できる教育をしてくれる…。
（金子）公立中学校、高校でですね。
（F）はい。今、中高一貫などを始めていますが…。
（金子）今、ようやく。
（F）そういうところで成果が上がって、広がってくれればいいなと思います。そして、公立一本やりでも…。私の子どものころは塾に行っている子はそれほどいなくて、それでも賢い子はみんなそれなりの学校に入っていました。今のように塾、塾という感じではなかったです。学校できちんと教えてくれて、今のように週休２日にせずに、ちゃんと授業をやってくれれば。
（金子）週休２日ではなくて…。
（F）はい。土曜日もちゃんと授業をやってほしいです。お金をかけられる家はいいですが、かけられない家だと、落ちこぼれてもどうにもできないという雰囲気なので、親も必死です。先生に呼ばれて「勉強ができないので」と言われたりすると、家庭教師をつけたり塾に行かせたりということになりますが、それをなぜ学校でやってくれないのかという

ことはあります。３人いますから、やはり親としては３人均等に学校に行かせてやりたいと思いますが、例えば３人とも私立大学はとても無理だろうと思います。
（金子）同時だったら大変ですね。
（F）はい。私自身も３人兄弟ですが、２人大学に行っています。母親がパートで働いて、その収入で学費を出してもらったのです。父親１人分の収入では難しいだろうということで、資金的な問題も頭が痛いですし、国立も毎年のように学費を上げているので、国立を民営化、独立法人などにされると、もっと学費が上がって、能力のある子も勉強できなくなるのではないか、お金がなければだめという世の中になるのではないかというのが、将来的な不安です。
（金子）かなりそうなりつつあるので、それで、先ほどの国の「少子化対策プラスワン」に、すべての子どもに年間50万円の奨学金を出したいと書いてあるわけです。生徒、児童、学生が800万人いるので、１人が50万円ですから、４兆円必要ですが、日本の年金の積立金が200兆円あるということなので、そこから回そうという話です。
（佐藤）それは給付ではなく、無利子での貸与です。
（金子）無利子で返済してもらうわけですが、とにかく貸そうと。そうすると、国立大学の授業料もそれで払えるわけです。50万円がいいかどうかは別として、そういうことを国が考えている。教育費が非常に大変だということは、我々のような大学に勤めている人間にはよくわかります。Eさん、教育費についてはいかがですか。
（E）そうですね。教育費という点からすると、私は子どもがいるのですが、今は別に生活していて、養育費という形で送っています。自分が親にしてもらったことを考えると、塾にも行かせてもらったし、受験もしたし、大学も私立を卒業させてもらいました。親は相当負担をしたと思います。その結果、自分の人生がどうなったかを振り返って、それを子どもに期待したり押しつけるかというと、実は私はそうではないのです。確かに今の社会はブランド志向で、有名私立学校に行って、末は東大や海外の大学に行くのが流行りらしいのですが、能力のある者はどこに行っても能力があるわけで、だめな者はどこに行ってもだめなわけです。ですから、自分の子どもに対しては、希望すれば叶えてあげたいと思いますが、希望しなければ、そのまま公立の中学校や高校に行って、普通に過ごさせてやりたいと思っています。教育費という点では、私の考えからいくと、さほど負担ではないというか。先ほどお金もないのにブランド品を買ったらだめと言われましたが、お金もないのに私立学校にやるという親が多すぎる感じがします。ただ、それは学校が信じられないとか、いろいろ特殊な事情もあります。ですから、公立の中学校も校内暴力などいろいろな問題を解決するために、何か施策を打っていかなければいけない、それが前提になるだろうと思います。
（金子）Dさんのところはまだお子さんが小さいので、教育費はまだ先でしょうが、先ほどのインタビューでは、生まれたらすぐ学資保険に入るという意見もあったのですが、将来的に教育費についてはどのようにお考えですか。
（D）昨日郵便局の学資保険を妻が探してきて、早速入ったのです。今、１人目ですが、私は、両親が２人とも働くようになったとしても、収入に見合う大学しか行かせられないと思っています。うちの会社の人でも公立小学校、中学校、高校ときて国立大学に入った人もいます。先ほどEさんが言われたように、実力がある人は、どこでもそこそこ発揮できるのかなと思います。私立に行かせるかどうかということは、やはり稼ぎ次第、私の頑張り次第でもあるのかなと思っています。今はちょっと、やはりまだ先の話だという気が。
（金子）共稼ぎではないですね。
（D）以前は妻も働いていたのですが、今は専業主婦です。
（金子）そうすると、最初にお尋ねしたように、短時間勤務や隔日勤務でとにかく収入が減ると困ると。収入に見合った教育をさせるというような。
（D）私は結構ベンチャー企業の方を営業で回ったりしていますが、あの人たちはリスクを取っている一方、リターンも取っています。では自分がそれをするだけの実力があるかというと、無いので、やはり今の会社でスペシャリストを目指していこうという気持ちです。先ほど外資系のお話もありましたが、日本も年功序列が崩れてきて、私の会社も成果給に変わってきています。これからは仕事の成果次第で給料も変わると考えると、残業代も正直あてにしていないではないのですが、貰えるのなら貰うと。やはり成果給に変わってくる環境の中で自分も変わっていかなければいけないと思います。また、そういう成果に見合う給料で、私学に行かせられるのか、公立にしか行かせられないのかなどを考えていくのではと思っています。
（金子）成果給というのは、長時間勤務や短時間勤務ということにはあまり関係なく、成果が出ればどちらでもいいという、そういう理解でいいのでしょうか。長く働いた方が成果が出やすい仕事がありますか。
（D）おっしゃるとおりです。それはあります。
（金子）では、長く働いた方が…。
（D）転勤族なので思うのですが、長くこちらにいればお客さんの方もわかって、実績が上がりやすいと思います。ただ、そうは言ってもベースになる仕事の部分はどこへ行っても同じというか、基本は同じなので、どこでも実績を出せる人がやはり評価されていると思います。
（金子）同じ仕事であれば、頑張った方が成果も出しやすい感じがしますね。我々もそうです。
（D）たまたまその期で実績が上がっても、次の期はだめとか。長続きして、コンスタントに実績を出している人を間近で見ているので、やはりある程度実力があればやれるのだなと。

（金子） Ａさんは専業主婦ですが、教育費をどのようにお考えですか。
（A） 長女が６歳で、習い事として体操教室に週２回、英語教室に週１回。次女もこれはやっています。あと、ピアノも習っています。一生懸命情報を探して安いところにお願いしていて、今、１回300円で専業主婦にピアノを教えていただいています。そのように、商売でやっていなくても、隠れた実力を持っている専業主婦の方もたくさんいるのです。その方は頭もよくて、小学校に入ったら今度はお勉強も教えてもらおうと思っています。ですから、塾に行って一流を目指さないまでも、「中の下」を「中の中」ぐらいに上げてくれるような、基礎的なことを教えてくれる、そういう主婦の方を探してというような…。
（金子） しかし、それはかなりの偶然もあるでしょうし、それほど多くはないでしょう。
（A） そうですね。やはりその情報を。でも、英語を話せる主婦の方もわりといらっしゃって。私の娘が入る予定の小学校の隣の小学校が、北海道で一番レベルが高いらしく、そこの先生に「みんな塾に行っています」「そろそろ行かないと置いていかれますよ」というようなことを言われてしまったという話を聞きました。でも、その主婦の方も３人子どもがいて、とても塾にはやれない。かといって、自分が教えてやれるかというと、子育てで時間がないとおっしゃっていました。公立の小学校でそういうことを言う先生が現実にいるのです。そう言われると、みんなびっくりして、夏休み前に言われたら、夏休み後にはクラスの４分の３ぐらいはもう塾に入っていたとのことでした。隣の学区の話だし、こちらはのんびりした小学校でよかったと思いますが、そういう格差というか、その小学校の周りは転勤族で本州から来た方が多いため、習い事にしても何でもレベルが全然違います。皆さん週に大体４回で、週に１日空いている時間があればいいぐらいの子も幼稚園にいますし。
（金子） それはもうまともに支払ったら大変ですね。
（A） そうですね。ピアノも１回300円だからこそお願いできるという感じです。
（金子） たまたま住んでいる環境がそれに適していたということでしょうか。それでは次に、女性の働き方も含めて、子育て支援ということが言われていますが、Ｂさんは、女性の働き方を子育て支援にふさわしいように組み替えるとすれば、どんなことが考えられるでしょうか。
（B） まず、企業が保育園の施設をそれぞれ保有したらどうかと思います。
（金子） 保育園。
（B） はい。保育園のような形で。それはご主人の会社でも奥さんの会社でもかまわないのですが。もし奥さんが働いていなくて、ご主人の会社にそういう保育園の施設があるとしたら、例えば１日とか、何時間とか預けて１回いくらという形でもいいですし、１カ月預けたいのならそれでもいいと思います。お子さんがいる方が育児で難しいのが、熱を出した、怪我をしたときに、会社を抜けるのが大変だということがあると思います。もし、ご主人の会社であれば、奥さんがそこにいなくとも、「こういう状況で子どもがけがをしています」などの連絡はできるわけです。そういうことに対して、例えば公的な資金を企業と共同出資して、企業とタイアップして取組んでいくとか。また、お母さん方というのはやはり育児ノイローゼという部分が大きいと思います。少しカウンセリングの仕事もしていて、そういうこともよく聞きますし、何時間か子どもから離れて映画を見るだけでも、心のゆとりが変わってきます。そういうところに国がお金を使っていくということであれば、みんなも税金をたくさん払っていても納得するのではないかと思います。あと、これは北海道だからかもしれませんが、例えば会社を辞めて就職活動をするときに、30歳ぐらいまででなければなかなか採用してもらえないとか、男性と女性のどちらを採るかというと、大体の面接で言われるのが、「結婚なさいますか」「お子様を産みますか」で、やはり男性を採用してしまうことなど、どうにかならないかと思います。税金のかけ方も、食料品などにかけないようにすると、生活も少し楽になると思うのです。時計やカメラ、車などの贅沢品に税金を多くかけるようにして。収入の少ない人たちには助かることなので、そのように国ももう少し考えればいいのではないかと思います。
（金子） 消費税率を一律ではなく、例えば食料品はもうかけないとか。
（B） そうですね。２～３％にするとか。
（金子） 贅沢品のようなものはもっと増やすと。
（B） そうですね。食べていくとか、そういうことは生活の基本ですし、やはりおいしいものを食べさせてあげたいとか。今の子どもたちというのは、みんながこれがはやっているからと言うと買ってあげる余裕はなくても買ってあげなければいけないとか。
（金子） 最初におっしゃった、企業が保育所を持つということは、むしろこの不況の時代では逆で、負担があるから、保育所を持っているところは減らしているわけです。
（B） 現実はそうですね。
（金子） 福利厚生を極力削るという方向がむしろ全国的なのです。それは、例えば国が支えるとか、そういうことをしないといけないのでしょうが。
（B） 私は経理、総務もやっていたことがありますが、福利厚生に関しても、使わないホテルと個別に年間契約をしている場合などがあるのです。そういうことをやめて、例えば企業グループ全体で保養施設を使うようにして、残ったお金を奥さんが使えるような形にしたりとか。今、自分も女起業家になることを考えていて、例えばこういうアクセサリー

などを作るのでも、私は自分で作り、金細工や絵を描いたりもしますが、そういうものも奥さん方ができるスペースを作ろうかと考えています。そして販売すれば自分の収入が得られ、少し心が豊かになるはずです。そのようにちょっとした空きスペースを奥さん方の会合などに使わせるとか、働いている男性の方たちに女性のメンタルな部分を説明できるような時間を作るのもいいと思います。

（金子） Cさんは女性の働き方についていかがですか。お姉さんをご覧になっていて…。

（C） 私は独身ですが、子どもを持って育てて、仕事もしている方が日本にはたくさんおられますが、すごいなの一言です。子どもを育てるということは、単なる育児ではなく、日本のいわば未来を育てているわけですから、子どもを持っていない人にはできないことをしていただいているわけです。将来私がこのまま結婚せずに、年を取って年金のお世話になるとき、それを支えているのは誰かというと、今の子ども世代が働いて年金を支払ってくれるわけです。そういう日本の未来を育てているという意味で、基本的に、子どもを育てる人たちにはたくさん優遇措置を付けるべきだと思います。私は以前からずっと思っていたことですが、生まれたばかりの赤ちゃんを育てることと、寝たきりのお年寄りの介護は、正反対のようで実は共通点がたくさんあると思うのです。ものすごく手がかかる、意思の疎通ができない、痛くてもどこが痛いのかもわからないような。要するにコミュニケーションを図ることが非常に難しかったり、下の世話など。介護と、生まれたばかりの赤ちゃんを育てることは、かかるストレスの質が非常に似ている気がします。先ほど言われたように、保育施設や、介護にはデイケアセンターなどがありますから、ちょっと預けて息抜きの時間をもらうというような、そういうソフト面での細かいケアのようなものも、実はすごく大事なのではないかと考えています。

（金子） Gさん、今、Cさんが、子どもを育てることは日本の未来を育てることになるので優遇した方がいいと言われましたが、同じ独身としていかがですか。優遇するということは、例えば税金面などでいろいろな配慮をするということでしょうか。

（G） 最近、私の先輩に２人目の子どもが生まれたのですが、やはり出産時にすごくお金がかかるという話です。何十万円とかかり、健康保険が適用されない部分があるということです。生まれたあとに入院するのは保険の対象になるが、出産自体は全く保険の対象ではないと。

（金子） 病気と見なされないようですね。

（G） そういうところもやはり優遇すべきです。

（金子） 一応健康保険であとでほとんど戻ってきます。

（G） そうなのですか。

（金子） 30万円ぐらいかかるのですが、あとで請求すると戻ってくる。そういう面でも、配慮するのは当然であるということでしょうか。

（G） そう思います。

（金子） Fさん、子ども３人を育てておられて、自分で面倒を見きれず、ご主人も仕事で手伝えないときに、今国が言っているのは、地域の中で子育て支援を具体的に考えたらどうかと。例えば、40～50代の子育てが終わったお母さんたちに応援してもらうとか、そういう仕組みを作ったらということも今回の新しい提言にあるのですが、そういうことはいかがでしょうか。

（F） そうですね。近所の方でファミリーサポートに登録している方がおられます。

（金子） それはサポートする側ですね。

（F） サポートする側です。その方はもともと保育園にも勤めた経験があり、幼稚園教諭の免許も持っておられる方で、お願いしたこともあるのです。ただ、いつも預けているわけではなく、優先順位としては一番最後で、本当に困ったときにお願いするという感じです。まず何かあったら私か夫が休み、それが無理なら夫の実家に頼み、それも無理ならベビーシッターを頼み、それも急なことで無理だったら、そのファミリーサポートを頼むという順番です。

（金子） 優先順位はわりと低いわけですね。

（F） そうですね。最後の手段という感じでしょうか。

（金子） まず家族でやって、それから実家ですか。

（F） そうですね。あとはお金を払えばいいようなところですね。

（金子） ベビーシッターですね。

（F） 近所の方なので、家庭の内情がわかってしまうということもあるので、あまり近くだと少し預けにくいという心理的な抵抗感もありますし。

（金子） 近い方が預けにくいですか。

（F） そうですね。もうひとつ、私は有償ボランティアの団体にも登録していますが、そちらは基本的には地域の人ではない人を派遣すると言っていたので、あまり近くて家の内情がわかってしまうような関係だとまずいということはあるようです。

（金子） ヘルパーさんも大体そういう原則でやっていますので、それはそうですね。

（安梅：サブ司会） 私は全国の保育サービスのことなどを調べたり、地域の子育て支援ということでやっています。専業主婦の方でもかなりの悩みを抱えながら、お家で悶々とやっておられる方がいますので、子育てが親にとっても楽しい

ように、女性にとって子育てがキャリアの妨げにならないようにするにはどうしたらいいのかということを、いろいろな人から意見をいただきながら地域づくりをやっていこうとしています。確かに必ず問題になってくるのは、お金の面と、どこがそれを負担するのかということと、今の現実の社会の意識です。保育サービスがこれだけ立ち遅れたのは、「母親は家庭に帰れ」、「３歳児神話」のようなものがあり、子どもを産んだのは夫婦の責任ということで、公的機関が必ずしも十分に前面に出て推進してこなかった。

でも、子どもの数がどんどん少なくなって、さあどうしようという感じになっているのです。是非皆さんから、どうしたら子どもも親もハッピーになるのかについてご意見をお願いします。

（佐藤）先ほど年金の話が出ましたが、少子化がどんどん進行していって、５年毎に国が財政再計算を行って、毎回保険料が上がっていく。そして給付額の方は政治的な問題もあって、あまり下げずにやっていく場合に、先ほど、介護と乳幼児の育児が非常に共通している面があるというお話がありました。介護の方は不十分ながらも介護保険ができ、40歳以上の方は、自分の親がもう亡くなっていても保険料を払わなければいけないのです。その応用編で、子育て保険、子育て基金というか、例えば25歳とか30歳以上の方で、独身のお子さんがいない方も、将来の年金財政のために拠出するというような制度の創設には、抵抗感がありますか。

（C）いえ、それはよい考えだと思います。皆さんもそうでしょうが、そういう使途のはっきりしている税金を払うことにはやぶさかではないと思います。将来自分たちが世話になる若い人たちを育てていくことは国の一つの事業ですから、そういう意味では、みんなで等分に負担して、自分たちも年老いてその社会のお世話になることを考えれば、無駄なお金ではなくて、逆にすごく正当な投資だと思います。今、ああそういう考え方もという感じで目からウロコだったのですが、確かに介護保険と同じ考え方で、新しくつくっていくのも一つの案だと思います。

（佐藤）例えば、私は今、毎月 2,300 円ぐらい介護保険を払っていますが、イメージとして、とりあえずそのぐらいだったら、独身でも、自分に子どもがいても、とにかく30歳になれば毎月払う、その使用目的は子育ての支援だけであるということであれば、特に抵抗感はないですか。

（C）ないです。

（金子）今のような考え方と、もう１つ、子どもを産むか産まないかは自分の家庭の責任で決めたことだから、当然自らの家庭の負担でやるべきだという反対の意見が出そうに思いますが、皆さん方はどういう感じを抱いていますか。

（B）私はその意見です。子どもも老人も確かに一緒で、今は子どもだけにターゲットを絞っていますが、税金の資金源が足りなくなるという点では、今、若者たちで働けない人が多いのです。フリーターでしか働けないという形で。企業に勤めていれば、給料から天引きで国に税金を納めますが、国に納めていない人たちはすごく多いと思います。もう少し若い、働けるようになった人たちにも援助策というか、ワークシェアリングなどで、みんながもっと税金を納められる状態にして財源を増やしていくということも考えていかなければいけない思います。

法律で、企業に５人以上いれば社会保険に入れる形ですが、企業が社会保険にすると、40～50％会社側が負担しなければいけないため、みんな国民保険に替えていっているということがあり、それもまた個人への負担になってきています。私は今仕事をしていませんが、税金などもすごく高いのです。５年前に会社を辞めましたが、そのときの収入が高かったので、その次の年に払ったのが最高額でした。健康保険料として、任意継続にしたら月３万2,000円ぐらい払っていますが、会社を辞めてから払っていくのも大変なことです。子どものことも援助する、お年寄りも援助する、また税金を払う人たちの範囲を広げるとか、ある人にばかり収入が集中することはなくしていくことも国は考えなければいけないと思います。だから、子どもたちだけの保険という形で、私たちのようにただ税金だけ払ってもおもしろくないです。あと、公務員などの方、厚生年金制度などでいうと、奥さんが働いていなくても、旦那さんの収入が1,000～3,000万円あれば、払ったことと見なされて年金が支給されます。独身の私などは、病気になったり何かあったら、自分も親も総崩れで生きていけなくなるではないですか。そういう不安などもあるので、その辺のバランスというものも考えてほしいと思います。

（G）子どもを育てる方には支援をした方がいいと言ったのですが、確かに、自分の家族の判断で、「子どもはいらないから２人で楽しくやろう」という家族がいたとしたら、なぜ他人の子どもを育てるのに金を負担しなければいけないのかということにもなるかなと。やはり、取れるところから取ろうということではなく、子育てにお金は必要ですが、それをどうやってうまく回していくのかということを考えた方がいいと思います。

（金子）今、Ｂさんが言われたことで、若い人がフリーターで、働くところがなくて困っているから、企業活動をもっとしっかりしてというお話でしたね。少子化にはだれもが気づいているけれども、子どもが減るわけですから、子ども向けのマーケットが萎んできて、子ども向けの商品やサービスを作っているところの業績はもうほとんど伸びないわけです。ですから、ミルクもだめだし、病院では産婦人科と小児科はもうだめだし、学習教材もほとんどだめだし、小中高校の経営も非常に厳しくなり、大学も私立大学が危なくなり、だめになるところも出てくるわけです。そういう意味からすると、少子化によって企業活動や経済活動がプラスになるところは非常に少ないだろうという気がするわけです。

（B）ただ、そういうフリーターなどであるがために結婚できないカップルというのも結構いると思います。私も30代半ばですが、私たちの年代は２～３人兄弟は多いと思うのです。

そして、どちらかが親の土地に残らなければいけないと。それが私なのですが、それで結婚することを断念したという

過去の経験もあったのです。子どももちろん大事ですし、私は子どもがほしいのですが、結婚する相手がいないので今は産めない状態です。今、結婚している人たちだけではなく、もう少し子どもを産める環境を作っていく、家庭を持てる環境を作っていくということも必要ではないかと思います。
（金子）その産める環境というのは、経済的にある程度しっかりした環境ですか。
（B）そうですね。その人たちが結婚できると思うような環境とか…。
（金子）そうすると、今まで子ども向けのビジネスをやっていたところはもうよくならないので、そういうところに就職しようと思っても非常に厳しくなり、失業率は減らないわけです。少子化によって失業率が上がる部分があるわけです。そこをどうしようかということも併せて考えていかないと、ただ単に産める環境というものはつくりにくいという気がしますが。
（B）そういう部分で、ワークシェアリングなどを導入していけばいいと思うのです。
（金子）ワークシェアリングすると、たぶん最初の男性の働き方を見直すところで、隔日勤務や短時間勤務という話に当然なってくる。そうすると１人分の収入が減るから、それは成り立たないかなと、そういう意見が出てくるわけです。
（B）そこは収入を減らすということではなく、やはり少し税金などでカバーしていく…。
（金子）その税金はみんなで払えばいいわけですか。
（B）そうですね。
（金子）つまり、その場合は負担が重くなるということは当然であるということになりますか。
（B）負担は今よりは大きくなると思います。
（金子）先ほど、Cさんのような話、そういう子育て基金に賛成だということに対して反対だとおっしゃったのですが…。
（B）ええ。その子どもを育てるというところにだけ税金を投入していくのではなく、今、税金を納められる年齢になっている人たちの中で、フリーターなどであれば納めていなくて、申請などもしていないという人が多いですね。そういう人たちも少しずつでも納めていけるような環境を作っていくことによって、少子化による税収減は小さくなるのではないですか。今、真ん中の年齢層にももう少し力を入れて、みんなが税金をうまく払って、少しずつ負担していって、小さい子どもたちにも回すというようにしていくのであればわかりますが、今小さい子どもを持っている方だけにというのは違うのではないかと思います。
（金子）Aさんはいかがですか。２人育てられていて、そういう子育て基金のような話が出てきたら。
（A）だんだんと子育てイコールお金が必要というような感じになっているますが、お金があっても、正直…。昔、地域振興券というものがあり、うちも４万円ほどいただいたのですが、みんなで旅行に行って終わりになって、例えば日々の育児のストレスが解消されたかというと、少しは解消されたかなという。お金も必要なのですが…。
（金子）つまり、負担というのはお金以外のものもたくさんあると。
（A）そうです。
（金子）肉体的、精神的に。
（A）そうです。今、周りも専業主婦で、子どもがいるが１人という方も結構多く、不妊治療でやっと授かったと。でも不妊治療はとても痛かったし、正直、１人で十分とか…。
　私自身、お産がもう大変で、２人産んだのだからもういいでしょうという、義務を果たしたような…。今日も実家に子どもを２人置いてきましたが、どこかへ転勤で、実家から離れていれば欠席していたのです。ですから、先ほどのお話ですが、地域でシニア世代の方が子どもを見てくれるというのは、すごくいいと思います。今、南区でも結構そのようなことがあります。
（金子）少しずつね。
（A）はい。子どもを託児して、その間に母親が講座を受けるようなものにも参加したことがあります。転勤がなく親の周りにいられればいいのでしょうが、今の地域はやはり転勤族が多く、急にお通夜などとなっても、小さい子を連れては行くのはなかなか大変です。しかたなく連れてくる方もいますが、その預け先に非常に苦労します。ですから、地域で見てくれるとか。先ほど言ったのですが、例えば小学生をいっぱい集めて地域の場などで勉強をちょっと教えてくれるとか、そういうことをしてもらった方がうれしいです。税制面の優遇ではわからないですね。お給料明細で少し税金が戻ってきても、きっちり家計簿もつけていないので、何かがプラスになったということもわからないですし。
（金子）それだと、経済面だけの支援ではないということですね。
（A）そうです。私自身が育児ノイローゼになったり、幼児虐待などしなかったのは、近所にお友達ができたこともありますが、実家が近いということが…。精神的ストレスが溜まったときには車に子どもを乗せて実家に直行できたから、２人育ててのんびりとやっていけているのです。しかし、そういうことができないお母さんもたくさんいて、話しているうちに泣いてしまったり、結構そういうことがあります。主人が忙しいときもありますが、男性はやはり仕事が好きなのは仕方がないのかなと。主人はわりと出世よりは自分の好きなことと家庭ということで、定時にぴったり帰ってくるので。
（金子）職種にもよるでしょうしね。

(A) そうです。民間企業の営業サラリーマンなので、最初は不思議だったのです。私は銀行に勤めていたので、残業なんてあたりまえで、男性は有給休暇中も私服で出てきて仕事をしているということがあたりまえでした。だから、すごく不思議だったのですが、今は、それはもう仕方がないと。男性の働き方は変らないのではないかと思います。
(金子) Ｄさんはいかがですか。働き方の問題と、経済的な負担だけを社会全体でカバーする以外に、肉体的、精神的、時間的な負担を特に若いお母さんが抱えているので、みんなで何とかしようという、今言われたような話を聞いて。
(D) そうだなと思いながら聞いていたのです。佐藤さんに質問したいと思ったのは、少子・高齢化という現実を踏まえて、子どもを増やすような方策をとるということ自体ではなく、例えば東南アジアの人たちを呼べるような…。そうした外国人にも市民権を与えて、税金をしっかり取っていくというやり方というのは、考えられないのでしょうか。
(佐藤) そういう選択の道もあるのでしょうが、今の人たちの多くが、単なる出稼ぎのような形で来ている人が多いので、例えば健康保険制度などにも入らないわけです。そういうことをやるぞといって呼ぶ、その代わり、小学校も中学校もきちんとする、住むところもちゃんとやるというようにすると、別の意味では、初期投資として当然負担は増えるわけです。そういうことを我々が選択するかどうかだと思いますが。とりあえずはそういう別の補助線を引かずに、とにかくこのままだったら西暦3000年に83人になると。これはやはり大変だろうと。それで、何かできることはあるのかというようなところを見ていきたいわけです。
(金子) 今の世の中は閉塞状態なのです。何か言うとお金の話にぶつかって無理、企業に行こうといってもリストラです。私どもが問題意識を持ったのは、50代や60代ぐらいの方々を何か子育て支援に活用させてもらうというか、そういう仕組みが何かできないものかと。先ほどのお話で、仮にサポートをすると、近い方はプライバシーの関係で嫌だという。
(F) そうです。他のつながりもあるので。
(金子) あまり家に入ってきてほしくないということはあるでしょうし、やはりそうですか。
(A) いいえ、私は子どもが小さいので…。遠くにいるところへ例えば預けにいくということですよね。
(F) そうではなく、自宅の方が多いようです。
(A) 私はそこの家に連れていって見てもらっていたのです。小さい子を遠くまで連れていくのはとても大変ですから、私自身なら同じ区内や近くが、まだ今のところ気にならないので、逆に近い方がいいなと思っている部分があります。近い方が迎えにいきやすいし。
(金子) ですから、それは保険のようなもので、近いところでもちゃんとサポートできるような50～60代の方々を組織しておいたら、使える人は…。
(F) 本当は昔のように隣近所があればよかったのです。
(金子) それはもう団地だと特にないし、マンション地区だったらもっとないですから。住むところが高層化した分だけ、隣近所の付き合いというものがずっと減ってきているわけです。
(佐藤) その場合に、イメージがわかないのです。この座談会は今日２回目なのですが、１回目のときに、結構保育所の問題がありました。やはり病児保育というか、病気になったときに一番困るということでしたが、そういう50～60代の方に期待するサービスというのは、例えば保育所への送迎をお願いするとか、それともまたどこかを組織化して、そこで日中の育児をお願いするというのか、何かイメージがわからないのです。どの辺にニーズがあるのかなと。
(F) 二重保育を頼んでいる方は結構おられます。べつに保母資格などはなくて、60歳前後の方かと思いますが、お迎えに行って午後９時ぐらいまで自分の家で預かるということを。
(佐藤) 二重保育ですか。保育園が終った後の何時間かを私が引き受けます、というような。
(F) そうです。
(C) それと、今の保育所のように、母親や父親が預けにきて、お迎えにいくというパターンもあるでしょうし、もう１つの選択肢として、向こうから来てもらうという形もいいと思います。介護のヘルパーさんのように、自宅に来てもらって、親が帰ってくるまでいてもらう。そういう選択肢をいくつも作っておいて、親にそのとき一番いいものを選んでもらうという形をとるような柔軟性も必要と思います。これと決めてしまわずに、それぞれ違ったニーズがあるでしょうから、その人に一番最適なものは何かということで。今たくさん50～60代の方がいて、まだまだ元気なのに退職する。今、早期退職などもありますから。能力はあるのに仕事がないという方たちには、そういう子育て支援などの道がまだあるということで。これからの日本の経済のことを考えても、みんなにプラスになる面が必ずあるのではないかと。そういう意味では、国がそういう社会基盤をもっとがっちり固めてほしいというのが正直なところです。
(金子) それは、経済的な裏づけとしては、雇ったら、例えばヘルパーさんのように家に来てもらって、その代金は親が払うという、そういうイメージですね。
(C) そうですね。今、私の家には介護の問題がないため、正直言ってそのお金の動きがどのようになっているのか知りませんが、親が全部負担するとなると、また逆の意味で負担になるので。だから、そこで何カ国でできる優遇的な措置があるのではないかと。
(金子) 介護保険などを使えば、ヘルパーが２時間で700円強ぐらいですが、実際は7,000円、10倍払うわけです。残り９割は保険で支払い、本人負担は１割ですから。仮にそのようなことが可能であれば、それほど本人の負担はないだ

ろうという気はします。
（C）そうですね。先ほど私の話の一部分だけが取り上げられて一人歩きしてしまいましたが、私もただお金を払えばいいとは全然考えていません。皆さんが言われたように、もっと子育て中の母親が楽ができるような形で支援していくとか、シルバー世代が子育てを支援する面で、お金以外の面で助けることはできると思います。ですから、足りないところにうまく人を回して、お金も足りないところに上手に回していくということができれば理想だと思います。
（金子）最後に、とっておきの対策のような話を、それぞれ一言ずつお願いしたいのですが。
（F）うちの場合で言うと、夫は「４人目はどう？」などと言いますが、私はもう「冗談じゃない、３人でいい」と言うのです。なぜかというと、それは肉体的負担です。
（金子）産んで最初の２～３年が大変だということですか。
（F）いいえ、赤ちゃんのうちの方が楽でした。小学生になると、小学生の親というのはほとんど専業主婦なので、昼間子どものために活動せざるを得ません。小さい子を連れて学校に行ってレクリエーションをやったり、結局母親が全部背負わなければいけないという負担もありますし。経済的なことは贅沢をしなければ何とかなりますが、子ども２人ぐらいが限界かなと思います。今子ども１人か２人の方も、「本当はもう１人ほしいけれども産めないわ」と言っている方は多いので、せめて経済的な見返りやサポートがあれば違うのではないかと思います。
（金子）その経済的というのは、教育費も含めてということでしょうか。
（F）そうです。子どもをほしいだけ産んだら、他のことはあきらめなければいけないので。
そういう状況では、どちらかというと、「では子どもは１人でいいや」となると思いますので。
（金子）その負担は、とりあえず国というか、何か目に見える形で、給料に反映するなり…。
（F）ニュースなどの情報の問題もあるかもしれませんが、子ども１人に数千万円かかるということが強く出てしまうと…。実際はそれほどかからずに済むのではないかと思うのですが。
（金子）大学の場合は、年間250万円ぐらいかかりますから、４年で1,000万円かかりますね。
（F）もし試験に合格しさえすれば、ほとんどただのようなお金で教育してもらえるのであれば、教育費が一番かかりますので、子どもをもう１人となるかもしれません。
（金子）外国によっては大学まで無料のところがあり、そういう国では日本の2.5倍ぐらいの負担をしているわけです。みんなで負担しているから大学まで無料で行けるという国が現実にあるのですが、日本の場合は消費税だけをとっても、たぶん25％への引上げは不可能という気がします。そこがみんな合意できれば話は簡単で、教育費はいらないということになるのでしょうが、日本の場合はあの５％へ引き上げるときの大騒動を考えたらわかるのですが。だから、そのようなことも難しいと思うので、ないところで知恵を出すしかないという感じですが。
（F）ただ、東大生の親は年収が1,000万円ということがありますので、お金がないと、たとえ優秀な子でも中卒や高卒で世の中に出ざるをえないというのは日本として損失だと思います。
（金子）私が大学に入ったころまでは慶応大学の親が一番お金持ちでしたが、この20年ぐらいは東大の親が一番お金持ちになって、ずっと変わらないですね。ですから、国立大学でもお金がかかるというか、入るのにお金がかかるのです。そういう時代なので、それはそれで大変です。Eさん、いかがですか。少子化対策はこれだという提案は何かないでしょうか。
（E）難しいと思います。価値観が非常に多様化している世の中ですから、子どもをつくらないこともその夫婦の選択で、それ以前に結婚しないことも選択で、結婚して子どもを何人産むかも本人の自由選択だと思います。ということは、子どもを産んでもプラスの面がありますよというインセンティブを与えないと難しいだろうなと。夫婦２人で楽しく経済的にも豊かになっていっても、例えば私は今独身ですが、最終的に自分の老後がどうなるのかという点は非常に不安があるわけです。夫婦で子どもをつくらない場合は、そういうリスクを持っている。今は子どもがいれば、ある程度老後の面倒を見てもらえるという時代ではないかもしれませんが、そういう期待感は一応持てます。そういうところを国として広報していき、国民の意識を変えていく必要があるだろうと。インセンティブの面では、やはり一番重要なのは経済的な面だと思うので、結婚しない人間も、結婚して子どもを持たない人間も、ある程度公平に負担をして、子どもを産んで育てることができる環境を作っていく方向しかないのかなと思います。
（金子）それは、先ほどお話しになった子育て基金とか。
（E）そうですね。とりあえず50万円のお金を貸してもらえるということで、それをあてにして、子どもを何人か育ててみようかなと思う夫婦も、思わない夫婦もいる、それはその夫婦の選択だと思います。しかし、基本的には子どもを持って育てていくことは人間の人生の喜びだと私は思うので、何かのきっかけにはなると思います。
（金子）インセンティブというのは、そのような意味で考えればいいですか。
（E）そうですね。あるいは、少しでも負担が減ることがあればということですが。
（金子）Dさん、いかがですか。
（D）いただいた資料の中の「子どもがほしい理由」というデータを見ていたのですが、１番「人間として自然」、２番「子どもがかわいい」などいろいろ書かれている中で、自分はどれかなと思っても、やはり子どもはかわいいという…。私が結婚した理由も、子どもがほしいということもなくはなくて、妻の友達などが子どもを産んで、赤ちゃんをあやし

にいったりしている中で、ほしいと思ったりしたのです。Eさんが言われたように、非常に価値観が多様化しているので、やはり子どもを産みたいと。逆に独身で幸せでないかというと、そうではなく、同じ会社の独身の人にはお金も十分あって、趣味に打ち込んでいる人もいます。幸せという価値観が多様化する中で少子化が進んでいるということで、子どもを欲しいと思わせるインセンティブというと、やはり経済的な部分が薄くなってくると。そうすると何がいいのか。教育費の負担軽減も確かにありますが、それだけでもどうかなと。私の意見は、極論としては少子化は少子化として現実として受け止めて、価値観の多様化も認めてもらう。では他に保険料を払ってもらう人はいないのかというと、海外の人、東南アジアなどで安い人件費で今働いている人を日本に呼ぶような方策なども、全く悪い考えではないのではないかと思います。

（金子）それは、例えると混血というか血が混じるという…。言葉がたくさんあるから、小学校でいろいろな言語を教える人を増やさなければいけないとか、いろいろあるわけですね。そういう負担は当然先行的に日本人側がみんなで払わなければいけないということになっても、やはりそういう外国の人を一定基準で…。

（D）でも、日本人とか外国人ということではなく、同じように保険も税金も払ってもらえるような世の中にしていかないと。していきたい、していくのがいいのではないかと思ったり。

（金子）外国人が例えば何十万人か来るとすると、仕事はあるのでしょうか。今でも企業はぎりぎりまで人減らしをしようとしていて、そういう中で、外国人にただ来てもらうだけでは困るので、働くところがちゃんとあるのかなという、別な意味での疑問があるわけです。

（D）やはり新しいマーケットを作っていく環境、その人たちを支援するような方策をまずベースとして考える中で、今、団塊の世代、50～60代の方は非常に多く、まだまだ働けるのに退職してしまうと。この人たちにターゲットを絞ったレジャービジネスとか、何かそういったものが今後出てくるのではないかと思うのです。そういった部分で、ベンチャーを起こすにあたって、やはりリスクを取っていかないといけないと思います。そこを何か支援できるような、最初の企業ができる環境の中で投資をするときに、国がそういう投資や融資をしてあげるとか。そういった新興市場やいろいろなものができてきていますので、もっとそういったことをアピールして、力を入れていくということも考えられます。

（金子）Cさん、いかがですか。

（C）私もすごく難しいと思います。原因として何か一つ特定できるものはなく、今まで日本が積み重ねてきたいろいろな要素が複雑に絡まって、今の少子化が出来上がったと思います。また、今の社会全体の閉塞感というものも、この少子化と全然無関係ではないと思います。

若い世代がどんどん減っていくことも、国の活性がどんどん落ちていくこととつながっていると思うのです。今子どもを育てている方たちというのは、バブル期のころに価値観を作った方が多く、ブランドの話なども出ましたが、こういう方たちが価値観を今すぐ変えようといっても無理だと思います。先ほどFさんも言われましたが、子どもを持つことのマイナス面ばかりが強調されるきらいがありますが、私の姉などを見ると、結構幸せそうなのです。だから、お金で買えない、お金に換えられない、子どもを持つことの幸せというものもあると思います。具体的には、子どもか仕事かという選択をしなければならない社会を変えるとか、税制を変えていくとか、単に給付するのではなく、何かお母さんの子育てを助ける仕組みをつくるとか、国のやることはいくらでもあると思います。しかし、今日・明日変えるのは難しいと思うので、国民全体が一緒に考えて、少しずついい方向に向かうようにしていくしかないと思います。

（金子）私は何年か前から、Cさんが先ほど言われた子育て基金のようなことを提言しているわけです。まず第１ステップとして、2,000円ぐらいならいいかなという話をしていますが、やはり４年ぐらい前に言っていたときの反応と最近ではずいぶん変わりました。最近は、Cさんのように、私が言わなくても独身の方がそういうことを言われることが結構あるのです。４年前は、「とんでもない、お前たちの企画は何だ」とみんなから叩かれて…。

（C）今でも皆さん、本音はそうだとは思うのですが、自分の老後を考えたときに、やはり誰のお世話になるのかというと、そのとき社会を支えているのは若い方たちですから。

（金子）ですから、この４年でずいぶん変わったものだなというのが、一番の印象です。

（C）最後にこれだけは言っておきたいのですが、お金をどこから持ってくるのかという話が必ず出てきます。私は庶民ですから、正直、国が何か変な法人などにあんな無駄なお金をたくさん使っているのに、そのお金をどうして回せないのだというのが本音です。これは皆さんもきっと同じように思っておられると思います。

（金子）構造改革でそういうことをやめようということに最初は取りかかったわけですが…。

（B）私の方は、小学校から高校までやはり一貫教育していけるようになると、もう少しそういう塾などの負担も減るのではないかということと、あと、企業の保育施設に関して、単に何々株式会社ということではなく、例えばデパートなども参加して、買い物客に保育園を使ってもらうようにするという部分で、少しお金を投入できる企業が出てきたらいいなと思います。税金も、やはり食料品などの税金は少し減らしていく。独身でも、贅沢品を買ったときの税金をたくさん払って、それがそのまま支援に回るのはいいのですが。とにかく働くところを作って、みんながもっとよりよく税金を払って、支援・保障に回せばいいと思います。

（金子）とにかく経済的な面での活性化をやらないと、どうにもならないという感じですね。

（B）助けてあげられるようになればいいなと思います。

（A） 産みなさいと言われて産めるものではないし、出産というのは大変だし、年に 12 回しかチャンスがないし、少子化を打破するために何カ国ができることと言われても。私たちの世代はバブルの時代に楽しんでいたので、まず自分が楽しいことが優先なのです。ですから、育児は汚いし、辛いし、誰も褒めてくれないしという、本音はそうです。家事に育児に用事に追い回されて。汚いことは嫌とか、辛いのは勘弁してという、その意識はやはり変わらないというか。例えば泥んこ遊びなどをしている子は今あまりいないのです。ですから、これから少しずつ教育などで、そういうところから変えていかないと…。長くかかりますが。

（金子） 例えば図書館の本は嫌だという子がいっぱいいるのです。他人が触った本は汚いから嫌だと。それと同じだと思います。古着屋には行くけれども図書館の本は嫌だと、何か変なことを言うのですが、とにかくそういうことを言う学生がいますから、それはよくわかります。

（A） あと、シニア世代を子育てに導入することにはとても賛成でが、報酬は必要かなと。私の父は今 65 歳で母は 55 歳です。父は少年野球の監督で、毎日飛び回ってお金もいっぱいその子たちに使っていますし、母もガーデニングにお金をどんどん使っています。年金しか収入はないのですが、私たちよりも年収が多いのです。もともとの収入が高かったこともあると思うのですが。だから、お金よりも何か生きがいを与えるという感じにして、逆に今小さい子が大きくなったときに介護するとか。年金の財源や老後の世話のために、今から小さい子を…。

（金子） それも貴重な提言ですね。Gさん、皆さん方の意見を聞かれていかがですか。

（G） 正直言って、特効薬の提案はできないと思いますが、人間として生きてきた中で、やはり、親から与えられるものというよりも、親との思い出とか、コマーシャルで「物より思い出」というのをやっていましたね。やはり育てるとか、子ども時代から親との思い出やそういうことにスポットを当てていく、そういうやり方で持っていくのがいいのかなと。

（金子） それでは時間になりましたので、グループインタビューはこれで終らせていただきます。長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」
札幌グループ面談（第3回）
日 時 ： 2002年9月29日(日)10:00～12:00
場 所 ： ホテルアルファ・サッポロ

（安梅:司会） 浜松医科大学の安梅です。子どもの心身の健康や、子育て支援のことが専門です。最初に自己紹介を兼ねて順番にお話いただけたらと思います。少子化といっても、少子化自体がいいことなのか悪いことなのかというご意見もあると思います。それはさておいて、このままいくと1000年後には日本民族がなくなってしまうのではないかということが統計的にも明らかになっています。もし、産みたいのに産めないような状況があるのならば、それを何とかすることに意味があるということで、皆さん納得していただけると思います。ですから、今、お子さんをお持ちの方は、もう一人産むのならこんなふうなことがあればいいなというお話を。また、お子さんがいない方は、こんな条件が整っていたら産めるのにと。自らの体験や、お友達から聞いたことでもかまいませんので、お話しいただけたらと思います。
（A:39・女・既・共・2） 私は子どもが２人います。もう１人子どもをということに関しては、現在、私は仕事を持っていて、それか軌道に乗ってきています。もう少し若ければ体力もあるのですが…。産むのは簡単とは言いませんが、産むよりも育てることを考えると、仕事をしながら子どもを育てていくことにとても不安を感じます。現在は私の家庭では２人で十分ではないかと思います。ほしいですかと聞かれれば、３人でも４人でもほしくないわけではないです。
（B:34・女・既・専・0） 結婚して４年になります。子どもがほしいのですが、できないという状況です。周りはすごく子どもがほしいと思っていると思いますが、なかなかできないので、少しプレッシャーを感じています。友達の子どもを見ているとすごくかわいいし、子どもが好きなのでほしいと思います。できれば１人よりも２人ほしいと思いますが、体力的な問題や年齢的なことを考えると、子どもができても何人産めるのだろうという不安はあります。
（C:39・女・既・専・1） 私は小学６年生の男の子が１人います。結婚は早かったのですが、７年間なかなか恵まれずにできたひとりっ子です。今は働いていません。主人が転勤族で、今は札幌にいますが、子どもが生まれたときは神奈川県におり、主人も私も実家が北海道ということで、２人目については経済的なこと、体力的なことも考えて、なかなか踏み切れないうちに、30代後半になってしまいました。うちの子は平成３年生まれですが、それから５～６年神奈川県にいて、経済的にも大変ということもありました。今、もしもう１人と考えると、体力的なことだけではなく、経済状況と考えると…。子どもが来年中学で、いろいろお金がかかることを考えると、やはり、今の私の家では１人が限界かと思っています。理想ではもう１人くらいと思ってきましたが、今はやはりいないよりましかと思っています。
（D:35・男・既・専・1） 私は35歳です。私の妻は32歳で、３歳の女の子が１人います。今は子育てに四苦八苦という状態で、私はいつも遊び相手になるのが大変です。
（E:35・女・既・専・1） 結婚９年目で、子どもは小学１年生の女の子が１人います。当初２人ほしいと考えていましたが、年数が経つにつれ１人の子どもにずいぶん時間がかかってしまい、２人目の予定はまだないです。ずっとお互い札幌で、両親も近くにいるので見てもらえると思いますが、現在は１人で十分かと思っています。
（F:31・女・既・共・0） 私は子どもはいません。共働きです。将来子どもがほしくないというわけではないのですが、私自身は子どもができた後も仕事を続けたいという希望があります。そうなった場合、働いているお母さんに聞くと、仕事を探すのも続けるのも非常にいろいろな困難があるという経験談や、新聞等の報道もあります。そのあたりがずっと引っかかっていて、今のように働き続いている状況です。最近、新聞やテレビでフランスが少子化対策をヨーロッパの国々の中でも先進的に行っているという報道がされていて、興味を持って見ていました。
（G:39・女・独・ー・0） 独身で、子どももいません。べつに独身主義者ではなく、私の漠然とした人生設計ではもう２児の母親ぐらいになっている予定だったのですが。最初のころの仕事がすごくおもしろくて、職場にはミセス用のポジションもありますが、そこのほどほどの時間に帰れる仕事に魅力を感じていなかったこともあり、ずっとハードなポジションばかり回されて、結婚について考える時期や機会を逃し続けてしまったのです。この年になり、出産年齢のリミットが近づいてくると、もうこれだけいろいろな仕事をやったのだから、思い切って引退してミセス用のポジションに行ってもいいと思ったりしています。同級生や妹が、産むのはいいとして、育てるのが大変で、年々体力も落ちてくるから本当にきついと言っていますので、少しでも実年齢よりも若い体力を保持しつつ、実際に自分の子どもを産みたいと思っています。
（H:39・女・既・共・4） 子どもが４人いますからもう１人というのはとんでもないという感じです。４ＬＤＫに住んでいて、友達はみんな一人ずつ部屋があるのに、うちは同じ部屋で机を３つ並べてという状態で、経済的にもとても無理です。もう１人なんてとても考えられません。
（安梅） 一回りお話をいただきましたが、ご自身のことを離れて、産みたいと思う人が産めるような環境を整えるためにどんな工夫ができるのかということについてご意見をお願いします。
（D） 私は男性なので子どもは産めませんが、手助けはできます。私の家は子どもは１人ですが、妻が出産したときは外で常時いました。子どもが生まれて３年間、私は子育てに参加しました。私も仕事をしながら子育てに参加しているので、今までとても大変でした。今も大変ですが。しかし、妻は、来年あたりもう１人ほしいと考えています。２人はい

ないと子どものためにもよくないという考えもあります。昔風の考えの人が多いと思いますが、子育ては女の仕事だという感覚が、年配の方には特に強いと思います。私の世代の人でも結構子育てに参加している人はいますが、周りの親を見ていると、そういう雰囲気を受け継いでいて、結構「お前やれ」という押しつけ型が多いのではないかと思います。私のところもそうですが、やはり核家族化で協力を得られる人が少なくなっています。子育てにうんざりするから、だれかに預けたいと思うけれどもなかなかそれがうまくできない。もっと協力、サポートしてくれる人が多いと子育ても楽にできるので、もう１人ほしいという感じになるのではないでしょうか。

（安梅）男性の働き方についての世間の考え方についてと、子育てのサポートの面をもう少し充実したらというご意見でしたが、ほかの方はいかがですか。先ほど不安と言われたＡさん。

（A）私が先ほど不安と言ったのは２点あります。１つは年齢的に40歳にあと１年となったことで、40歳で産めば子どもが20歳になったときはもう60歳です。主人が２歳上なので、定年で収入がなくなるという点も、おぼつかないという気がします。私が結婚したのは25歳で、結婚してすぐに主人が病気になり、医者から４年間は子どもをつくらないように言われました。結婚したのが25歳のわりには結構遅く、30歳近くで第１子を産んでいます。もし26歳ぐらいで第１子を産んでいれば、子どもが３人ぐらいいたかもしれないと思ったのですが。昔の人は働き始めるのも結婚も年齢的に早くて。やはり若い方が元気ですから、産もうと思ったときにいっぱい産めるというか、体がそれについていける状態と思いますが。結婚年齢がどんどん上がってくると、例えば女性の場合、初めて結婚するのが35～36歳となれば、37歳で１人産んで、もう１人となったときに私くらいの年齢になって、不安になるのではないかと思います。

もう１つ不安な点は、今、私は自営業というか、あちこちにフラワーデザインの講師に行って講習会をしています。家でする仕事を若いころからやっていて、家で今もやっているのです。例えば、共働きしたいといったときに、他に働きに出ようと思っても、まだ下の子が小学校１年生で上の子が小学４年生なので、フルタイムで働くことはできないと思っています。そこで、やはり産もうかと思うと、さらに身動きがとれない状況になって、今やっている仕事をまたやめなければならなくなります。若いころにやって、途中、子どもが生まれてブランクがあって、また始めたという形になっているので。ここまで軌道に乗ったものをまた中断しなければいけなくなるという頭があって、もう子どもはいいかなと思ったのですが。

（安梅）Ｃさんはどういうところでどんな環境が整えば、もう少し子どもをと思われますか。

（C）私は働かず、子どもが生まれてからずっと11年家にいますが、やはり、預ける実家や親戚がない場合に、１歳以下の子を１時間ベビーシッターや託児所に預けると高いと思います。１日何時間か働くパート的な仕事を主婦がしたとすると、下手すると差し引きマイナスの月もあるのではないかと考えたりします。同級生で結婚していない友達もまだいます。実家のお母さんがよくしてくれるから結婚しなくてもいいのかなと。あと、保育園も待機の人がたくさんいると思います。働きたいから預けたいといっても、登録できないとか。都道府県や市で違うかもしれませんが、登録して子どもを預けて半年以内に仕事を見つければ、それで届けを出せばいいというところもあれば、はっきりしたことはわかりませんが、今働いていなければ登録すらできないとか、できたとしても何カ月も待ったその間のこととか、そういう不安がやはりあると思います。保育所ももっと預けやすい体制が整えば、また違うのではないかと思います。

（E）私は働いていなかったので。でも、やはり今の方と同じように、いざ困って預けようと思うと、料金が高かったりとか。１時間600円というところがあって、そこによく預けていたのですが、そこの保育してくれる人に対する不安というか、安心して預けられるところではなかったのです。子どもがいつも泣いていたりとか。そういうことが少し気になっていました。

（安梅）ベビーホテルみたいなところ。

（E）そうです。24時間やっていて、近くで利用し易かったのですが、安心して預けられるところではなかった。安心して預けられるところは高すぎてどうしようかと、よく困りました。

（安梅）保育は、きちんと質が確保されているところでないと、不安で預けられませんよね。そういうきちんと質が確保されているところは数が不十分ということが今も指摘されましたが、保育以外の施設や地域でのサポートという点ではどうですか。昔なら地域ぐるみでみたいなことがありましたが、今なら地域ぐるみでどんな可能性がありますか。Ｄさん、どうですか。

（D）地域的なサポートですか。私は引っ越したばかりですが、お隣の顔は知っています。子どもがいることも知っていますが、どんな人が住んでいるかはわからない。一応挨拶回りに行ったからわかっていますが、それから一歩進めてというのは難しいです。大体、私ぐらいの30代半ばの方ばかりが住んでいるのですが、なかなか生活スタイルが…。私もサービス業に勤めていますから、お休みはいつあるのかわからないような状態です。他の方々は、夜働いているのか朝働いているのか何しているのかという状態で、交流は少ないです。最近は、自分のスタイルを守って、自分の好きなようにするという生活習慣があたりまえになっている感じです。

（安梅）するとやはり、なかなか難しいという。

（D）地域が一緒になって動いているという感じは、私のところはありません。

（安梅）Ｅさんのところは今お子さんは１人ですが、どんなサポートがあれば、もっと産みたいと感じられるようなことに…。

(E) 現在、南区に住んでいますが、サポートという面ではあまり印象には残っていません。幼稚園などで見ると、多少、児童会館などでみんな交わって遊んだり見てくれる場所とかがありますが、子どもが小さい場合にはあまりなかったような気がします。
(金子:サブ司会) 不安にしてもサポートや負担にしても、産んですぐの場合と小学校に行った場合と、それからもう少し大きくなって大学生になった場合とは、中身が違うと思います。だから、今一番大変だと思うのは、産んで３年間は実はサポートは受けられなくて、両親、父親も含めて、例えば夜の２時間おきに赤ちゃんが起きるのでどうにもならないというような負担がみんなにあるわけです。小学生になると、児童会館などに少しは頼めると。大学生になると、今度はお金の負担はあるけれども放っておいてもいいという。同じレベルの不安・負担ではないのです。私も娘を２人育てて、夜中に２時間おきに起きなくてはいけないということがありました。
Dさんが先ほど言われたように、自分も参加して大変であったと。それは小さいときです。今度は例えばAさんの上のお子さんの場合、今の負担や不安というのはどういうことですか。
(A) 小学校に行ってからは、お友達と自分の世界ができて、だいぶ一人で遊びに行くようになりましたが、３～４歳のころには、私のそばから離れることがありませんでした。やはり成長しているわけです、特に精神的に。すると、小さなときとは違った、精神面でのケアが必要になってくるので、私が子離れできていないのかどうかわかりませんが、いつまで経っても心配は残ります。ただ、自分で使える時間はできました。
(金子) 例えば、いわゆるサポートとしては、０～３歳くらいと小学校・中学校ぐらいに分けた場合、どちらの方がより切実ですか。
(A) やはり、小さいとき。
(金子) Cさんは。
(C) やはり小さいころで、幼稚園に上がるくらいまでは、本当に大変だと思います。今は小学６年生なので、言えばわかります。鍵を持たせても鍵をかけないで出かけてしまったり、鍵を落とすのではないかとか別の心配はありますが。帰ってくる時間も小学低学年と高学年は１～２時間は違います。そういう意味では、５～６年生くらいになってからは、少しは安心と思っています。あとは、子どもが来年中学で、仮に私が働くことになったとしても、やはり、先ほどAさんがおっしゃったように精神的なものが…。親がいないとお友達同士で…。思春期にもなるし、いろいろ精神的なことを考えると、せめて帰ってくるころにはいてやりたいと。毎日とは言いませんが、できればいるような状態がいいかなと思っています。
(金子) そうすると、例えば、限られた予算の中で、地域のサポートで児童会館をつくる場合に、小学生向けともっと低年齢向けのどっちを選ぶかというと、やはりもっと低い方を。
(C) 年齢が低い子の方がもっと皆さん…。
(金子) 切実というような感じですか。
(C) うちは10歳の子ども１人ですが、もし10歳の子とちょっと離れて幼稚園の子やもっと下の子がいると、やはり下の子の方に、そういう預けるところがあった方が…。上の子も学校のことや、いろいろあります。そういうときに、下の子を連れていると学校の中で騒いだりして皆さんに迷惑をかけることを考えると、そういう預けるところがあるだけでも違うと思います。小さいときの方が預けるところがたくさんあった方がもっと楽ではないかと思います。
(A) Cさんのお話で思い出したのですが、子どもが小さいころにはとてもたくさん予防接種があるのですが、全部日中の午前中なのです。あれはやはり保護者がついていかないといけないものですが、どうしてこの時間にしかやってくれないのだろうと。
(金子) 午前中なのですか。
(A) 私の地域では、役所に何時から何時までと言われていれば、何があってもその時間に行かないと予防接種が受けられないのです。そういう制度も変えてもらえればと思うのですが。
(金子) 例えば、土日でも。
(A) そうですね。例えば夕方にちょっとしてくれれば。
(金子) 月曜日は午前だけど、水曜日は午後とか。
(A) でも、必ず日時が決まって通知が来るのです。その時間に行かなければ、また１カ月延びてしまう。すると子どもが風邪をひいてしまって、受けられない状態になる。半年、１年ウィルスの抗体がないまま放ったらかしの状態になる。必ず親が家にいる人を対象にしている。
(金子) それが前提ですね。
(A) そういう頭があるのかなと。お役所仕事なのですね。
(佐藤:事務局) 千葉県では集団検診は土曜日、日曜日にまとめて…。市長の姿勢というか、そういうことで何かいろいろ工夫できる余地は残っているのではないですか。それは可能だと思います。
(金子) Hさんはお子さんが４人ですが、サポートという場合、４人兄弟だったら上のお姉ちゃんが一番下の子を見るという、昔はどこでもやっていたことがあると思いますが、その辺はいかがですか。
(H) それはあります。

（金子）それは母親としてこうしなさいと言わずに放ったらかしというか、自然にお姉ちゃんが。
（H）ずっと放ったらかしなのです。今、６月から夕方働きに行っているので、夕食のとき私はいないので。それで放ったらかしの状態なのですが、たぶんお姉ちゃんが全部リーダーになってやってくれていると思います。
（金子）それは自然にそういうふうになった感じですか。
（H）そうです。
（金子）下の子たちも大体お姉ちゃんの言うとおりにするという、そういう兄弟関係ですか。
そういう場合は、地域がサポートするというよりは、むしろ自前で完結している。
（H）はい。どこかに行く時間がなくても家の中でできるので放ったらかしのような感じです。
（金子）ご近所の方で、子どもさんが１人しかいないお母さんとそういう話をされたときに、感想などお聞きになりますか。「お宅はいいね」とか、「大変ね」とか。
（H）「大変ね」とはよく言われます。「よく４人もいるわね」というのはよく言われますが、「いいね」と言われたことは…。「大きくなったらいいわね」というのはよく言われますが、「今がいいわね」ということは、言われたことはないですね。大変そうに見えるのだと思います。
（安梅）今、お子さんがいる方にお話を伺いましたが、お子さんがいない方たちのご意見を、お友達のことなども踏まえて、お聞かせ願いたいと思います。Gさん、いかがですか。
（G）職場には、子育てをしながら仕事をしている女性も結構います。やはり、仕事と家庭の両立が大変で、辞めてしまう人もいます。私の職場では、今までは子どもが１歳までは２時間早退して仕事ができるという体制でしたが、今年の４月から、本人が望めば無給ですが３年間職場を完全に休んで子育てに専念してもよいという制度が設けられました。やはり、みんな、無給ということと、３年間社会から遮断された状況で育児に専念して、３年後に復帰ということにすごく不安を持っています。自分がもしその立場になったとき、どちらがいいのか。仕事しながら子育てとなると、どうしても仕事も中途半端になってしまうような気がします。
（金子）無給でなくて、例えば、給料が半分くらいなら３年間休むということは可能ですか。
（G）お金の問題よりも、３年間全く職場と接点がなく育児に専念して、いきなり復帰ということに不安が。
（金子）では、お金の問題ではないのですね。
（G）そうですね。
（佐藤）今、厚生労働省では、「少子化対策プラスワン」を打ち出しています。１～３年の育児休暇について、今、自分が勤めている企業では取りづらいという雰囲気でためらう方と、今言われたように、３年間のキャリアが中断してしまうことでためらうという方と。後者の方が割合が大きいのですか。職場としては、取る気があれば、とくに取りづらいとかそういうことは。
（G）結構、労働組合などもしっかりサポートしてくれていて、その辺は思い切って取れるのです。でも、出産前のポジションに復帰というのは、たぶん不可能です。
（金子）そうすると、社会との関連というか、会社との関連を切らないようにするという工夫をして、なお且つ無給でなく、半分くらい給料をもらい続ければ何とかなるという感じですか。
（G）私自身今独身で、無給というのはどのくらいきつい状態なのかわかりませんが、今の自分の感覚としては、無給のことよりも、やはり復帰するときの状況が気になります。
（安梅）Fさん、いかがですか。
（F）私の周りでは、最近ベビーラッシュです。年代的には大学を出て就職して８～10 年くらい経った人が周りに多いのですが、そういう人たちの間でのベビーラッシュも、それなりに同じ一つの会社で自分なりの仕事のキャリアやポジション、人間関係ができている。例えば、育児休暇を取れる会社で、その制度を利用して１年後に復帰しても何とかやっていけるという自信や経験が積み重なって、「よし、今だ」という感じで、皆さん、30 歳を境に子どもを持たれたという印象がすごく強いです。本人たちの話を聞いても、復帰したあとも何とかなりそうだという言葉が端々にあるので、そういうシステムを利用している人は利用しているなという印象があります。逆に、転勤族の奥さんで、自分の意志ではなく、仕事は続けたかったが辞めたという人が、もっと早い段階で、転勤で仕事を辞めた段階で子どもができていたりとか。やはり女の人は、仕事との関係で子どもを産む時期をすごく考えているという印象があります。
（金子）先ほども出ましたが、「少子化対策プラスワン」という新しい国の支援策が出ましたが、その一番最初に男性の働き方を変えようというのがあります。具体的に言うと、短時間働いて、残りは家に帰って子育てに協力しなさいと。または、短時間ではなくて１日おきに働いて、子育て期間はとにかく協力して頑張りなさいと書いてあるわけです。その場合、１日おき、または短時間に働いても、働いた分だけ給料が減るわけです。そういうことを国が言っていることについてお聞きしたいと思います。まず男性の立場から、子育て期間には、「月・水・金」ぐらいと半分くらい働いて、残りは家にいなさいと。あるいは午後３～４時には帰っていいから、その代わり給料はその分減るというような制度は、やはり困りますか。男性としては。
（D）私は、「月・水・金」でも、「火・木・土」でも、日曜日働いてもいいです。感覚的にもサービス業の感覚なので、暦的感覚も持っていません。いつ休もうといつ働こうと、そういうことにはべつに抵抗はないですが、給料が減るのは

辛いです。
（金子）給料が減らなければもちろんいい。
（D）ええ。
（金子）そうですか。女性の立場からもお尋ねしたいと思います。Aさんどうでしょうか。
（A）はたしてDさんのように一生懸命やってくれるのかなという。
（D）たぶん、遊んであるくと思います。絶対そうなります。
（金子）子育ての応援はしないで、パチンコ屋に行ったり…。会社は行かないのだけれど、子育てもしないという男性が出てくるのではないかと。
（A）厚生労働省の方でそういうふうに決めたと。その日はきちんと子育てをしないと何か…。
（金子）育児レポートを書くとか。
（A）確かにそういうものをどこかに出さなければだめだということになれば、また別ですが。
１日くらいはおむつ替えもするかもしれませんが。
（金子）要するに、給料が減るというか、所得が減るとか困るという。
（A）当然そうです。どうして女の人が働くのかということもあるでしょうから。
（金子）なるほど。逆に、所得が保障されれば、かまわないという意見も結構…。
（D）所得が保障されれば、喜んで子育てを手伝います。
（B）うちは所得が減ると、家のローンもあるので困ります。私は今、月に半分ぐらい働いています。いったん結婚して、そのとき働いていた職場を辞めて、１年間くらいブランクがあって。ずっと金融機関に勤めていて、また金融機関に勤めたのですが、やはり、その１年間のブランクはすごく大きいです。11年勤めていたときは日本経済新聞などもしっかり読んでいましたが、１年間は何も読まなくていいやと思って、だらだらと過ごしました。そして１年空いて、新しく違う金融機関に勤めたときに、「ああ、私は１年間何をやっていたんだろう」と思うくらい、すごくブランクを感じました。最初は証券会社に行き、次は銀行に勤めたのですが、全然職種が違い年も取っているので、仕事を覚えるのに必死でした。お給料もほしいし、自分の生活の中で働けると思って働いたけれども、そのブランクという壁が…。ずっと勤めていた期間に対して、休んだのが１年でもすごく大きかったと思います。そのことに対する不安がすごく…。
（金子）Cさん、いかがですか。ご主人が働き方を変えて、働く時間を減らして家庭に戻ってくるというのは。
（C）結婚して今までのことを考えると、早く帰れても毎日ちゃんと帰ってくる保証はないと思います。それを抜きにしても、収入が減ることは、皆さん正直いって困ると思います。
主婦でなくてもみんな不安になると思います。あと、何時なら帰っていいとか、子育て期間とは何年をいうのか。
（金子）例えば２年とか。
（C）２～３年というと…。何曜日休んでいいとか、何時なら帰っていいとか決めてしまうのではなく、３年ならば３年、５年なら５年という期間、本当に子どものために休みたいときが絶対あると思います。子どもが熱を出した、病気になった、奥さんが具合が悪くて子どもが熱を出したなど、絶対休まなくてはいけないときに、堂々と子育てのために、「子どもがこうだから休みたいです」と言って、１日なり数日なり休めるというふうにした方がいいと思います。
（金子）そういう理由で別枠で例えば年間10日ぐらい…。
（C）私が熱を出したときなど、１歳未満の子どもを放っておくわけにはいかないので、そういうときに主人が休めたらと。子どもが熱を出したというと、休みはくれますが、すごく肩身が狭い。そんなときに、どうぞというか、あたりまえのように休める方がいいと。
（金子）有給休暇などを使うという。
（C）そうです。育児のための休暇を取れる制度が何日とか。帰る時間ではなく、いつでも取れる方がいいのではないかと。お給料も減らないのです。何時とか決めるのではなく、その家庭の事情で取れる方が…。女の人ももちろんです。そのために職場にいづらくなるという友達もいますから。今、パートですら、そういう事情がありますから。堂々と子育てのために休める。例えば、奥さんが授業参観や個人面談へ行きたいというときがご主人の出番だと思うので、そういうときは堂々と会社に言えた方が…。国や会社が決めるのではなく、その家庭の事情で取れる方が私はありがたいのではないかと思います。
（金子）そうですね。Eさん、いかがですか。
（E）６年間ぐらいの育児を振り返ると、主人は結構見てくれていましたが、いざそういう休みになって見てくれるかというと、不安です。やはり所得が減るとなると問題が出てくるので、それはちょっと考えます。
（金子）所得が減らなければ、そういう制度の方が。
（E）利用したいです。給料が減るのは困ります。
（金子）Fさん、いかがですか。
（F）それは、厚生労働省としての意見、発表ですか。
（金子）ええ、そういうことのようです。
（F）私にはちょっと信じられません。それが正直な…。それは休みを取れば所得は減りますが、あくまで親が全部見る

のが前提という考えであると思いますが。
（金子） ０～３歳くらいの間ですね。
（F） そうですね。もちろんその考えはありがたいのですが、やはり選択肢を多くするという何か指針を出してほしいと思います。
（金子） 選択肢というのはどのような。
（F） 例えば、休みをもらって給料が減るということであれば、せっかく親子みんながそろっていても、経済的な余裕がないから、ちょっと温泉に行こうかという「ゆとり」すらなくなるような気がします。逆に、お父さんが週３回休みになったら、もっと給料のいい別のアルバイトに行ってしまうかもしれないと思います。
（金子） その会社は休みだけれどもと。なるほど。
（F） 今、リストラなどで働く時間が減って、その分、夜にアルバイトに行くお父さんもいるそうです。そういう現実もあるので、厚生労働省の方はそういうことを知っていると思いますが、もう少し、そうしたい人はそうするし、そうでない人もいていいという選択肢を。
（金子） 選択肢はそういう意味で多くした方がいいと。
（F） はい。
（G） せっかくいい制度ができても、やはり、男性は仕事最優先であるべきという組織の考えのようなものがあって、取りづらいようです。せっかくできた制度を男性が有効に使いやすく取りやすくするような職場の雰囲気作りなどを、やはり厚生労働省なども大々的にＰＲしたりして盛り立てていってほしいと思います。
（金子） そのような男は仕事優先であるという企業の考え方は、どこをどうすれば少しずつ変わっていくのでしょうか。男が変わらなくてはいけないといっても、これまでずっと言われてきたことと変わっていないと思います。私たちでさえまだ変わっていませんので。企業自体は、例えばもっと国際競争で頑張らなくてはいけないと思っているわけですから、そういうときに、男が週の半分の休みを取ることはつらいと私も思いますが。しかし、基本的に少子化対策として、男性の働き方、あるいは育児参加をもう少し具体的に考えることは大事であると思います。企業の体質を変えるという考え方に、どうしたらいいかということに突き当たるのです。女性の場合は、大きい声で「やはり変わらないとだめなのよ」ということを言い続けることも一つの手であると思います。今お勤めの会社では、そういう男はやはり仕事なのだという体質は、なかなか変わりそうにないですか。
（G） 子どもを看護する休暇なども、せっかく男性も女性も平等にできているのに、やはり積極的に取っているのは女性です。実際にマイホームパパという感じの人が、仕事から疎外されていくという風潮がないにしても、やはり男性はあまりない。
（金子） そこから先、強制はなかなかできないでしょうからね。Ｈさん、どうですか。
（H） やはり、男性の意識ですね。時間があっても、やらない人は育児をやらないと思います。
育児や家事など家の中のことは、働いていてもやる人はやると思います。やはりそれは、家庭でも小さいときからの躾というか、育て方というか。
（金子） 親のね。
（H） そう思います。私の兄の家はお母さんの躾がよくて、男の子でも家の片づけ、食器洗い、掃除を全部やらせています。お母さんがほとんど動かなくても家の中全部がきれいになっているという状態です。やはり、あのような家で育った子は、大きくなってもちゃんとやるのではないかなと思います。
（金子） それは、男性の問題ではなく女性の問題、母親の問題。男性からすると、どうですか。やはり、男性は仕事が優先であるということを変えようとなってきた…。
（D） やはり、感覚的には男は仕事です。そういう感覚がある。私ははっきり言って遊ぶ方が好きですが、それでもやはり、男は外に行けば７人の敵がいるというような感覚で、外で働くのがあたりまえの感覚になっています。
（金子） それはなかなか変わりにくいという。
（D） 男性から仕事を取ったら、あとは家庭に戻ったら邪魔にされるんじゃないかと。「何で家にいるのよ、あなた、仕事行きなさい」と。
（金子） 私は、寅さんの映画が好きで、「男はつらいよ」と言うと、同僚の女性の先生が「女だってつらい」と。そのとおりだと。しかし、辛さはたぶん少し違っている。男の仕事の辛さというのはとにかく競争で、７人の敵の中で頑張って、よければ出世して給料を増やしてということになりがちです。女性の場合は、出世ももちろんあるけれども、それ以外の部分は全部自分が見なくてはいけないという。例えば育児にしても何にしても、家のことは女性がしながら仕事もするという辛さがある。辛さの中身が違うので、この辛さを同じにした方がいいという判断と、今言われたように、やはり男は仕事という感覚が強いので、それはそれでやろうと。だから、女性の辛さを少し周りでカバーしようという、そういう意味でのサポートをつくるというやり方しかないのかと思います。
（D） 確かに父親が子育てに参加するか参加しないかというのは、やはりその父親が小さいときにどういうふうに育てられたかが影響するのではないかと思います。私の友達なども、子育てはしないで、全部奥さんに任せている人は結構います。私は育児参加型ですから、何から何まで完全サポートして、赤ちゃんの夜泣き攻撃から全部、私が見ました。昼

間は妻が面倒を見て、夜は私が仕事から帰ってきてから交代して全部やるからということで、なるべく妻には自分の時間を与えるようにしました。私の時間はというと、ないです。夜も昼も。でも、それくらいしなくては、赤ちゃん時代は妻もフルに面倒を見ていないとどうなるかわからない状態ですし、初めての子だからどう扱えばいいかもわかりませんでした。妻に聞いても、子どもの小さいときの状況はどんなだったろう、抱いた感じはどんなだったか、全然記憶にないと…。写真を見たら、ああ、こんなに小さかったんだねと。私も同じです。小さいときの状況は、どんなのだったかもう記憶がないのです。あまりにも一生懸命やりすぎたという面があるのか。

（金子）それはつまり、実のお母さんがそういう躾をされたということですか。

（D）私は、おじいちゃん子だったのです。おじいちゃんにいつも世話をしてもらったという小さいときの記憶があるのです。私の場合はおじいちゃんだったから、逆に私も同じ状態で、男・男の体制だったので、私も子どもの世話をやらないといけないという感覚になったのかもしれません。だから、おばあちゃんに私が育てられたら、そういう感覚はなくなったのかなと。

（金子）やはり母親が専門であるというような。

（D）ええ。母親が面倒を見るのがあたりまえだという感覚になるかもしれません。また、私の父親は、子育ては一切しない人で、やはり古風な考えで、子育ては女の仕事だという感覚でした。その上のおじいちゃんによく面倒を見てもらったのです。やはり、自分の父親の小さいときに育った環境でしょうか。

（金子）働き方なども、やはり育てられた環境で、男は山に芝刈りに行ってというふうに思って、20歳ぐらいまで大きくなって、いきなり「川に洗濯にも行かなくてはと言われてもなかなかね」というのは、たぶん皆様のご主人にも多いのではないかと思います。しかし、それを少し何か考えましょうという話になってきたわけです。支援の問題でずっときているのですが、もう１つ、少子化問題でアンケートをすると、教育費の負担が非常に大きいという回答が一番に必ず出てきます。子どもが小さいときはそうでもないのですが。家から出して仕送りをすると、授業料を含めて年間250万円くらい、４年で生活費込みで1,000万円くらいかかるそうです。その問題がやはりネックで、なかなか子どもを産めない、産んでも１人という意見が多いと。そのことに対して、今回の厚生労働省のプランでは、すべての子どもに年間50万円の奨学金を無利子で貸し付けるという案があります。そうすると国立大学の授業料くらいは出るわけです。生活費は出ませんが。それは当然、本人が就職して返済すればいいわけです。何かそういう手を打たなくてはいけないという時代になりかかっています。おそらく４人もいらっしゃると、Hさんのところがこれから一番教育費が大変だろうと思います。それについていかがですか。

（H）経済的にとても大変で、私も６月から働きに出ている状態です。まだ一番上が中学１年生なのです。

（金子）ああ、もっとかかりますね。これから10年は大変ですね。

（H）はい。だから、どうしようかと。計画が立っていないような状態です。

（金子）しかし、とにかく塾にやったり何か。

（H）塾は行けないです。行ってないのですが、でも本人は行きたいと言っているので。周りの子はほとんど行っています。だから、中学２年生くらいになったらとは考えてはいますが。

（金子）兄弟が多いから、あなたはちょっと我慢しなさいということを、お母さんからおっしゃるわけですか。

（H）はい、言います。それしか言いようがないので、そのように説明してはいるのですが。

（金子）Aさんのところは教育費の問題はどうですか。まもなく大変になると思いますが。

（A）まもなくだと覚悟しています。中学生・高校生を持っている方が、「大変だ、大変だ、お金がない」と言っているので大変なのだろうなと漠然とは思っていますが。北海道は、本州の私立大学を受験する方もいるのですが、地元で国公立を狙ったりする人が結構…。最近、高校は私立傾向になりがちですが、大学の方はやはり国公立で、北海道にある国公立大学という考えがまだ多いので。北海道の国公立に入らないで東京の私立大学に入ったら、私はどうしようと思うくらいお金が…。そのときもかかるし、その前段階もかかるし。家の修理にもかかるし結婚資金も貯めておかなくてはとか、いろいろ考えると、一気には…。

（金子）それは０～３歳や小学校、中学校とまた違った意味での子育ての負担ですね。

（A）そうですね。持ち物ひとつにしても、子どもが小さいころは、清潔で洗ったものであれば何でも文句を言わずに着ていますが、高校くらいになってくると個人の希望が出てきたりして、そういう面からお金がかかってくるようなことを、私だけではなく周りの方も言っています。お小遣いもそうです。周りのお子さんがお小遣いを持っていれば、自分の子どもにあげないわけにはいかないと。友達同士でどこかに行くときに、みんないい格好をしていて、自分の子どもだけボロボロの格好はさせられないと。そういうところから、結局受験の前にもいろいろなテストを受けたり勉強したりにお金がかかり、受験してからもまたお金がかかってというふうに…。本当に1,000万円ぐらい貯めておかないとだめなのかなと。

（金子）何か努力されて。学資保険に入っているとか。

（A）学資保険は１年のときから入っているのですが、担任には足りないと言われています。

（金子）Cさんはいかがですか。同じような状況ですか。

（C）うちは１人ですので、子どもの多い方よりは一人にかけるわけですから、今は塾ともう一つ習い事をさせています。

塾も中学に行くと費用が上がるし、講習会一つにしても小学校とは違うようですごく高くなります。まして中３の受験期になると、もっと高いです。
（金子）お正月の３日間はまた高いし。
（C）高いですね。行かなくてもできればいいのでしょうが、なかなか。やはり学資保険に入って、「１本では足りない」と言われました。小学校に入学するときも１本とか。でも、たぶんそれではとても足りる金額ではないです。それを考えると、１人でよかったのかなという気持ちがあったり。経済的なものだけです。大学だけではなく、高校でも大変だと思います。
（金子）それに入るための塾ですね。
（C）そうです。もちろん入ってからも大変だと思います。大学と高校の学費だけでも「えっ」と思うほどかかります。先ほども言われたように、お小遣いも、今の子は携帯電話代などいろいろありますね。部活費も入ったらいろいろかかります。本当に純粋に学校に納めるお金だけではないと思うので、やはり、本当に大変だと感じます。
（金子）私は娘が２人で、大学３年と今年１年に入りました。私立大学ですが、３月の終わりに 150 万円がパッと消えたわけです。授業料と入学金と、上の子の授業料と、それから合格したら自動車学校に行きたいと言い出して、また 30 万円がパッと消えて。部活費や携帯電話などそれ以外にまたあるので、これは大変だと思います。とにかく 50 万円を無利子で貸し付けるということが出てきたので、そういうことに対してはどうでしょうか。
（C）一般的には、銀行などの協力ローンみたいなものがあると思います。
（金子）それは利息が。
（C）利息がありますね。それなら、同じ借りるのであれば利息がない方がありがたいと。
（金子）あとは本人が就職して返すという。そういうことでもしないと、教育費は大変です。教育費は落とせないですから。それはそれで評価できるような話ですか。
（C）今よりは。真面目に返してくれれば本当にいいのですが。やはり教育費は大変だと思うので、あった方がいいとは思います。
（金子）年金の問題など、少子化でやはりこれから少しずつ苦しくなって大きな問題になってくるのですが、その年金は、我々が払っている分は全部は戻ってこなくて、上の人が吸い上げるという制度なので、それも非常に大変だという気がします。それは老後の設計にも直結するので、何か手を打たないとということです。例えば、Gさんは一人で今まで頑張ってこられて、年金を考えることはありますか。あと 20 年経つと定年ということですが、今はいいとしても、いずれ仕事を辞めたときの年金はどういうふうにお考えですか。
（G）やはり自助努力が大事であると思ったので、20 代半ばくらいで自分で保険会社や生命保険会社で宣伝しているのを掛けたのです。
（金子）自分で掛けている。個人年金のような。
（G）これからの年金制度は非常に大変だと思ったのです。
（金子）では、もちろん給料から公的な年金の方にも取られているわけですね。
（G）やはりみすぼらしい老後は送りたくないし、あまり不安を抱えながら生きていきたくないと思って。
（金子）Hさんのところは、むしろ子どもが多いから、個人年金などは考えたくはないですか。
（H）不安なのでやはり個人年金は掛けています。
（金子）どうですか。Fさんはいかがですか。年金というのはまだだいぶん先の話ですが。
（F）だいぶ先の話で、うちの家系はあまり長生きではないので、年金を貰うまで生きていられるか。就職したときから、そういうふうにずっと思っています。最初は公的年金については掛けていましたが、結婚したあと、夫が公的年金だけでは不安だというので、夫自身は個人で掛けていたのです。私もそろそろ考えたらと毎年言われますが、手がついていない状況です。確かに、公的年金は不安という報道があるので、考えなければいけないと。
（金子）例えば早い話が、今 70～80 代の人がたくさんもらっています。満額もらっているので。我々はただ払うだけで、何も見返りはないわけです。でも、我々が貰うころには、払ってくれる人たちがどんどん少なくなっているので、うまくいかないということです。それを、例えば制度として変えるのがいいということで変える場合、今の人たちに満額の３分の２くらいで我慢してもらって、残りの３分の１は払っている人が自分のものにできれば、また違ったものが見えてくると思います。
（F）おっしゃるとおりだと思います。その辺のはっきりした答えがないので、いつまでたっても新たに払い始める気持ちにはならないという状態です。
（金子）しかし、制度を変えるのはなかなか大変みたいなので。Eさんはいかがですか。
（E）やはり結婚してから勧められて、主人は個人年金に加入しています。今考えると、やはり入っていて良かったと。後先のことを考えて。
（金子）公的年金には、一応付き合いで給料から掛け金を取られてはいるけれども、それ以上あまり期待はできないと。
（E）全然期待していませんが、やはり不安ですので。
（金子）何か手を打って変えた方がいいと。年金の配分だけでも変えるようなことを考えた方がいいということにはな

らないでしょうか。払ってくれる子どもたちが増えれば、その心配は全然ないわけです。今、少子化を何年かくい止められたとしても、20年間は子どもがいない時代が続くので、我々があと15年して年金受給年齢になったとき、ひどい状況になっているのはもう見えているのです。皆さん方が長生きしてもどうにもなりません。今のやり方で、我々が長生きすると元が取れるぐらいです。そういうことが見えているので、なかなか手を打ちにくいということがあります。男性の立場からはどうですか。やはり、個人年金に入っていますか。

(D) もちろんです。とても将来が不安です。テレビや新聞で公的年金の破滅的報道を、特にこの２～３年、聞きたくなくても聞いてしまう状況にあります。私も35歳ですから、あと25年で60歳です。そうなると、自分の思っているイメージのライフスタイルを考えたいです。60歳になったら自分はこういう状態でありたいと。そうなるには、自分でそれなりの経済的状況を作るベースを作らないと、そういう状況にはなれないです。ただ公的年金で年間82万円くらいもらって悠々自適だというライフスタイルを考えるより、やはりステートアップしたライフスタイルを皆…。よい老後、安心できる老後、楽しい老後を迎えるためには、やはり自分で行動していくしか、今の現状ではないと思います。ですから、個人年金関係は私はガッチリ。給料からその掛け金を引き去られて、手取りは少ないという感じはしますが。

(金子) 奥さんは専業主婦ですか。

(D) そうです。

(金子) 今、政府の方では、専業主婦の人からも年金の掛け金を払ってもらいたいということで、それは少しずつ進んでいるようなのですが、それについてはいかがですか。専業主婦は、今は払っていないわけです。しかし、払ってほしいという意見が政府の中でかなり強くなってきて。

(D) でも、国民が反対するのではないでしょうか。

(金子) 国民というのは、専業主婦。

(D) 専業主婦が。当然、払うということは、旦那の負担が増えるということです。

(金子) 今も実は、見えないだけでご主人が実際払っているわけですが。

(D) 含まれているだけではなくて。

(金子) そうです。見えないだけで。でもそれは、やはり個人の自立という面からすると、不公平だからという意見が結構強くて。

(D) 働いている人から比べれば、不公平ですね。

(金子) Bさん、いかがでしょうか。専業主婦として、年金的にも払いなさいという動きがあるわけですが。それは、年金制度を守るためにという大義名分があるわけです。

(B) 現在は勝手に取られているから、わからないですね。でも、実際働いていないし、お給料を貰ったときに引かれると、それはすごく大きいと思います。

(金子) 引かれるというのは。

(B) 主人のお給料から引かれることは、大きいと思います。自分で払わなくてはいけないのは、大きいと思いますから。

(金子) 今も一応払ってはいるのです。ご主人から。

(B) 勝手に引かれていますが、私のところにきたときはわからないです。私の負担になってくると、大きいと思います。

(金子) 賛成反対を聞かれると、反対ですか。

(B) 反対です。

(金子) Eさんはいかがですか。

(E) 反対です。

(金子) それは、今のままでいいという。つまり、ご主人が払っていることで、自分の名前では払わなくてもと。

(E) 私も専業主婦なので、また自分から払うというのは嫌です。

(金子) Gさん、いかがですか。このような専業主婦側の意見があるのですが。

(G) やはり、これからの自分の行く末を案じると、何か手を打たなくてはいけないと。それが専業主婦の皆さんからという形ではなくて、ほかに何かないのかと。

(金子) 年金制度について。

(G) ええ。いろいろな方向から考えないと。今のように若い世代が納めたお金で65歳以上の人が年金を受けているという制度だと本当に負担です。それを防ぐために、負担を少し…。

(D) 出費を抑えるしかないのではないでしょうか。つまり年上の人たちに今支払っている分を抑えていくしかないのではないかと。収入が減るのだから、支出も抑えないと。

(金子) それを誰が言うかですね。例えば今の３分の２に減らすと。

(D) すごい不満の声が出るでしょう。

(金子) 出るでしょう。それが構造改革だという話になれば、また別でしょうが。

(G) ちなみに、今、専業主婦の方から払っていただいたら、どうなるのですか。みんなに将来、年金がこれくらい行き渡るという指針が。

(金子) それは、たぶん、焼け石に水でしょう。

（G）実際にそういうことがはっきりしないと、こうだと言われてもちょっと。
（金子）とにかく、払っていないのは不公平だという意見があるので、払ってもらおうと。
実は、学生も 20 歳を過ぎれば払っていますが、それでも焼け石に水です。支給年齢は 60 歳だったのが、段階的に 65 歳に上げています。支給年齢をどんどん上げて少し帳尻を合わせようとしているだけです。支給額は変わりません。Ｄさんが言われるとおり、受け取る側を減らせば年金収支は改善されるでしょうが。そのあたりは厚生労働省はどうなのですか。権利としてみんなが思っている額を減らすということは。
（佐藤）少子化ですから、支える世代の保険料負担に拍車がかかっています。今高齢者がもらっている受給額も、物価スライドといって、物価が上がると上がっていく。逆に今物価が下がっているときには、連動して年金受給額を下げるべきところを、今まで政治的配慮でそれを止めていたのです。物価が下がっているのだからそれもおかしいと、支給額も下げると。厚生労働省の中でいろいろ研究しているようですが、なるべく保険料を支払う層を増やしていくということで、専業主婦にも払って貰う案が出てきました。また、高齢者でも 60 歳になると厚生年金が貰えますが、働くと途中で停止になります。しかし、そういうことをすると、自分で働く金額を調整してしまいます。そこで、65 歳まで年金は使わないで、65 歳になったらそれを割増しでやると。つまり 60～65 歳はしっかり働いて、保険料を納めてということで、なるべく支える層を増やすということで。パートの条件も、今、130 万円の壁といわれています。常勤の４分の３以上を勤めると厚生年金に入らなければならないというのを、今、130 万円ではなく年収 65 万円以上にするとか、週平均労働時間の４分の３以上だったのを２分の１くらいまで下げると言っています。国民に負担を強いることばかりやっているわけです。今、新聞に載っているのは、年金額を決めるときに、５年毎に財政再計算という見直しがあります。５年経つと経済も相当変動しているでしょうから、そのときの給付額はいったいどうしたらいいのかということを今検討しているわけです。そのときまた保険料額アップがあるかもしれません。厚生労働省の中でも議論しているのですが、いい加減若い人が保険料を払うのが嫌になってしまうのではないかということで、極端な議論としては、ある程度の国民負担を示して、これ以上向こう 20 年間は保険料をアップしませんと。その代わり、痛みを今のお年寄りに持っていくということで、スウェーデン方式といわれています。要するに、保険料を上げないわけですから、お年寄りに回ってくるお金は少なくなるのです。少子化ですからしかたがありません。
それに連動してお年寄りの今の給付額が自動的に下がると。こういう方式もそろそろ検討していかないと、もう負担能力に限界が来ているのではないかということです。2004 年に大改正がありますが、そういうことで、給付と負担の問題、両方とも考えてはいるのです。
（金子）結局、少子化問題というのは、１つは産んで育てる大変さをみんなでどう共有し、負担の問題をどうするかということと、特に教育費が高いという問題。そして、今の年金の話題で出たように、自分たちの老後にも直結する非常に大きな問題です。産んだ赤ちゃんの問題もあり、中学生・高校生・大学生の問題もある。また、子どもが減るということで、いろいろなマーケットが縮んできたり、労働者が減ってきたりということもあります。それから、年金の支え手である若い人たちが増えないので、自分たちの老後にも関係があるという、いろいろなところにつながりがある大きな問題なので、いろいろな意見をお尋ねしているわけです。決定打はないでしょうが、最後に一言ずつ、私の少子化対策はこれだという話を聞かせてください。
（佐藤）私の意見として冒頭に申し上げたいと思います。なかなかいい知恵はないのですが、少子化で支え手がいないからこれからしっかり産みなさいなどという政策は、当然国家で採れるわけがありません。安梅先生もおっしゃっていますが、もう少しこういうふうに工夫したら子育ても楽になり、もう一人産もうかと思うような環境づくりをしていく。それにあたって、先ほど出ていたように、今のお子さんに家庭教育・学校教育で男女家事分担を教えるという教育の問題もあります。それと、男の働き方で、給料が減らなければ１日おきに仕事を休んでもいいということですが、このリストラの厳しいときにそんなことは無理なのです。厚生労働省が打ち出したものはかなり理念が先行していますが、皆様の感覚ではまだまだそこには進んでいないという感じです。どこも八方塞がりなのですが、40～50 代の子育てを終えたようなお母さん、お父さんたちの能力を活用して、地域でネットワークを作るというのはどうでしょうか。隣は何をする人ぞということで、とてもそんな地域の人々を活用したサポートというのはあり得ないものなのか、それとも、もしこういうことをしたら何とかなるのではないかというヒントも含めて、最後にご意見をお願いします。
（H）この間回覧板で「子育てボランティア募集」とあったような気がしますが、やはり今言われたようなものがあれば、預けようと思ったときに、どこに電話したらいいのかもわからないという状態ではなくて、地域にこういう人がいるということがあれば安心して預けられます。費用もそんなにかからず、空いている方にお願いできるのではないかと思うのです。地域でやるのはとてもいいのではないかと思います。
（佐藤）おそらく、預ける人にもある程度の負担はしてもらうと。要するに、無償のボランティアではなく有償のボランティアになると思います。そういったときに、皆さん方から見ると、子育て経験がある人でも保育の免状を持っていないと安心して預けられないと言われるのです。
（H）子育て経験があれば、それは問題ないのではないかと思いますが。
（金子）資格がなくてもいいと。
（H）それはやはり嫌だという方もいらっしゃるかもしれないので、納得していれば。

（佐藤）それも乳幼児を対象にするのと児童を対象にするのではかなり違うと思います。
（金子）それから、昨日も話題になったのですが、知り合いに頼む方がいいか、同じキャリアの経験があっても全然知らない人に頼んだ方がいいかということも結構、判断が分かれました。それはいかがですか。もし、そのような子育てボランティアの方がいらしたとして。
（H）やはり、知らない人でしたら不安です。できれば知っている方の方が多少はいいかと。
（G）本当に真剣に考えていかなくてはいけない問題で、やはりさっきおっしゃっていたように、地域をうまく活用するということは、すごく大切であると思います。なかなか地域から草の根的に何かが盛り上がってシステムができるということは難しいでしょうから、やはり行政から何らかのサポートというか、土台作りが…。
（佐藤）企画立案など、融合するような。
（G）大事ではないかと思います。また、予防接種の問題も、平日の夜や土日など、柔軟的に対応していくシステムづくりなど、これからもいろいろ見直していかなくてはいけないところがあると思います。いきなり大きなことからできなくとも少しずつ。
（F）私はDさんのところとは違って住宅街で、退職したご夫婦とかが昼間ずっと家にいて、近所の方と交流されているような人が多い地域に住んでいます。朝でも夜でもお会いしてご挨拶もします。ちょうど私たち夫婦の親の年代で、世間話の中で、「うちの息子はまだ孫の顔を見せてくれないのよ」などと言われて、「孫の世話をするのが楽しみなのよね」と言うのです。すると、もし私に子どもがいて、たまに顔を見せにいったりしたら、そのご夫婦は喜ぶのかなと思ったことがあります。その経験と合わせて考えると、ひとつ案があります。さっき言われたように、地域の方で募集するということですが、例えば私が起業家だったら、保育の質を確保することを含めて、派遣会社のような立場になるのです。そして、近所の定年後のご夫婦でもいいし、子育ての終わったお母さんなどでもいいのですが、そういう方のコーディネートをどうするか。例えば、乳幼児が希望とかもっと大きい子でも預かりますとか、そういう希望を調整して、あとは預けたいお母さんがどのように子どもを預けたいのか、知り合いの方がいいのか、知らない方がいいのかという希望を中間でまとめて、地域の小さな組織を作るのです。
でも、そのためには、全然知らない業者が子育てをやりませんか、パートでいくらですと言ってもだめなのです。ある程度は自治体や公的機関の企画や立案、アイデア、そしてネットワークも借りないといけません。例えば、私が企業家でそういうことをしたら、需要はあるのではないかと思いました。私の母の経験ですが、父が転勤族で、母は継続的に会社勤めができませんでした。でも、保母さんの資格があったので、口コミでしょっちゅう近所のお母さんたちが子どもを預けにきました。手のかかる乳幼児もいたし、小学校低学年の子どももいました。結構切れ目なくどこにいてもそういう需要はあったようです。そういう人はほかにも多数いると思ったので、こういう案はどうかと考えました。
（E）私はやはり、地域サポートがもっと充実して、気軽にいろいろ預けたり質問したりできるところがいいと思います。子どもが今、１年生で、お友達のお母さんが何か用事があるときは、うちで預かったり預けたりしているのですが、やはり、わからない人に預けるより知り合いやお友達同士で預ける方が安心できます。やはり今までを振り返ると、保健所などにこちらから何か聞きたいと思って聞いても、あまり答えてくれなかったりとかもありました。
そういう面でも少し考えていただきたいと思います。
（金子）昨日２回行った座談会では、ホームヘルパーを家に呼ぶ場合は、むしろ知り合いでない人がいいという意見の方が強いのです。知っている人に家の中を見られたくないということがあるので、それで、知り合いがいいのかどうかをお尋ねしているのです。お年寄りのデイサービスなど、あるところ１カ所に集めて、いろいろサービスをするということと、ホームヘルプサービスということで、自分の家に行っていろいろ介護をするというときに、いろいろ意見が分かれて、なるべく近所の人には見られたくないと。ですから、そういう預かり方はしてほしくないということがあったのです。その辺の抵抗感はどうでしょうか。地域ネットワークといっても、なかなか難しいのです。その辺が難しいところです。
（E）やはり知らない方に家に来られて見られるのは、少し不安な面もあります。私はやはり、知っている方どうしで行き来するのがいいかと思っていたのですが。
（D）地域組織を作るという方向が一番いい方法ですが。それができたら理想の世界ですね。
（金子）抽象的にはですね。
（D）いい世界なのですが、なかなかうまくいかないですよね。皆さんそれぞれの考え方があって。皆さんのいろいろな考えを私はいいなとは思うのですが、やはり今の40～50代の子育てを卒業した人で、そういうことに参加してくれる人がいるのかどうか。
（金子）それは、いるのです。
（D）いるのですか。参加してくれるのですか。
（金子）帯広などでもやっているので。全員が私は嫌ということではなく、私はやりたいという40～50代の方がおられるわけです。ですから、それがもう少ししっかりできたとして、それを使うかどうかが問題です。組織化の。
（D）そういう情報さえあれば使いますよね。ただ、それを組み立てるには、やはり行政等がサポートして組織をまとめることをやっていかないと。地域の住民が各個人をまとめるということは、なかなか難しいことです。そういう例があ

るということですが、当然、私も地域にそのようなサポートのネットワークがあれば利用したいです。お金を払いたくないというわけでもないですから、サポートしてくれるならいいです。他の託児所や幼稚園、保育施設に預けるより経済的負担が少なく子どもが楽しくやれるのだったら、なおさら預けます。そういう組織があれば。しかし、現状では私の周りはなかなかそういう環境にないので。

（金子）ビジネスというか、ベビーシッターの派遣など、有償ボランティア組織のようなものはたくさんあります。ベビーシッターというのは若い子ではなく、やはり40～50代の女性を。２～３時間派遣して１時間いくらということが、実際札幌で動いています。

（D）そういう本当の営利目的ではない組織団体ができれば、本当にいいことです。

（佐藤）営利目的ではないけれども、有償組織ではある。給料もある程度払わないと。

（D）有償はわかりますが、今、保育所や各個人の会社でやっていることは、ほとんど営利なので、そういうところは負担が大きいです。１時間預けて1,000円など。半日預けていくらかという世界です。自由に利用できる施設があって経済的負担も少ないければ、皆さんどんどん使うと思いますが。早くできてほしいですね。

（金子）保育所とのすみ分けの問題があるので、おそらく保育所は血眼になって人をかき集めています。だから、そういう保育所でのサービスよりは、たぶんレベルは落ちると思います。

（D）それは当然そうですね。保育所には条件がありますね。私も保育所に預けようと思ったのですが、奥さんが働いていないからだめだと言われました。妻にも自分の時間を与えてやりたいと思うし、私は仕事に行っていて、妻は昼間はずっと子どもの面倒を見て、息を抜く時間がないと思うと、やはり、私が育児参加するしかないかと。私が休みのときは、子どもを私に預けて好きな時間に好きなところに遊びにいっていいと。今までずっとそうやってきました。そういう息抜きの時間を与えたいと思っているので、子育てにはフル参加でやっています。

私が本当にアップアップ状態というか、私が子育てをメインでやっているのかなという感じもしますが、やはり、そういうものは夫婦ですから２人で共有すべきことです。家族の中に起きたことは、夫と妻が協力して克服していくことなので、だれが何をやらないといけないとか、父親は何をやらないといけないとか、そういう考えは今はあまり通らないと思います。やれることは、だれでもやろうと、やっていこうと。そういうことがいいのではないかと。

（佐藤）感想を申しあげると、Dさんの意識は男女の中でもかなり進んでいる方ですね。

（D）私もそう思います。

（佐藤）いつでしたか総理府の調査で、男女が家事分担すべきことに賛成という比率は高かったわけです。しかし、では本当に男性が家事をするかというと、なかなか怪しいパーセンテージが出てきます。そこのギャップは何なのかと。今日は非常に勉強になりました。やはり、Dさんが小さいときから育った環境。地道ですが、その辺からやっていかないと。

（D）それはあるかもしれないですね。小さいときに置かれた環境によって、子育てをするか、妻の育児に協力できるかできないかが、夫の考えの中に徐々に構築されていくのかと。

だから、単身赴任をしている家庭に生まれた子どもは、たぶん子育てをしないのではないかと。父親がほとんどいないから、感覚的にそういう考えの子ができるのではないかと。父親が子どもに対して面倒見がいい家ならば、男の子どもがいれば、その子は子育てに協力的な夫になるのではないか。だから、父親が子どもに与える影響は、重要ではないかと思います。

（C）今のお話を聞いて、一人息子がいるので、自分のことをできるように言ってきたつもりですが、やはり、そういう意味でももちろん教えていかなくてはいけないと思いました。

また、地域のサポートは、あった方がいいと思います。うちはある程度大きくなっているので、さほどお世話になることはないかもしれませんが、やはりあった方がいいと思います。特に保育園は、お母さんが働いていなければ受付もしてくれないこともあります。年収でも月謝が上下すると思います。そういうことも少し考えればいいのではないかと思います。地域で子育てが終わったおじいちゃん・おばあちゃん、おばさん・おじさんがいてと。ただ、個人的には非常に難しいと思います。ご近所ならご近所で、近ければ近いほど難しい問題はたくさんあると思うので、その辺は考えて。個人的に本当に信頼があって預かるのは別でしょうが、個人的に何か始めてというよりは、きちんとしたところが管理してと。全くのボランティアの方が預ける人はいいですが、やはり多少お金を払った方が預かる側の責任も出てくるという気がします。

人間性の問題とは思いますが、子どもを預ける側として、資格というよりも、信頼のできる人を見極めて集めて、そういう人がきちんとしてほしいと。今いろいろ託児所で事故があったりするので、親としては本当に安心できるところを望みます。

（B）私も、そういうものが地域にあればいいなと思います。以前、新聞で読みましたが、北海道のどこかだと思いますが、自分が空いている時間に自分ができる仕事をして、それをチケットで貯めておいて、自分が何か困ったときに地域でそれを使って助けてもらうという制度があるそうです。あるお母さんが、自分がガンに冒されて自分の娘に子どもが生まれるときに助けてあげられないから、自分の体は苦しいけれど、自分のできる仕事をしてチケットとして貯めておいて、それを娘に託したという話を読んで、すごいなと思いました。私の住んでいるマンションでも、隣の人はどうい

う人か知ってはいますが、行き来したりする仲のいい友達まではいません。もちろん困ったときに助けてもらえる間柄でもない。空いている時間に自分ができることをして、困ったときに助けてもらえるという制度があれば、すごくいいと思います。お金だけではなく、自分ができることを自分ができる時間にして、自分が困ったときに助けてもらうことによって、協調性や隣の人たちがどういう人かもわかってくると思います。そういう制度が実際にあるのは確かだと思います。そういう制度が広がっていけばいいと思いました。

(A) 皆さんのお話を聞いて、本当にそういう制度があればいいなと思いました。やはり望むばかりでなく、自分たちでできることをお返しするという。将来、私たちが年寄りになったときも、そういうものがあれば…。もちろん少子化が進んで高齢の方が非常に増えればそれはそれで困るのですが。地域の密着性の希薄さが、私の近所の小学校のＰＴＡ活動などでも問題になっています。公園にも危なくて一人で遊びに行けないという状態が続いています。学校の砂場に覚醒剤の注射器が落ちていたと、そういう時代なので、どこに誰が住んでいるのか知った方がいいということで、学校側でも考えるようになりました。地域の方で何かちょっと教えられるようなことを持っている方を学校の授業に呼んだり、お年寄りと交流会をしたりするのですが、それに加えて、困ったときに助け合えるような機関ができればいいと思いました。

それと、昔より子どもが減っているから当然ですが、子どもが行ける場所が少なくなっている気がします。お年寄りが行って何かする場所は多くなった気がしますが、子どもたちだけで遊びにいける安全な場所が減ってきた気がします。それを最近、私はとても思います。子どもたちだけで外に出せないと思っています。

(金子) それはいたちごっこです。例えば、産婦人科と小児科がどんどん減っています。子どもが生まれないから、医者が開業しても成り立たないので、ますます産婦人科と小児科の開業医が減っていく。子どもを産んだ人は、非常に育てにくくなっている。同様に、老人は増えているので、たくさんの施設をつくらないと選挙で議員や市長は負けますから、そちらの方にお金が行くのです。子どもはどんどん減っているので、それは後回しだと。ますます子どもにとっての施設が乏しくなるわけで、いたちごっこです。子どもがどんどん増えれば、そちらの方にもお金を使わないと、親の方が文句を言いますが、今はどんどん増えているお年寄りの意見の方が強いわけです。限られた予算の中で地域の施設をつくるとき、例えば高齢者の福祉施設をつくるか、子ども向けの遊びの施設をつくるかという二者択一の場合、今は残念ながら高齢者向けになりがちです。だから、いたちごっこでどんどん条件が悪くなって、ますます子どもが少なくなって、ますます施設も乏しくなって、小児科の開業は、地方に行くと無理になっている。子どもがいないから、開業してもどうにものならないという時代に来ているわけです。

(佐藤) 時間になりましたので、グループインタビューはこれで終らせていただきます。皆さん、長時間どうもありがとうございました。

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」
福岡グループ面談(第1回)
日 時 ： 2002年10月26日(土)13:30～15:30
場 所 ： ホテル日航福岡

(金子:司会) 大体６つぐらいの大きなテーマをこちらで用意しておりますので、それに関係するお話をしていただきます。最初に簡単に自己紹介をしていただいて、それから本日の少子化関係のお話を頂戴したいと思います。
(A:30・女・既・共・0) 本日は短い間ですが、よろしくお願いいたします。
(B:36・女・既・専・2) ７歳と２歳の子どもがいまして、仕事の方は看護婦をしているのですが、子どもが小さいので今のところ仕事はしていません。家で専業主婦をしています。
(C:37・女・独・－・0) 私は未婚で子どももいません。市内でＯＬをやっています。
(D:39・女・既・専・3) 小学生の子どもが３人おります。主人が通信機器の会社を経営していて、それの経理関係の仕事を手伝っております。
(E:32・男・既・専・0) 結婚はしていますが、まだ子どもはなくて、私の方は営業の方の仕事をやっています。
(F:34・女・既・共・1) 年長の男の子が１人と、サラリーマンの主人と、私はパートで働いています。
(G:34・男・既・共・2) ６歳と２歳の女の子がいます。仕事は空調関係の営業をしています。
(H:33・女・既・専・0) 結婚して２年ぐらいで、まだ子どもはいません。
(金子) ひとまず自己紹介をいただきましたので、まず事前に厚生労働省から出された「少子化対策プラスワン」という資料を送らせていただきましたが、これは 1990 年代の最初に「エンゼルプラン」というものが出まして、それから1999 年に男女共同参画社会基本法がつくられました。いずれにしても、少子化対策ということも目配りしながらやられてきた中での、第３の少子化対策の政府の基本的な姿勢理念です。

これをざっとご覧になっていると思いますが、ここで最初に言われているのは、男性の働き方を変えなければいけない。どうしても女性に子育ての負担がかかりすぎるので、子どもを産まない、産むとしても１人しか産まない、あるいは、子育ての負担が重たいからということがずっと言われていまして、それにはまず男の方がもっと協力しなければいけない。男女共同参画もそういうことの趣旨ですが、最初に男の働き方を変えましょう、具体的にいうと、もっと短くしましょうと。例えば「隔日勤務」という言葉が使われていまして、例えば１日おきに「月・水・金」とか、ということになるのだろうと思いますが、そういうことや、４時ぐらいになったら早く帰りましょうという、短期就業、短時間の就業というようなことが書かれています。そのあたりから是非皆様方の今のご経験、今の段階でのお考えをお尋ねしたいと思います。

それではまず、共働きをなさって、子どもがいらっしゃらないＡさんから、男性の働き方についてご自身のご経験、ないし会社でのそういう見聞に基づいて、本当にそういうことができるかどうかまで含めて、話を是非していただきたいと思います。
(A) 私の主人は毎日残業でいつも帰りがすごく遅くて、女の人よりも負担が大きいので、そういうふうに時間を短くというのは無理かなという感じがします。一人一人の仕事の量とか任されている量が多いので、時間が足りていない
(金子) 国の方がもっと短くしなさいというけれども、それは基本的に無理だということですか。例えば短期就業や隔日勤務なんていうのは非常に難しいということですか。
(A) はい、そうですね。
(金子) ご自身も今働かれていますよね。その会社でも男性の方々は同じような感じですか。
(A) 私の行っているところは一人一人の負担はそんなに多くはないです。
(金子) ご主人は公務員ですか、民間ですか。
(A) 民間です。私は中央官庁の出先機関でパートで働いています。
(金子) そうすると、そういうところは、やはり勤務するところによってたくさん仕事があるようなところと、５時になったら帰れるようなところがあるということですか。民間の場合は基本的に無理な感じですか。早く帰るとか、仕事を減らすとか。
(A) はい。やはりお客さん相手なので、お客さんの都合に合わせるという感じになるので。
(B) うちの主人は民間で、時間は大体９時から６時とか決まっていますが、残業が多くて、いつも帰るのは９時過ぎとかにしか帰ってきません。残業時間も決まっているのですが、皆さんが残っているから残らないといけないというような感じで早く帰ることはなく、一応週休２日制になっていますが、土曜日に仕事に出たりしていますので、隔日になるということは無理だろうなと思っています。
(金子) 仮に１日おきや、あるいは早く帰れる場合に、収入が同じであるということであればもっと可能な感じがしますか。つまり、今、例えば週に 40 時間働いているとして、それが 25 時間、30 時間になったときも同じような収入だったら短くする人もいるかなという感じでしょうか。
(B) それはできないでしょうね。主人のことはあまりわからないのですが、ノルマというものがありますし、それが達

成できないと会社での出世とかそういうのがあるので、できないと思います。
（金子）ご主人に「あなた、もっと労働時間を減らした方がいい」ということは妻としては言えそうですか。
（B）言ったこともあります。営業所のときはできなかったけれど、支店の方に配属になったら６年前ぐらい前までは７時ぐらいに帰った来たんです。「このごろはなぜ遅いの？」と聞くと「皆が残って仕事をしているから」と言っています。
（金子）男性の方からするといかがですか。Ｅさん、国の方が少子化対策は男がとにかく変わらないといけない。その筆頭は働く時間を変えましょう。具体的には短くしましょうと、早く家に帰れということをいわんばかりのことを書かれているところがあるのですが、いかがですか、自分のことを考えると。
（E）私は営業ですが、営業職の方は勤務時間は決まっているのですが、やはり会社の予算というのがあって、それを達成しなければ、なかなか帰るというのは…。特に月末とかになって個人的には売上とか利益の実績が達成していても、全体的に見れば達成していないという場合が多いので、その場合、１人だけ先に帰りにくい。先ほどの方が言われていた帰りにくいというのはその理由だと思うんですが。
（金子）そうか、両方なんですね。個人のノルマももちろんあるけれども、営業所なり支店全体のノルマがあって、それを達成しないと全体としてやはり本社の方からうまく…。
（E）そうですね、企業の規模によっても違うのでしょうが。小規模な企業の場合は当然毎月の売上も大企業に比べたら低いですし、大体社長もすぐ近くにいるので、ある程度達成していたらもう帰ろうと決裁もするので帰りやすいと思うのですが、拠点がたくさんあるところとなると、全体的に達成しないとその企業としては評価されないので。
（金子）そうすると、残業が増えてもしかたがないんだみたいなことになりますか。
（E）いえ、やはり私も個人的には自分の実績をきちんと出していたら帰りたいとは思うのですが…。外資系とかは、個人的に達成していたらその個人の方は評価される面があると時々聞くのですが、日本の企業は現状ではやはり体質的に個人主義というのはまだ通らないので、会社の体質を変えないとなかなか難しいと思うのですけれども。現状では無理だと思います。
（金子）一つは、国内だけでなくて、国際競争の中で会社は生き残らなければいけないというところがあるので、「そんなに簡単に労働時間を減らせないよ」ということを、偉い人も偉くない人もおっしゃることが多いのです。やはりそういう傾向は今でも強くなったかなと私は思うのですが。
（E）そうですね。私も入った当時に比べて市場が厳しくなって売れないのですが、逆に今までよりも時間は長くなっている。
（金子）働くというか、会社にいる時間が。
（E）どこの企業も市場が下がっているなかで、年々売上アップを必ず達成しないといけないので、時間を延ばせば上がるわけではないとは思うのですが、結局そういう形になってしまう。公務員にしても私は知り合いで税関の人とかを知っていますが、帰るのは朝の３時ぐらいになることもあるようです。役場で５時とか６時に帰る人もいますし、公務員は基本的には早いとは思うのですが、中にはそういうところもあり、その企業の部署や職種によって、帰れる業種もあれば帰れない業種もあると思うので、やはり現状では難しいと思います。
（G）はっきり言ってどう考えてもこれは無理ですね。正直言って、ちょっと公務員的な感覚ですね。民間企業に私も勤めているのですが、例えば先ほどおっしゃったように「月・水・金」ですか。例えばの話ですが、そういったことなんて絶対にできませんもんね。
（金子）我々公務員でもできませんから。
（G）そうですよね。先ほどおっしゃったように厳しくなっている状況と、それからいい状況を考えてみても、会社というのはやはり成長していかなければいけないということを考えれば、与えられた予算とかの部分もありますが、各々個人が日々やっている仕事はどうしても時間が足りないのですね。ですから、「それを短縮しろ」では売上を落とせるかというと、そんなことはできませんから非現実的ですね。うちの場合は建設業ですから労働基準法の関係もあり、３日を超えない間で水曜日を「ノー残業デー」にしているのですが、それでも３分の１ぐらいはなかなかやはり帰らないですね。電気もクーラーも消して、支店長が「もう帰れ」と言ってもそれでもどうしても帰れないという状況もありますので、なかなか難しいなと。
　ただ、その水曜日、たまに早く帰るのですけれども、そのときはやはり子どもと遊んだりとか、「早く帰ってきたんだから、これしてくれ、あれしてくれ」というようなことを言われたりとか、やっていますけれども。たしかに早く帰れば妻の負担は当然軽くなるのだろうなとは思うんですが、今は共働きなんですけどね。
（金子）札幌でそういう話をしたときに、「早く帰ってきてもどうせ手伝わないんじゃないか」というご意見も結構ありまして、「パチンコ屋か何かに行くのじゃないか」という奥様もいらっしゃったのですが。
（F）うちは大体７時前後に帰ってくることが多かったんですが、ときどき仕事で重要なものを任されたりすると、９時、10時と時間に関係なく残業が増えて、最近も毎日私が子どもと一緒に休んでしまう時間に帰ってきています。でも、私から見ていると、遅く帰ってきてはいるんですが、何かすごくやりがいを感じて一生懸命にやっているような気がするんですね。だから、嫌で嫌でたまらない仕事をやっているようではないふうに見えるので、早く帰ってきたら逆に頑張ってないのかなと思ったりするんですけど。

労働時間を短くというのは無理という話も出ましたが、昔は週休２日というのも、「そんなのは考えられない、無理だ」というような時代がたしかあったと思うんですね。でも、かなり定着してきて、学校とかも週休２日になった関係で、私の周りのパートの方たちもほとんど週休２日で休んでいる方が多いですね。だから、やはり少しずつでもそういうふうに何か変えていこうという…、どこかに煙が立たないと、いつまでもやはり今と同じ現状で、皆の考えを少しずつどこからか変えていく必要があるのではないかなとは思いますが。

（金子）その一つとして、男性の働き方を見直しましょうと、一応言われてはいるのだけれども、私も含めて男性の方からすると、「いや、そんなに早く帰ったって、仕事量を減らしたって」という気持ちが結構強いので、なかなかそのあたりギャップがあるような気がしますね。

（F）私が行っている会社は金融機関で週休２日なんですが、週休２日の他にさらに毎月必ず休みを取りなさいという指導があって、一応は皆取られるのですが、「休み」と書いて私服で出てこられるんです。「電話があっても休みだから取り継がないで」と言って、自分の何か内部の仕事をされています。それが何かあたりまえになってしまって、最初見たときはすごく驚きました。

（金子）それは男性社員ですか。

（F）ええ、男性社員です。女性は休まれていますね。

（金子）時間の関係で、６つぐらいありますので、少しずつテーマを変えさせていただきます。

もう１つは、働き方を見直しましょうということと同時に、地域の中でできるだけ皆が助け合って子育ての負担を軽くしましょうというようなことを書かれています。それで、特に地域の中でという場合には、今日専業主婦の方が何人かいらっしゃいますから、一番身近なところでお感じになっていると思うので、Dさん、いかがですか。地域の中で子育て支援ということを仮に具体的に考えるとすると、どういう支援がほしいですか。あるいは、いらないですか。

（D）性格的なこともがあるのですが、私自身はその地域の支援うんぬんがすごく面倒だし、近所付き合いとかそういうのも面倒だというのがありますね。だから、極力近所の人とそういうプライベートで付き合いたくないというのがありますね。子ども会とかがあって、建前上「子ども同士が喜ぶから」とのことで「何時に必ず集合してください」と言われるのですが、実際に子どもは喜んでいるかといったらそうでもないんですね。やれ塾だとか、やれお稽古事だというのがありますから。だから、そんなのは私はうさん臭いというか、いらないと。

（金子）お子さんは何人いらっしゃいますか。

（D）３人です。

（金子）では、３人全部お一人でお育てになっている。

（D）近所付き合いが全然なかったわけではなく、気の合うお友達とか、気の合う幼稚園のお友達で助けたり助けられたりしています。隣だから助けてとか、近所だから助けてとかいうのはなかったですね。

（金子）それは、例えばお子様同士のお友達のお母さんと一緒にという、何々ちゃんのお母さんとという助け合いですね。一般的に地域での子育て支援とかではなくて、自分で作っていくわけですね。そちらの方がお互いずっとやりやすい。

（D）そうですね。だから、自分のプライベートなことを知られたくない、しゃべりたくないのに、近所の方からグワッと入ってこられるというのはすごく私自身は嫌だったから。

（B）うちは転勤族なので、知らないところに引っ越したりするわけで、そういうところで、その地域の方の助けがあったら、私の場合はうれしいなと思います。

（金子）今までそういう経験が特にありますか。

（B）育児が嫌になったりするんですよ。近くに祖母とかがいなくて自分ひとりで育てているので。そんなときに地域で託児付きの講演とか、話を聞くものとかがあれば、そこに託児で預けて自分だけストレス解消をしたり、そういう場が多ければ私の場合は助かるなと思っています。現実に２時間ぐらいですが、託児付きの講演会を聞きに行ったりしています。

（金子）Dさんみたいに、何々ちゃんのうちのお母さん同士という、そういう付き合いでの支え合いというか、それはいかがですか。

（B）小学校になったら授業参観とかに行くぐらいで、なかなか親と親のつながりがないですね。その場にずっといるんだったら仲良くなるのだろうけど、引っ越しが多いもので、お母さん同士で仲良くなったりすることがなかなかないですね。下の子が２歳なので、その子の友達をつくってやろうと思って、公園とかに行ったときに知り合うお母さん方はいますけど。

（金子）それは単なる知り合いみたいな感じで、何か助けるような関係まではいかない。

（B）預かったりとかは、まだ越して来たそんなに経っていないので。それで、もうそういう関係になるころにはまた転勤して。

（金子）Hさんはまだお子さんはいませんが、そういう地域での子育て支援みたいなものをシステムとして少しずつは作ろうという動きに対してもしお子様ができたらという仮定で言うといかがですか。

（H）今は主人と２人で暮らしていますが、主人は銀行に勤めていて帰りが遅くて12時過ぎになることもあります。そ

れで一人でいることがずっと長くて、これでもし子どもが出来たら一人で育てる形になってしまうので。親も北九州で近いのですが、そんなに頻繁には来てもらうこともできないので。だからそう考えると、そういうのがあれば私は助かるというか、気持ち的にもちょっと救われるかなというのはあります。

結婚する前に私はカナダに住んでいましたが、託児所とか育児サークルみたいなものが充実していて、お母さんが育児をしているとストレスが溜まるということで、ちょっと子どもを預けて買い物に行くというのも結構していました。例えば１時間預けて300円とか、安くて気兼ねなく皆預けているので、もしそういうシステムが日本にあれば、近所に遠慮しながらとかいうのではなく利用できるのかなと思ったりします。ちょっと理想論ですが。

(金子) むしろお金で、300円ぐらいずつならそっちがいいと。

(H) ただ、そういうのもあって、あと地域の公民館とかで育児サークルというかたちでのもあり、その二本柱を自分でチョイスできるようになっているので、日本の場合は制度的にそういうところがやはりちょっと今まだ足りていないのかなという感じはあります。

(金子) 札幌の事例ですが、有料の在宅支援サービスの組織をつくったんです。それは基本的には高齢者向けのサービスを提供するという家事援助とかそういう意図だったのが、実際は４分の１の仕事はベビーシッターなんです。結局、今おっしゃったように、お母さんがちょっと何か一時的にとか、あるいは夫婦で演劇やパーティに行ったときに、そこへ頼むと大体40代後半から50代の女性が、在宅に入りこんで２～３時間は面倒をみる。その代わり、時給は1,000円とか何かそういうお金を払ってというのが民間でやっているわけですけれども。それは少子化対策のつもりでやったわけではなくて、高齢者対策のつもりでやったら、気づいてみると４分の１のニーズとしてベビーシッターの仕事が発注されるので、それなら少子化対策としてそっちを少し増やそうかというところがあるんです。男性からするといかがでしょうね。

(G) 今のお話はすごくいいと思うのです。というのは、私も転勤族で、出かけるとかそういう部分はまだいいとしても、困ったときは結構あります。特に子供の病気ではなくて、母親が病気したときですね。親戚もいませんから、こういったときはどうしようもなくて、仕事を休むか、困ったなということが何回もあったものですから。保育園の送り迎えもできないですから、今の話のように来てもらってやってもらうということができればいいですね。先ほどの話ではないですが、安く（笑）。東京にいたとき一時的に預かっていただくところがあったのですが、民間ですから価格が結構高いですね。安くなるとそういう企業にとってもやはりいろいろ影響もあるのでしょうが、そういうのがあると非常に助かるし、少子化対策という意味からしても結構いいんじゃないかと思うんですが。

(金子) ニーズがもし一定程度あれば、公的資金をそこへ少し投入しでても、そういう支援体制を作るという手もないことはないかもしれませんね。例えば時給で2,000円のところを、1,000円は補助するとか、何かそういうことがあればもっと使い勝手はよくなるだろうという気はしますね。

Ｅさんはいかがですか。そういう他人が家に入り込んで子どもさんだけを２～３時間面倒をみるということに対して、父親として抵抗感とか、そういうのがあるでしょうか。というのは、ホームヘルパーさんの場合は、依然として嫌だという方がいらっしゃるわけです。他人が入ってくるのは嫌だと。

(E) 保育園とかでも事件とか起きている場合もあるので、どういう方が来られるかわからないのは結構気にされる方もいると思います。どちらかといえばやはりそういう施設みたいなものがあった方が、皆さんも安心して利用されるのではないかなと。

(金子) その施設というのは、やはり公的な施設ということですか。デイサービスみたいな、高齢者向けでいうとそういうちゃんとやるところを、お子様サービスみたいな感じでもっと公的に整備していくみたいな。

(E) そうですね。

(金子) 札幌では子育て支援センターみたいなところを置いて、少しずつ増やそうということを始めています。ただ、区に１つぐらいしかできないので、福岡市でいっても、東区といっても和白もあるし、箱崎もあって結構距離が離れていますので、なかなか１カ所ではすまない。では２カ所とか３カ所いるのかといっても、だれが負担するのかという話になって結構厄介な話ですけれども。

(E) そういう施設もあると同時に、遠くの場合は来ていただけるという、その個人個人によって選択できるような体制がとれていたらいいですね。いろいろな事情の方がいると思うので、選択ができるように。

(金子) 選択の機会がとにかく多い方がいいということですか。何人も言われているのですけれども、つまり、あれを選んでもこれを選んでも、いろいろ事情によって使い分けられるような子育て支援であればよろしいみたいな、そういう感じでしょうか。

(E) そうですね。それと先ほどの勤務時間についても大体夜遅くて奥さんが一人でやっているというのが多いので、何かそういう集まる会とか、相談できるところがあればいいかと思います。私も赤ちゃんがいる友達は誘いにくくて、なかなか会うというのもできないことが多いのですが、そういう公的な機関があれば苦労が少し減るから、少子化にちょっとだけでも歯止めがかかるということもありますが。

(金子) Ｄさんは先ほど、何々ちゃんのお母さん同士で何とかやってきたみたいなお話でしたが、そういうような、今話題になっているようなことはいかがでしょうか。

(D) そうですね。あくまでも何々ちゃんのお友達というのもラインを引いていまして、余ほどの時はちょっと子どもを預けたりするのですが、やはり事故が起きたりしますよね。そのときにだれがその責任を取るかということまで考えたら迂闊に人に預けられないです。預かるのも嫌ですし。今は小学生ですから自分でお留守番もできますが、幼稚園の頃はやはりどうしても一人でお留守番ができないので、民間ですが1時間500円のところがあるので、そこをたまに利用したこともあります。
(安梅) そういうところでも事故は起こりますよね。
(D) 何か事故が起きても、もしかしたらそこが保険に入っているとか、損害賠償ではないですが、もしそういう事件になったときに言えるじゃないですか。でも、仮にお友達とかだったらもう…。どうかな、言えるかなというのがありますね。
(金子) お友達同士だったら、ちょっと怪我させられたりしても、それは仕方がないかみたいな、そういう感じになりやすいですか。
(D) 母親同士でいくら仲良くしていても、預かって「ちょっとおでこをぶつけたのよ」といっても、やはりすごく心配して、「私が悪かったのかしら」みたいな感じに最後はなるので、最終的なことまで考えると、預けたり預かったりは…。
(金子) 基本的には自力路線ですね。
(D) そうですね。基本ではもう自力でやっていこうというのはありますね。
(金子) それはやはり専業主婦をなさっているから自力路線がある程度できる。これが共働きだったら、なかなかそれは難しいですか。
(D) そうですね。私は保育園に入れたことがなく幼稚園なんです。だから、保育園は時間帯が長いから、ちょっと事情が違ってくるのではないかなとは思いますが。
(金子) Bさん、いかがですか。今話題になっているような、傍からの支援ということは。
(B) 福岡にも1時間700円で支援センターみたいなものがあるんですよ。その支援というのは、福岡市でやっていて講習を30時間ぐらい受けた人が子どもを預かるんです。それで、その個人の家で1時間とか2時間とか、お迎えだけの時間帯とか預かっているのですけれど700円でも高いですね。もっと安くなれば利用しようかなという気にもなるのですけど。
(金子) いくらぐらいだったらよろしいですか。
(B) 先ほど言われた300円とか400円ぐらいだったら気軽に預けられるのですが。
(金子) 2時間でも、それこそ1,000円でおつりが出ればいいという感じですか。
(B) はい、そうなんですが、700円となると。自分も仕事をしていれば良いのでしょうけど、何かそれが高くて預けられないというのがあるんです。
(金子) 男性の側からするとそういう料金についてはいかがでしょうね。
(G) そうですね、今、最低賃金が時給730円ぐらいですかね。やはりそれをベースで公的な資金導入というのか、その辺のバランスを考えてもらわないと。うちの家内もよく先ほどのように料金のことを言いますね。預けないで、自分がみた方がいいかなと。あれはたしか紹介を受けて、電話で依頼する手間暇かける必要もある。うちも何回か利用したことはあるのですが。
(金子) 自分で連れていく場合と、それから来ていただく場合と。それで民間の場合と、半分は公的なところといろいろつくられていて、とにかくもう少し地域ぐるみで子育てを応援しないとうまくいかないなという、人の問題、制度の問題を全国的にも今やっているんですけれども。

もう一つ世代の協力ということで言うと、今も出たように、やはり最後はお金の問題になる。お金があれば、例えば700円でも半分の補助があれば、350円で雇える、頼めるということだったらいいよと。ただ、その場合の残りの350円は税金でやるのかやらないのか、あるいは別枠を作るのかという議論がボチボチありまして、それを今、特に独身の方も含めてお尋ねしようと思うのですが。

介護保険は皆さん方はまだ30代だから関係ないのですけれども、一応40歳を過ぎると自分や配偶者に親がいてもいなくても、札幌の場合では2,900円ぐらい毎月給料から引かれるわけですね。それは自分の親には行かないかもしれないけれども、めぐりめぐっていく場合もあるし、親がいなくてもお隣の、お向かいの親に若干行くわけです。それは今の我々の40~50代の働いている世代が、70~90代の人を支えるという、そういうお金ですね、保険ですから。

それを今度は逆に、働いている人も働いていない人も、例えば30歳を過ぎたら子どもを育てている人たちのために、介護保険と同じような理屈で何か「子育て基金」みたいなものを作って、例えばBさんが時給700円かかるんだったら、そこに預けるときに「350円はそこから補助しますからどうぞお使いください」みたいな、そういう制度が作れればもっと子育てしやすくなるのではないか。そういうことを私は言っているわけですけれども。その世代間の協力というか、その場合の一つの理念は介護保険の、40歳を過ぎたら皆とにかく親がいてもいなくても2,900円毎月払う。だから、今度は子育ての場合は、30歳を過ぎたら例えば2,000円ならば2,000円、いてもいなくても、結婚していても独身でも、とにかく次の世代のために払うというようなことを私はずっと言っているわけです。そういうことに対してお尋ねしたいと思いますが、そういうことが仮に具体的になったときにどういうふうにお考えでしょうか。

(C) 私も将来的に子どもを絶対に産まないというわけでは今のところないので、自分にめぐりめぐってくるんだったらしょうがないかなという感じはしますけど。でも、やはり給料もかなり少ない状況なので、独身だったら控除とかも全然ないので、税金とかもいっぱい取られている状況で、さらに負担が増えるというのはちょっと「うーん」と。だから、お子様がいらっしゃる方といらっしゃらない人で負担が違うとか。

(金子) 例えば1,000円と2,000円にするとかね。

(C) そうですね。そういったことをやっていただければちょっとまだ出しやすいかなという気はします。

(金子) そういう考え方についてはいかがですか。つまり、40歳以上の人は親がもう死んでいてもとにかく介護保険を払うわけですね。だから、子どもを産まなくても産んでも、とにかく一定の年齢以上になったら次の世代のために1,000円、2,000円払うというような発想の仕方ですね。

(C) 結局年金とかも次の世代が上の人の負担をしているということになるので、私たちがその年金をもらうときにはその下の世代の人が働いてくれるというふうになってくるので、そうだったら次の世代の人の援助をちょっとはしてあげないといけないのかなという気はします。

(金子) そうですか。Aさん、いかがでしょうか。まだお子さんがいらっしゃらないけれども、仮にそういう制度が何か議論の対象になった場合に、どんなふうにお考えですか。

(A) 2,000いくらとかになるとやはり「えっ」と思うのですけれども、ほんの少しだったらいいかなと。例えば1,000円以内だったらそんなに負担にならないかなと思うんですが。

(金子) そういう考え方はいかがですか。

(A) そうですね。年金もそうですけれども、貰えるか貰えないかわからないのに払っているというのはやはり嫌なように、それも「なんで自分が払わなくてはいけないんだ」と思う人もすごく多いと思います。

(金子) 特に子どもがいない人はね。でも、1,000円ぐらいだったら何とかなりそうな感じですか。

(A) そうですね、はい。

(H) 私は、払うべきかなと思うのですが。税金を使い道のわからないところでたくさん取られるよりも、こういう形で使い道がはっきりしているものに関してはやはりもっと支援するべきと。だから、こういう形で税金を払うんだったら私は賛成かなと。

(金子) 税金というか、私が言っているのは介護保険のような、税金ではないんだけど、とにかく何か気持ちだけでも次の世代を支えるためにした方がいいんじゃないかということを、介護保険と同じ理屈で言っているんですが。

お子さんのいらっしゃる側からすると、そういう話があったらいかがでしょうね。

(B) 子育てするのに少しでも楽にできるようになれば払ってもいいと思います。

(金子) ご自身はもうお子さんがいらっしゃるから、問題はやはり独身の方とか、子どもがいらっしゃらない人からも少し出してもらったらいいではないかということを私は言っているわけですけれども、そういう考え方についてはいかがですか。

(B) 出していただけるのなら、年齢を決めて。

(金子) 例えば30歳以上とか、適当な年齢で切って、介護保険は40歳以上ですけれども。

(B) いつかは子どもを持たれる。持たない人もいるかもしれませんけれども、持っていない方も値段は違ってもいいので、出せるようになったらいいかなと思います。

(金子) 例えば先ほどの700円を400円にできる。あとの300円はそちらから何かが来れば、それは非常に頼みやすいですね。そういうところへまた働く人も増えるでしょうし。

Dさんは自力路線でずっとおやりになっているわけですが、そういう制度についてはいかがですか。

(D) 社会保険も厚生年金もどんどん毎年上がっていくでしょう。私は全額会社の負担とかではなくて、全額自分で払っているから分かるのですが、介護保険も今はこの比率ですけれども、また毎年毎年上がっていくのではないかなと。30代、40代の人が一番お金がいるじゃないですか。住宅ローンを抱えていたり、教育費とかにもかかると思うんですね。それなのに、なんでまた払わないといけないのかとか、そういう考えですね、私は。

(金子) 私も娘が今2人大学生なんですよ。4月に、あっと言う間に150万円ぐらいいるわけですね、入学金と授業料と。大体それは、子どもがいるから必要経費としているわけで、いなければゼロなわけです。子どもを育てていなければ、その150万円も何もいらない。そういうふうな不公平感というのが結構強くなっているような気がします。子供さんは小学生ですか。

(D) 小学生ですが3人私立なんですよ。だから、結構お金がいる。それは私が選択したことですから致し方ないのですが。でも、やはりあれもさせてみたい、これもさせてみたいと考えると、なんで国にまたこんなに税金を払わないといけないのかと思ってしまうんです。皆から徴収するばかりでなくて、もっと予算の組み方とかがあるんじゃないかなというふうに。

(金子) 男性側からするといかがでしょうね。今の新しい制度、介護保険に似たような子育て基金のような話は。

(E) 話としては一応そういう制度も、多少引かれる分だったらいいかとは思うんですが。

(金子) 使用目的がはっきりしていればと、先ほどHさんがおっしゃったように。

(E) そうですね。今も毎月給料からいろいろな税金が引かれていますが、実際に何にこれだけ使われているのかよくわからないので。
(金子) 新聞ではときどき、防衛費に10%とか、いろいろ出ますね。公共事業に何とかとか。だから、とりあえずは平均してみると、1万円払っているとすると、1,000円が何とかで、2,000円は何とかでという、それはあるようですけれども、ただ知らないだけで。
(E) 会社でも組合費というのがあるのですが、強制ではないので、入っている人と入っていない人で、何のために払っているのかなというのが結構あって。実際何に使われているかという、そういうきちんとした金額とかが明確に出ていて、個人的に普通考えたらそんなに負担にならない金額だったら、引かれてもいいかとは思うんですが。
(金子) 新しく制度を作っても何とかなるかなと。
(E) そうですね。逆に今引かれている部分で減らせるところがあったら、逆にそれから減らすような形で、帳尻が合うような形がもしできるようだったら、それでもいいかと思いますし。
(金子) 「少子化対策プラスワン」が9月20日に出てから、ちょっと風向きが変わったと思うのは新聞で、今まではとにかく「個人の自由なんだから子どもはいてもいいじゃないか」みたいなことを書いていたんだけど、何かやはりそれだけではうまくいかないということを書き始めて、例えばフランスがお手本で、「フランスは子どもがたくさん生まれるような家族政策を実行しています」という記事が載るようになったんです。これは明らかな変化ですが、ただその場合に休業すると日本の場合は大体育児休業は4割ぐらいが最長1年間ですかね。2年目に入るともうゼロですよね。フランスの場合は8割出るとか、いいことがたくさん書いてあるわけです。ただ、負担の問題が書いていない。例えば消費税は20%を超えるわけです。だから、私はいつも尋ねるのは、私も含めて、消費税は今5%ですが、20%の社会を「うん」と言うかどうかです。私はなかなか言いたくないなと思うし、皆さん方もたぶんそうだと思うので。そうすると、そのやりくりの幅が非常に限られてくる。軒並みうまくいっているところは、負担率が高いわけです。日本の負担よりも2倍ぐらい負担しているところが多いです。そうすると、当然戻ってくるお金も多いと。
今5%の消費税だけれども、25%ぐらいにすると育児休業、育児休暇を取っても給料の8割ぐらいは戻ってくる。2年目もある程度来るという制度がフランスにあって、それを紹介するわけです。だけど、日本では到底それは不可能で、なぜかというと、それだけ負担していないからという理屈があるんだけれども、それほどやってもやはり子育て支援のために負担を国がカバーする制度を作った方がいいか。そういう選択をそろそろしないといけない時期だろうと思うんですけれども、ご自身で今以上の負担、例えば給料から引かれる分の税金は変わらないとしても、物を買ったときに20%ずつ消費税がつくという社会に日本がなるかどうかですね。
(F) 私はどちらかというと、今の考え方に賛成です。
(金子) 賛成というのは、少しぐらい負担が増えても仕方がないというか、いいというか。
(F) その給料から引かれるというのは、やはり子どもをいるいないで不公平が…。私はいますが、まだいない方にすれば納得いかないんじゃないかな。
(金子) 子育て基金みたいなものを作ることがですか。
(F) ええ、それよりは消費税を上げて、そういうふうに負担をしていくと、自分の無駄使いも減るかもしれません。
(金子) なるほど、その別枠の基金ではなくて、消費税を増やして、そのうちの例えば5%分ぐらいを使用目的をはっきりさせるみたいな、福祉目的税みたいな感じだったら納得いくわけですね。でも、その20%というのは、徐々に上げていくにしても、20%の社会に耐えうるというか、周りをご覧になっていて、それでいいという人がいるだろうか、相当大変ですよね。
皆さん方がたぶんヨーロッパの福祉は充実しているとおっしゃっている、そういう国々のすべてが消費税20%を超えています。所得税も高いのです。だからうまくいくという理屈は、私どもはよくわかるわけですが、新聞やテレビはあまりそういうことまでいってくれないので、「日本と同じ負担でなんであそこの国がうまくいっているのよ」と思っている人が結構多いわけです。でも、そうではなくて、ポケットに5万円と10万円と入っていれば、それは10万円の方がずっと使い勝手がいいに決まっているわけです。でも、我々は5万円しかないのだというところから何かものを考えた方が、日本人に合うのかなということなんですが。
Gさん、いかがですか、働いている方側からすると。
(G) 私は先ほどの消費税のアップというのは、これ以上いわゆる需要が減るということに関してはまず無理だと思います。
(金子) そうか、会社の立場からすると。
(G) ええ。ですから公的資金ということに関しては、私も官公庁の仕事で食っていますから、いわゆる道路財源ではないですけれども、ああいったものもやはり必要な部分と思っています。先ほどの話にあった、いわゆる介護保険に似たような形のものもそうです。
ただ、年齢制限に関しては、30歳以上ではなくて、その割合をきちんと決めて、いわゆる成人になったら、もしくは仕事をする立場になったら、社会人になったらということで、数の原理ではないですが、徴収という形ですべきではないかなと。なぜ30歳なのかということにもなると思うんですね。若くして子どもを持たれる方もいらっしゃるでしょう

し。

それで徴収した分で、少子化対策ということがテーマであれば、やはりたくさん子供をつくれば、いわゆる金銭的負担は軽くなるのだということがいろいろなところで反映しないと。例えば先ほど言ったようなネットワーク作りとかいうのもいいですが、もう目に見えて電車に乗るのも安い、遊園地に行っても安いとか、そういったものがないと。子どもを預けるにしても、「１人預けるよりも３人預けた方が安いですよ」というようなことになれば、やはり頑張って子どもをつくる、というのは冗談ですが、少子化対策にはなるのではないかなと常々思っています。今子どもをつくるとお金がかかるというのがあたりまえですから、「子どもを数多くつくるとちょっとは負担が違うんですよ」というようなことにならないと、お金の使い道という意味では少子化対策にならないんじゃないかなと思うんですが。

(金子) 多いほど個人負担が少なくなるというふうに逆な形になれば、たぶん相当違いますよね。一方でそういうふうな意見と、それから、「だけど、個人の自由だから、別に私の人生は私だけだから」みたいなところがあって、産む産まないの自由ももちろんあるし、産めない人もいらっしゃるし、そういうことまでやるべきではないという意見も結構あるわけです。

ですけれども、とにかく働いておられる方はよくお分かりと思いますが、子どもが少なくなるということはマーケットが萎み、マーケットが萎むと、企業の業績は大体落ちてくるわけです。企業の業績が落ちてくると、必ずリストラが始まって失業者が増えるわけです。これはどこでもそうなのですが、それを一定程度食い止めるためには、やはり社会全体で子育て支援ということを考えていかないといけないのだろうなということを常日頃言っているわけです。

そういうことと、それから自分の老後をどういうかたちで支えるか。何人かの方から年金の話が出ましたが、今一番リッチなのは70～80代であって、それは我々みたいなたくさん生まれた世代が支える側にいますから。だけど我々がそういう年代になったときは、支える側はもっと少ないですから、どうしても逆三角形になって非常に大変な目にあう。だから老後の問題を考えることと、子育ての問題を考えること、社会的な負担を考えることは同じなのですね。

それで、ちょっと話を変えますが、自分の老後のことを、例えば個人年金とか、そういう形で何かお考えになっていますか。

(H) まだ結婚して２年ぐらいですので、先に家のこととか考えるので、そこまではまだ具体的には考えていません。でも私は今33歳で、子どもをつくるかどうかという話はよく主人とするのですが、子どもを持っている友達の話を聞くと目に見えてお金がかかるという現実があります。今では子どもが少なくなっていて、支える側としての数が圧倒的に少なくなっているので、自分の老後は自分でみないといけないようになってくると思います。そういうことを考えると、子どもに支えてもらうのではなく、自分たちで支えるのだったら、子どもを産むのも考えないわけではないけど、「２人でこのまま生活してもいいね」という話をしたりすることもあります。

(金子) そうですね。子どもを産んでも子どもが支えてくれることはまずないですね。個人的に、親子関係で支えるという時代ではないので、それは介護もそういう方向をやめましたから。子どもが親の介護をする時代ではない、皆でやるということにしましたので、それはそのとおりなのですが。例えばご主人が子ども向けの仕事の会社とか、そういうことではないですか。

(H) いえ、銀行です。

(金子) 子どもが減ったことによって業績がどんどん落ちているところがたくさんあるわけです。ですから、自分たちは自己防衛できるかもしれませんが、会社自体がうまくいかないということが多々あって、気づいてみたら窓際になるとか。窓際で止まればいいけど、外に出されるという危険性があるので、そういう判断をどういう形ですればいいのかよくわかりませんが。

(H) 今、実際どれだけかかるのかがわからないから、怖くて産めないという。

(金子) そういう方が多いですね。私みたいに大学生の子供が２人いますと、あっという間に150万円なくなるというすざましい世界ですから。それはもう3,000万円はかかりますね。

(H) 自分の親にしてもらったことが、実際自分の子供に100%できるのかみたいな思いもあって。

(金子) だけど、それをもし全員がやらないと、それはもう社会、企業も何も成り立たないということはもうはっきりしていますから、そのあたりは、べつに社会のために子どもを産むわけではないんだけれども、何かそういう理屈がどこかに、社会性みたいなものがやはりないとうまくいかないかなと思います。

私の友達で乳業メーカーに勤めているのがいて、ミルクが売れないというのです。当然ながら、それは飲む子どもが減るわけだから。その代わりおじいさん・おばあさんは増えているけれども、ミルクを飲まないからどうにもならない。気づいてみるとそういう子どもが買って支えられていたという商品はたくさんあるわけです。そういうところに勤めている人は死活問題だなという気がするのです。だから、どうしても個人のところでの子どもなんだけれども、気づいてみると子どもというのは社会の構成員としてしか位置付けられないところがあって、なかなか難しいかなと思うんですけれども。

Aさんから順番に、ご自身の老後というか、老後はだいぶ先だけど、個人年金などをお考えになっているか聞いてみたいと思います。

(A) 今のことで手いっぱいで、先のこととか考えられない状態です。

（金子）その手がいっぱいというのは、今の場合子どもがいらっしゃらないので、仕事の面で手いっぱいですか。
（A）仕事というか、今の生活を維持するので、もう先のこととか考えられないという感じで、個人年金とか、そういうことは全然まだ考えていません。
（B）子どもにかかるお金と日常生活で使うお金で精一杯で、個人年金もしたいという気持ちはあるんですが、そちらに回す余裕がないので、今のところは私もしていません。
（金子）教育費とか住宅やそういうことの方が優先されて、結局自分の老後まで目が行かない。
（B）はい、まだそういう余裕がありません。
（C）私は個人年金に入っています。私はいろいろ派遣社員とかやっていて正社員の時期があまりなかったので、厚生年金の受給資格がはたしてあるのかということと、まだ結婚していないので、とりあえず自分の老後は自分で見なければいけないかなというのがあって、ちょっと前から年金に入っています。
（D）厚生年金はもうも貰えないものとの前提で、個人年金には１つ入っています。だから、その年金だけに頼るんじゃなくて、年をとってからでも収入を得る仕事があればと思って、今ちょっとスクールとかに通っています。
（金子）厚生年金を諦めてと言われるけれども、ご主人はもちろん給料から取られているわけですよね。それは別に支払いをしていないわけではなくて、戻ってこないので。
（D）戻ってこないし、もう破綻しているというのが新聞を読んでもわかるじゃないですか。私も払っていますが、給料から引かれるから払わないわけにはいかないし。
（金子）それで個人年金にもお入りになった。それはご主人もそうですか。
（D）いえ、一応主人と相談して私だけ入っています。主人は年を取ってからでも何とか食べていける人なので（笑）。
（金子）そうですか。男性からするといかがですか。当然、年金分はもう引かれているわけだけれども、年金制度に関しての不安というか、不信感みたいなものはおありですか。
（E）そうですね。実際、今会社を回っていても結構倒産とかもあるし、有名なところでも潰れているから、今後自分の会社も潰れることはないとは言いきれないと思っています。実際、それをあてにしていたら、将来的にはちょっと不安な面があると思っています。今は子どもがいないので、実際レジャー費とか、そういういろいろな面を省いた分を、できる範囲内で貯蓄しているぐらいが将来的に考えている分ということです。
（金子）奥様は今のところは専業主婦ですか。
（E）そうですね。１年ぐらい前までパートをやっていたのですが今はもう辞めています。
先ほどHさんが言われていましたが、子どもをつくるか、このまましばらくまだ２人でいるかというのをちょっと話しています。ただ、将来的には歳を取って２人だけというのも、私の親とかも見ているとやはり子供がいた方がいいのだろうなという感じもしますので、その点は今ちょっと考えているんですが。
（F）私ももう 10 年以上個人年金に入っていますが、一番最低しか払えなくて、だんだん主人の収入が増えるに従って増やそうと思って入ったのですが、ずっとそのまま増やせずに、月にほんの数万円かしかもらえないような保険に今も入っていますけれども。
（金子）それはやはり子どもさんが大きくなって、そちらの方に、お稽古事や何かにお金が回るということですか。
（F）家を購入したために 35 年払いの住宅ローンでもう火の車でして。
（G）私は全然考えていないですね。気がついたらもう 34 歳になっていますが、今皆さんの話を聞いていたら本当にすごいなと思いますね。たしかに言われてみるとそうだなと。それと年金の話自体というのは、ある意味半分あきらめですね。もうどうこう言ってもしょうがない。皆さんが言われたように不満はありますが仕方ない。自分の給料を上げるしかないというような開き直りもありますけれども、ただ一つ要望としては、やはり本当に透明化してほしいですね。政治家の皆さんも頑張っていますが、もう一踏ん張りやってもらわないとというのはあります。今気づきましたが、個人の年金については、やはり必要ですね。
（金子）自己対策、自分の対策としてね。私も全然そういうのに入っていないまま今この年まで来たので、どうしていいかわからないのですが。
なかなか難しいところがあって、一番いいのは、例えば３万円払っている年金の掛け金のうちの、１万円は自分のものだというふうにしてくれれば、ずいぶんまた気持ちが違うのですが、全部取られますのでね。払いたくないなと思うことが多いのですが、気づいてみるとちゃんと引かれて給料が来るので、どうにもならないということなんですね。
それで、子どもを支援して、その子どもが１人で育つ場合と、複数で育つ…。昔ならたくさん地域に子どもがいて、喧嘩をして仲良くなってという、いろいろな揉まれ方をしていた時代があったのですが、今はもうそういうことがないので。つまり、子どもが少なくなってきたことによって、子どもの自立性というか、社会性というか、そういうものが変わってきたと思うのです。
ひとりっ子の場合と、３人で育てる中で兄弟の関係や、あるいはご近所で３つ上とか下ぐらいの子と一緒に遊んでいたときと、今みたいにほとんどそういう交流がなくて、テレビゲームか、習い事か塾かというようなことになっているのと、育ち方が違うのではないかという気がするので、そのあたりを少しお尋ねしたいと思います。Dさん、いかがですか。お子さんをご覧になっていて、そういう社会性というか、自立性というか。

(D) それがいいか悪いかというのはちょっとわからないのですが、私たちが小さいころに比べて、今の子どもというのはとても何かおませというか、大人っぽいというか、シビアというか、ドライですね。そのような気がします。小学校６年生の男の子が今一番上なのですけれども、もう十分大人の会話ができますし、税金のこととかよく私が話したりするのですが（笑）。

結構好きなんですね。でも、やはり野や山で朝から晩まで昔みたいに遊ばせたいなというのが本音なんですが、なかなか現実は。

(金子) それは塾に行ったり、あるいはテレビゲーム。

(D) やはり最終的には大学受験というものがありますから、そのためにやはり中学受験したりとか、そういうのがあってなかなか遊び回るわけにはいかないと…。

(金子) 性格的にいかがでしょうね。Dさんが小さいときの育ち方と、今のお子さんをご覧になって。周りに子どもが少なくなっているわけですね、それは何か影響がありそうですか。

(D) そうですね。ちょっと今のところ、私はないと思うんですが。

(金子) Bさん、いかがですか。ご自身が小さいときの経験と、今お子さんは小さいでしょうけれども、少子化の時代になっての育ち方ですね。

(B) 自分が小学生のときとかは、習い事もせず遊び回っていた記憶があるんですが、自分の子どもも友達も習い事をしていて、子どもの習い事がない日はお友達が習い事があって遊べないということが多いので、友達と放課後に遊ぶということが今は少ないように思います。

(金子) それは例えばDさんが言われたように、大学受験というのが大きいものとしてそびえ立っているので、そのためには我慢しないといけないんじゃないかみたいな感じですか。

(B) 転勤族でどこに行くかわからないので、そこの地域によってレベルが違うと思うんですよ。なので、どこに行っても対応できるようにしておかないとと思っているんですが。落ちこぼれになったら子供がかわいそうかなというのがあるので、最低限の習い事はさせています。

(F) うちは１人なんですが、主人がテレビゲームをするのを見て、子どもも小さいころからもう覚えて。一番驚いたのは、小学生のお兄ちゃん・お姉ちゃんがいるお友達の家に行ったときに、その小学校のお友達が遊びに来て、男の子が３人いるのにシーンとしているんです。話をしなくて皆ゲームをやっているんですね。それを見たときに「なんで子どもがいるのに静かなの」と、全員に聞いてしまったぐらい、何かこれでいいのかなと。だから、うちはなるべく休みの日は公園とか、自然の中に遊ばせるお金のかからない遊びをしていますけれども。

たまたまこの前、専門学校に通っている男の子に会って話をしていたら、その子はちゃんと医療関係の仕事につきたいと言って勉強していたんです。リハビリ関係の仕事につきたいと勉強していたみたいなんですが、今は何かその仕事も福岡では結構もういっぱいであふれていて、「いったい僕たちはいま何の仕事がいいのかわからない」みたいなことを話していて。確かにうちの子が大きくなったら、「稼げるから医者がいいんじゃないか」と時々冗談で子どもに言ったりするんですが、医者も溢れてきて、何を子どもに勧めていいのやらわからないなと、最近ちょっと悩みました。大学だけが目標じゃないと思うので。

(金子) 子どもが少なくなってマーケットが萎んでくると、お勧めの仕事というのはなかなか見つからないですね。

小児科と産婦人科を希望する学生もすごく少なくなっています。少子化だから子どもを産まない。子どもが少ないので当然お客さんが減ってきている。医者としてどういう分野を勉強するかということを考えた場合に、産婦人科と小児科は選ばないというのも全国的に定着している。

ところが、子どもを育てている側からすると、小児科の先生が地域にいないと困るわけです。夜間、病気になったりするときに。そういう形でずれがかなり見えてきているわけです。でも、大学の医学部で専攻分野を決めるときは、もちろん教授が「お前、これをやれ」というわけにはいかないから、学生たちはこれからの時代は例えば年寄り向けの…。年寄りが増えますと、お客さんが増えますので、生活習慣病の研究とか、そういうのはいっぱいいるわけです。

それから女子の医学生が増えてきたので、力仕事ではないもの、皮膚科と耳鼻科と眼科、これはもういっぱいです。まもなくたぶん眼科と皮膚科と耳鼻科はそういう状態になって、共倒れする危険性があるのではないかと思います。それで、気づいてみると、産婦人科と小児科は非常に少なくなるという、そういう何かミスマッチが発生しているのです。

(安梅) 今まで皆さんのお話を伺っていまして、結局個人の努力で解決できない部分がものすごくあるわけです。それで、是非お一人お一人の方に伺いたいのは、社会のシステムとして、例えば皆さんが小泉首相だったらどんなふうなことを打ち出すかというようなアイデアを、突拍子もないことでもかまいませんので、お話しいただきたいです。

それは、ただ少子化の対策ということだけではなくて、実際に私自身は子どもを見てきて、小さい子から大学生に至るまで、何かちょっと子ども自身が変だなというか。今ちょっとお話になっていましたが、人間と人間とのかかわりとか、付き合い方がちょっと昔と違ってとってもぎこちなかったり、プッツンするのは子どもだけではなくて大人もたくさんいるんですが、精神的なストレスにものすごく弱かったり。子供がもっとのびのびと育つような社会を作っていくこともとても重要なのです。だから、その少子化ということと、のびのびと本当に生まれてきてよかった、育ってよかったと思えるような社会にするには、皆さんが首相だったらどんな施策を打ち出しますかというのをちょっと一回りお

願いできませんか。

では、Hさんから順番に行きましょうか。Hさん、カナダを参考にされても結構です。

(H) すごい理想の部分も多いと思うのですが、うちにこもって外に出る機会というのがやはり少ないから、例えば週２日休みであっても１日は塾とか、何か学校で特別な教室をやっていると聞くので、そこに親たちも一緒に行く機会があればまたちょっと違うのかなとか思ったりしますけれども。

(金子) 連れて行こうとお考えですか。

(H) 私もパートを半年ぐらい前に辞めて子どものことを考え始めたところですが、新聞を読んだり人の話を聞いていると産んで安全という時代には思えなくて、もうこのまま２人でもいいかなというところに今なりつつある。萎んでいく世の中というふうに思っている人は結構少なくないと思うんです。だから、産んで安全というか、産んでよかったと思えるようにするというのがやはり必要だし、もっと何かゆとりをもった機会を…。大学まで行っているとか、大学院まで行っているとか、何になったから何の職業だからというところの価値観で見てしまう。それじゃなくて判断できるような価値観に変える必要もあると思うし、そういうところからやはり変えなければいけないのかなとか思うけど。皆がもう競争して生活しているから難しいとは思いますけれども。

(金子) プラスの面ももちろんあるのですが、マイナスの面も。

(H) ゆとりがないと思います、本当に。子どもをあの人が産んだから産まなければいけないとか、皆が産んでいるいから産まなければいけないという感じで妹は産んだんですね。でも私は、私たち２人が幸せに暮らせればそれでいいかなとか思って、競って自分が生活するのはやめようと思っています。

(金子) 銀行だから直結しないかもしれないけれども、例えばミルクを作っている会社だったら、なかなかそういう判断もつらいなということになりますね。つまり、やはりマーケットが萎んで会社の業績も落ちてくる。リストラになるかもしれないというのが今の場合はあるからね。だから、職業によってそういうことがない、マーケットは萎まないだろうなと思うところと、もう直結するような、おもちゃを作るとか、ああいう学習塾をやっているところも影響は非常に強いですから。そのあたりの判断をする必要があるでしょうね。

(安梅) 価値観を変えるように努力をしないといけない。首相だったらそうすると。

(金子) 何をすれば変わるんでしょうね。東大に全員入れる、通信教育でもいいから入れるとしたらいいですか。東大もそんなに権威はないんですが、今は。でも、何となくブランドがあるから。ゆとりを奪っているのは大学もそのひとつですか。

(H) 私が思うのは、自分がしたいと思うことをもっと尊重する。

(金子) だけど、それはおそらくその何をしたいのかということを学ぶことは、ある程度いろいろな分野のことを知らないと実は不可能じゃあないかと。したいというのは、小学生レベルのしたいことと、おそらく高校３年生のしたいことは違うでしょうから。

ただ単に何もしなくて、ロビンソン・クルーソーみたいにポツンとああいうところに行って一人年だけくっても、したいことというのは非常に限られると思います。でも、そうじゃないところで競ってしたら、田中耕一さんみたいに気づいたらノーベル賞ということはないにしても、そういうのはあるかなと。競争が働いているプラス面も。なかなか難しいですね。気持ちはわかるのですが。

(H) 例えば皆で美術館とかに行って何か絵を描くとしても、日本では例えば「この銅像を写しなさい」みたいな感じで教育をしているところがあるのかなと思うけど、日本以外では「美術館で好きなのを描いてきなさい」というのがちょっとあったりして。その辺の何か自分の好きなものとか発想のチョイスというのが、結構その辺から違う。選ばせないところもあったりするのかなというような気がします。

(安梅) 一歩一歩教育からという感じなんですね。

(金子) 私は本業は高齢化の方なんですが、高齢者の生きがいのことを研究すると、結局音楽と美術と保険体育と技術家庭なんです。60 歳を過ぎたら、「生きがいは何ですか」というと、絵を描くこととか、歌うこととか、ウォーキングとか、手芸とか、ほとんど８割ぐらいがその４つの科目なのです。でも、今の子供たちは、そういういわばゆとりを教えてくれるような科目が入試にないので捨ててしまうわけです。音楽はやっているけれども、高校入試でやらないからまじめに覚えないですね。むしろ、そういうものを中学校のときにやらせた方がいいだろうと。それは時間的にはゆとりがなくなるのですが、60 歳を過ぎたときに絶対にそういうのが役に立つ。そういう意味では、ある時期はゆとりがない方がいいなと。中学校のときにもっと音楽とか美術をやらせた方がいいなという気が個人的にはするわけです。いずれにしても、なかなか社会全体として取り組むということが一本化できないので、なかなか難しいだろうという気がします。

(G) 今日来て学んだのですが、やはり子どもがいないことにはキャパがなくなってしまうのだと。一つは、どうでしょうね、子育て福祉税ではないですが、そういった切り込み方からやって、しばらくは景気回復も含めて、とりあえず今たくさん使っている道路財源とか、そういったものをストップして、税金投入を方向転換してしまうというのは。では、それは何に使うかというと、基本的にはやはり教育ですね。その分においては、小学校・中学校にはエアコンをつけるということになりましたが、空調屋ですからうちにとってはありがたい話なのですけれども、そういうお金の使い方で

良いのかなという思いはあります。逆にもうちょっと低年齢化の部分ですね、要は、生まれてすぐからの教育に関してもうちょっと行政が入ってもいいんじゃないかなと。というのは、たまたま縁があって転勤してきて今福岡にいるわけですが、保育園では、玄米を食べたり、裸足で過ごしたり、ほとんど毎週遠方まで歩いて遠足に行くんです。神ノ島まで歩いていくとか、すごいのですが、そういったことをやっているので結構皆が逞しくて、太っている子はいないです。跳び箱も皆5～6段は軽く飛んでしまうような、そういう逞しくて本当にすばらしいなと思うんです。東京にいたころ父兄に「運動会に来てもらえませんか」という話があったので行ったら、びっくりなんです。もう皆がもやしっ子みたいな感じでね、本当に。そこは区立の保育園なので行政がやっているところですけれども。

文部省が入ってどうのこうのというのはありますが、小学校、中学校、高校、大学に対しての教育マニュアルをもう1回見直してやっていけば、その時期に学ぶことは非常に大きいと思うのですね、将来に。ですから、その部分をちょっと重要視して、例えばお金がかかることですから、そういう食事に関してもそうですし、遊具に関しても、危険なものもあれば、ためになるものもあると思うのです。それから、もう少し校庭を、正直言って保育園にしても今は狭いと思うんです。都会も田舎でもそうですけれども、敷地をこれぐらいにすると補助金が出ますよとか。1人当たりの、病院だったらベッド数に対して平米数が広いと補助金が出るとかいうシステムがありますが、ああいった部分の使い方というのもおもしろいんじゃないかと思います。もう少しゆとりをもって、ギュッと詰め込むんじゃなくて。今、子供が行っている保育園は広いのですが、それでも親御さんが一緒に何かできるかといってもできませんから。ですから、そういった部分でのお金の使い方というんですか。そういったものもやってみたら、先ほどから出ているような感性というものが磨かれるんじゃないかなと思うんですけれども。

もうひとつ、ちょっと話がずれるんですが、1人目を保育園に預けていて、2人目ができたときには、仕事を辞めなければいけないんです。ちょっと猶予期間があるんですが。だから、次に仕事に就くまではもうちょっと猶予期間を保育園の方でみてもらうと良いのですけれど。保育園を撤退しなければ仕事に就けない。今度は子どもがいるから、仕事を探しにも行けない。そうすると、先ほどの話に戻ってしまうのですが、どこかに預けて仕事を探すという部分でちょっと苦労する。「それじゃあ、ちょっともう次はつくれないね」という話につながってしまうので、その辺の援助とかも必要かなと、細かい話ですけれども。

あとは交通費に非常にお金がかかるのですね。車を買うにしてもそうですけど。例えば、子どもがいるから大型のワゴンを買うと、ちょっとは何か優遇があるとか、ガソリンについても控除があるとか。年末調整でもいいですが、そういう控除という部分もやはり考えていただくか、どちらか負担をしていただくかという、両方の何か選択か、若しくはそういう対策があれば具体化したものになると思うので。

(金子) 子どもがいると優遇するということを、交通費だけではなくて、他のいろいろなところで制度化することに対して、子どもがいない人は反発しないでしょうか。

(G) その辺の反発が絶対にあると思いますが、何にしても摩擦というのは、何かやろうとすれば起こると思いますので、その目的というのは少子化対策ということで考えていけば、やはりそういったことをまずやる方が充実するんじゃないですか。

(金子) 子どもがいる人を優遇するということの方向と、子どもがいない人を子どもがいる人と同じレベルに引き上げるという、2つあるということですね。

(G) そうですね。だから、不妊治療ですか。べらぼうにかかる。ああいった部分もその一つですね。もうちょっと何か優遇措置があるとか、例えば子どもを産む費用にしてもそうです。東京にいたときなどは、某有名病院で産むと100万円ぐらいかかるとか、もうびっくりするような話を聞いていましたので、私は郷里の熊本に帰って産ませました。

(金子) あとで一応戻ってきますが、健康保険の方から。

(G) 全額じゃなく30万円ですよね。だからその辺も、産むことに関してもお金もかかるということもいかがなものかなと。

(F) 私の周りの30代の方も不妊治療というか、ほしいのにできないという方もすごく多いのです。その方たちに聞くと、人工授精とかでも50万円はかかるとかというので、そうそう簡単にほしくてもつくれない。今お話しされたように、その辺についてもちょっと何とかならないかなと思うんですけれども。

私も子どもは1人しかいないのですが、次を産んで何かメリットがなければ産もうという気にならないのですが。少子化対策というか児童手当を今毎月5,000円いただいていますが、はっきり言って5,000円はあってもなくても大して変わらない額なので、例えば年間に1人に対して100万円、2人だったら200万円、300万円といただけるというのであれば、私もパートを辞めてでも産もうかなという意欲がわいてきますけれども。

(金子) それの財源の一つとして、先ほどの話のように例えば30歳以上の人がすべて介護保険みたいな形で払うということを考えておかないと。天から降ってこないので、だれかが払わないといけないわけです。100万円、200万円はちょっと論外ですが、10万円とかそういうのがあれば。

ただ、福岡にもあるかもしれないけれども、北海道の過疎地域で出産お祝い金という制度を結構作っていて、3人目を産むと50万円、4人目は70万円とかを一時金として渡す自治体が多いんです。けれども、多くの場合、貰ってすぐ引っ越す人がいるのです（笑）。そうすると、貧しい自治体の町長さんは、「金がないのに人口が増えるからと思って、

３人目が生まれたら50万円あげたのにすぐ引っ越して」と文句を言うわけです。
（G）何年とか条件をつければいいんじゃないですか。
（金子）そうなんですが、実はそういう出産お祝い金というのは、出生行動にプラスに働かない。お金を貰うから産むということはあまりないわけです。毎年くれるんだったら違うけどね。だから、それはどこかで誰かが払わないと。税金はそれぐらいしかできないみたいで、一時金ですね。だから、制度は作るけれども、誰もそれに該当しない。しかも３人目ですからね。２人は当然だみたいな議員さんたちが多いので、３人目からだったら50万円、70万円、100万円つけていいという話だけれども、到底そういうふうにならないですね。
（E）まず、現状はやはり、企業とかで融資を受けるところが経営が厳しくなっていますので、そういうのを緩和できる分と、あと、こういった会みたいにいろいろ発想をもって独立されたい方とかも結構いらっしゃると思うのですが、そういうのをもう少し支援できるように、資金的な面でどちらか対応できる組織があれば、世の中も多少なりとも潤うと思います。会社が増えれば、その分景気も若干よくなる場合もありますので、そういう資金面でどちらかが対応できるところがあればつくられるのもいいだろうと思うのですが。
あと、子どもの面も先ほど出ましたが、地域によって九州でも北と南ではやはり子どもの性格とか体型とか遊び方とか全然違うと思うのですが、もう少し体験できるような、学校内か別組織か何かそういう組織があれば地域間が均一にはならないとは思いますが、若干遊び方も変わってくると思います。先ほど言ったように、家にこもってこもってゲームをしたりとか、パソコンでメールのやり取りとかして、実際お互いに目線を合わせてやるコミュニケーションが少なくなってきているので、そういういろいろな人と、いろいろな地域に振られるような組織でも作ればいいかなとは思いました。
（D）今年からゆとりの教育といって、公立小学校とかでは時間数が短くなって、内容もすごく削減されますよね。それで子供が１時半とか２時とかに帰ってくるものだから、私の友人などもそのために働きたくても逆に働けなくなっている。だから良い面も悪い面もあると思うのですが、もう少し学校の時間を長くして、やはり母親がちゃんと働ける程度、５時ぐらいまででしょうかね、それぐらい学校があってもいいんじゃないかなと思うんです。
それと、あとすごく感じるのは、今お金を持っているお年寄りが多くて、お金を持っていない子持ちの家族がありますよね。お金を持っているお年寄りというのは、すごく経験があって、特技といいますか、知識とかも豊富な方もたくさんいらっしゃると思うので、漠然とした考えですけれども、寺子屋みたいな感じで日曜日の朝とかに、その優秀なお年寄りが子どもに、私たちの年代が教えられないようなことをちょっと教えてもらうとか、そういうふうなものがあってもいいんじゃないかなと思っています。
（金子）子どもをそういう形で面倒をみてあげようという高齢者がどれぐらいいるかということですよね。
（D）ええ、もちろんそれは希望する人。だから、孫の顔を見たいけれども、見られないなんて、結構お嫁さんと仲が悪くてという方もやはりいらっしゃると思うんですよね。
（金子）高齢者を調べてみると、昔よりもずっと「孫なんか面倒みたくない」という人が多くなりましてね、自分たちだけでどこか温泉に行くとか、そういうようなことを言われる方が特に女性の高齢者に多いですね。おばあさんに頼めばいいというのは、若い世代の勝手な思い込みじゃないかというように私は最近は思うのです。「めんどくさいのはもう嫌だ、自分たちで遊ぶんだ」と言う方が多いですね。ですから、すべての人が孫の世代を私も見てあげるというふうにはならないような多様性があって、それはそれで認めてあげないといけないのだろうなと思いますね。
ですけれども、それは全員が全員ではなく、帯広では地域の子育て支援協議会というのを作って、50代を中心にして子育て経験者が、例えばDさんが困ったら応援に行くというようなシステムをつくっているわけです。子育て支援という形で。だから、やりようによってはそういうことも可能ですけれども、すべての人が孫の世代に何かやりたいということではなさそうだなと。なかなかそういう難しいこともあるということですね。親は親なりに自立している。その自立の一部に子育て支援があって、もっとレジャーや友達との付き合いなんかを優先するような高齢者の方がむしろ目立ってきたような気がするんです。皆さん方のお母さんを考えてもらってもわかると思うけれども。
（安梅）お年寄り自身の生きがいの場としてとか、世代間の交流の場として、この寺子屋式のものを作ってみて、選んでいただくというのはとてもいいアイデアですよね。今、ファミリーサポートセンターみたいなもので、それこそ子育てをそのまま直接サポートするというのがあるのですが、こういう寺子屋式で、自分の好きな、持っているスキルを発揮するために、子どもたちに伝えていこうとかいうのを、やっていただくといいのではないかなと。やりたい人がやればいいんですよね。
（金子）だから、やはり環境みたいなものが必要でしょうね。
（C）育児休業の問題が先ほど出ていたのですが、育児休業の取得率が発表になっていて、公務員などだと90％ぐらい取っていて、大企業だったら50％ぐらいですか。それで、小企業になったらもう10％、20％しか取得率がなくて、お子さんができた段階で辞めていってしまう方が多いということを何か最近ちょっと耳にしたのですが。
実際、私の勤めている会社も従業員が５人ぐらいしかいなくて、そこで１人が育児休業を取ると考えたら、公務員ではないけれども、その分の補助とか絶対になくて。育児休業を取る人は無給かもしれないけれども、その取られたあとの残された人たちもその分カバーしなければいけないという問題があって。その辺のところの補助があれば、育児休業

を取る人も、あとの会社を任された人たちも笑顔で「休んでいいよ」というふうに言ってあげられるんじゃないかなと思いました。だから、そういう公務員とか先生などだと代用教員とか代休とかそういう制度ができているけれど、小さい企業だったら１つの企業でそういった制度というのは絶対にできないと思うので。そういったことは地域で補助を出すとかいう感じでその企業活動が成り立つように、また育児休業を取る人も送り出す人も負担がないような、そんな制度を考えてもらった方がいいんじゃないかなと思いました。

（金子）全体でとにかく支えるということになるのだろうと思いますね。私が最初に言ったように。そういうことまでやると少しは働きやすいし、育児休暇も取りやすいし、取ったときのその４割ではなくて６割給付になれば、あるいは８割給付になれば、それはそれでもっと楽になりますから。どうしても若干負担の問題を考えざるをえないなという気になりますね。

（B）私には男の子が２人いて、女の子がどうしてもほしくてもう１人産もうかな、どうしようかなと今悩んでいるのですけれども、働きたいという気持ちもあって、毎日のように考えるのです。保育所に預けたら、子どもが病気をしたときは休まないといけないから、パートじゃないと働けないなというのもあるし。一時預かりというのを保育所でやっているのですが、それも定員が決まっていてなかなか入れないですよね。一時預かりをする保育園も数が少ないですし。それで、その一時預かりをどこでもできるように増やしてほしい。増やす方向に行っているとは思うのですが、早くそれをしてほしいなと思っています。

（金子）どこでもというのは、保育園だけじゃあなくてということですか。

（B）まず、保育園からでいいんですが、自分の地域の中ではまだ１カ所しかなくて、もう予約をしてもなかなか…。

（金子）その保育園の中でどこでも引き受けられるようにするということですね。

（B）月に 14 日間ぐらいは一時預かりで預かってもらえるのですが、なかなか入れないんです、その１日預けるにしても。ですから、保育園が増えていったら働くこともできますし、子どもが増えても働きながらみられるなというのもあるので、そうしてほしいなと思っています。

（A）私は、もっと公務員とかを減らして、税金を有効に使うようにしてほしいです。

（金子）例えばスウェーデンは、公務員が30％いるというのをご存じですか。日本は５％なんですよ。

（A）でも、ニュースとかでは何か無駄使いしたとか、そういうのがよくあるので、何というのか、目に見えて有効に使われていますというのが全然感じないので。

（金子）銀行の方もいらっしゃるけれども、公的資金を導入するというのは無駄だという意見も結構あって、あれは公的資金というけれども、税金だから、「銀行なんかに、そんなものに使うな、突っ込むな」という意見もあるわけです。それは有効利用ではないと思いますか。ということで、結構なかなか難しいのです。全体からすると、日本は公務員比率は低いわけです。皆さん方はたぶんご存じのスウェーデンに象徴されるような国は、30％ですよ。

（安梅）とにかく目に見える形で有効に税金を使わなくちゃということですね。

（金子）公務員が少ないかどうかはともかくとしてね。

（A）世の中が悪くなるばかりで、具体的に目に見えて何かしてくれているというのがなくて、何か無駄使いしているというのばかりが目につくので。本当は何かしてくれているのでしょうけれども、わからない。

（金子）知らないですよね。例えばGさんのところは空調とおっしゃったのですが、小学校・中学校で、福岡でも全部空調の工事を始めるという。

（G）福岡というか、全国ですね。文部科学省がいわゆる３割負担をする。小・中・高校、公立に関しては。

（金子）ということは有効利用だと思いますので。税金の有効利用だと私は思いますけれども、そういうことを知らないわけですね。

（G）でも、公務員は多いですよね。私は役所ばかり行きますからよくわかりますけれども。遊んでいますね（笑）。もう５時前になったら帰るでしょう、ほとんど。私の友達は市役所に行っていますが、誰でもできると言ってましたもんね。

（金子）そうか、そのあたりはなかなかね。でも、とにかく比率は少ないのです。

（G）スウェーデンで何をやっているのかわからないですが、日本の公務員がやるべき仕事の比率も低いかもしれないですね。

（金子）それはそうです。ヘルパーさんなんかも皆雇っているわけですからね。

はい、わかりました。ちょうど時間ですので、公務員を減らすということで。ちょっとずれましたね（笑）。

それでは一応２時間経ちましたので、これでグループインタビューは終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

（安梅）ありがとうございました。貴重なご意見をいただきまして。

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」
福岡グループ面談(第2回)
日 時 ： 2002年10月26日(土)17:00～19:00
場 所 ： ホテル日航福岡

(安梅:司会) まず一回り、自己紹介を兼ねて今の状況を、例えばお子さんがいらっしゃるとか、いらっしゃらないといったお話を含めてご紹介いただけますか。
(A:32・女・独・ー・0) 私は、現在は結婚はしていません。つきあっている人はいますが、私自身が転職をしたばかり、決まったばかりということもあって、しばらくは結婚や出産の予定はありません。しばらく仕事の方を頑張るつもりでいます。
(B:39・女・既・共・2) 私は、小学校と中学校の息子がいまして、共働きです。関係があるかどうかわからないのですが、祖母が90歳で、ちょうど新聞を見て同じようなことを考えているなと思って読んでいました。
(C:37・女・既・共・0) やはり今、社会問題というか、少子化というのがありますし、自分もそういうことに興味があって応募しました。
(D:38・男・既・専・1) 私は結婚しておりまして、１歳６カ月の娘が１人います。もともと妻も私も福岡の出なので、私はもう母親だけですが、母が福岡市内に在住していまして、妻の方の両親も福岡市の隣の太宰府市に在住しています。
(E:32・女・既・共・1) 結婚しておりまして、６歳の娘と、お腹に５カ月半の男の子がいます。共稼ぎです。妊娠が決まったとたん、主人が３年間、長崎の離島の対馬に単身赴任になりまして、少し苦しい状態ではあります。親は近くにいるのですが、少し呆けが始まってしまったおばあちゃんを抱えていたり、車の免許を持っていなくて、私の父がまだ仕事をしていたりということで、出産をあまり手伝えないかもという現状でちょっと困っています。
(F:35・男・独・ー・0) 35歳になるのですが、27歳で結婚して、31歳で離婚しました。自分なりに大学のころの教授などと話したりして、今、コミュニケーション学を専門的に勉強しています。男性の立場、女性の立場というジェンダーを越えて、自分の意見というものがどういうふうにして受け止められるかを今日は確かめにきたという感じです。
(G:37・女・独・ー・0) 結婚していませんが、一緒に暮らしているパートナーがいます。２～３カ月前に15年間働いていた仕事を辞めて、今は学生です。この１年くらいで新しい仕事を見つけるか、結婚・出産の方を選ぶか、微妙なところにいます。
(H:39・女・既・専・2) 結婚していまして、小学校６年生と小学校２年生の男の子がいます。専業主婦です。
(安梅) 一回り皆さんにご紹介いただいたのですが、まず少子化ということで、どのような社会的な問題があるから少子化になってしまったのかという、皆さんの身近に感じられていることをお話しいただけたらと思います。
(H) うちの子は６年生ですが、急に中学受験をしたいと言い出しました。私も軽く考えていたのですが、中学受験となると塾に行くのも結構お金がかかりますし、いろいろな面で教育費がかなりかかってきて、また、６年一貫教育になってきますとなかなか大変です。下も男の子が控えていて、お兄ちゃんと同じようにしたいと言い出してきているので、やはり２人で精一杯です。もし子どもが３人もいた場合は教育費やいろいろな面でどうしても負担が大変です。子どもを産んだ以上は責任を持って対等にしていきたいと思うので、そういうことがある以上、産みたくても産めないというのが現実ではないかと思います。
(G) まだ結婚・出産をしていないので、あまり意見はできないのですが、周りの友人はひとりっ子が多いです。２人目３人目をつくる予定ではいたけれども、できる、できないというか、１人にかける負担というか、今の奥さんはほとんど働いていて時間がない。社会的な待遇面もまだ難しいということで、そうこうしているうちに産めなくなったという友達が多いです。
(安梅) 社会的な待遇というのは。
(G) 待遇というか、例えば、休暇についても形としてはあるのですが実際は取りにくい。
(F) やはり少子化は当然の結果だと思います。人類の進歩というか、これはしかたがない。発展途上国では、医療もないのに子どもばかりができて。一応、日本は先進国ですが、みんな大学を出たり短大を出たりと学歴が高くなってくると、ＤＮＡの中に仕組まれているものがあるのかなという気がします。
少子化とは関係ないかもしれませんが、ずっと世界があるとは思えないですね。となるとこれは一つの現象で、人類の進歩で、知的になればなるほど人は子どもをつくらなくなっていくのではないかという気はしています (笑)。
(安梅) 自然の法則のような意識でいらっしゃるということですね。そういう面もあるかもしれませんが、阻害要因になっているが故にこういう少子化になったという部分で感じることはありませんか。
(F) 結婚するときに子どもはつくらないと妻に言いました。面倒くさいのです。あとは、特に自分が行った大学の女性などはプライドも高いし、なかなか結婚もしない。こういうふうに話す場に来る人たちというのはまた違うのでしょうが。できちゃった婚をしてしまったり、子どもができなくて一生懸命つくっている人もいるのでしょうし、クローンなどもできてきて、人間自体の倫理がよくわからないです。
そういうことで、少子化の要因になっているというのは大人が楽しく生きていないというか。香川大学の教授が本を

出されていまして、それを見ていると、大人が楽しく生きていないので、子どもを生んだとしても僕は責任が持てないし、子どもに対して責任を持ちたくないと僕自身思っています。ただ自分の人生が楽しければいい。自己中心的ですが、ただ僕は子どもは必要ではないし、自分が子どもを育てるほど責任を持てない。ちょっと屈折していますが、自分が育った家庭環境もあるのでしょう。そういうふうに思っていて、結構そういうふうに感じている人は多いのではないかと。特に、東京の女性などでも結婚せずにマンションを買ったりという人が結構いて、自分の都合のいいときだけ都合のいい男の人と遊ぶ。バブルの頃の女性の感覚というのは、結構僕は好きというか、それでいいのではないかという気がします。

(E) 箇条書きにしてきたのですが、結婚しても働く女性が増えてきた。保育園に預けると保育料がとても高いので、２人、３人を２年連続で産むと、３歳未満児や２歳になるとものすごい金額になるのです。やはり昔は２つあき、３つあきという子が多かったのですが、うちのように６～７歳も離れてしまうと、悩んだ末につくったのですが、保育園が高い。あと学童保育があまり充実していない。留守家庭もあります。小児科医が不足しているという話も聞きました。不妊治療がかなり高額です。分娩費がとても高いです。生活を圧迫するのでもうつくらない、できたけれどもおろすという友人もいました。オーストラリアは分娩費や検診代も全くいらないらしくて、子どもを産むと報奨金のようなものを貰えるという友人の話を聞いたので、日本も思い切ってそうなったらいいなとは思います。

(D) 今、いろいろお話を聞くと、お金の部分、社会の仕組み的な部分という話も出ましたが、とはいえ、一昔前、自分たちの親の世代のときは、今よりもっと貧しくて制度的に整っていなくても、やはり子どもをたくさん産んでいたのですね。ですから、そういった面から考えると、今はみんな裕福になっていますし、制度も、完璧とはいえないまでも育児休暇が取れたりということはあると思います。

ですから、なぜ今、こういった少子化になっているかというと、結局、人の生き方が多様化してきたというか、昔は子どもをたくさんつくって家を守る。子どもがたくさんいれば、例えば農家であれば子どもが働き手として手伝ってくれるからとか。昔は医療的に今ほど整ってなったので、たくさん子どもを産んでいないと死んでしまう子が出てくるといった問題がありましたが、今は医療的にも充実しているので、たとえ１人や２人でも長生きしてくれるということもあります。ですから、今の少子化というのは、人の生き方が多様化してきて、子育てよりも自分の趣味などにお金をかけたり、子どもをたくさんつくってそれぞれの子にいろいろ習わせたりするよりも、１人だけに絞り込む。そういった部分ではないかと思います。

(C) 私は37歳になるのですが、子どもはいません。結婚も遅かったのですが、周りの人から「子どもはまだ？」とか、「できたらいいのにね」と言われるのです。そうしたら「まあ、40 歳までにはね」と言っていますが、本音を言うと、あまり責任を持ちきれないということと、学校を出すのにお金がかかるかなとか、今の社会状況が子どもを育てるにはいいと思えないので、別にいなければいないでいいかなという気持ちではいます。夫もどうしてもとは言っていないので、できなければできないで２人の生活を楽しめばいいかなと考えています。

(B) 私は子どもが２人いますが、２人とも本当にやっとできた子どもです。１人目が妊娠中に家を建てていたのですが、子どもがそのまま２人、３人と続けばいいなと思ったので、子ども部屋を３つ作ったのです。働いていましたので、私の両親にかなりいろいろなことで助けてもらいましたが、２人産んだあと２年ほどしてもう１人と思ったときに、その最大の協力者である母が３人目をつくることにすごく反対したのです。保育料がとにかく高くて、２人で７万円ほど払っていたりとお金の問題もあって、「１人でもこんなに大変なのに、ずっと働くのなら２人だけにしなさい」と一番協力してくれていた母から言われたのです。保育料については、ベンツに乗ってきても払っていない人などもいたのですごく矛盾を感じていたのですが。主人は納得できない部分もあったのですが、それがあったのでずるずると年齢を逃してしまったという形です。タイミングを逃したといった方がいいでしょうか。今、つくづく後悔しています。体が丈夫ではないので１人産むのも大変だったのですが、それでももう１人どうにかして産めばよかったと思います。

今、少子化になる要因は、小学校、中学校に子どもをやっていて本当に学校の仕組みも面倒くさいし、変に平等すぎる面があるのです。よく問題になっていますが、小学校の場合、体力のために走らせたりしていたのも順番を決めずに、同じタイムの子を一緒に走らせるとか、大人にとっても子どもにとってもすごく矛盾していることが社会でまかり通っている。

もう１つは、私たちの世代の親というのは私たち子どもに対して甘いところがあるので、べつに結婚しなくても居心地がいいから、お付き合いする人さえいれば結婚しなくてもいいということもあります。それで結局結婚することになっても、結婚した年齢が高くなると高齢出生のリスクなどもあるので、子どもは１人でいいかなというようになっているのではないかと思います。友達などにも、１人を大事にお金をかけて育ててもいいのではないかという人もいますが、それも納得できると自分自身も思います。ですから私も、もう少しあとに１人目を産んでいたとしたら、１人を大事にということになったかもしれないと思います。

(A) まず、子どもを生んだらお金がかかるということ。それと、女性の社会進出が増えてきて、私の会社にも共働きの方が何人かいますが、どちらかというと、子づくりよりも定年まで仕事をしたいと。今の日本の社会では、結婚すると家事や子育てなどの負担がどうしても女性の方に多くかかってきてしまうので、一緒に働いている共働きの方は、子どもを産むことを意識している方はいません。逆に、40歳くらいで結婚を予定されている方もいるのですが、産む年齢が

限られてきているので、すぐにでも産みたいと言われてます。

私自身は32歳で、今は仕事の方を優先させたいのですが、産めなくなる前に、できたら35歳くらいまでには１人ぐらい産んだ方がいいのではないかと心が揺れ動いています。でも、私のパートナーは親の介護を抱えていて、お金がないということもありますし、根本的に子どもがあまり好きではないということもあるので、その辺は今後どうなるかわかりません。今の時点では産む予定はありません。

(安梅) 一回り皆さんからお話を伺って、少子化にかかわることとして大きく３つぐらいのことが挙げられたと思います。１つはやはりお金。経済的な部分での負担が大きいから、なかなか思い切れないというところがある。２つ目は社会制度的なものですね。社会制度がきちんと整っていないことによる負担感が、特に女性にいってしまうという点。３つ目は価値観のことで、これは他の人に何か言われる筋合いのことではなくて、子どもを産まないという選択をする自由。１人だけ産むという自由。たくさん産むという自由。それは個々人に任せると。

今回はその価値観の部分は置いていただいて、そこには触れずに、本当はもっと欲しいのだけれども、また産みたいのだけれども、お金や社会的な制度の問題で負担感が大きすぎる場合にどうしたらいいのかというところに焦点を当ててディスカッションをしてみたいと思います。

まず、お金の部分ですが、どんなふうにして解決していく可能性がありますか。何かいいアイデアはありませんか。子育て支援に対してお金を使うということは、今限られたパイですから、さらに何らかの形で財源を得るか、今使っているものをなんとかするかということになってきますが。一つのアイデアとしては、先生がいつもおっしゃっている。どうぞ。

(金子:サブ司会) 介護保険がありますね。介護保険というのは40歳を過ぎたら、自分の親がいてもいなくても、配偶者の親がいてもいなくても、札幌で2,900円ぐらいですが、等しく払うわけです。それは自分の親がいなくても払うわけですから、自分の親のためではない。つまり、前の世代を今の世代が支えるという発想です。

私がこの数年間言っているのはそれと同じ理屈で、子どもを産む産まない自由があるし、結婚するしないという自由もあるけれども、次の世代をみんなでもっと支援することが大事ではないかという意味で、例えば30歳を過ぎたら介護保険と同じ理屈で、産んだ人も産まない人も同じような、次の世代向けの支援をしようということです。子育て基金のようなものをつくって。そうすると、先ほど保育料が高いという話がありましたが、そこから保育料の一部を支援することが可能であれば、もう１人産む方も出てくるかもしれない。つまり、みんなで、とにかく今の世代が次の世代を支えないと、例えば年金制度が壊れる、医療制度も厳しくなって健康保険制度が壊れる。ということは、みんなやはり困ることではないか。

Ｆさんのように自分は自己中心的と開き直って言われる方も結構いるのですが、あなたが病気をしたときに、あなたの面倒を見るのは看護師さんであり、お医者さんであるけれども、それはもしかしたらＢさんが育てている子どもかもしれないわけです。ですから、そういう意味からすると、自分だけの楽しみはもちろんですが、2,000円か3,000円であればいいのではないかということを、介護保険と同じ理屈でずっと今お尋ねしています。本当にそういうことが可能なのか、やはりそういうことは個人の自由という観点からするとだめなのかというあたりも含めて、是非ご意見をいただきたいということなのです。

(F) 今の考えだと、アメリカ型の考え方が入ってきてアメリカにならえという感じで、すべて自己責任ということになっています。確かに僕が病気になったときに見てもらうのは誰かのお子さんかもしれませんが、病気になるのも自己責任であるのであれば、それに対しての生命保険がある。お金がないから医療をみてもらえないというのは、アメリカなどはそういうふうに保険などもある。そうしたら、今流行りの言葉ですが、勝ち組負け組というのは、あと10年すればはっきりすると思います。

エリートといわれる官僚的な人たち、それから一部上場企業や大企業で働いている人と中小企業で働いている人間を僕は自分の目で見てきました。僕は、最初は大学を出て官僚みたいなことをしていたのですが、それから職を転々として小さいところや大きい企業などにも入っていろいろ見てきました。これからはもっとはっきりするし、自己責任というのはもうあたりまえです。

そこで、介護保険料をどうするか。2,000円ぐらいなら払える人もいるし、払えない人もいる。払えない人、生活できない人は、日本国というのは生活保護があるわけだから。お金は、デフレといわれてもつくればいっぱいできるわけです。ヨーロッパの福祉は進んでいて、日本はヨーロッパほど豊かではないけれども、日本なりに、例えばコンビニで時給700円でバイトしながらでも一人で生きていける。豊かということが前提で話しているので、そこのあたりのアジア的な発想ではだめかなと。より、欧米に近くなっていく。経済的にというと株式なんかのように完全に自己責任です。

(金子) 例えば、粉ミルクをつくっている会社は10~20年前にに比べて全然売れない。それは少子化でミルクを飲む人がいないわけですから当然です。しかし、それはミルクだけではなくて、例えば学習塾も、ドリルの会社も、子ども服の会社も全部だめです。それが徐々に中学生になって高校生になって、大学もかなりだめになるということが目に見えるので、そうすると豊かな社会が実は豊かではなくなるのではないか。つまり、失業者が増えるだろうと。失業者が増えると、一般的には望ましいことではないので、そういう意味からも、もう少しマーケット的にも支え合えるところがあれば支えた方がいいのではないかということです。

気づいてみると、２人で楽しくやろうとしていたその人が勤めている会社がたまたま子ども服メーカーであれば、ある日突然窓際族になってリストラされる。そうしたら、楽しくも何もなくて失業者になるわけですから、そういうことまで自己責任かというと、それは自己責任というよりも社会全体が内向きの縮小方向に向かっているということでしかない。それはもう少し違った工夫が必要ではないかという発想です。

Ｃさんはいかがですか。２人でやるのはかまいませんが、仮にそういう会社に勤めているとするとどうですか。そういう不安はありませんか。

(C) そこまで、そうですね。

(金子) あなた方の夫婦のことではなくて、そういう方が結構多いのです。２人でやれば楽しいのではないかと。でも、気づいてみると、２人が働いているところが子ども向けの商品やサービスをつくっているところであれば、絶対よくはなりません。悪くなったときに、どちらかが、あるいは両方が失業者になるかもしれないというリスクがあるのです。そうなると、楽しくも何もできなくなってしまう。コンビニの700円でやれるといっても、コンビニのかなりの利用者は若い人ですから、若い人がどんどん減ってくれば、コンビニは増えていますから１店舗当たりの売上は当然落ちてくるわけです。ですから、もういらないという危険性が個人の自己責任の裏にあるのではないかという気がします。ですから、そこまで目配りした方が、みんなある程度豊かさを達成したので、それは維持できるかもしれないというつもりで先ほどの制度のことを言っているのです。

(F) それはもう、完全に政策になってくるのですね。

(金子) そうですね。そういう方向もあるのではないかと。しかし、それは国民が支持しないともちろんうまくいかないわけです。

(F) ですから、中国みたいにひとりっ子政策で、小皇帝といわれて一人で大事に育てられて、わがままに育つ。そこは日本に当てはめられるかどうかわかりませんが。

では、仮に１人、２人子どもをつくった人には国が奨励しますといっても、先ほどＤさんが言われた多様化というところで、あまりみんなが納得しないような気がします。でも、結局は子どもをつくっていかないと、今いる上の人たちを支えられないというところはあるのですね。

(金子) それはもう、みんなが覚悟のうえでやれるかどうかですね。ただ、環境問題だと非常にわかって、例えば、環境を破壊することはみんな反対で、それは自分のためでもあるし、次の世代のためでもあるし、まだ生まれていない子どもたちのためでもあるわけです。オゾン層を守るというのはみんなストンとくるわけですが、少子化問題も同じだということを私はずっと言っているのだけれども、それはなかなかストンとこないわけです。

(F) スパンが長いからピンとこないのです。

(金子) けれども、それは努力すればなんとかそういう認識になるかなという気がするのですが、環境問題の場合は１年でもずいぶん効果があるわけです。しかし、少子化問題は20年かかります。子どもが一人前になるまでの話ですから。それを言い続ける価値はあるだろうと思います。それはやはり価値観の違いみたいなところにどうしても入っていかざるを得ないところがあるのではないですか。やはり生き方の問題として、そういうところは出てくるのかと。

仮に価値観を入れたとしたら、どういうことが言えそうですか。

(G) 価値観を入れたらというか、私自身が子どもに興味がないのです。先ほど、私の友人にひとりっ子が多くて、２人目をつくりたいけれどもつくらないという話をしましたが、実際、自分の周りの20人の人を考えても、どうしてもほしいという人はそんなにいない。結婚していても、ほとんどがひとりっ子か子どもがいない、私のように相手はいても結婚という形を取らないというのは結構はっきり分かれています。仕事を長くしているからかもしれませんが、子ども重視ではない人が自分の周りには結構多いのです。

少子化ということについても、先ほど、Ｆさんから知的水準にともなってという話がありましたが、自己中心かもしれませんが私も同じような意見で、私の周りの友人なども同じ意見の人が多いです。それは専業主婦の方が周りにいないから、また、考えが違ってくるのかもしれませんが。

(金子) 自分の老後の対策というのは、例えば個人年金か何かですか。

(G) はい、入っています。辞めたばかりですから、今は個人年金だけですが。自分の10歳ぐらい上の人たちからは、「どうして結婚しない、どうして子どもをつくらないと」と何百回と言われています。

(金子) それは男性も女性も？　おっしゃるのはどちらですか。

(G) 男性が多いですね。女性は親類などは言いますが、他の人はあまり言わないですね。逆に、羨ましいという感じです。

(金子) 専業主婦の方から、そういう生き方に対して私たちは私たちの苦労があるみたいな話はありませんか。

(H) 私と同年代の人にも、まだ結婚していない方はいらっしゃいます。夜会って飲んだりしているときに、こちらは向こうのことを「いいね、自由な時間が持てるし、ほしいものも何でも買えるし」と言うと、向こうは向こうで、「あなたこそいいよ。いいときに結婚して。逆に、私はずっと親から早く孫の顔を見せろと言われる」と。お互いに、私も向こうのことを羨ましいという気持ちも正直少しあるし、今の生活が一番幸せかなというのも半分あるので、どちらがいいかというのは本人たちの問題です。

（金子）本人たちの問題なのですが、社会制度という観点からすると、本人たちの問題を超えて、例えば年金制度が壊れるではないかという意見は結構あります。その先に、壊れたときに老後はどうするのかという話はやはり考えなくてはいけない。個人も考えるし、社会全体も考えることになったときに、お互いに自由だからというだけではすまない面があるのではないかと思います。介護保険もそうで、自分の親だから自分で面倒を見ろという長い間の日本の歴史があったときに、自分で親の面倒は見られないから、お金ぐらいは少し出して、それを使ってヘルパーさんやデイサービスという他人の手を借りて親の介護をしようということを決めたわけです。日本は、少なくとも２年前に。その理屈は子育てにも生かせないのかということが私がずっと言っていることなのですが。

（A）私は、先生の言われていることはわかります。というのは昨年、社会保険労務士の試験に合格しまして、今、派遣会社で大体300名弱くらいのスタッフの方の社会保険を担当しています。派遣会社というと母体がどうしても若い方なので、年金等加入の際に「今までどうしていたのですか」と聞くと、「国民年金はどうせ貰えないから払っていない」という方が多いのです。私も勉強するまでは、勝手に会社から引かれているのですが、貰えないのに払い損だなと思っていました。でも、社労士の試験に合格して、併せて年金アドバイザーの勉強も少しして、ハッピーリタイアメント夫婦が老後定年を迎えて、月20万円ぐらいの生活を維持するためには、1,300万円ぐらいの預金がいるというのを見て、びっくりしました。

もちろん今は若いから、健康だから、そういうふうに自分のことは自分でやると言えるかと思いますが、バイタリティのある方でそれだけの蓄えができる方はいいとして、こういう不景気な世の中で職探しも年を取る毎に大変ですし、いつ会社でリストラされるかもわからない、自分自身も事故に遭って障害者になることもあるかもしれない。そういうことを考えると、みんなで支え合うという部分はわかりますし、みんながみんなバイタリティのある人ばかりでもありません。夫婦合わせて老後に一千数百万円も貯金できる人というのは限られています。ですから、その辺の教育を国の方から若い世代に向けてもっと発信してほしいなと私も思います。それで勧誘でもないですが、年金を払ってくださいということは仕事上はやっています。

（金子）個人年金ではなくて。

（A）個人年金ではなく公的年金ですね。２～３万円しか貰えないといっても、貰えるだけありがたい。それは死ぬまで貰えるものですから。貯金があるからいいといっても、いつ食い潰すかわからないが、それに比べたら、社会保障制度というのは死ぬまでずっと出るというところがすごくいいなと。長生きすればするだけ得というか、いいなというのが、勉強してみて非常にわかりました。

（B）私も先生の言われていることはすごくわかります。子育てしにくいな、大変だなと思ったのが、共働きだったので、まず最初の子どもを産んだあとすぐに保育園を探さなくてはいけないので区役所に行ったのです。区役所で言われたのが、「人数制限がありますのでご希望のところには入れないかもしれません」と。だから、どうだではなくて、それだけなのです。「一応、申込みをして、いろいろと審査とか抽選があって、だめだったらもう保育園に入れません」とすごく冷たいことを言われました。その足で入れたいと思っていた職場の近くの保育園に行って「今日、区役所でこんなふうに言われました」と言いますと、お役所が言うほど人数がすごく多いわけでもないとのことでした。それなのに、区役所の方では冷たく突っぱねられる。保育園では、また連絡しますと言ってくれているのに、なぜ役所ではこうなのだろうと。

子どもを産んで相談するところというと、まず区役所に行きますね。その時点で大体の母親は、「じゃあ、もう仕事を辞めなくてはいけない」となると思うのです。私はその足でそのまま行ったからよかったのですが、私の友達なども同じ状態でちょっと悩んでいました。私は保育園に直接行ったら、一応形ばかりの申し込みはあるけれども、大体入れますということなのです。そこのところで、お役所というのは冷たいなというのがまずある。こういうふうに簡単に言われれば、子どもって育てにくいなと。そのあとにもう一軒行けば安心できるものがあるのだけれどもというのがあったのですが。

入れたら入れたで今度は、私の働いている会社は結婚したら結婚退職が普通で、結婚退職をしなくても妊娠したら辞めるのが普通だったのです。ですから、同じ年の他の同僚たちの目が冷たい。母乳の搾乳をするためにロッカールームに行ったら、結局、その時間はサボれるよねという感じで、同僚でもすごく冷たいのです。そこの会社は辞めたのですが、今は父親の育児休暇も認められていますし、もう少し長く勤めていても大丈夫かなと思えるような職場になっていますが、子どもを産んで働いている親に対しては社会全体が何か冷たい。

（金子）少しずつ変わっているでしょうが。

（B）ですから、テレビなどでありますね、何とか機構とか、子育てするのに保育園は受け入れますよとか。そういうことをＰＲしたら、子どもも産みやすい。今、石橋をたたいて渡る人が多いので、やはりどうしても子どもを産んだあとの先々のことを考えて、子どもを産む人が多いと思うのです。ですから、もう少し子どもを産んだ人に対して、温かく優しい目でテレビなどで流して、全体で温かくしてくれたら、だいぶ違うと思うのです。

子どもを産まなくても楽しければいいという方も、今すごく多いと思います。私もなかなか子どもができなくて、できてもすぐに流産して、その後またできなかったときには、主人とこれから２人で楽しくやって生きていこうという気持ちになりました。すぐにまた妊娠して子どもを産むことができたのですが。

ですから、２人で生きていくということもいいとは思いますが、先生が言われたように社会全体から見ると、介護のことなどを考えると、私たちの世代の人が今の70～80代の人を支えなくてはいけない。今はそう考えていたのですが、先生のお話を聞いて、私たちも今の子どもたちに支えられなくてはいけないとのだと思ったら、子どもを産む産まないは自由なのだけれども、年金などはみんなで支え合わなくてはいけないと思います。

(C) 私の職場は、わりと産休産後の制度が整っていて、皆結構それを利用しています。休んでいる間は無給ですが、ちゃんと復帰させてもらえる制度も比較的充実していて、多分ほかの職場から見ると恵まれているとは思うのですが、それでも私の友達などは結婚して妊娠するとほとんどみんな退職して専業主婦になっています。まだ全体的に周りの協力が足りないから、一人で育てることがとても負担になるような感じです。もっと周りが協力してくれたり、子どもを親に預けて面倒を見てくれると一番ありがたいのですが、遠くに離れているなどの事情があって保育園などに預けないといけないという人たちもいます。国や地方自治体がそういう施設を充実させて、働く人たちがもっと働きやすい環境を整える必要があると思っています。今、介護保険があって、私も40歳になったら必然と給料から引かれると思いますが、やはり少子化対策に向けて何か形として制度をやっていかないと、これからもっと大変になるのかなと思っています。

(金子) 厚生労働省から出た「少子化対策プラスワン」の一番最初に、男の働き方を変えなくてはいけないということがあります。これは札幌でも東京でもお尋ねしようと思っていることで、本当にできるのかという非常に単純な質問をしたいのですが、まず、男性の働き方を変えようというのは、具体的には短く働こうと。それから、隔日、例えば「月・水・金」ぐらいでいいのではないかということが書いてあるわけです。本当にそういうことができるのかどうか。いろいろな人に聞くと、それは無理だろうということが多いですが、ご自身の今の職場やお考えも含めていかがですか。

(D) 私は民間企業に勤めていますので、売上を上げてナンボの世界です。公務員の方というのは、売上ではなくて与えられた仕事をこなしていくだけで、それなら時間を減らしたらやる量も減るということでいいのでしょうが、民間企業の場合は売上を上げて会社の経営を成り立たせなくてはいけない。当然、働く時間を減らしたら、その少なくなった時間で売上を上げなくてはいけないと。それが可能かというと、そうではないですね。実際ほとんどの民間企業や中小企業ではサービス残業はあたりまえです。９時～５時となっていても、実際は７時・８時、忙しい部署は10時・11時まで働いても残業代などは出ない。それはどうしてかというと、そんなところに残業代などを乗せていたら、会社自体の経営が成り立たない。

そういうところからいくと、いかにもこういう考えというのはお役所的です。公務員ならそういうことはできるかもしれませんが、民間企業ではまず無理です。大企業ならある程度内部留保のような利益を積み重ねて財力がありますが、日本の８割～９割の男性が勤めているような一般の中小企業ではまず無理です。本当に社会主義にならないとこんなことは絶対にできないです。

(F) 僕も全く一緒です。僕も役所の方にいたから、これはわかるのですが、本当にお役所的な考えです。

(D) 私も個人的には仕事が嫌いな方ですから、早く帰って子育てをしたい方なのですが、そうした場合、やはり収入減となるとそちらの方がもっと深刻になりますので。

(金子) 仮に、「月・水・金」働いて、同じ収入が保障されるのであればやりますか。

(D) それはまずあり得ないです。特に自分も役職者ですが、ある程度の地位にある人間は責任もあるので、部下の指導・管理育成となると、「月・火・水」だけ来て、後の「木・金・土」は誰が面倒を見るのかという部分もあるので、これは率直に言って無理ではないかと思います。

(金子) 共働きをされている女性の側からはいかがですか。そういう男性の働き方というのは可能だと思いますか。

(E) 私の会社は本店だけですがフレックス制を導入していまして、少し早めに来て３時ぐらいに帰ることもＯＫです。私は営業所にいるのでちょっと無理なのですが、そういうことを導入したら少しはやりやすいのかなと思っています。時間をどんと減らすのではなく、ちょっと早めに来て、コアタイムはいて、早めに上がらせてもらう。逆にお昼から出てきて、今日は夜も残れるから、残業ではなくコアとして働く。そういう考えが広まれば、もう少し柔軟的になるのかなとは思います。

(D) 今のお話についてですが、結局、公務員もそうですが、内勤職できっちりこれだけの仕事をこなしていくという仕事ならいいかもしれませんが、営業職の場合、お客さんが「何時に来て」と言われて「子育てで４時に帰らなくてはいけないのです」となると、仕事はもうなくなりますね。やはり営業の立場から言えばお客さんに合わせる。そうなると、例えばお客さんが９時から打ち合わせしたいと言ったら行きますね。ですから、そういう部分では絶対不可能です。実際、フレックスタイム制を導入している会社でも、朝９時から３時までと仕切っている方もいますが、そうすると３時以降は完全なサービス残業でやったりしています。

(金子) 帰らなくて、やはり働いているわけですね。

(D) そうです。それでは営業成績も上げられない、売上も上げられない。結果的にそういうことが収入とか出世とか、自分の人生に響いてきますね。

(金子) では、そういう短縮は不可能だということですね。

(D) 暇な時はできるかもしれませんが、そこで仕事なりクレームが発生した場合は絶対動かなくてはいけない。クレームが起きた時に子どもを抱えてお客さんのところに行けるかというと、本当に緊急時なら１～２回ぐらいはいいかもし

れませんが、しょっちゅうそういうことはできません。まず社会的に子育ては女性がするというのが日本の通念上ある。実際、今は男性が子育てで休暇を取れることは自分も知っていますが、以前、会社の上司に言ったら笑われました。そんなのがあるわけないだろうと。実際あっても知らない人は多いのです。知っていても使えないのです。まず会社の経営者が、民間の中小企業が認めないと思います。

(F) 見かたを変えると、女性の方が働く才能があったら、女性がどんどん社会に出ていって男が家で「主夫」をする。それも、アンペイド・ワークといって、年間に直したら270万円の金額になるのです。男性を含めた働き方の見直しということであれば、女性の方が才能があり、男性よりも社会性、営業であれ事務であれ稼ぐ力があるなら、女性が働いて男が家を守っても別にいい。作家でそういう方もいましたね。それがまた特別なこととしてとらわれるところが異例なのでしょうが。確かに先ほど言われたように、女性が結婚してお互い共働きをしていても、女性が何らかの形で子どもの負担を強いられるところは男性よりも多いというのは感じます。

(H) 仮に主人が短縮時間で働くことになったら、うれしいです。そうなってくれたら子どもを３人でも産めると思います。私も主人の協力があまりなかったので、２人つくって、これ以上はつくらないと思いました。

私はやはり、日本の制度が悪いと思います。男性が「子どもが病気だから帰る」とは、恥ずかしくて言いづらい雰囲気があるようです。「奥さんは何をしているのか。奥さんが家にいるのならどうしてその奥さんが連れていかないのだ」と言われるみたいで、結局、頼れるのは主人よりも自分の親になってしまいます。

上の子の子育て中にアメリカに２年ぐらい住んでいたことがあって、そのときに上の子が喘息の発作を起こして入院をしたのです。それでも主人は日本的考えがあるので会社に行っていたら、「どうして子どもが病気なのに会社に来ているのか、今すぐ帰れ」と命令されて、そのまま病院に来たので、むしろ私がびっくりして「何で？」というと、会社から「お前はもう来なくていい、子どもが治るまで来なくていい」と言われたそうです。こういうアメリカの考えであれば、子育ても一緒にできるし、母親はすごく助かるなとあのとき思いました。

(金子) 日本はそういうふうに変わりそうですか。

(H) 無理だと思います。

(金子) どこが無理なのでしょう。

(H) また、日本に帰ったら180度変わって、もうしっかり日本的考えに。今でも帰ってくるのは12時で子どもが寝てしまってから。朝も早く出ていくので、子どもも父親の顔を１週間見ないことはあたりまえです。

(金子) どこから変えたらいいですか。どこからというか、ボタンの押しようがないですか。

(H) もう、それは無理です。私も一度このことで主人と喧嘩をしたことがあるのです。子どもが病気で、私もどうしたらいいかわからないときがあったのですが、今の会社を辞めて違うところに移ればそれが可能かもしれないと言われたので、それなら収入が減ってもいいかと言われると、やはりそれは正直言ってできないです。やはり女性の方がどうしても負担になるのはやむを得ないかなと思っています。

(B) 私は男の働き方が変わるのはうれしいです。今はパソコンがあるので、会社の資料を取り寄せて自宅ですることできれば、多少寝る時間が少なくなっても主人もすごく喜ぶと思います。それはもちろん会社の方から男性社員だけを集めて、こういう制度をつくりますとなった場合ですけれど。

でも、今、子どもが学校で怪我をしたときなどは、両方に連絡が入るのです。私は会社から自宅に帰るのに１時間かかるのですが、主人は車を運転するので40分くらいで帰ってこられます。学校の方で、「病院に連れていきましたから、今眠っています」という連絡があったとき、主人は行動が早くて、作業服のままいったん帰って、保健室で５分ぐらい見て、すぐ帰ったということがあります。いろいろクラブ活動などもやっているので、そういうことを見るのが楽しみになってきますので、そうなればそれで、たぶん寝る時間が短くなっても、家で３時間仕事をしなくてはいけなくなっても、フレックスタイムになったらたぶん喜ぶと思います。

会社は３カ月間ぐらいですが、土曜日が出勤で月曜日が休みになる時期があるのですが、男性社員は皆さん、そちらの方がいいと。結局、月曜日に子どもの姿を見られるということで喜ぶ人が多いらしいです。

今、こういう制度があるといっても、労務や総務から対象者にちょっと説明があるくらいだと思うのです。そうではなくて、仮に１時間ぐらい集めて、「こういう制度をしたいと思うから、希望者は」というふうに、企業の方から説明してくれたらやりやすいと思うのですが、あの人はやっているけれども、自分はやりにくいなというのがあると思うのです。年齢層が20～50代まであるので、20～30代の人はそれでＯＫかもしれませんが、主人のように40代になると…。夫婦共働きで奥さんの方が年上なので収入が高いという人がいて、病気のときなど休みを取るときは、ご主人の方が帰るのです。資格なども奥さんの方が上だと、病気になったとき、ご主人の方が休むのです。それをあまりいいようには言いませんが、本当は羨ましいのではないかと思います。

(金子) いろいろなところでこういうお話をすると、中には、そんなに早く帰ってもどうせ手伝わないからという女性の方も結構多いです。例えば、早く帰ってもパチンコ屋くらいにしか行かないのではないかという意見もあるのですが、しかし、企業が男性の育児休暇などを取れる努力をすることの意味は、やはりあるようですね。

(D) ただ、企業、会社にとっては得にならないことですね。そうなると、我々働く側としては早く帰ったり子育てをするのは全然やぶさかではないのですから、男性に育児休暇を取らせない場合は、法的に経営者に対して罰を与えるとか

してもらえれば、我々働く側も堂々と「子育てなので早く帰ります」と言えるのですが、現状はそれができないから。
（金子）例えば、国際競争の中で生きていかなくてはいけないとか、国際でなくても国内でも競争は激烈ですから、そう言っていては無理だという意見も結構強いですね。
（安梅）子育て支援ということで、地域の中で互いに助け合ってというようなところも、このプラスワンの中で詠われています。世代の違う方たちと触れあうとか、助け合うということをどんなふうに企画できるか。何かその辺でアイデアのある方はいらっしゃいますか。
（H）今は小学校も中学校も週５日制になってしまって土・日が自由になったので、公民館などで地域の人たちと触れあう意味で将棋をしたり、いろいろなお年寄りの方と一緒に遊んだりする行事が増えてきているような気はします。
（安梅）実際に活用されていますか。
（H）うちはしていませんが、行っている方は多いです。公民館とかで子どもが同じ地域のおじいちゃんたちと将棋を指しに。あと、お手玉とか、剣玉とか、折り紙とか、昔の人のそういうのを習って遊ぼうとか、毎月やっているようです。
（金子）それは市報か何かに。
（H）市政だよりに載っています。学校の方からも、できたら行くようにと。あと、今度もゲートボールをおじいちゃんとかと一緒にすることもあるようで、参加募集が来ていました。結構、市の方も頑張ってやっているみたいな感じはあります。
（B）私の地域も同じようにあるのですが、老人クラブの方で登録してくださいと募集したのです。老人クラブの方で２日制のために何か協力できることはないかということで募集したところ、登録がすごく増えたということを地域懇談会で聞きました。逆に子どもの登録はすごく少ないので、登録してくださいということだったのですが、将棋やお手玉を好きな子はいいですが、興味のない子は全く行きたがらないのです。クラブをやっている子もいますし。

それで、地域懇談会で「５日制になったからその時間をどうしよう」という話が出たのですが、押しつけが多いのです。ゆとりというのはそれぞれの家庭、子どもの考え方、親の考え方で違っているのに、ゆとり教育だとして、休みの日にそういうことにできるだけ参加してくださいと、子ども会の方でもこうしますと。それで行事に出なかったら、どうして出ないのだろうというふうになるのです。でも、ゆとりというのは、家で本を読もうと、昼寝しようと、出かけようと、それはその人その人のゆとりだと思うのですが、それを学校や地域の方でちょっと押しつけになっている部分がある。よく親同士で話が出るのですが、「なぜ、その人その人のゆとりではいけないのか。何のための５日制だろう」というのがあるのです。

Hさんのところは結構たくさん行かれていると聞いて、「ああ」と思ったのですが、私たちの地域は逆に少ないのです。興味もないし、したいことをしたいから。逆に学習に関わるようなことを行事として入れたら少し多いのです。老人クラブの人がせっかく登録してくれているのに申し訳ないと思いますが、やはり、子どもが昔ながらの遊びに興味を示さないのに、登録して受けるようにとは言えないものがあります。考え方の相違というか、老人クラブと子どもたちのギャップが少しあるようです。
（E）私の地域も公民館で土曜日に、老人クラブの方がボランティアで出てこられて、小学生を見ています。私は土曜勤務がたまにあるので、是非利用したいと思っています。私自身、小学生のときに妹が入院して母がつきっきりでしたから、隣のおばあちゃんにずっと預けられていました。最初はいやだったのですが、おばあちゃんが編み物とかお手玉を教えてくれると、自分にかまってくれる人がいるのがとても楽しくて、毎日おばあちゃんの顔を見に、隣のうちに「ただいま」と帰りました。テレビゲームとか他に興味がある子たちも、行って遊んでみたら「ちょっと楽しいかな」と思ったりもするのかなと。そこにたどり着くまでに時間がかかるかもしれませんが、行ってみたら楽しいのかなとは思います。土曜日だけではなく、勝手なのですが、留守家庭が５時まで、若しくは４時半までなので、大体勤務は５時～６時ぐらいですよね。おばあちゃん、おじいちゃんは大変かもしれませんが、５時～７時ぐらいまで、公民館で、ちょっと簡単なおやつを一緒につくったり、遊んでくれたらいいなとは思っています。
（金子）そういうボランティアで地域ぐるみで面倒を見るやり方と、それから例えば時給 700 円ぐらい払って有償でベビーシッターみたいなものを提供するところがあります。先ほどもお尋ねしたのですが、例えば何か困ったときに、そこに電話をすれば 50 代の子育て経験者の女性が家に来て、預かって留守番してあげると。ヘルパーさんのように考えてもらっていいと思いますが、そういう世代間の交流の仕方についていかがでしょうか。
（E）実際、私も子どもの出産予定があるので、ヘルパーさんを頼もうと思っています。ただ、相性があるので、いらっしゃる方がどんな方か。登録して、その人が来ていきなり預かるというのではなく、事前に面接とまではいわなくても、一回会えたらいいなとは思っています。良い方でも相性が合わない方もいますので、そういうのが不安で頼まない人が多いと思います。やはり他人なので、近所の人でない場合もあるし。でも、登録は一応しようと思っています。
（金子）そういう制度があるわけですね。700～800 円という時給というか、時間でいくらという値段について希望はありますか。
（E）あまり高いと払えない。700 円ぐらいだったら大丈夫だと。
（金子）１時間というわけにいかないですよね。
（E）１時間だけでいいときもあります。仕事の関係で帰るのが 30 分ずれたりとか。

（金子）　そういう世代間の交流の中で、ボランティアのやり方と、少しお金を払ってでも応援団を地域で増やしていくというやり方についていかがですか。
（H）私は幸せだったのでしょうが、母親が協力してくれたから保育園にも預けずに済みましたし、人のお世話にはならなくてすみました。でも、身内ではないというか、どこまで信じて…。家の中のすべてですから、本当に信頼関係ができて任せられるところまでいくにはそれなりの時間もかかるでしょうし、なかなか難しいのではないかとは思います。
（E）逆に、その方のお家に預かってもらうというやり方もありますよね。そちらの方が、預かる方も家事がやりやすいし。
（金子）複数で預かることも可能ですね。
（E）そうですね。２～３人とか。それはいいなと思います。
（金子）高齢者の方がホームヘルパーさんを雇う場合も、他人に来てもらいたくないと言う方はいらっしゃいます。ですから、特に子どもの場合は相性というか、どういう人かわからないと不安は当然ありますね。それはお金の問題ではないですか。安ければいいのでしょうが。そこそこであれば、そんなに…。
（E）負担にはなりますが、子どもを一人で置いておくよりは。自分が何か我慢すればいいかなという感じですね。
（金子）札幌市でそういうことを立ち上げて、そこそこにベビーシッターのニーズがあって、大体50代の女性の方が派遣されて留守番などに行くわけです。今のところはトラブルはありませんが、事故があったときにだれが責任をとるかという問題をきちんとしておかないとうまくいかないかなと思っています。
（D）そういうヘルパーという形できちんとお金を払っているなら、ヘルパーさんも当然お金を貰っているわけですから、責任を持って面倒を見てくれると思います。でも、ボランティア的な部分だとある程度好意や善意でやっているので、事故が起きたときにどうするか。そこが子育てをしている方には一番心配な部分です。身内のおばあちゃんとかだったら自分の孫なので、少しでも危ないところだったら「そっちには行かないで」となりますが、ボランティアだと、これくらいならいいかなという甘さが絶対あると思います。また、ヘルパーさんだと、お金を貰ってある程度仕事としてやっておられるから、事故に対する責任意識はあるのではないかと思います。
　日本はある程度アメリカ的な動きになっているわけです。アメリカはほとんど完全なベビーシッターで、夫婦で出かけるときに人を雇い入れるという感じですから、やはり日本もそういう方向でずっと進むのではないかと思います。
（金子）私の本業は高齢者の方なので、60～80代の女性の方に会う機会が多いのですが、若い人が思っているほどは孫に対する愛着感がない人が多くなってきています。孫の面倒を見たくなくて、自分たちでお友達と温泉などに行きたいという人が非常に多くなりました。ですから、Hさんのように助けていただいた方もいらっしゃいますが、一般論からすると、時代の雰囲気としては、祖母に頼めばなんとかなるというものではなさそうな感じです。
（D）今は核家族化が進んで、自分たちの両親が近所にいるかいないかでかなり違ってくると思うのです。私のところは近所にいるので、今日も妻が出かけているので子どもは妻の母に預けてきたのですが、そういうことが気軽にできるから助かっています。実際、こういう場に出席するためにヘルパーに頼んで出席するかというと、やはり…。
（金子）独身の方、そういう制度が日本全体できちんとできれば、それはそれで子育て支援、少子化対策には有効だと思われますか。
（A）そういう公民館で集まって触れあうことがあるとか、年配の方が協力してベビーシッターのようなことをするというのは今初めて聞きました。ベビーシッターというのは、皆さんがおっしゃるように相性などもあるので、もし自分が仕事をしながら子どもを産んでとなったら、全くの他人に預けるよりは自分の親に頼ってしまうと思います。やはりないよりはあった方がいいし、そうすると子どもも産みやすくなる。外で働きやすくなる。子どもを産んでもちゃんと仕事も続けられるということで、いいと思います。
（金子）有償、無償というのはどちらでもよろしいですか。
（A）それはやはり安い方が。国などが補助をしてくれて無償で受けられるのであれば、その方が絶対に普及するし、皆さん活用したいと思うのですが、でも、共働きであるならある程度は払えるのではないかと。
（金子）Fさんが最初に少し言われていた、ヨーロッパは福祉が進んでいると。それはそのとおりなのですが、多くの場合、消費税が20％を超えているわけです。消費税20％、25％に我々国民が耐えるかという問題が一つあります。
（F）２年前の介護保険の法案などもほとんどの人は知らないです。慣れればそのまますっと通っています。そのようなもので、５％、20％となっても…。20％は大きいとは思いますが。
　今日の趣旨というのは少子化グループインタビューということで、どういうふうにして子どもをつくったり、社会保障をしていこうかということを話し合っています。でも、僕が今日の少子化グループインタビューで話したかったのは、なぜそこまでして結婚して子どもをつくらないといけないのか。それを思って今日来たのです。ですから話しづらいところがあります。話がそちらの方に行ってしまうのです。社会保障もいいでしょう。地域における子育て支援も立派なことだと思います。男性を含めた働き方の見直しも、全部いいのですが。
（金子）価値観の問題に直結しますよね。
（F）そう、価値観の問題。ただ、今日の少子化グループインタビューの趣旨が、社会保障とか、子どもが産まれた方がボランティアをどうするとかということであれば、僕は今日来ていません。少子化の中の一つのテーマとして考えて、

事前にいろいろ意見を書かせてもらったのです。多様な家庭の形態や生き方に配慮とか、結婚しなくてもどのように豊かで満足のいく生活ができるかという資料を見せていただいたのですが、どうしてそこまでして結婚して、子どもを育てるのか。日本という国を維持していくということが大前提としてあるのでしょうが、なぜそこまでして真剣にならなければいけないのかがわからないのです。

（金子）日本社会を維持する必要がないという判断ですか。

（F）企業にしても50年が寿命とかいろいろな説がありますね。僕は先生の意見と完全に違うのですが、国を企業に例えるなら、国際競争力ですね。その中で日本のＧＤＰは世界で２位、軍事力は世界で８位です。僕が今日話したかったのは、なぜそこまでして子どもをつくりたいかということと、この資料を見て、結婚しても子どもを持つ必要がないとか、結婚に対してどのような負担を感じるかとか、結婚しなくても豊かで満足のいく生活ができるかといったことを話したかったわけです。僕は社会保障やその整備などは別に興味がないのです。

（金子）結婚して豊かな生活を維持するかしないかというのは、かなり制度の問題になるのです。個人の努力ではどうにもならないことがたくさんあって。

（F）そうですね。でも、そこは全部官僚に任せればいいのではないですか。

（金子）それはよくわかりません。それは立場があるのでしょうが、例えば、いくら頑張っても失業するというのは自分の責任ではなくて、社会全体の一つのトレンドとして失業することがある。

（F）わかります。でも、例えば外資系の銀行や外資系の証券会社というのは、成績が悪かったらすぐに切られます。それでいいのではありませんか。

（金子）そのような強い人ばかりいればいいけれども。

（F）僕は強くないから、働くことを拒否しました。

（金子）みんなそうやってしまうとどうなるでしょうね。Ｆさんのような人が徐々に増えているわけですが、みんながそうなってしまったら。

（F）これは1980年代に司馬遼太郎が言っていることですが、これからフリーターみたいな人が多くなると。今の世の中を見ていて、どうせ遊ぶのであれば知的に遊んでほしいと、そういう考え方もあるのです。ですから、僕は自分の人生を楽しく生きていければいいかなと思っているのです。そこで、制度なり地域というのはすごく温かくていいなとは思うのですが、別に僕はそういうことに興味がありません。

（金子）そういう意識はもちろんあるでしょうが、このままでは、大体50年経つと人口が半減しはじめます。西暦3000年に日本人は83人になるわけです。そのプロセスで、楽しくやろうと思っていても楽しくやれなくなるという人がかなり増えています。

（F）今は2002年で、僕は今35歳です。生きたとしてもあと50年です。

（金子）ですから、それはいいのですが、環境問題はみんなそうは言わないわけです。環境はやはりちゃんとしないといけない。フロンガスはやめた方がいいとみんな合意するわけです。それは次の世代、そのまた次の世代のことを考えたわけです。

（F）でも、先生自身も日本の人口よりも自分の生き方の方が大切だと思いませんか。

（金子）一つは価値観ですね。

（F）価値観ですね。僕は、それはバイアスだと思うのです。

（金子）例えば人間は死ぬから、だから医学はいらないではないかという意見があるわけです。

（F）はっきり言って日本の社会全体にあまり興味がない。

（金子）しかし、そういう生き方ばかりではない。そういう生き方をしない人もたくさんいるわけですから、そのことはやはり考えてあげたい。

（D）一ついいですか。Ｆさんはもうお子さんをつくらないという考えですから、それでいいと思うのです。ただ、我々子どもがいる世代は、まず自分の子どもは幸せになってほしいし、曾孫は無理かもしれませんが、孫の顔ぐらいは見ると思うので、やはり100年くらい先までの日本の姿を想定して、これではいけないというので先生方がいろいろ研究されていて、それに我々としての意見を述べていきたいと思います。

数100年先とか、その辺のことに関しては、当然自分の子孫はいるかもしれませんが、興味はありません。ただ、現状では、100年後は確かに皆さん危ないのではないかと。実際、自分には子どもが１人いますが、はたして自分より幸せな人生を送れるのかなとか、世界情勢も危なくなってきていますし、そういう部分もいろいろある中で、老後のことや子どもたち、さらにその下の世代については、やはりこの場でいろいろ議論していくべきではないかと思います。

（F）そうですね。ですから、そこで制度などの話ばかりになってしまうと話がしづらいのです。

（金子）制度だけではなくて、考え方も含めて。いろいろな考え方があっていいのですが、それを認め合うという意味で、今、Ｄさんがおっしゃったような観点をどういうふうに具体化していくかということは最大限必要だろうと思います。つまり、最大公約数的には子どもを産む人が当然多いわけですから、そちらの方も目配りしないと不公平であるというのは当然ですね。

（F）僕が一つ聞きたかったのは、今日、僕が思ってきたテーマというのは、どうしてそこまでして子どもを産むのかと

いうことです。少子化のグループインタビューの中で、皆さんにそれをお聞きしたかったのです。
（金子）ですから、端的には何回か言っているわけですが、少子化が続くと失業する人が増えてきて、豊かな生活、楽な生活ができなくなる。
（F）システムとしてはわかりますが。
（金子）ですから、それだけです。
（F）僕はそれを皆さんに聞きたかったのです。子どもを持たれている方に。
（D）自分も独身のころはＦさんの意見に近くて、そんなに結婚したいとも思っていなかったし、子どもを産みたいとも思っていなかった。ただ、流れ的に女の子と付き合って、結婚して、結婚しても子どもをつくるかつくらないかという話も曖昧にしていました。ただ、何となくお互い30代半ばになって、友達に子どもがいて楽しそうにやっているので、１人くらいいいかなと。それで実際に子どもをつくって、楽しい生活を送っているのです。ですから、つくるつくらないとか、運・不運とか、つくりたくてもできない人もいるし、たまたまできてしまった人もいる。それでとりあえず幸せにやっていけているならいいのかなと。結構そういう人が多いと思うのです。結婚して子どもをつくることがあたりまえみたいな、生まれたときから自分の親とかを見ていて、そういう価値観で来ている人たちがほとんどです。ある意味、独身のころの自分や現在のＦさんなどは、ちょっと変わった方のタイプなのかもしれませんね。
（F）そういう僕も、１回結婚しているのですが。
（D）ただ、結婚されてもうまくいかなかったという方は世の中にいて、離婚して独身の方もいて、最初から結婚していない方もいらっしゃる。結婚年齢もかなり晩婚化しているとか、そういう現状はあります。ただ、そういう状況を踏まえて、今回のテーマで高齢者、そして少子化の問題をこの場で議論しなくてはいけないということです。
（安梅）いろいろな方のご意見をいただきたいのです。そのためにこの会を持ったわけなので、Ｆさんの考えもいただきたいし、他の方の考えもいただいて、政策者に任せてしまうのではなくて、実際に生活している我々の声を反映させていきたいということがあるのです。是非どんどんご自分のご意見をおっしゃっていただきたいと思います。
（金子）Ｇさんも価値観が違うとおっしゃっている方でしょうが、違うから、「生んで、勝手に。私はそうじゃない道を選ぶ」とかいろいろ道はありますね。それ以上、何かご主張というのはあるのでしょうか。一応違うことはわかったうえで。
（G）話が戻りますが、男性の勤務時間の話のときに皆さんは賛成でしたが、男性の勤務時間が仮に１日２時間減ったとして、それを男性が望んでいるのかなと思うのです。少しでも負担を軽くしたいと思うから奥様方は当然望んでいますね。でも、時間が空いたからといって、男性がそれを求めているのかなと思うのです。仕事の時間が減ってお給料が変わらなければ、それがいいでしょうが、その空いた時間に手伝うのかなと私は思うのです。手伝うとしても、仕事の量を減らすことを望んでいる男性が多いのかなと思うのですけれども。
（D）それは仕事が好きか嫌いかということになると思います。自分などは、仕事はしますが基本的に嫌いです。もし、仕事をしなくてもよくて、その分給料が入ってくるなら、それは子どもをかわいがっていればいいのですから。
（G）子どもと遊ぶというわけではなくて、主には家事の手伝いをするということですね。
（金子）厚生労働省が言っているのは、そういうつもりで早く帰れと。
（G）子どもと遊ぶのは、べつにそのために勤務時間を減らすということはあり得ないと思います。
（金子）子どもと遊ぶのも一緒です。
（G）でも、奥様方からすれば、遊ぶことよりも家事の負担や送り迎えとか、そういうことをしてほしいと思うのです。はたして、男性が仕事の時間を２～３時間減らして、その時間をそれに充てたいのかなと思うのです。
（金子）それもやはり負担ですから。たくさんあって、幼稚園の送り迎えなども入りますから。ただ単にオムツを替えるという意味ではないのです、早く帰るということは。男も子育てですることがたくさんありますので。それは見えないだけなのでしょうが。
（D）ただ家に早く帰って子どもの面倒を見ているだけでも、奥さんは今まで子どもにかまっていた時間を別のことをしたりできるから、それはそれでかなり貴重な時間になると思うのです。
（金子）そういうことも含めて、在宅の時間を少し長くしたらという話なのだと思います。
（F）先ほどどなたかが言われていましたね。矛盾という言葉が結構引っ掛かったのですが、本当に矛盾だらけだと。なかなか日本は住みにくいなと。
（金子）でも、おそらくどこに行っても似たようなものです。北欧は良いと言う方は多いけれども、25％消費税という社会に耐えられるかなという気が一方でするわけです。例えば10万円の商品を買ったら、２万5,000円を別に払わなくてはいけない。そういう社会に我々は本当に耐えられるかなと。それよりは、例えば2,500円ぐらい払って、それを全部子育て支援に持っていった方がずっと楽ではないかという気がします。そういう意味で、ずっと前から言っているわけです。気持ちの問題もあるのだと思うのですが、制度的にはそういう話です。ですから、それはどこに行っても、例えば中国に行っても、アメリカに行っても、オーストラリアに行っても、問題はいろいろあるだろうと思いますから、よそに行けば済むという問題ではないから、みんな失業しない程度に日本でやれるところまでやった方がいいかなと。
一番恐ろしいのは、子どもが少なくなることによって、企業業績がほぼ全体的に落ちてきて、当然リストラが始まっ

て失業者が増える。失業者が増えると、必ず犯罪者が増えるのです。これは古今東西全部そうです。つまり、そのあたりを歩いていると犯罪に遭うという危険性を感じる。これはこれで、やはり住みにくいだろうと思います。子どもがいるいないにかかわらず。ですから、１～２年ではわからないけれども、10年、20年、30年のタイムスパンで考えると、おそらくそういう因果関係がいろいろ出てきて町に行けなくなってしまうという不安があるわけです。そういう社会で、住みやすい、２人だけで楽しめるかなと。むしろ楽しめなくなってしまう。

(G) そういう社会だからこそ、子どもをつくりたくないという。

(金子) そうなるとますます悪循環が強くなる。一方ではつくっている人がいるわけですから、そのあたりは価値観の違いなのでしょうが。

(F) しかし、確かに価値観という言葉で片づけると楽なのです。これは少子化に絡む一つのデータですが、東京の男性と九州の男性の精子数は違うのです。東京の方が少ないみたいですね。精子の数自体が減っているのは環境ホルモンの方だと思うのですが、ストレス。結局、ＥＤとかそういうのもあって、セックス自体、そこまで男も執着していないというか。ただ、精子の数の減少というのも、だんだん少子化になっていくということの一つの要因かもしれません。科学的な詳しいことはわかりませんが。

(金子) 俗に言えばそうです。環境ホルモンが不妊化を助長しているという議論はあります。証明できるかどうかはわかりません。

(安梅) 最後に何か政策的なことでも、こんなふうだからということでも何でもかまいませんからお聞かせください。

(A) 先ほど、男性が育児休業を取りにくい、絶対無理だということがあったのですが、やはり国の方から、日本で８割９割を占めている中小企業に対する助成金等の手当を厚くする。従業員にも教育が必要かと思いますが、経営者の考えも少し変えていく。そうすると、言い方は悪いですが、助成金ほしさにどうしても早く帰さざるを得なくなる。営業などではどうしてもその人に来て欲しいというのが多少あるかと思いますが、同僚などで助け合ってその人が行けないなら代わりに、誰か手のあいている人に行ってもらうようにすればいいのではないか。自分もまた他の人が行けないときに代わりに行くという助け合いでやっていけばいいのではないかと思うので、その辺の助成金関係も手厚くする。ほかの分で何か少し削れるものがあれば、そちらに回して普及しやすくすればいいのではないかと、今までの話を聞いて思いました。

(金子) 削れないとすれば、若干の負担はあっても仕方がないと。

(A) そうですね。それこそやはり消費税とか。

(金子) 例えば、今は５％ですが、10％ぐらいにして残りの５％は目的税にするとか。福祉目的税とかいろいろいいますね。

(A) そうですね、20％、25％はきついと思いますが。数パーセントは仕方がないことかと思います。

(B) 先ほど、ベビーシッターの件が出ましたが、私も今子どもが小さければ利用したいと思うのです。でも情報誌などに載っているベビーシッターはたくさんあるのですが、名前があまり売れていないというか、そこまで印象に残らないものが多いですね。本当に誰でも聞いたことがあるような大きくて全国的なネットがある企業でベビーシッターだといったら、ちょっと信用できるものもありますし、もし何か保証があっても、利用者が多ければ多いほどその部分に保険がかけられるということがあるのではないかと思います。また、スタッフの中に、元看護婦さんとか、教育に携わった人とか、そういう方たちが入っていればなお安心できるものもあります。

確かに、家に入れるのは心配ということもあるのですが、聞いてすぐわかるぐらい浸透している企業や団体のベビーシッターだったら安心できるのではないかと思うのです。子どもをこれから育てる方、産んだ方からしたら、妊娠中に、「ここにこういうのがあるから、こういうところに頼めばいいな」とか。

(金子) 全国区ならばいいと。

(B) 全国区であれば、少し安心できる部分はあると思うのです。たぶん今、ベビーシッターで電話帳に載っているのといったら一人でやっていたり、ちょっとわからないですね。行くのも、電話をかけるのも考えるところがあるのではないかと思うのです。

あと、先ほど、Ｄさんが少し言われたのですが、男性が子育てをするのに育児休業を取らなかったら罰金を取るとかいう話がありました。私もそれは賛成です。障害者の方を雇わなかったら、払わなくてはいけないですね、何パーセントという。そういう感じで、対象者が育児休業を取りたいという希望はなかなか言いにくいものがあると思うので、それができない分は企業が罰金を払う。でも、その罰金は国が全部子育ての方に使ってほしいですね。ほかの何に使うかわからないのではなくて、そういう罰金は子どものために、例えば母子家庭のところとか。母子家庭の方では保険に入っていない人が多いです。けがをしたらどうするのだろうと思います。母子家庭でなくても、子どもたちに、そういうところに還元できるような感じの罰金を取ってほしいと思うのです。どこに行くかわからないような罰金は取ってほしくないと思います。

(C) 私は、確実にそういう制度に回してくれるというのであれば、消費税であれ何のかたちであれ、少々お金が高くても保障されているのであれば、しっかりと何に使うという目的が決まっているのであれば、回してもらった方がいいかなと思っています。

（金子）介護保険は一応介護のみというふうに限定的に使われていて、目的外には多分使われていないわけですね。税金の場合はいろいろな方面に使われますので、なかなか難しいかなと。
（C）そうですね。不透明な部分もありますから、それは納得できない部分もあるのですが、しっかりこれに使うからどれだけ取るということがわかるのであれば、少々高くても取っても仕方がないかなと思います。
（D）先生がおっしゃった消費税20%、25%もＯＫだと思います。ただ、贅沢品、例えば車のベンツやブランド品など、日常生活に必要のないものなら20%、25%、30%ぐらいかけてもいいと思うのですが、衣食住など、普通に生きていくために、一般庶民とかが日常使うようなお金の部分は、はっきり言って消費税はつけないでほしいです。その分を、大金持ちが買うようなベンツや豪華な家やブランド品にどんどん税金をかけて、そこから取った分で福祉などに回して欲しい。
あとは、天引きで厚生年金や福祉の方とかの分を引くにしても、それが自分たちが年をとった時にちゃんと役立ててもらえるとか、子どもたちに役立つということがはっきりしていれば、引かれるのはやぶさかではないのです。ただ、今、厚生年金を払っていても、はたして自分たちが老後に本当にもらえるかどうかわからないというと、はっきり言って払いたくないです。その分、自分で投資などをしてもうけられるなら、それで失敗したら失敗したで自分の責任ですし、うまくいけばそれで老後は裕福な暮らしができるのではないか。そういう考えです。
（金子）個人年金はどうですか。
（D）いや、まだそこまでは考えていません。とりあえず、今が楽しければいいというところで動いています。ただ、私ももうすぐ40歳になるので、40歳になったらそろそろ老後を考えていかなくてはいけないとは思っています。
（E）私は何らかの形で財源を得ることは大事だと思いますが、財源があっても周りの人の意見がそういうふうに向いていないとやはり厳しいと思う。先生が言われた、子どもが少ないと経済がどんどん厳しくなるということを、私も今日ここで、「ああ、そうだ」と初めて気づいたような感じです。もう少し宣伝ではないですが、今、一部の店で洋服がとても安いのは大量生産しているからですね。ミルク会社や子ども服会社だけでなく、私が勤めている電力会社でも、消費者が少なければ収入が少ないですから、私も含めてそこら辺があまりよくわかっていない。今が楽しければいいと思っている人がとても多いと思います。私の会社は幸いいろいろな制度が整っているので、育児休職も時間短縮も私は取ってきました。私の父は違う会社で代表をしているのですが、「会社に育児休暇をとる人がいると困るよ」と私に実際言っています。「穴があく分パートを雇う。そのパートには最初から教えなくてはいけない。やはり大変だから、お前が取るのであれば、有り難く思って取りなさい。あたりまえの顔をして取るんじゃないよ」と釘を刺されたのです。結局、考えが昔の人間なのです。あたりまえなのですが。そういう教育というか、浸透するような宣伝というか、子どもが少なくなって人口が少なくなると、物も高くなるし、収入もそれだけ少なくなると気づかせてほしい何かが必要かなと。
（金子）一番簡単なのはマスコミだと思いますけれども。
（E）そうですね。マスコミですね。
（金子）マスコミが、まだそこまで書かない、話さないというのがあるのです。
（E）やはりおもしろくないテーマなので、飛びついてはこないと思います。それにみんな気づいていないと思います。
（F）私としては日本が一つの独立国としていい国になったらいいと、そう思っています。
（金子）今後いろいろ難しいでしょうが。
（G）特別な意見はありませんが、先ほどのＥさんのお話にあったように、私は広告代理店で働いていたのです。やはり、マスコミが全くといっていいほどアピールしていない。15年間働いていましたが、こんな深刻な問題になっているとは全く知りませんでした。多分私レベルの人が業界にたくさんいると思います。先ほどの話にあったように、自分の業界でも30代の女性ばかりですが、結婚していてもお子さんがいらっしゃらない人が多いです。ですから、そういう問題に対して、自分たちが消極的であると思います。なかなか難しいと思うのですが、もっと一般の人にわかってもらうためにはマスコミの利用が一番早いと思います。
話は戻りますが、ボランティアやベビーシッターの話のときに思ったのですが、今、私はいろいろな学校に行っていまして、10代の子や、逆に60代の人とは話す機会が多いです。そこで思うのですが、今の子どもたちはほとんど横社会で、縦の人と付き合う機会がないと思うのです。兄弟や親戚も少ないですし。ですから、ベビーシッターはちょっとおいておいても、地域のボランティア活動などがもっと増えたら、最初は子どもが嫌がって行きたくないかもしれませんが、今、私が本当に年の離れた人と話していて勉強になることがたくさんあるのです。ですから、子どものうちから違う世代の人と話す機会が増えたら、また変わってくるかなと思います。
（H）私も今日いろいろ話を聞いて結構勉強になったのですが、男性が育児に協力しやすい会社づくりをまず一番に挙げてもらうことが先決かなと思います。もう１つは、子どもを育てるには、教育費があまりにもかかり過ぎるというのが今の現実です。国が一方的に決めた週５日制で、お稽古事がかなり増えています。例えば、スイミングも子どもの８割が習いに行っていて、それは学校で全く教えてくれないから、全く泳げない子は本当に泳げない状況なのです。学校に聞くと、みんなが習っていてレベルが違うから教えられないと言われるのです。そうなると、自分で習わせないことには、いつまでも顔もつけられない状況になるということで、親がみんな必死にやらせるので、どうしても１人にかかる教育費が多くなっているのが現実です。それが少子化につながるのはやむを得ないと思います。やはり国がある程度も

っと考えていかなければ、この問題は解決しないと思います。
（金子）教育費の一部をみんなで負担するということはいかがですか。例えば、私が最初に言ったように、子育て基金から少し回すという。天から降ってこないので、誰かが負担しないと増えないわけです。
（H）逆にそうやってお子さんがおられない方は、自分のところは関係ないという方もおられるのではないかというのが現実で。
（金子）関係ないことはないという話をずっと私はしているわけですが、なかなかそのあたりが十分まだわからないところなので。必ずフランスやデンマークの話が出て、例えば、デンマークは大学４年卒業するまでただです。それはすばらしいとおっしゃる人が多いのですが、70％を超える負担をしているからできるわけで、日本のように38％しかしない国ではそれは絶望的に不可能です。そういうことさえも、新聞はあまり書いてくれません。デンマークがいい、４年生までただだと言われると、みんなそれはいいと思うのですが、10万円の仕事をしても、皆さん方のポケットに３万円しか残らない。日本だったら６万2,000円ぐらい残るわけです。ですから、そういう社会しか多分日本人は選ばないだろうと思うので、そこでしか工夫がないのではないかという気がするのです。そのあたりも含めて、そういう意味で情報公開が大事で、いたずらに青い鳥は北ヨーロッパにいるというだけでは済まない筈だという気がしますから、それでこういう仕事をしているわけです。どうもありがとうございました。
（安梅）それではちょうどいいお時間になりました。大変ホットなご意見をいただきまして、これらを生かしていきながら一歩ずつ進んで行きたいと思います。本当にありがとうございました。

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」
福岡グループ面談(第3回)
日 時 ： 2002年10月27日(日)10:00～12:00
場 所 ： ホテル日航福岡

(金子:司会) まず、自己紹介を兼ねてこのグループインタビューに応募された動機も含めて、１人ずつ順番に簡単にお話願います。
(A:32・女・既・共・3) 今、育児休業中です。赤ちゃんを産んでからこんな遠くに１人で来るのは初めてで、とてもドキドキしてやってまいりました。今、子育て真っ最中ですので、とても少子化には関心がありまして応募させていただきました。
(B:32・女・既・専・3) 私は子どもが３人います。少子化といわれていますが、案外私の周りには２～３人産んでいる人がたくさんいるのです。今日は、少子化とは逆にたくさん産んでいる側として何か言えることがあるかと思って来ました。
(C:33・女・独・－・0) まだ独身です。少子化に拍車をかけるような形になって申し訳なく、今回は勉強させていただこうかと思って参加させていただきました。
(D:30・男・既・専・1) 見ると、男性は私１人だけです。応募した動機は、私も今２歳になる子どもが１人いますが、もう１人つくろうかどうしようかと、ちょうど家内に相談している最中にこういうのがありましたので、妻と一緒に応募しました。
(E:39・女・既・共・3) 私は子どもが３人おりますが、学校を出てそのまま就職して結婚し、子どもを産んで今に至っている状態です。いわゆる共稼ぎなのですが、第１子のときは産前産後６週・６週の時代で、第２子が産前６週、産後８週で、第３子は、同じだけれども育児休業が初めて取れる年に産みました。一番上から一番下まで７歳違うのですが、その７年間で保育園の受け入れ状況も全然違ってきていたり、育児休業が一般の職員でも取れるような時代になったときに、昔ながらの一番きつい時と今からの時代のスタートの時まで子どもを持ったということで、少子化ということを直接影響を受けたような世代ですので応募してみました。
(F:31・女・既・共・1) 私は２歳になる息子が１人おります。うちは核家族なので、１人目は実家に帰って産んで、すぐ帰ってきました。家で仕事をしておりまして、家での仕事が軌道に乗ったときに第１子を産み、第２子目はこちらで産もうかと思っているのですが、親を呼び寄せずに、どのような支援があるかということを今調べている真っ最中でした。私の周りにも、まだ第２子、第３子を欲しい人がたくさんいて、いろいろな情報を欲しております。きちんと調べてこちらに来たかったのですが、役所には以前行ったきりで、まだ古い情報しかないのですが、こちらでいろいろなことを聞けたらと思っています。私の周りには欲しいけれどもできない人もたくさんいて、そういう方のことも思いながら語れたらいいと思ってまいりました。
(G:37・女・既・共・0) 私は結婚11年目で、まだ子どもに恵まれない夫婦です。子どもがいないせいか、40歳前後の女性でまだ結婚していない友達が多いものですから、常日頃から少子化や将来の不安などがよく話題になります。そういうことをこの座談会の中で発表できたらいいし、いいアイデアなどを友達との話題にさせていただけたらいいなと思って応募しました。
(H:37・女・独・－・0) 私も少子化に拍車をかけている一人です。親戚のところは大体３～４人子どもを産んでいるのですが、町と田舎ということもあるのでしょうが、私の兄弟に関してはやはり１人ぐらいです。私としてはできたらたくさん産みたいという事情があるのに、結婚ということもあるのでしょうけれども、たぶん年齢的に産めなくなるというところもあるので、どうしたら増やせるのかなというのは私も疑問を持っているので、こちらの方で勉強させていただきたいと思います。
(金子) いくつかお話をお尋ねしたいテーマがあります。１つは、皆さん方に一番新しい厚生労働省からの「少子化対策プラスワン」という資料をお届けしていると思いますが、これは1990年代の初めに「エンゼルプラン」というのが出されまして、国が最初に少子化対策を始めてからのものです。そのあとに、「少子化対策推進基本方針」というのが出されて、前後して「男女共同参画社会基本法」というのが謳われまして、今回のこの９月20日の分が、国にとって３回目の大掛かりな少子化対策のプランです。この第１番目に、これからの少子化対策に大事なことは、男性の働き方を少し見直さないといけないと。もっと具体的に言うと、短く働き、早く家に帰りましょうというようなことが書いてあるわけです。それを手がかりにして、皆さん方のご意見をいただきたいと思いますが、紅一点というか黒一点のDさん、男性の働き方を見直せという、具体的には、短く働け、早く家に帰れというようなことに対して、ご自身の今の職場や、あるいは友達、先輩等を含めてどのようにお考えでしょうか。
(D) 私は銀行員ですが、会社の制度においては時間短縮ですね。つまり、ノー残業デーを設けたり、早く帰ろうという運動は盛んなのですが、現実問題として、今の仕事の状況を考えればどうしても残業をしなければいけない。会社として制度は作るけれども、それは個々人の仕事のスキルというか、能力に依存しなければいけないところが多いものですから、やはり帰りたくても帰れない。９時、10時になってしまう。最悪休日出勤を必要とするような状況が現時点では

続いております。ですから、やはり厳しいのかなと。家族のことを考えれば、早く帰りたいと思うのですが、早く帰れるというのはまだ時間がかかるのかなと思います。
（金子）個人の側からすると、早く帰ったら仕事が片づかないという部分ももちろんだし、職場の他の人たちにも迷惑をかけるというようなこともありますね。
（D）全員で帰れるのならいいのですが、私一人だけ手を挙げて帰るということは、やはり同僚に迷惑をかけることになりますので、それは難しいのかなと思います。
（金子）例えば、子どもが生まれて２歳ぐらいまでだったら５時までには帰るとか、４時には帰るという制度が仮にあるとすればいかがですか。それは、いわば権利として。そして、その分あなたの仕事を40～50代の人がカバーするという制度を、仮に入れるとすれば帰りやすいですか。
（D）権利としてあれば帰りやすいようになるかもしれませんが、権利を行使できるかどうかということですね。
（金子）Ｄさんの仕事は個人的なものがあるわけですか。
（D）そうですね。ですから、その人に引き継ぎをすることがなかなか難しい。
（金子）それは銀行だけではなくて、多分他の業務でも似たようなものだと思います。
奥様方はご自身で働いておられる方、専業主婦の方といろいろですが、まず、男性がもっと短く働いたら少子化対策にプラスになるのではないかという厚生労働省の話についてのご感想でもよろしいので、Ａさん、いかがですか。
（A）うちの主人は電力関係ですが、とても帰りが遅くて夜２時のときもあります。会社内でも残業が多い職場と少ない職場がありますが、うちはとても多いところで、月に100時間を超えているときがありまして、「このままだと過労死が認められるね」とか言っていました。ですから、そういう彼に育児の手伝いはとても期待できません。それどころか夕飯は絶対私が全部子どもに食べさせなくてはいけないし、彼は朝起きたらすぐ食事をして会社に行きますから、昔は大変だなと思ったこともありましたが、今は仕事を頑張っているからということで納得してやっております。
（金子）残業が多すぎるというか、残業がもしなくなったら収入が減るわけですか。
（A）収入的にはボーナスが毎月あるような感じになっています。体を壊したものですから、今は主人も残業の少ない部署にいるのですが、それでも10時ぐらいです。申し遅れましたが、私も３人の子持ちです。でも、まだ１人産みたいと思っています。主人の手助けはあまり期待できないのですが、どうして子どもがほしいのか自分でもわかりませんが、あともう１人、絶対女の子を産みたいと思っています。
（金子）ご近所に実家のお母さんがいらっしゃるとか。
（A）いません。
（金子）全部お１人で。それは、またあとで子育て支援のことをお尋ねします。
（B）私もＡさんとよく似ているのですが、主人は朝早く行って夜遅く帰ってくるので、世間では男性も家事を手伝った方がいいとか、子育てをと言いますが、実際に朝早く行って夜遅く帰ってくる夫に手伝ってほしいとなかなか頼めません。ですから、私も全部自分で子どもの世話などをやっています。最初は手伝って欲しいと思ったのですが、慣れてしまえばそういう生活でもいいというか、自分で全部やっています。でも、早く帰ってこられるようになったらすごくいいなとはいつも思っています。
（金子）早く帰ってこられるようになったら、手伝っていただけそうですか。
（B）手伝いというか、子どもたちとふれあう時間があったらいいなと思います。日曜日などは休みなので、子どもの面倒を見たりしてはくれるのですが。
（金子）月曜日から金曜日は全然、そういうことは期待できない。
（B）顔を合わせることもないので。
（金子）Ｃさんの職場にはそういう男性がたくさんいらっしゃると思いますが、働き方を見直そうというようなことを言った場合には、どのような反応がありそうですか。
（C）私は独身ですから、こういうのがないから、たぶん私にしわ寄せがくるというか、周りはみんな子持ちの方ばかりなので、例えばその方が先に帰られるとすれば、私とかが代わりにしないといけないだろうなと思うのです。そこで助け合わなければいけないのだろうなと。自分もきっとそういう立場になるだろうからということは常々考えていますが、ただ、職場的に考えたときに、たぶんみんな帰りにくいだろうなとは思います。「先にごめん」などというのは難しいのかなとちょっと思います。
（金子）私の仕事もそうだし、皆さんもそうだと思いますが、頼める仕事と、これは自分がしないといけないという仕事があると思うのです。Ｄさんも先ほど言われましたが、自分にしかできないという仕事と、「この部分はお願いします」という仕事があって、それは比率からするとどれぐらいの感じですか。
（C）でも、代わろうと思えば、たぶん引き継ぎなどはできなくはないと思うので、すべてがその人でなければいけないというわけではないと思います。
（金子）そうすると、制度は会社で作ったけれど、取りにくい、使いにくいということですか。
（C）みんなが使っていけば、一人でも始めればいいのでしょうが、その一人始めるコツが難しいですね。
（金子）最初に手を挙げることがね。

(E) 私の場合は主人が公務員で、私も役所の外郭団体で役所の人たちと一緒に働いています。主人も転勤が定期的にあるのですが、子どもたちが小さい間はほとんど帰ってこられない状態の職場で、市がイベントをするときなどは半年間とか行くものですから、本当に母子家庭のような状態をずっと過ごしてきました。本人の体も心配ですし、やはり何も言えないです。そういう状況で、自分も２人産んだあとで倒れてしまったのですが、それからは主人が洗濯物を干してくれるようになりました。そこまで行かないと男の人は手伝えないみたいです。
(金子) 妻が倒れるとようやく家のことを少し考える。
(E) ここまで、こんなになっていたのだということで。私も、２人目までのときは仕事がすごく忙しくて、でも昔は延長保育というものがなかったので保育園の迎えもあって、とにかく仕事を持ってそのまま車に乗り込んで帰るのです。子どもを保育園から連れて帰ってきて、家事をバーットやって、子どもを寝させたあとで自分の仕事をするのです。そうすると主人が帰ってくる。そういう時期があったので、やはり人に頼む云々ということよりも、少ない人数で、それぞれ一杯持たされている状態で、その時期によってこれまでに仕上げなくてはいけないというものがあったら、結局自分がしなければだれかに振り分けられる。そのだれかも自分が持っている仕事以上に押しつけられるから、人間関係がすごくギクシャクした時代もあったのです。

今はそこまでいかない時代だろうと思いますが、とにかく、昔は意識がすごくあれだったから、私が３人目を産んだときに、初めて「法律で決まったから育児休業を取ります」と言って、制度をきちんとして就業規則を変えてもらったりしましたが半月ぐらい波乱万丈でした。産休に入ったあとも、どうなるのだろうという状況でしたが、育児休業をスタートする何週間か前に、会社から「こういう条件で育児休暇を取ってください」と、やっと整備された状態でした。

でも同じ職場の人で、同じような時期に子どもを産む人がいたのですが、育児休暇を取らなかったのです。そのあと、雇用保険から休業中の保障が出るようになったときに、１人取りましたが、今まで育児休業を取ったのは、私ともう１人の女性と２人だけです。

昔の人たちは９時から５時までの仕事だったけれども、「私が産んだら次はあなたね」という感じで、人間的にうまくいっていたらしくて、順番に子どもを産めたという話を聞きました。
でも、自分たちが産むときは、空きが出れば誰かが入るということがあるので、職の席取り合戦みたいな感じで、女の人でも仕事があるというだけで、とにかくこれを失わないようにするためにはうちに帰ってからも仕事をしなくてはいけないという厳しさがありました。
(金子) 男性も同じようなことがあります。
(E) 私たちの職場は男の人が１人いたのですが、もっと給料のいいところへ転職しました。管理職は男の人ばかりですが、それでも持っている仕事が範囲が広すぎて、だれかに代わってくださいということが言いにくいです。
(金子) 他人に取って代わられる不安があると、なかなか取りにくい。それは、制度的にそういうことがないとか、自分が復帰するときはまたちゃんとしますという条件があればもっと違うでしょうね。
(E) 私の場合、３回産休を取ったのですが、１人目のときは年配の人が１人臨時で入られました。そのときは２カ月ぐらいしか取れなかったのですが、その人は私が復帰したあと１年間はおられましたが、一つの仕事に２人も必要ないということで、別の相談員さんに戻られました。２人目のときは人を入れなくて、残っている３人の人に振り分けて、復帰したときにまた新しい事業が入っていたから、その仕事をしました。３人目のときは１人入れてもらったのですが、１年休んでいるから、そういう人を入れると、その人に「この人は復帰したから辞めてください」と言えない状況でした。ただ、新しい事業が始まったからスムーズに２人ともいられましたが、その方も10年ぐらい経ってやめられました。
(F) 私の夫は手伝う気満々で、最初、自分のお風呂担当とかきちんとしていたのですが、職場での立場が変わって、今は１１時とか夜遅くになって、お手伝いは土日だけです。土日の出勤や出張のとき以外はずっと見てくれていますが、あまりにもハードワークでやはり倒れてしまいましたので、ボチボチしか手伝わせません。来年、子どもができるので、そのときには目一杯は取れないけれども周りを見ながら数日間は休暇を取ると言っています。ただ、しわ寄せが後ろにくる。結局、休んだあとに自分がしなくてはいけないし、また、休むから自分が楽なわけではないので、休暇を取らせるのは大丈夫かなとちょっと心配です。あと心配なのは、周りの方の信用です。特に上司の方などは「自分のときはそうではなかった」と言う方の気分によって変わるのではないかと思います。来年の状況によっては取れないかもしれません。
(金子) 建前としては取る権利があるのでしょうが、やはり上司の人の判断でね。評価の基準として使われるか、使われないかによってずいぶん違うでしょうから。
(G) うちは子どもがいませんし、夫婦がお互いに自分の仕事を好きにやっていますので、時間的なことに関しては問題がありません。主人は残業が多いですが、子どもできても、その残業はあまり変わらないと思います。
(金子) ご自身で何かしなくてはいけないみたいな決意はお持ちですか。
(G) 持っています。
(金子) 「早く帰ってきて」というようなことはなかなか言いづらいですか。
(G) 今は、早く帰ってきてもらう内容がないですから。
(金子) 一緒に音楽会に行くとか、そういうことが書いてあるのだけれども、そういうことは日曜日でもいいという感

じですかね。
(G) はい、休みの日には。ふだんはお互いの趣味と生活が中心になっていますので。
(金子) Hさん、職場の男性の方をご覧になっていかがですか。
(H) 私は、今、自営でやっていますので会社の組織の中ではないのですが、自営で他所の会社に行ったりしてお仕事をするときに、やはり私がＯＬのときもそうだったのですが、慶弔事のときはみんな親身になってくれますが、それ以外の具合が悪いだとか、今日も熱がある、明日も熱があるというときには、やはりみんないい顔をしてくれません。実際、私が働いていたときはバブリーな時代だったので残業もすごく多かったのですが、その中で、例えば介護でも、帰られるときには、わかるのだけれどもこちらもきつくて12時過ぎまで仕事をしていてとなると、やはりなかなか笑顔では見送りにくいというのはあります。
(金子) それは男も女もそうですね。
(H) はい。男性に関して、最近は女性もそれだけの働きをしてきていますが、会社が求めているのは「やるだけやって帰れ」というところがあるので、それを考えると、やはり帰れないですね。
(金子) 冠婚葬祭を含めて慶弔のときは寛容だというのは、それはお互いさまいうことなのでしょうか。子どもが生まれるとか、子どもが病気をしてというようなときはあまりいい顔をしませんか。
(H) 慶弔のときは本当に「おめでとう」とか、「大変だから早く帰りなさい」というのがあるのですが。子どもが病気とかの場合は、たぶんフォロー体制がなってないから、みんな自分にくるというのが嫌なのだと思います。
(金子) 慶弔事であれば、その日だけ、その時間帯だけとみんな思っているのでしょうね。せいぜい３日ぐらいだから。
(H) 人間関係はすごくいい職場だったので、人の喜びなども一緒に喜んであげられるのですが、それがずっと続くとなると。障害児をお持ちの方もいらっしゃったのですが、全くわからなかったのです。障害児を持っていらっしゃることがわからないぐらい、奥さんに負担を全部かけて働いておられましたから。
(金子) なかなか厳しいところですね。
こういう形で、テーマに沿っていろいろご意見を頂戴しますが、３人のお子さんを全部お１人でというようなことをおっしゃっているわけですが、例えば、夫は残業して育児協力が難しいけれども、ご近所にベビーシッターをしてくれるようなところがあるとか、あるいはボランティアででも少し預かってくれる方がいるとか、地域の中で子育て支援を始めましょうということもこの「プラスワン」に書かれています。そのためには、今からいろいろな条件を作っていかなくてはいけないのでしょうが、Aさん、Bさん、Eさんも３人、ほとんど独力でお育てになったということですが、そういう地域における子育て支援体制ができるとすれば、どういうことをご希望になるか。もし、Aさんに４人目が生まれるとすれば、どういう条件であればお使いになるとお考えか。そういうところをお聞かせ願いたいのですが。。
(A) いろいろなお話があったのですが、近所の人に手助けしていただくといったことは、私の周りでも専業主婦の方はすごくネットワークが発達しているので、やっているようです。でも、私のように産休に入るまで仕事に行っていますと全然知り合いがいない状態です。しかも、私は実家が遠いものですから職場関係の友達しかいなくて、そうすると育児を手伝ってもらう方がいませんでした。今は家にいるものですから少しずつ友達ができましたが、まだ生後５カ月ですから片時も一緒にいないとだめですので、誰かにお願いするというところまでは至っておりません。今日は主人に見てもらっていますが、今日ここに来るにしても、預けるところがないのです。真ん中の子どもが認可の保育園に行っているので、そこで一時預かりをしていただけないかとお願いしても、まだ小さいし急にそういうことは受けられないということで、たった３時間であってもどこにも預けるところがないのです。ですから、もし４人目が生まれるころにできることがあれば、近くの保育園などで理由の如何に関係なく２～３時間預かっていただければ助かると思っています。
(金子) それは時間で700円とか1,000円とかのお金を払ってでも、頼められたら頼みたいということですか。
(A) 周りに頼める母などがいないものですから、お金で解決できることはしないと。ふだんは何も必要ありませんが、急なお出かけだとか。あるのに使わないのと、ないから全然使えないのとは大きな違いだと思っていますから。今でも無認可だといくらでも自由に使えるようですが、やはり無認可と認可の保育園では保育状況も全然違いますから、いろいろなところを選択できればいいと思っています。
(金子) 無認可のところは不安もあるしということで、あまりお使いにならない。
(A) 私の子どもは認可の保育園しか行ったことがないので、無認可も非常にいいところがあると聞いていますが、やはり園庭がなかったり、先生も資格のない方がいらしたり。子どもが好きだという熱意があれば何でもＯＫだと思いますが、初めはどうしても条件で見ますので、認可の保育園の方が助かると思います。
(金子) 認可の保育園を増やそうということはずいぶんやられているそうです。
(B) 私は専業主婦なので、ほとんど子どもにかかりっきりでいるのですが、時々どうしても１人で出かけなければいけないときには、車で10分ぐらいのところに主人の両親がいるので、そこに預けに行くこともあります。あと、近所で子ども同士が仲のいいお母さんに「少し見ていて」と言うこともありますが、１歳になる前はなかなか預けにくいです。３～４歳になれば子ども同士で一緒に遊んでくれるので、見ていてもらったりもするのですが、１歳ぐらいまでは預けたりはできません。近所の幼稚園が一時預かりをしているので、下の子が幼稚園に入るようになったら利用したいと思っています。

（金子）先ほどＡさんが、専業主婦の方々は地域のネットワークがあるけれども、自分は働いていたからないと言われましたが、Ｂさんは専業主婦をされているので、そういう専業主婦同士のお友達というか、同じぐらいの子どもを持ったお友達は多いでしょうが、その間で「それなら、私が預かるわ」というような、お互いに預けたり、預かったりという関係もあるのでしょうか。
（Ｂ）一方的ではお互いにどうしても嫌な感じになりますので、「今日は私が見るから、今度は変わってね」みたいな感じで、かわりばんこみたいな感じで。
（金子）それは、例えば、俗にいう公園デビューか何かをやって、公園で知り合って、「何々ちゃんのお母さん」という形でのお知り合いですか。
（Ｂ）そういうのもありますが、幼稚園などに通い始めたら、幼稚園の送り迎えのときにそのお母さんと知り合いになったりします。近所の公園に行っても、あまり子連れの人がいないのです。健診などになるとたくさんの子連れの人を見るのだけれども、実際、公園などではあまり遊ばせないというか、危ないとか、砂場が汚れて汚いとか、紫外線にあまり当たってはいけないとか、いろいろな理由で、出歩く人をあまり見ない。元気で遊んでいる子どもをあまり見ないような感じですね。ですから、幼稚園などで知り合う方が多いかなと。
（金子）そのネットワークを使って預けたり、預けられたりということはあるわけですね。
（Ｂ）しょっちゅうではありませんが、どうしてもというときは「いいよ」という感じです。
（金子）そういう関係をお持ちなんですね。Ｅさんはずっと働いておられるので、そういうご関係はいかがですか。
（Ｅ）私の場合、子どもが赤ちゃんの当時は２人とも現役でバリバリ働いておりまして、泊まりの出張がある時は、地下鉄で一駅離れたところに住んでいる自分の両親に見てもらっていました。保育園の迎えは妹に学校の帰りに行ってもらって。
私は３月末は本当に忙しいのですが、昔は年度末になると保育園も休みだし、母たちも働いているから、同じ保育園に来ているお母さんたちで「今日は私が休みを取れるよ」という感じで、そのようにして預かり合っていました。同じクラスで子ども同士が友達なので、乳幼児のころからそういうことをしていました。「おんぶしておけば寝るから」とか、「これとこれは食べるから」という感じで。１回、どうしてもだれも休みを取れなくてどうしようというときに、一人の人のお母さんが面倒を見るからといって鹿児島から出てこられて、そのときにうちの子どもも預かってくれました。そうやって助けてくださったから、主人がほとんどいなくても、休めない時期でも、保育園が休みで預かれない時期を乗り切ってこられたという感じです。ですから、やはり子ども同士の友達で、みんな同じ働いている状況の中で困っているのがわかっているから、その代わり「怪我したらごめんね」という感じでやってこられました。でも、一番下の子どものときは、そういう人間関係が作れない雰囲気でした。たまたま自分の母も定年退職になっていたから、今度はうまくそちらに預けることができました。ですから、結局、７年間で地域の雰囲気がガラット変わってしまいました。
（金子）札幌市ですけれども、お母さんの世代を中心に在宅サービス組織を有償で立ち上げたところがあります。当初は高齢者の介護支援・家事援助のつもりで立ち上げたのですが、そのうちの４分の１がベビーシッターとして注文があるようになって、結局、50～60代の女性が、皆さん方から電話があればその家に出かけていって、３時間なら３時間の留守番込みで子どもの面倒を見るというサービスをやっています。仮にそういうものが全国的になった場合に、だれにも頼めない、親も遠くにいるという場合、時間で1,000円ぐらいで子育て支援の組織のサービスを購入するということはいかがですか。
（Ｄ）家内とよく話すことがあるのですが、そういう制度ができたら、多分まちがいなく利用すると思いますが中身によります。ニュースを見ていると、本当にこの人は大丈夫だろうかという不安もあるので、制度があったとしても、その中身をよく把握して、例えば近所のお母さんの評判を聞きながら、「ここなら大丈夫かな」ということを見極めたうえで使うと思います。
（金子）よくいわれるのは、そういう事業者の評判と、もっと具体的には誰が来るかという来る人の評判を聞きたいというような意味合いが結構あります。２つ合格すればぜひ来てくださいというふうになると思うのですが、やはりそのとおりですか。
（Ｄ）そうです。
（金子）情報というのは、ご近所で使われた方々にしか尋ねようがない。
（Ｄ）うちはパソコンでそういう母親どうしのネットに参加して、フリートーキングをやっているのです。ですから、情報誌などにないような情報、お母さん同士で知りえている「ここは実際評判がよくないよ」という情報を収集しています。
（金子）そのようなサービスは札幌だけではなく福岡にもあると思いますが、具体的にお使いになるようなことはどうですか。
（Ｆ）福岡にもあります。会員さんのお宅に預けにいって、お迎えもあるのですが、基本的には相手の家なのです。私は預かる方もお願いする側も、両方ともももう登録をしています。子どもはまだ２歳ですが、どちらかというとお願いされる方が多いです。うちの周りは看護婦さんやお迎えを必要としている人が多いのに登録者が足りないということで、無理して、手はまだ足りないけれども預かることに。来週も預かる予定です。

（金子）登録者が足りないというのは、預かる方の登録者ですか。預けたいという人が非常に多いわけですね。
（F）地域によって違うかもしれませんが、預けたい、利用したい人は多いです。うちの周りはそのように聞いております。それとシルバー人材センターでも今検討していて、それも評判はたぶん各個人によって違うのでしょうが、まだ利用したことはないですが今度お願いしようと思っています。
（金子）料金としてはどれぐらいだったら適正というか、基本みたいなものはありますか。
（F）もう値段は決まっています。今登録しているところは、７時までは１時間700円、それ以降は１時間900円です。シルバー人材センターの家事労働手伝いは１時間800～900円ぐらい、食事をお願いするともう少し。手当も、交通費を入れますので、２時間お願いしても900円ぐらいになると思います。
（金子）例えば、Ｄさんが先ほどおっしゃったように、シルバー人材センターだったら当然だれが来るかわかりません。誰か来るでしょうけれども、その人がどういう方かというのは、とりあえずわからないわけですね。
（F）そうですね。その場合は自分のところに来ていただくわけですので、自分が見られます。その点、一度どこかを通すわけですので、リクエストはしやすいのではないかと思います。あと、そういうネットの情報でお母さん方のページはすごく活発で、特に夜中に質問を投げかけると出てきます。
（金子）そうですか。進んでいるのですね。
（安梅）自分の欲しい情報をいかに効率よく得るかということは、これからものすごく重要になってきます。今はインターネットを活用してそういうものを得ておられる方と、そういうものを使えなくてどこにうまく相談していいのかわからないという方と、ずいぶん格差が出てきていますね。みんながうんと利用しやすく、自分のほしい情報を、また質的にもね。インターネットの問題点というのは、デマを流したらそれがそのまま行ってしまうという怖い部分もありますね。そのようなところで実際に利用されている方、これから利用されたい方、どういうような工夫ができると考えられますか。
（F）インターネットを使わない場合はフリーペーパーや新聞などの広告媒体か、だれかの投書とか、あるいは子どもたち…。多すぎて取捨選択するのが大変ですし、それを読みくだく時間も大変ですが、プラスαではやはり何でも口コミ。情報をある程度知っていて、プラス口コミで気になるところを周りに聞くというふうに現在ではしています。よりよい方法が見つかればいいのですが。
（金子）口コミというのは、例えば職場の口コミとご近所の口コミと、また幼稚園の子どもの友達のお母さんという３つぐらいあると思いますが、どれが一番多いですか。
（F）やはりご近所が一番即戦力がありますので、何かにつけ気になることがあれば、ご近所に自分はどういう情報が知りたいということを話題に出すしかありません。
（金子）どこの小児科の先生がいいか悪いかというのは気になるところですよね。そういうのをいくつか聞いて、行ってみて、気に入ればそのままだけれども、「どうも」と思ったらまた違う話を聞いてと…。それは基本的にはご近所の経験者に尋ねるということですか。
（F）経験者からすべてが得られるわけではないので、行って嫌だったら次に行くというようになります。今はいい歯科医を探しているのですが、なかなか見つからないので、身近なところで自分がまず行くしかない。インターネットでは情報が少し広すぎて難しいですね。
（金子）　ＡさんやＢさんは、小児科の開業医でお世話になられたことが多いと思いますが、それはどういう形で選ばれて、あるいは固定されたのですか。
（A）やはり近所から評判を聞いていたのですが、私は大病でなければ近所の病院で十分だと思っていて、今は決めたところに行っています。
（金子）それはすぐ近くの開業医ですか。
（A）はい。いろいろな評判がありますが、行かれた方の感想にもよりますし、先生の状態にもよるのでしょうし、何でもそうでしょうけれども、自分の目で見て、自分で思ったことをできないと。人の意見に左右されていては結局わからないままなので、私は大病でなければ近所の病院で十分だと思っています。
（B）私も以前住んでいたところで行っていた小児科がすごくいい先生で、引っ越してからもわざわざ行っていたのですが、やはり熱が高いときはすぐ歩いていける近所の小児科の方が助かるので、今は近所の小児科に変えています。
（金子）例えば、今お使いになっている小児科の先生の評判を周りに尋ねて、まあまあよければそこでいいという、自分で確認されるということですか。
（B）近所の人に聞いてみて、その近所の人から、自分は子どもが小さいときからずっとそこに通っているという話を何人かから聞いたので、行ってみると先生がよかったので。子どもがすごく人見知りする時期だったのですが、その先生を見た瞬間に笑ったのです。ですから、ここにしようかという感じで。
（安梅）そういう個別の情報をどうやって確実に得るかというネットワークをきちんと作りたいのです。そこには、もちろん子育て中の親御さんたちもアクセスするのですが、もっと世代を超えてサポート情報なども流せたりするとみんながとても利用しやすくなる。どのようにしていったらいいのでしょう。
（D）子育て情報のネットだけではないのですが、ああいうネット媒体でこういうことは、先ほどの話にもありましたが、

情報が氾濫して、いろいろないい情報や悪い情報、垂れ込み、誹謗中傷など氾濫してしまうので、やはりそこを交通整理してくれる管理者がいたらいいと思います。今回のこういう子育ての場合だと、アドバイザー的なことができる人もネットを見ながら多少交通整理ができるような。誹謗中傷のようなまずい意見ではないかと思うのは管理者が管理して削除するなり、訂正するなり、そういう多少の交通整理ができるようなネットであれば、またそれは評判が評判を呼んできちんとした書き込みをするような人しか登録をしない形になってくると思います。誰でも入ってきて、何でも１回きりになってしまうと、今度は、そういう興味本位で投げかけてくる人ばかり登録して、とんでもないことになってしまう。

妻も気にしていて、いろいろ登録した中で、ここはやめておこうと退会したり、ここは比較的まじめな意見を言ってくれる人がいるというところに登録して続けたりとか、今は情報を受ける側が自分で選択していますが、できたらネットを管理する方でもそういう交通整理をやっていけるようなものができたらいいのではないかと思います。

（金子）これはだめという基準がなかなか難しいかもしれませんが。

他にもたくさんお尋ねしたいのですが、少子化対策が必要だという理由の一つに、子どもがどんどん少なくなると、今我々があたりまえだと思っている年金制度が非常に苦しくなってくる。苦しくなって困るのはみんなで、特に65歳を過ぎてからの生活の保障を若いうちから考えないといけないという時代になりかかっています。先に独身の方にお尋ねしたいと思いますが、Cさん、例えば個人年金という形で自分の60～80歳のころの老後の備えについてはいかがですか。

（C）用意はしていません。年金はパンクするかもしれないという不安はあるのですが、チラシを見たときだけ「しなくてはいけないかな」というぐらいで、まだ。

（金子）周りの方はいかがですか。

（C）一人だけ、したという話も聞いています。その人はご主人がそういう仕事をしている関係だからかもしれませんが、実際に子どももいますし。

（金子）あまり先のことだから具体的ではないですか。

（C）そうですね。病気をしたときとか。仕事は何らかの形でずっとしていきたいと思っているので、自分で稼いでいこうという気持ちはあるのですが。

（H）私は国民年金と個人年金で、個人年金には２口入っています。国の年金はあまり信用していません。私の場合は自営業ですので、周りにいる方もそういう方が多くて払うか払わないかを選択といいますか、自分で結構やったりする人もいるのです。会社だったら天引きされるのですが、若いときは「いや、払わない」と言う人はすごく多かったです。

（金子）今はそうでもないですか。

（H）今は少しずつ、例えば結婚されて自動的に取られるというのもあるのですが、少し前は「だって返ってこないでしょう」というのがあったので、それだったらやはり自衛しないといけないと思って個人年金に入りました。

（金子）そうすると、当然収入のうちから老後の支えのために回すお金が増えますから、現在の可処分所得は少なくなりますね。それはしかたがないですね。

（H）そうですね。私はどちらかというと一人で生きていくかなと思っているので、余計にきちんとしておかないと。

（G）私も同じ意見です。統計で聞いたことがあるのは、30代で10年ぐらい前には、自分が貰うときには10%で、自分の子孫、子どもたちが貰うときは1.0～1.5%ぐらいだといわれていました。そのときに考えて、主人が給料から天引きにしていますが、子どもができないということもありますから、老後は別に貯金が絶対必要だということで、年金保険などに力をいれて、今から貯金をできる範囲でやっています。

（金子）Dさんはいかがですか。男性の立場からすると。

（D）社内の年金制度は結構充実している方だと思っているので、あまり深く考えたことがなかったのです。先ほど「子どもが…」という話もありましたが、うちの親は祖父母に仕送りをしていたのですが、私自身はまだしていません。ですから、自分の子どもに対して、そういう資金的な負担をあまり期待していないので、今の制度で大丈夫かなと。国に対してどうこうということではなく、社内の制度でなんとかなるかなと。ちょっと甘い考えかもしれませんが、そこまでしか考えていません。

（金子）経済的に子どもに期待できる時代ではなさそうな感じで、多くの場合とにかく自分で最小限は何かしないといけないということになってきているのですが、他方で、子どもには期待できないけれども、子どもの教育費はどんどん増えている。おまけに、いろいろな調査を見ると、大体自分が出た大学や短大ぐらいは子どもに行かせたいという方が非常に多くて、教育費が非常にかかる時代になっています。今後の子どもの教育費に対してどのようにお考えになりますか。

（A）今、一番上の子が小学校１年生で、ピアノとバイオリンをやっていますが、バレエもしたいと言っています。時間的なこともありますが、経済的にも、３人目が生まれましたので、１人目の子にそんなにお金をかけていいのかとも思うのですが、やはり子どもの可能性を伸ばしてあげたいというのも親心で、どうしようかと悩んでいます。でも、３番目の子どもに同じようにできるかというと、これからどんどんお金がかかってくることが目に見えているので、もう少し考えて計画的にやっていかないと、教育費はかけるだけ高くなりますので。今までも、上の２人が保育園に通っているときには、３歳未満と３歳以上が１人ずつで月に８万円以上保育料を払っていましたから、保育料だけで年に100万

円は払っていましたが、考え違いなのでしょうが、必要経費といいますか、これからも出来るかぎりのことはしたいと思っています。
（金子）ご主人と両方でそういうふうにお考えで、稼いだお金のある一定は教育費に回そうということですか。
（A）主人は、「そこまで教育費にかけても…、公立で十分だ」と思っているようです。私も子どもがまだ１人しかいないときは、私立に行かせたいと思ったり、お金がかかる方へと考えがいってしまうのですが、やはり３人の子どもを育てるようになってくると、食べさせるだけでも結構大変になってきますので、何もそこに行かなくても元気でいい子は育つと思うのです。プラスαをどこまで求めるかというのは、自分にとっても悩みというか、気になるところではあります。
（金子）個人年金とか、自分の老後のみたいなことは。
（A）まだお金もかかる子が３人いますので、とても自分のことまではいきませんが、子どもには頼れないなと思っています。
（金子）３人いても頼れませんか。
（A）それは気持ち的な問題だと思うのです。子どもには子どもの人生がありますから、自分は自分でなんとか、死ぬまで自分で面倒見たいと思っています。
（B）私は一番上の子だけ学資保険に入れているのですが、下の２人は入れていません。子どもにはいろいろお金がかかるし、これからどんどんかかっていくだろうから、一番下の子が今１歳なのですが、３歳になったら私も働いて蓄えていこうとは思っています。先ほどの年金の話ですが、20 歳から学生でも入らなくてはいけないことになっていますね。私の周りの友達はみんな学生だからといって入りませんでした。でも、私は祖父が年金を貰っていて、その年金からお小遣いを貰っていたので、私は祖父のために払おうと思って20歳から年金に入りました。学生だったのでアルバイトをして、アルバイト代の中から払っていました。子どもの教育費も奨学金制度などいろいろありますから、そういうものを利用したり、アルバイトをしながら、子どもたちにもやってもらいたいと思っています。
（金子）全部が全部親が用意するというのではなくて、できるならば子どもたちにもどんどん利用させるということですか。
（B）そうです。私が行ったように、子どもたちにも自分が一番行きたい道に行かせてやれるだけの資金は蓄えていたいとは思っています。
（金子）例えば、よくいわれるのですが、デンマークでは大学卒業まで授業料はいらない。それはなぜかというと、消費税が25％ぐらいあって、みんなで負担している分が学校にも戻ってきて、もちろん福祉介護にも戻ってくるので、負担は非常に重たいけれども見返りもそれだけ大きい。そういう国もあるわけです。日本はその反対で、消費税はまだ５％だし、税金も相対的には安いわけです。ですから、１つの考え方としては、北欧のスウェーデンやデンマークのように、もっとみんなで負担をして、その代わり戻ってくるものも非常に大きいというような制度を作るというやり方があるのですが、そういうのに馴染むか馴染まないか、もっと考えていかなければならないのですが。
　子どもの教育費がますますかかるようになる。そのときに、親として夫婦で稼ぐのは限界があるので、もっと社会的な支援として、消費税を５％ではなくて15％、25％に上げて、みんなでそういう介護の方も支え合うような社会制度というのはいかがでしょうか。
（E）はっきり言って、今、うちは子育てと介護とダブルで来ています。主人がひとりっ子なもので、なおかつ主人のお父さんが年金前だったもので、５年年金、10 年年金というのがあったのだけれども、国民年金ができたときには相当の年齢になっていたのでまともな年金を貰えなくて、実はその分だけでは医療費が払えない状態です。
（金子）３万円ぐらい。いわゆる老齢福祉年金だけですね。
（E）福祉年金よりちょっとあるらしいのです。福祉年金だったら逆にいろいろなものが免除になったのですが、若干あるばかりにそれにはならない。でも普通の年金ではない。主人の母はちょうど36 年からずっと払い続けていたから国民年金が満額あって、なおかつ軍需工場に行かされていて11 カ月の厚生年金があって、普通より若干多いのです。自分の母の方は、自分の父が社会保険だったもので、お金を掛けなくてはいけない時期だったのに、給料が少なくて国民年金も掛けてあげてなかったので満額も貰えなくて、60歳を超えたあとに払いたいというような状況になっていました。とにかく、働いている、働いていないにかかわらず、明暗を分けたような家族なのですが、親世代がそうやってしっかり持っていてくれると、この真ん中の世代は助かるのです。
　でも、そうではない親とどんどんお金のかかる子どもと、また自分たちの給料がどんどん減っていっている時代で、本当にどうなるのだろうかと思います。なおかつ老後のことを心配して、自分たちの家を買っているのです。土地さえあればなんとかなるだろうと。年金もまともに貰えない可能性があるので、何らかの控除とかそういうもので本当に助けていただかないと、最後は家を売るのかなという状況です。全部手を広げすぎて、なおかつ老人と子どもがドーンと来ている世代なので、やはりそういう助けてもらえる制度があるとずいぶん楽ではないかと思います。
（金子）介護保険というのは、最初は親の介護は子どもがするのだということでずっとやってきたのに対して、それはそうかもしれないけれども、ヘルパーさんも雇いたいしデイサービスも受けさせたい。その費用を全部子どもが見るのをやめようという趣旨で作られたのです。ですから、自分や配偶者に親がいてもいなくても、40歳を過ぎたらみんな払

っているわけです。親がいなくても、お隣にはいるし、お向かいにもいるから、とにかくデイサービスやホームヘルパーのほんの一部分をみんなで負担しようという趣旨で作ったのです。

今、Ｅさんが言われたように、介護と子育ての問題が同時にくることが多く、もっと子育て費用をみんなで支え合いましょうということを、予てから私は言っているのです。子どもというのは次の世代で我々を支えてくれる存在なので、子どもがいてもいなくても、結婚していてもしていなくても、介護保険と同じ理屈で2,000円か3,000円ぐらい、子育て基金のようなものを作って、それで教育費の一部を補助するとか、奨学金の一部にするとか、そのようなことをしたらどうだろうかという話をいろいろなところでしているのです。そういう話についてご意見をいただきたいと思いますが。

(H) そういう基金というのは賛成です。人間が生きて死ぬまでの間で、健康なときは全く大丈夫なのですが、手がかかる子どもの時期と60歳を過ぎてからというのは、例えば、安心して子どもを育てられるという環境があれば、私の姉ももう１人産むと多分言うと思います。教育にもお金がかからないし、教育もチョイスできる環境の中でここに入れようということができたら、先ほど言われた20%の消費税も私は賛成です。現状ではお年寄りが家を借りたいといっても借りる場所がなかったり、きっと死ぬまで戦場にいるような感じだと思います。子どもも自分を見てくれないとなったときには非常に寂しい老後になってしまうので、それを考えたら、人生において20%の消費税とか基金というのはすごくいいことだと思います。

(金子) いきなり20%をやると内閣は潰れてしまうので。例えば、10万円の商品を買うと２万円の消費税がつくわけです。私は、介護保険ぐらいだったら月に2,000円か3,000円ぐらいだから、そちらの方がわりと入りやすいのではないかと言っているのです。それでも、いろいろな意見があってすぐにはできないでしょうが、いずれにしても教育費が非常にかかりすぎるということがどうにもならない。その高い教育費で、中学校も高校も大学も運営されているという現実があるので、それはなかなか親だけが払えないというふうになりかかっているから、そういう意味もあるのかなということで言っているわけですが、Ｇさん、いかがでしょうか。

(G) 大賛成です。私は子どもいませんが、やはり隣に子どもがいますので、相互扶助という精神はとても好感が持てますので賛成です。

(金子) 皆さん一言ずつお願いします。

(F) 確かにそういう制度にどんどんいった方がいいと思います。実際、子どもを預ける先を考える、先ほど２人で８万円と言われていましたが、結局、どこにやっても月にその程度はかかりますね。次を産もうかなと考えるときに、それぐらいの値段が小学校にあがるまでかかるのだったら、もう３人目はきついかなと。今、保険や年金の見直しをしているところですが、今から毎月２～３万円引かれていくのはちょっときついので、私が独身時代にかけてきた年金はそのままですが、夫のは見直す予定です。子育て世代は月の掛け捨てを３年ぐらいは止めて、抑えている方の方が多い状態だと思います。統計を見て考えております。

(E) 人間は生まれて死ぬまで、ここでは人のお世話をしているけれども、ここでは誰かから助けてもらっている。働いている、働いていないとか、自分は払いたい、いや元が取れないから払わない。それだったらたぶん社会保障の国には馴染まないのではないかと。「今できることを自分はします。その代わりに年をとったらよろしくね」という気持ちでいくしかないのではないかと思います。

(金子) 三方一両損でしかないだろうということを私はずっと言っているわけです。だれが得するわけでもないけれども、少しずつみんな損をしてでも次の世代をちゃんとしていかないと、おそらくもっと急速な少子化が進んで、みんなが困るようになるのではないかと思います。

(E) 職場の関係で、窓口にお客さんがみえるのでわかるのですが、実際、働き盛りの若い人たちが学校を出て、親の扶養に入っている人がいます。「就職口がないので私がまだ養っているのです」と言って、お母さんが自分の扶養に入れられるのです。お母さんが年をとって働いているのに。ですから、若い人たちの雇用の場を作ってあげないと、厚生年金も入ってこないだろうし、働いていないから国民年金も払えない。そうすると、もう年金に結びつかないのではないかなと。結局、未年金の人、貰えない人がたくさん増えてくるような気がします。

(金子) 非常に単純に考えると、子どもが少なくなることによって子ども向けの商品やサービスが売れなくなってきます。ミルクだけではなくて、いろいろなものが売れなくなって、企業の業績も落ちてくると、当然リストラが始まって失業率が高くなります。失業率が高くなると、必ず犯罪が増えるのです。これはどこでもそうなのです。そうすると、社会の安全という観点からも問題になりやすいので、「産めよ、増やせよ」ではありませんが、これ以上少子化が進んでいかない方がいいだろうと考えています。例えば、昨年度と同じ水準でいくと、2050年に日本人が9,000万人ぐらいになってから50年刻みで半減していくわけです。ですから、2100年には4,500万人になって、2150年には2,250万人と半分ずつ減っていって、今から1000年後の西暦3000年には83人になると、国の予測の数字が書かれています。83人というのは天然記念物みたいなものになるわけですが、私が恐れるのはそのプロセスの大混乱で、例えば失業者が増えるということは、先が読めるとすれば、そういうのは避けた方がいいだろうという気がするので、なんとかいろいろな工夫が必要だということを言っているわけです。そのうちの１つとしては、介護保険と同じ理屈で、子育て基金のようなものを作ったらどうだろうかと。これは世代の協力、子どもがいてもいなくても次の世代をみんなで支えようという

趣旨で言っているわけですが、Ｄさん、いかがですか。
(D) 相互扶助という考え方は、基本的には非常に賛成です。ただ、それをやるにしても、今の不況は構造的な問題だと思うので、やはりみんなの意識、どちらかというと、みんな自分が厳しいので、「自分さえ何とかなれば」という考え方が蔓延しているところがあります。職業柄、取引先に会っても、今年はボーナスを出せないとか、たぶん給料も来月から３割ぐらい切らなくてはいけないと。失業率だけではなくて仕事には就いているのだけれども収入が激減している人が山ほどいます。ですから、失業率だけではなくて、弱い立場になっている、厳しい立場に追い込まれている、でもここで辞めたら収入がゼロになってしまうから、我慢して生きているという人が背景にいっぱいいるので、そういうところをなんとかしないと。
(金子) それはもちろん少子化だけではなく、他にもいろいろな理由があるのでしょうが。
(D) では、そういう人たちがどこから節約するかというと、今まで掛けている年金を解約したいとか、そういう保険を…。
(金子) 長期ではなくて、当面、目に見えるところで必要でないと思うものを削るわけです。
(D) とにかく当座必要な分の資金を確保するために、保険などのそういう先のことを止めてしまう。そうしてなんとか食いつないでいる人が多い中で、制度だけというのではなくて、もう少し構造的な問題を深刻に考えて…。
(金子) 私もよくわかりませんが、構造不況を「エイヤッ」と解決するいい秘策があるのでしょうか。
(D) やはり一生懸命個人で貯金しないように、何も考えずにお金を使えるような将来的な安定性みたいなものが見えてくれば、今一生懸命貯め込んでいるお金を使う気になるのでしょうけれども。今は景気が不透明だからどうしても貯めてしまってお金が回らない。
(金子) 物やサービスが売れない。それでどんどん業績が落ちていく。悪循環ですね。
Ｃさんはあと７年ぐらいしたら介護保険の方はそういう年齢になられるわけですが、例えば30歳を過ぎたら子育て基金のような制度を作りましょうというようなことに対しては、いかがですか。それはしかたがないという感じですか。
(C) 私は勤めているので介護保険も40歳になったら必然的に引かれてしまうわけですが、周りに子どももいますし、高齢者もたくさんいますから、協力できることは協力していきたいと思います。
(金子) Ｂさんはいかがですか。たぶん戻ってくる部分が多いだろうとは思いますけれども。
(B) 分娩費が24～30万円戻ってきたのはすごくうれしかったし、児童手当が３歳までだったのが小学校に行くまでになったりしてすごく喜んでるというか、前よりよくなったと思っているから、貰った分、自分もその基金みたいなのに払わないといけないのでしょうが、育てながら出しながらというのは大変かなとも思います。
(金子) 例えば、奨学金をそういうものから出そうというようなことになれば、もちろん手を挙げるということになりますか。
(B) そういう考えはすごく賛成ですが、いくらまで出せるかというところになってくると、また額が多いとできないし。
(金子) ですから、介護保険が3,000円ぐらいですね。
(B) それぐらいだったら。
(A) 子育て基金にしても、実際に奨学金をいただくとなると、絶対所得額税で何万円以上というのが出てくると思うのです。そうすると、うちなどは３人目が生まれるまでは児童手当も一切貰っていませんし、保育料も一番高い段階ですから、どんどん出す方が多いのです。今は子どもが小さいですが、将来勉強したいことがあって大学に行くことになったら、今の状況だと全部私たちが払わないと、奨学金は貰えないのです。授業料の免除やいろいろ大学のことに詳しいのですが、おうちが自営業だとか、お父さんやお母さんが年金生活者でないと国立大学であっても通らないのです。とても優秀で、自分で大学を出たいという人が出られるような基金にしていただきたいです。
(金子) 運用のしかたが問題ですね。
(A) 今、保育料でも所得税で決まってしまうのです。私などは給与所得者ですので、所得税額はまぎれもなく区役所から通達がありますが、実際に保育園で見ていますと、同じような２人を預けていても月１万円しか払っていないお宅もあるのです。本当に生活が苦しい方は仕方がないと思いますが、ある程度は中間ぐらいの金額でやっていただかないと、税金はたくさん払うし、保育料もたくさん払うし、本当にやっていられない。ですから、１万円ぐらいしか払っていないお宅がベンツで乗り付けて、うちは中古車しか乗っていないのにと思うときもありますので。
(金子) そういう制度の問題に見直しをかける時期に来たのかなということですが、もう１つ話題を変えると、私たちは団塊の世代で一番多く、昭和24年なので、270万人同時に生まれて、死ぬまでその競争が激しいわけですが、そういう競争の中で生きてきた人間からすると、今120万人の中で生まれ育ってきた子どもたちの自立性といいますか、自分で社会性を身につける面について、いろいろな意見があります。子どもが少ないので自立的ではないとか、社会性に富まないとか、協力ということをあまり感じない子どもが増えてきたみたいなことを言う方が多いのですが、少子化の中で子どもがどのように育つか。親が育てるというのは、これまでもかなり言われてきたことですが、実は子どもというのは、ある年齢までいくと今度は自分で育つわけです。その育つということを支援してあげる。ですから、親の子育てと、自分で育つ子どもの子育ちの両方が、少子化の中でも子どもをしっかり育てることになるのではないかという考え方で、具体的に札幌でそのようなことをやっています。

まず、３人のお子さんを育てられた方に先にお尋ねします。Ｅさん、３人一緒に育てられて兄弟姉妹の関係があるわけですから、他所のひとりっ子のお子さんに比べて、社会性や自立性という点でいかがですか。

（Ｅ）私は育児休暇があったから、一番下の子は１歳になるまで私が見ましたが、上の２人はおっぱいを飲んでいたときから、他人様の手で昼間の時間育っているものですから、はっきり言っていじめにも遭いませんし、いじめもしていません。学校も毎日行っています。ですから、友達もたくさんいるし、親友と呼べる子たちもいて、クラスが替わってもすぐ友達ができます。この子たちは親からそんなに手をかけてもらえなかったけれども、その分、人が喜んでくれる、人が魅力があると思ってついてきてくれるものを育っていく間に身につけたのだろうと。その点だけは、本当によかったと思っています。

（金子）結果的にはよかったですね。ほったらかしている部分があったのが。

（Ｅ）結果的にはよかったです。そこまでかまってあげられないけれども、食べさせて、学校や保育園にやるだけでも精一杯だった時代だったから。でも、本当に友達には困らないです。学校に行かないということがないから。頭はよくないけれども、そんなにひどい子たちではないから、その分だけ私たちも恵まれているかもしれないと思うようにしています。

（金子）結果的には、他人の中で育ったということは、親が手を抜いたというと変ですが、してあげられなかったということですね。

（Ｅ）昼間全くいないものだから。おじいちゃんやおばあちゃんもいるにはいるのですが、やはり働いていたり、１日か２日だけれども遠くの親戚に預けて働いたときもあったり、でも、そういうところで、べつに大人の顔色を伺っているわけではないから、ある意味で、本人たちがこれからも親元を離れて生きていくうえではプラスになったのではないかと思います。

（金子）ＡさんとＢさんは「子育て」と「子育ち」について、いかがですか。

（Ａ）３人のお子さんがとても明るくてお友達も多いというのは、すごく羨ましい話ですが、私の真ん中の子は１歳から保育園にいますが、恥ずかしがり屋で、先生に「おはよう」と言われると「キャッ」という感じの男の子なのです。でも、私も小さいときはそういう感じで内気だったので、やはり明るくて元気な子はいい子だとみんな思っていますが、迷惑をかけないでただ生きているだけで十分だと私は思っています。性格は生まれ持ったものがありますから、元気な子や明るい子は本当に人目を引いて、とてもすてきですけれども、それぞれ迷惑をかけなくて元気に育ってればいいのではないかと思っています。３人おりますが、私が今思っているのは、１人の子に関心が集中しすぎないのは母親としてはとてもいいのではないかということです。私も働いていますが、放任では育てていません。私はとても完璧主義に近くて、共働きだから子どもを手加減するというのはやりたくなくて、自分の時間を惜しんでも、どちらかというと子育てに集中しています。ですから、自分としては３人いることで、子どもたちが息抜きがあるのではないかと思っています。１人だともっと集中して、英才教育ではありませんが、もっと監視してしまうのではないかと自分で思うのです。

（Ｂ）私は、子どもを産むごとに子育てがだんだん楽になってくると思うのですが、下の子を上の子が見てくれるので、一番下の子が一番楽です。３人で適当に遊んでくれているので。

あと、今は子どもが遊ぶ場所などがなくて大変だと思います。私たちが子どものときは、そこら辺を走り回って、近所の人たちはみんな友達という感じで、おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさんと、どこの家でも自由に出入りしていて、そんな環境の中で育ったのですが、今はそういう…。うちの一番上の子は野生児というか、ものすごく元気がよすぎて困っているぐらいなのですが、外で遊んでいると、温かく見守るというよりも逆に変なふうに言われるというか。いつも遊びまわっている感じで、昔だったら多分私などから見たら普通だと思っているのですが、そういう育てにくさがあると思いました。ちょっと何かあると、直接言うのではなくて、近所でも「どこそこの子はどうだ」とか、陰口ではないけれども、よその子のことを言ったりすることがあるので、そういうのは嫌だし、そういう意味で今は育てにくい環境だと思います。安全に遊べる場所も少ないし。

（金子）それは行政なりがもっときちんと環境を作るということなのですか。

（Ｂ）そうですね。遊ぶ場所がないし、安全ではないですね。登下校中などは気になりますね。１人で歩いていると心配です。学校に行かせていても何か心配。

（金子）Ｄさんのところはまだ小さいでしょうけれども、子育てという部分と子育ちという部分、そういう２つに分けて考えていくというのは父親としていかがですか。

（Ｄ）私は転勤が多いので、私も家内も近所で助け合いながらという環境を作るのが難しいなという気がします。３～４年ぐらいで全国津々浦々あちこちへ行くような環境なので、そこで友達が作れたとしても全く違う。昔だったら、まだ社宅があったのですが、今は社宅を閉鎖して普通の借り上げに入るようなかたちで、周りを見渡しても全然知らない人ばかりです。そういう中で、うちの家内は比較的社交的な人間なので、その辺はなんとなく厳しい環境でも友達を作ってやってはいるのですが、なかなかそうできない人もいるでしょうから、そういう中で子どもが自ら自分で育つ環境とか、周りが協力して子育てをする環境というのは、今の状態ではなかなか作りにくいから、何かサポートがあったらいいなと漠然とは考えています。

（金子）転勤する方のためには、どういうサポートだったらいいのでしょうね。全国ネットで、何かそういう…。

（D） 難しいですね。やはり、同じ共通の悩みを持つ人たちがフランクに話し合える、集まれるような環境があったらいいのではないかと思うのですが。家内ともよく相談するのですが、そういうのを作ってしまうと、またいろいろ変な人も来たりして、一概に、そういうものができたからホイホイ入るのは難しいよというふうに…。
（金子） 昨日のインタビューで非常に印象的だったのは、そういうファミリーサポートみたいな全国組織の大企業があれば頼むのだけれども、福岡だけとか、佐賀だけとか、そういうローカルは嫌だというようなことを言われた方がいました。有名な企業がが全国ネットでやればいいですかと言ったら、それなら良いと。地元の小さなところで、よくわからないようなところがやるのは嫌だというようなことを言っていました。その方も転勤族だったと思います。
（D） 確かにその考えはいいかもしれません。
（金子） 安心できるところが全国同じようなレベルでサービスを提供すれば、仙台に行っても金沢に行っても同じサービスが買えるという、そういうことだったらいいという感じですかね。
（D） やはり行政でやるのではなくて、財源の問題や人の問題があって、場所によって温度差が出てきますから、むしろそういうしっかりした会社で、全国組織で同じサービスを受けられるようにして、それに対して国が資金的なものとか政策面で補助をするという方が馴染みやすい。
（金子） けれども、特定の民間企業を税金で応援していいのかという話も、また別のところから出てくるでしょうね。
（D） でも、今の生命保険などの制度も、国が全部できない分を民間に補完してもらうという組織が生命保険とかの中では成り立っていますから、別にそういうあれがあってもいいのではないかと思います。
（F） 私は社会性を見つけたり、他の人と接触をする場を見つけようと思って、仕事の合間に子育てサロンとか、児童館とか、公民館とかあちこちと行っています。今度の月曜日に身近にある一番近い公民館がオープンするのですが、どのような方がいて、自分たちがどのぐらい打ち解けられるかはメンバー次第だと思います。子どもたち自身が人に迷惑をかけないというふうに育ってきているので、私はどのぐらいまでやるのかなと見ていますが、浅い関係の場合、やはりお母さん方がどういう反応をするかが親同士は気になります。実際に「子育ち」を見守っていけるような、しっかり見てくださるスタッフがいるところもありますが、そうでもないところも多いし、機能がきちんとしているかどうかもまだ把握できていないので、本当のご近所さんでできない分をどのようにサポートするかというのを、今から見ていきたいと思っています。私の場合は、自分の同じマンションで子どもだけで遊びに行くところがあって、ちょっとだけより良い所があったらいいなと一歩引いて眺めている感じなので、切羽詰まっていないのですが。
（金子） 時間もあまりありませんので、基本的に少子化対策ということで、これはやはりやった方がいいのではないかということを、具体的にはともかくとしてアイデアだけでもいただきたいので、それぞれの方にお話をしていただきたいと思います。

この「少子化対策プラスワン」にもいろいろなことが書いてあって、例えば、不妊治療を保険にするとか、中学生や高校生に赤ちゃんとのふれあいの場を増やすとかも含めて、さまざまなことを工夫しようということが書いてあります。例えば、若者、高校生・大学生にすべて年間50万円ずつ奨学金をやろうという案があります。それは我々の年金の財源から回して、年間50万円までは本人に貸してあげて、親ではなく本人が働いて返すようにしようと。１年間に４兆円と書いてありますが、高校生と大学生は800万人いて年間に50万円ですから、４兆円必要なのですが、今のところ私たち団塊の世代が働いて、皆さん方も働いておられるので、年金の財源は200兆円ぐらいあります。その200兆円から４兆円だけ毎年子どもの方に回そうということです。そして、50万円を上限としてあげるけれども、それは卒業してから本人が払う。そうは言っても、高校３年、大学４年で毎年50万円借りると、本人があとで払うのは結構大変だと思うのですが、教育費はどうにもならないぐらい高いですから、そこまででもして、あとは本人が頑張って一生かかけて返すということまで、この「少子化対策プラスワン」には書いてあるのです。ですから、とにかく総力戦でやらないとどうにもならないという含みで、このようなインタビューも始めたわけです。たくさんの情報メディアから、たまたまこのシニアプランの案内をご覧になって、そして応募されて来られたのですから、これだけは言いたいということがたぶん皆さん方おありだと思いますので、最後はそういうことをお尋ねしたいと思います。Ｈさんから順番にお願いします。
（H） 私は以前結婚しておりまして、不妊治療にかかったとき一番多いときは年間20万円ぐらい払っていました。それは私も働いていたから気にせず使えたのですが、そうでない方にはかなり無理があります。10万円を超えたら返ってくるといっても、それは全額ではなくて、払った分に対してほんの数パーセントしか返ってこないので、とても助けていることにはならないのです。ですから、不妊治療費用に関しては、例えば年間で７万円を超えたらあとは国が払ってくれるとか、安心して産むための手段を助けてくれないと、不妊治療さえ満足にできないと思います。

それから生まれてからの支援もやはり大切だと思います。先ほど１時間で700円という話もありましたが、やむにやまれず預けるときは700円というのは安いのです。でも、そうではなくて、もう育てられないという精神的に追い詰められたときも預けたいので、それだったら例えば１時間500円とか、気楽に預けられるようになったらと思います。今の若い人は自分の時間をすごく大切にしてお母さんになっているから、自分の時間がないととてもつらくなってくるので、気楽に預けられる安全なところ、病気でも預けられるところ、長く預けられるところ、働き方も変わってきているので夜でも預けられるところというのができたらいいと思います。
（G） 私も子どもがおりませんので、Ｈさんと同じ不妊治療に関してなのですが、やはりそういう支援があれば私もどん

どんチャレンジできますし、40歳を過ぎてまだ結婚していない方々もそれをすごく心配しているので。

あと１つは、私の主人の父親が65歳で寝たきりなのです。その介護を母と一緒にしているのですが、介護に手間がかかりまして、今子どもができたら介護ができなくなるからというのがあって、不妊治療まではしていなくて、子どもはいつでもいいという感じなのです。でも、65歳ですから80数歳までは、あと20年介護を続けなくてはいけません。私に子どもができてしまえば介護ができなくなるからというので、子どもを生みたいけれども生めない状況もあります。そういう部分で、子どもができてからも預けられるところや、そういう施設が完備していれば、もっと気軽に子どもをとか考えられると思います。ですから、充実させていただきたいと思います。

（金子）そういう施設はＨさんも含めて、民間ではなくて、やはり国や自治体がやるという方がよろしいですか。

（Ｈ）いいえ、民間でも安心できれば。

（金子）きちんとある一定の基準を満たしていれば大丈夫だという。もちろん民間の方がいいという感じでしょうか。

（Ｆ）その預けるところという話で、民間で安心してというところはなかなか難しいので、もちろん民間を利用してもよろしいのですが、できれば職場の中にあるのがベストです。迎えに行かなくてはいけない、連れて帰らないといけない。もちろん病児でも受け入れられる方がよりよいのですが、そういうところがあると安心して仕事を続けられるし、子どもも産める。

（金子）専業主婦の方もおられるので、職場プラス地域の両方でしょうね。

（Ｆ）そうです。子どもを高校出すために稼ぐ。専業主婦の方でも働きたい方もいらっしゃると思いますので、その点は認めます。

（Ｅ）このプランを読むと本当にいいことで、自分が小さい子を育てていたときに希望していたことがたくさんあります。周りでも共稼ぎでお金を稼いで不妊治療を受けて、やっと１人できたという人を知っているので、ほしくてもできない人のことを考えると、行政の方で何らかのことを考えていただきたいです。

あと、働いているいないにしろ、本当に１人になりたいときがあると思いますが、お金を出してまで預けるのは贅沢だという目があるので、介護している人のリフレッシュと同じような形で、子どもを育てている人がリフレッシュするために預かってくれるところ、お母さんがホットできる空間や体制を考えていただければ、また新しい気持ちで、子どもに八つ当たりせずに育てられます。今の人たちが子どもを殺してしまうというのは、年齢に関係なく、相当追い詰められている状態が多いので、リフレッシュできる場を無償ででもしてあげるのが緊急ではないかと思います。

（金子）介護の場合はデイサービスのような形で、６時間か７時間お預けして、その時間は介護をしなくてもいいわけですよね。

（Ｅ）その間、少しリフレッシュできますけれども、子どもを育てているとき職場に行っている間は保育園が見てくれていましたが、帰ってきたら全部１人で子どもを背負ってご飯を作らなければならない状態でやっていました。子どもが大きくなったらなったで、いろいろなことをしながらご飯をという状態だったから、年次休暇を使ってでも１人になりたいということが多々あったのです。ですから、そういうサポートをしてくれるところがあると、また子どもを産もうかなと思う人がずいぶん出てくるような気がします。１人か２人で、それでもういいという感じで何人かの声を聞きますから。

（Ｄ）今のお話を聞いて、うちは有料ではあるのですが、そういうところに週１回出しています。うちも専業主婦なので、自分の仕事の面で預ける必要はないのですが、やはり専業主婦とはいえ、１日に１回ぐらい子どもの手を離すことができるところがあればということで、いろいろ探して見つけたのです。でも、問題は少し値段が高くて週１回、１カ月で２万円ぐらいするのです。大体４～５時間ぐらい預かってくれますが。ちょっと高いなというところがあって、せめて5,000円ぐらいならと思うのですが。逆に安いところもあったのですが、１～２時間ぐらいしか預けられない。それだと何もできないので、たまっている家事をやって終わりという感じで、何かそういうものがもう少しできたらなと。何かいい面でできたらなと思います。ホッとする時間がほしいと言っていましたので。

（金子）仮にそういう施設ができたとすると、受けてくれる、あるいは子どもを面倒見てくれる人たちは、同じ世代がいいですか。もっと上のお母さんぐらいの世代がいいですか。

（Ｄ）預かってくれる人は同じ世代がいいのかな…。

（金子）そうですか。皆さん方はどうですか。

（Ｅ）少し上がいいです。一番上の子を保育園に預けたときに、若い先生たちは、保母さんの資格を持っていても子育て経験が全然ないのです。でもパートの先生は、自分の子どもを育てるために一回仕事をやめている先生で、その先生たちからいろいろなことを教えてもらったのです。育児書にも載っていないことを全部教えてくれました。私は親元から離れていましたが、本当に勉強させてもらいました。あれで不安にならなかったし。

（Ｆ）私は忘れてしまってないぐらいの経験者がいいです。私の親世代は、それは違うと証明されているようなこともたくさん吹き込んで、私が否定すると怒るので。

（金子）なるほど。Ｃさん、いかがですか。今預けるところの話が多いのですが、全体として、少子化対策として、これはというようなお話でも結構です。

（Ｃ）私が子どもを産むと考えた場合、普通は保育所に預けると思うのですが、病気のときに預かってくれるところがあ

るときっと助かると思います。実家が近くにあればそこに預けられると思いますが、私の周りでも、「熱を出したから迎えにきてください」と急に保育所から電話がかかってきたり、朝、「今日は子どもが熱を出したから行けません」と職場に急に電話がかかってきたりすることがあるので、そういうときに、どうしても今日ははずせないという日があると思うのです。その人でないといけないという日があると思うので、そういうときに預かってくれる場所があれば助かると思います。保育所は遅くまで預かってくれますが、小学校となったら、今は学童保育がだいぶ充実しているようですが、仕事は５～６時ぐらいまであるので、その間学童保育がなかったら子どもはどうするのかということがすごく不安です。

（金子）病気の際に預けるのは、例えば病院ではだめですか。

（C）病院の託児室のようなところで預かってくださったら助かります。

（A）今、あることはありますがすごく遠いです。区で１つぐらいしかありません。

（B）私はときどき育児で悩んだとき、夜中でも電話で無料相談できるところがあるのですが、それで助けられたこともあります。ちゃんとした指導を受けた指導員みたいな人が相談に乗ってくれる電話もあるのですが、そこは12時までで、時間が少しオーバーしたら時間だからといって相談の途中で終わってしまったのです。もう少し早めに電話をするように言われましたが、子どもの起きている時間は電話ができないので、夜中でも相談できるようなところがあったらいいと思います。自分の母ぐらいの年配の人がゆっくり聞いてくれて、いろいろアドバイスをしてもらって、その一言で助かったことがありました。

（金子）それは病気の相談ですか。

（B）いいえ、育児の悩みです。悩みのことで、だいぶストレスが溜まっていたときに電話をしたことがあります。一番上の子が言うことを聞かないことがあって、どうしたらいいのか、私も泣きたいような感じで電話をしたのですが、そのときに、いくら叱ってもどうにもならない子は叱らない方がいいと言われたのです。それで気持ちが楽になって、その日から怒鳴り散らさなくてもよくなったのです。悪いことをしたときも、ガーと言ってもだめ、子どもによって叱り方があると思うので、この子はだめだから別の言い方にしようと思ったのです。

（金子）それはご主人や実家の両親よりも、相談業務をしている人の方がよかったですか。

（B）身近な人だとちょっと…。普通の悩みというか、あまり深刻でないことだったらいいのですが、だれにも言いたくないような、「ひどい母親だな」と自分で思うようなことを知っている人には言いにくいから、全然知らない人に。

（A）私は、保育園に預けている間に子どもが水疱瘡になったことがあります。そのとき２人預けていましたので、お姉ちゃんがなったから次は弟がなると想定して、２週間は保育園に行けないものですから、そこまでしなくてもと思いながら飛行機で実家に預けに行ったことがあります。空港で子どもを親に渡して、すぐトンボ帰りをしたのですが、そのことを職場の上司に言いましたら、「そこまでしてまで」と言って絶句されましたけれども、そのとき思わずむっとなって、「では２週間も休んでもいいのですか」と言ったら黙ってしまったのです。

今通っている保育園で、数年前から専業主婦がお子さんと一緒にやってきて、週に１回保育園で遊びながら育児の不満を解消しようというプランをやっています。それが始まると聞いたとき、正直言って高い保育料を払っているのだから、まず病児保育をやってもらうのが筋ではないかと思ったのです。専業主婦のお母さんたちが週１回、つくろぎというか、ストレス解消も兼ねていらっしゃるのは最もだと思います。ですが、病気になって回復期にある子どもを預けるところが区に１つしかなくて、共働きの場合は年次休暇をやりくりしてなんとか仕事を続けているわけですから、看護士さんの資格を持った方を各保育園に１人ずつぐらい配置して、隔離されてもかまいませんから、ある程度見ていただくと本当に助かると思います。

私は今３回目の育児休業中ですが、３回とも上司に育児休暇の依頼をしてもなかなか対応してもらえないのです。突然病気で入院するのと違って、１年も前からわかることなのに、なかなか後任の方も決めてもらえなくて、結局周りの方に迷惑をかけてしまうのです。そういう体制は仕事を続けるうえではやりにくいので、もっと上司もいい対応をしていただければと思います。

（金子）それは、例えばこういう「少子化対策プラスワン」が出て、もっと国が企業に対して指導をするということで。

（A）やはり人次第だと思いますが、３回ともなかなか後任の方が決まらないで、私がちゃんと依頼しなかったのかと周りの方に思われるのがすごく悲しいので。こちらは妊娠がわかった時点ですぐに報告して、「いつから休みをいただきます」とできる限りのことをしているのに、後任が決まらず、引き継ぎができない、産前休暇に入ったのに仕事に行かなくてはいけない、権利もなかなか行使できないといった状態です。でも、人が少なく合理化などと言っていますから、合理化と育児休業とか育児時短という反面的な作用といいますか、私も育児時短は復帰したらできますが、仕事の内容は変わらずに４時までに帰りなさいと言われても、結局給料は少なくなって密度の濃い仕事をしなくてはいけないわけです。それだったら、もっと軽い仕事に代わらせていただいて、４時で帰りたいというのが本音です。もう少し人にゆとりがないと、みんな相手のことをかまってやれないと思います。

（金子）育児休業中は４割ぐらいの報酬で、１年間ですか。

（A）１人目のときは25％でしたが、今は40％になっています。ですから本当に助かっています。期間は３年まで取れるのですが、１年を超えると社会保険を自分でかけないといけないし、そういう手当金もなくなりますので、かえって大変になってきます。私は１年と少し取って、きりのいい時期に復帰することにしました。

（金子）ちょうど時間になりましたが、たくさんの意見をちょうだいしまして、どうもありがとうございました。

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」
東京グループ面談（第1回）
日 時 ： 2002年12月14日(土)13:30～15:30
場 所 ： セブンシティ「銀杏の間」

（金子：司会） 本年度の研究テーマのグループインタビューは、９月に札幌、10月に福岡、今回の東京で本年度のスケジュールでいくと最後になります。北海道、九州、東京の３カ所に分けてやったのは、東京が一番少子化が進んでいるということです。札幌がそれに次いで第２位、福岡も負けず劣らず少子化というか合計特殊出生率が低い地域だからです。そういうところで暮らしている方々の生の声を聞いて、その原因と、どうしたらいいかということ、それから行政がいずれどのような手を打てばいいかという場合の参考素材になるように心掛けた研究をしています。

私の専門は社会学という学問で、少子化や高齢化が進む社会のあり方を考える学問であると同時に、少子化や高齢化が進む中で個人はどのように生きていくのかという、社会と個人の間の研究をする学問です。

（安梅：サブ司会） 私の専門は保健学です。みんなが健康で元気に長生きするというのが今はやりなのですが、この少子化に関しては、お子様の方も元気に健やかにすくすくと、親御さんの方もいろいろなストレスがあるかもしれませんが、それを地域でなんとか支えながらやっていけたらいいなということを専門にしております。

（金子） それでは、自己紹介を兼ねて、このグループインタビューに自分はどうして参加しようと思ったかということも含めて、簡単に一言ずつお願いします。

（A:33・男・既・専・1） 私は去年の 12 月に子どもが生まれて、１年間子育てをやってきましたが、周りに知り合いがいなくて親も離れていて、いろいろ大変なことがありました。この少子化の記事を見て、私が置かれている立場がこれに当てはまるのかと思い、参加してみようと申し込みました。

（B:36・男・既・専・0） 私の場合は昨年結婚して、まだ子どもがいません。年齢的にそろそろ子どもがいないといけないという気持ちが半分あります。世の中では少子化ということがうたわれています。会社の中で雑談はするのですが、専門家の方の意見を直接伺う機会がありませんし、同年代の方で会社以外の方々の意見を伺う機会が少ないので、今回いい機会だということで参加させていただきました。

（C:38・女・既・専・1） 子どもが社会科の勉強などで、人口の推移は、以前は釣り鐘型だったのがだんだん逆三角形になってきているということを習ってきて、そういうものを実際グラフで見ると、「なるほど、そういうふうにしてどんどん子どもの数が減っているのだな。」と、認識しました。今日はいろいろと勉強させていただきたいと思います。

（D:38・女・既・専・2） 専業主婦で子どもは２人います。専業主婦は、普段あまり発言する機会もなくて、「少子化に関するグループインタビュー」を記事で読んで、いい機会だと思い参加させていただきました。

（E:38・女・既・専・0） 私は結婚がかなり遅くて、今年の９月に結婚しました。それまではパラサイトシングルといいますか親に頼りきりだったので、少子化も自分のような人が原因ではないかと思い、記事を見て参加したいと応募しました。

（F:38・女・既・共・1） 子どもが６歳でひとりっ子ですが、周りからは「ひとりっ子ではかわいそうだから、早く２人目をつくったら。」と言われ続けて６年経ってしまいました。まさしく少子化は自分のことという感じで応募しました。

（G:32・女・既・専・1） 私は去年出産して子どもは１人なのですが、育てていく中で仕事と育児の両立についていろいろ考えることがあり、こういう機会にいろいろ学べたらと思い応募しました。

（H:31・男・既・専・1） 私は６年前に結婚して、子どもは５歳になります。２人目が欲しいと思っているのですがなかなかつくれない状況です。私自身の収入はあまり多い方ではなくて、講師の仕事をしていて収入が不安定ですので家内も働いています。子どもをつくれないのはやはり収入面が非常に大きくて、もっと行政がバックアップしてくれるといいなと思い参加させていただきました。

（金子） それぞれの立場で集まってきていただいたのですが、お尋ねしたいことは大体４つ若しくは５つぐらいに分けることができると思います。

厚生労働省が、今年９月20日に「少子化対策プラスワン」という新しい少子化対策を出しましたが、それまでは「エンゼルプラン」の古いものと新しいものを中心にやっていました。９月に出された一番の特徴は、「男の働き方を変えましょう」ということを打ち出していることです。これは男性の立場を含めて、この新しい少子化対策の中で最初に働き方を考えなければいけないのではないかと国の方が言われています。これは、言うのは簡単でがなかなか大変だということを私たちも思います。まず、この点から順番にご自身の職業を含めて、働き方を見直すことについての意見をいただきたいと思います。

（A） 働き方を見直す…。

（金子） 見直すというか、具体的にいうと「短縮しましょう」という話です。例えば「月・水・金」に働くとか、夕方４時頃になったら帰るとか、今のように長く働かなければ、その分、男性が家に早く帰って育児を手伝えるだろうということに対してです。

（A） そういう考え方は大変いいと思います。私も子育てをしていて、平日はほとんど家内に任せっきりで、帰宅が８時や９時になるので、それから極力子育てをやろうとするのですが時間もないので、その働き方を見直して時間を短縮するというのは非常にいいと思います。しかし、自分ひとりで「月・水・金しか働きません」とか「４時に帰ります」と言っても、会社全体で取り組み、周りもそういう考えもとでやらないとむづかしいと思います。
（金子） 会社がそういうふうにしてくれる場合に、一番のネックは収入の問題だと思いますが、半分働いたら当然収入は減るでしょうが、減ってまでやるかどうかです。収入が減ることがわかっていても、やるかどうかについてはいかがですか。
（A） 減少するとなると、やらないのではないかと思います。
（金子） 働く時間は短くなるけれども、現在の収入は保証できるとか。
（A） 保証してもらえるのであれば、是非子育てに参加…。
（金子） いままでの経験で言うと、営業などの仕事は相手次第なので、自分だけが休むわけにはいかないという意見をたくさんいただいております。Aさんの体験でそういうことについてはいかがですか。
（A） 私の仕事は、「日」や「月」によって忙しさが変わるので、最初から「月・水・金」しか来ないというのではなくて、今週は仕事の状況を見て「月・火・水」や「水・木・金」に出勤し、状況によって取れる曜日を変えられれば、取り易いのではないかと思います。
（金子） 収入が減る方が大事だと思うか、仕事がスムーズにいく、いかないのどちらの方が判断材料になりますか。
（A） 収入の方です。
（金子） では、収入がある程度保証されれば、今のようにサービス残業も含めて減らしてもっと早く帰って、男性も家事・育児の場面に協力できるということですか。
（A） はい。
（金子） 同じ質問ですが、男性の働き方の見直しについて意見をいただきます。
（B） ニュースや配布資料を見て、「そんな無謀な」と直感的に思いました。私の仕事は営業やサービスです。社外の人との仕事が商売対象という形でやっていますので、例えば、子どもが生まれたら５日間の休暇を取るというのは、無理な話だと思います。テレビや新聞を見ていると、ここ数年、景気がどんどん悪くなってきており、民間企業では人をどんどん減らし、残った人でいなくなった人の分も抱えて仕事をやっている状況です。要するに、１人当たりの仕事量はどんどん増えてきているのが民間企業の実態だと思います。そういう中で働く時間を減らすというのはかなり厳しい話だというのが実感です。
かたや少子化という問題もあるので、その辺を解消していくためには、自由な時間を捻出する必要性があり「少子化対策プラスワン」が出てきたと思いますが、あまりにも、今のこのタイミングでは逆走しているような発想だと思いました。ただ、あまり抵抗感ばかり持って何もしないという訳にはいかないですし、やはり個々の事情もあると思います。こういうことは無理としても、マインドとしては認識していると思います。昔のような封建的な社会とも違います。そういう面では、個々の時間やプライベートについては、非常に重視してくれる環境になりつつあるように、ここ10年の間に変わってきているのではないかと思います。自分の仕事のやり方や効率化を考えていけば、自分の努力で捻出できるのではないかという気もします。しかし、考えはかっこいいのですが実態が伴わないことが多いと思います。
（金子） 今の話の中で、１人当たりの仕事量が増えてきたのは、我々のような立場からしてもよくわかる発言で、１人あたりの働く時間を減らしながら仕事は増えてきたことを感じるのです。ですから、むしろ仕事が増えてきたので働く時間を長くしなければ対応できないところが、我々のような大学で働いている人間にもあるので、いきなり減らしなさいと言われても、他の条件が変わらなければ無理だろうと思います。その場合よく言われることは、ワークシェアリングという少し人を増やして、１人当たりの収入は減るけれどもたくさんの人を少しずつ雇えば１人あたりの労働時間は減るということですが、Bさんの会社・職場で可能でしょうか。
（B） 可能だと思います。ただ逆に収入が減るというもう１つの問題がありますので、そういうことを考えると、組織としては可能と思いますが、個々の意見としては反対になってくる部分があるのではないか。子どものことを考えると当然費用がかかる問題ですし、多少後ろ向きにならざるをえないという気持ちが働いてしまうのではないかと思います。
（金子） そのワークシェアリングの部分を、国若しくは社会全体が少し費用負担をしてくれればまた別の話になりますね。
（B） はい。
（金子） 個人の仕事が減るけれども収入は維持できる。しかし減った部分はワークシェアリングでほかの人が肩代わりしてくれる。その分の費用をどこからか持ってくれば、会社はもちろんそれでいいでしょうし、フルタイムで働いている人たちの抵抗もあまりないという感じでしょうか。
（B） そうですね。
（金子） ご亭主の出社が例えば「月・水・金」になるとか、夕方４時若しくは５時にきちんと帰るということを仮に実践されたとして、本当に家事参加・育児参加があるかどうかは、自分のことを考えると不安があるのですが、主婦の立

場からの意見をいただきたいと思います。
(C) やはりお子さんが小さくて主人の手を借りたいという世代の方でしたら、歓迎されると思います。
(金子) 子どもがいくつぐらいまででしょうね。
(C) 幼稚園の送り迎えがあるぐらいまでです。
(金子) 小学校はもう自分で行けますからね。
(C) そうですね。ですから私など「月・水・金」に帰ってこられたらどうしようかなと…。
(金子) 結構、そういう発言をされる方が多かったです。帰宅途中でパチンコ屋か何かに寄るのではないかという意見もあったのですが、やはりそういう感じですか。
(C) 7時ぐらいまでに帰ってこられるとすごく慌てます。
(金子) 平均は何時ごろですか。
(C) 今は忘年会などがありますので時期にもよりますが、8時から10時ぐらいの間です。
(金子) そうすると、基本的には夕食は子どもと一緒ですね。
(C) 先に食べています。
(金子) ご亭主は別で、お母さんと子どもだけという。
(C) そうです。
(金子) 早く帰るあるいは少し働く時間を全体として減らすことの可能性はいかがですか。
(C) 今の世相ですと、本当に景気が悪くて、今度、専業主婦が増税になりますね。パートで働いていた人は103万円の壁があり、なんとかそこまで働いていた人たちにも税金がかかりますし、ますます家計が苦しくなっていくと思います。あくまで理想だと思いますが、現実としては非常に厳しい問題です。ゆとりがあって余裕のある世の中になれば考えられるかもしれませんが、現実としては非常に難しいと思います。
(金子) そのゆとりというのは、例えば収入面と時間面でいうと、どちらを優先されますか。
(C) 両方というのはなかなか天秤にかけられません。
(金子) 大変ですね。
(C) ヨーロッパなどは夏休みが1カ月あり、すごく羨ましく思います。暑い時期に主人がスーツを着て出かけていく姿を見ると、すごく大変だと思います。
(金子) 年次有給休暇は20日ぐらいありますが、平均8日間ぐらいしか取っていません。
(C) 全部取るということはまずないです。
(金子) そういう意味では、やはり働き続けてある程度収入が確保できないと、時間的なゆとりも取りにくいという感じですか。
(C) そうです。やはり収入は気持ちの中にゆとりをもたらすものですから、減収というのはすごく厳しいと思います。
(金子) 働く時間が減って減収よりは、8～9時に帰ってきてもいいから、収入はある程度維持したいという気持ちが強いですか。
(C) そうです。年金もはたして受け取れるのかどうか。43歳以下は払い損だという意見もありますし、今の若い人はフリーターで税金を払わない人もいます。本当に先が見えないため不安感を持っています。ですから、今は収入を得るという方向にいくのではないかと思います。
(金子) 先が不安なことはそのとおりですが、個人年金などで対応されているということはありますか。
(C) 専業主婦ですので優遇されていますが、特にそういうのは今のところやってません。
(金子) それではDさん、同じ質問です。
(D) 男性が早く帰ってきたり、働く日数を減らしたりというのは、やはり現実的なことを考えると無理な話ではないかという気がします。いま、小学校6年生と3年生なのですが、小さかった時は主人が早く帰ってきてくれるといいなと思ったことはあるのですが、大きくなってくるとそういう必要もなくなってきました。私ひとりでも十分子育てできるという感じになってくると、仕事を十分してもらって収入を得たいという気持ちが強くなってきます。そういう考えの人もいるし、子育ても完全に終わってしまって家に早く帰る必要もないという人たちもいて、そういう中で早く帰るということは、周りの目があって無理なことが多い気がします。
(金子) 例えばデンマークの話で、子どもが3歳までは優先的に帰るべきであるということを実践しているところがあります。その分は3歳を超えて子どもが大きくなった同僚が残業してカバーするということです。例えば3年間は4時なら4時に帰るべきであり、収入はある程度保証する。その方の仕事は40～50代の人が残業してカバーすることをずっと世代的に繰り返していけば、少しはいいのではないかと思いますが、仮にそういうことであれば、職場の中でもあまりつらい思いをしないでしょうか。
(D) 全国的にそういう考えに皆さんがならないと、やはり無理だと思います。
(金子) そうですね、1つのある会社だけがやってもですね。早く帰ってこられることで、あれを頼もう、これも頼もうというようなことを今お考えでしょうか。子育てだけではなくて、例えば夫婦の会話とか介護の問題とか、そういう

ことを含めての意見はいかがでしょうか。
(D) いまは主人も私の方も両親とも元気ですが、この先何年後になるかわからないですが、そういう問題も出てきます。そういうときにはあれこれ頼みたくなる時期も来るのではないかという気はします。
(金子) 先ほど、Cさんも言われたが、将来が不透明で年金などのことを含めるとどうしていいかわからないという不安はありますか。
(D) それはあります。
(金子) 個人年金などに対応されるようなことは、相談されたことはありますか。
(D) 特にそういう話はしていません。
(金子) 専業主婦の優遇をやめるということがこの数日新聞に出ていて、間もなく年金の掛け金も個人単位にするという方向になるだろうという世論の動向があるわけですが、それについていかがですか。
(D) やはり収入が減ってしまうのでとても…。
(金子) 税金が増えるということですね。
(D) そうですね。そうすると、これから子どもが大きくなっていくので、やはりお金はかかる一方で、そういうことはとても困ります。
(金子) 専業主婦を優遇しているからやめるというような意見の出し方が多いのですが、それは優遇しているというふうにお考えでしたか。
(D) それは思っていませんでした。子育ては家で私がするもので、それがあたりまえだと思ってきましたので、子育てしたり家事をしたりしているから優遇されていると考えていたのですが、それが全く否定されてしまうようなことになるので、怒りを覚えます。私がパートに出たりしなくてはいけなくなるということで、それも困ります。
(金子) 今までのやり方は専業主婦を優遇していると、新聞などでは国もそのようにいったので変えるということを言っているわけですが、優遇されているとお考えでしたか。
(C) 国民年金を払わなかったりということですか。
(金子) それとか配偶者特別控除のこととか。
(C) 専業主婦も家にいるからといって遊んでいるわけではないです。家事労働というのは、賃金に換算すると28万円という数字が出ているので、私は一度主人に「28万円ちょうだい」と言ったことがあります。朝は子どもの弁当を作って、夜は主人の話し相手になりますので…。
(金子) 専業主婦の立場からは、子育てが最大の社会貢献になっているという意見が一方ではずっとあるわけです。専業主婦からの発言で一番大きいのはそこですが、それが新聞やテレビでなかなか出ないです。なぜかというと、新聞やテレビを作っている人はみんな働いている女性ですので、専業主婦が新聞やテレビを作らないので、なかなかその意見が届かないことや、紙面に表れないという問題が別にあるわけです。専業主婦の方はちょうど1,000万人いるわけですが、そういう人たちの声がなかなか届かないような構造が作られてしまっているような気がします。私自身はたぶん皆さん方と同じ考えですが、なかなか難しいところがあります。私はそういうマスコミ批判もやっているのですが、本当に優遇ということになるのかどうかということをもっときちんと議論した方がいいのに、優遇だということで問答無用というところがあるような気がします。そのことも専業主婦の方にお尋ねしたいと思っていたわけです。ご亭主の働く時間が短くなるというようなことと、主婦をやっていて、専業主婦の場合、優遇であると認知されたので、優遇しないという方向に今から動こうとしているのですが、その２点についてのご意見は。
(E) いま、主人の帰りは11時ぐらいになっています。土曜日は休みですが寝ています。それで、洗濯や掃除が終わったころに起きてくるという状況です。例えば「今日は雨が降りそうだから、洗濯物入れておいて。」と言っていても生返事で、期待できません。たぶん、主人は早く帰ってきても家事に参加しないのが目に見えているので、仕事の終わる時間が早くなっても家事をやるという話には繋がらないと思います。
(金子) そのことについて他人がとやかく言うことはできないので、厚生労働省としては、そういうことをすれば家事参加、育児参加してくれる男性も増えるのではないかということで、止めざるを得ないわけです。また、もう１つの「優遇している」といういい方についてはいかがですか。
(E) 結婚するまで働いていたので、そのときは感じませんでした。結婚して主婦になってから耳に入ってくるようになった感じがします。働いていた時のことを考えると、やはり優遇されているのではないかと思いました。
(金子) お友達でそういう話をされたことがありますか。
(E) ありません。
(金子) 未婚のときは。
(E) 税金のことなどもあまり考えていなかったし、「あったらあるだけ使え」という感じで何も考えないでやっていました。
(金子) 今度は共働きの立場から、ご亭主の仕事の時間が短くなるということについての意見をお願いします。
(F) 主人は失業していまして、いま仕事を見つけたのですが非常勤なので、そんなに遅く帰ってくるということはなく、

収入も低かったので自分が「頑張ろう」という気持ちになり、子どもが５歳ぐらいまでは非常に大変でした。早く帰ってきて手伝ってくれるかなという期待はありましたが、全くそういう気もなく揉めたことは結構ありました。また、仕事中に子どもの熱が出た場合には私の方に連絡がきて、職場からすぐ行かなければいけないことが続きました。主人に「たまには休んでくれればいいじゃない」と言うと、「男でそんなことをやっている奴は誰もいない。前例がない。」という感じです。毎朝、熱を出す度に夫婦で揉めて、本当は２人目もほしかったのですが諦めました。

子どもを保育園に預けていたので、朝４時や５時に起き大変つらい時期があったのですが、夫が非常勤だったので辞めるわけにもいかず、今も頑張っています。

(金子) ずっと働いていたわけですね。

(F) はい。

(金子) 専業主婦の経験はありますか。

(F) ありません。

(金子) ここ数日の新聞やテレビの報道で、専業主婦の優遇をやめるということについてはいかがですか。

(F) あまりそういうことは考えたことがなく、先ほど言われたように、税金などのことは何も分かりません。興味を持っていなかったというか、とにかく目の前にあるお金という感じでしか考えていませんでした。

(金子) お子さんはおいくつですか。

(F) ６歳です。ようやく１人で留守番ができるようになりました。

(金子) 10年もたたないうちに塾などの教育費にお金がかかるようになると思いますが、そういう場合の負担の問題はどのようにお考えですか。

(F) 夫もボーナスが一切ないので、かなり節約しています。

(金子) 同じような質問です。

(G) 主人の働く時間が減ったとしても、普段の生活で早く帰ってきたときは、お風呂に入れてくれるぐらいで、そんなに必要としていません。必要なときは、子どもが病気をして病院に連れて行くときや、寝ずの看病をしなければいけないときや、私の体調が悪いときにいてほしいと思うだけで、手のかかる１歳児なのですが普段はあまり必要と思いません。どちらかというと有給休暇内で「今日は朝だけ休ませてください」とか、期間代休のような感じで、会社でもっと取りやすいように進めてもらえる方が助かります。主人と同じ会社にいたのですが、やはり男性は有給休暇があってないようなもので、女性ほど簡単に取れません。会社全体で気兼ね無く休みが取れるような環境つくりが必要だと思います。

(金子) 実際、有給休暇は過半数の方が半分も取っていない訳ですね。

(G) ほとんどあってないようなものです。

(金子) 専業主婦優遇という議論についてはいかがですか。

(G) 優遇されているとは思いませんが、私はもう少したてば働こうかと思っていたましたので、優遇されなくなるとがむしゃらに働くしかないと思います。

(金子) ちょっと働こうと思っていたのに、本気で働こうという事ですね。

(G) そうです。そうしないと保育園の費用で収支がトントンになってしまいます。また、年齢からいって２人目もほしいのですが、いま心が揺れています。

(金子) 専業主婦の優遇をやめてというのは、年金を貰う人がどんどん増えてきて、掛け金を払う人が減ってくるので、みんなで働いてくれという趣旨だと思うのですが。

(H) 早く帰るということなのですが、私は励行しています。私は大学を卒業して営業をやっていましたが、家内が妊娠して会社を辞めました。子育てなどに時間や手間がかかりますし、家内は18歳のときから10年以上仕事をしており、女性だからといって仕事はしないということは全然考えていません。やはり、家内は母子家庭で育ち母親がずっと仕事をしていて、女性も働くべきだという考えを持っていますから、私がそれに合わせるような感じです。例えば、家内が妊娠したころ、通勤などが結構つらいと思いましたが、オフピークで時間をずらして通勤することを会社側が認めていなかったのです。ですから、私は家内の会社の近くの職場に変えて一緒に通勤しました。また、子どもが保育園に行くようになると送り迎えがあり、私ができるようにということで、家のそばの学習塾で講師をするようにして、私が合わせてきたという感じです。ですから、当然、私の収入は安定していません。それでもいいかなと私は思っています。家内はしっかり働くと言っていますから…。当然、収入が安定しませんし、収入が低いのは仕方がないと思いますが、転職がしやすい社会であればなお良いのかなとは思います。

(金子) いま、人減らしの方にすべての会社はありますから、転職は厳しいですね。それも結局は経済的な活力を社会全体が持たないと、なかなかそういうふうにはならないということなのでしょう。１つの会社が頑張っても、全体として底上げできないとなかなかうまくいかないのだろうという気がしますが…。

(H) 私も家内も収入より家庭内のゆとりを優先しているので、夫婦と共に子育てをするという考えでやっています。旦那さんが７時よりも早く帰ってこられては困るというようなことは、私の家ではちょっと考えられません。

（金子）働き方は非常に大事なのですが、もう一つ何人かの方から意見が出た、日常的にはあまり役に立たないけれども、病気をしたときや困ったときに夫の協力が必要だという話がありました。安梅先生がその専門ですが、いま、一部の地域では地域で子育て支援をして行こうということで、苦労するのが母親だけではあまりにもつらいことが多いので、もっと地域の中でできることをみんなでしましょうという、保育園や幼稚園をもっと増やす、或いは夜間に小児科の先生がいるような急病センターもきちんとするようなことも含めて、地域ぐるみの支援をやっています。

また、ベビーシッターのニーズも結構あるわけですが、皆さん方は都内にお住まいですが、そういう地域からの応援というものに対してそれぞれどのようにお考えで、こういうことをもっと増やしてほしいという希望があれば、ぜひお尋ねしたいと思います。

（A）今月１歳になるのですが、育てていくうえで周りに相談する人がいないので、気軽にいつでも相談できるようなところを多く作っていただければと思います。例えば、夜に子どもが急に泣き出して泣きやまない場合に、病院へ行くにももう閉まっている。そういうときに気軽に子育てをした経験のある方がどこかにいて、その人に相談できるようなところを作っていただければ良いと思います。

（金子）夜間の急病センターのようなものが区の中にありますか。

（A）あります。

（金子）泣きやまないとか、熱が少し高いとか。

（A）そうです。

（金子）病気や健康における相談ということですね。

（A）そうです。あとは育て方で、うちの子は離乳食を食べ始めるのが遅くて、他の子はみんな食べているのにうちの子は食べていない。そういうとき「大丈夫なのかな」と不安になったりしていたこともあるので、そういうことも気軽に相談できればいいと思います。昔であれば、おばあちゃんがいます。今は本を見ると４カ月になったらこれを食べさせて、５カ月になったらこれを、というのがあって、４カ月になってそれをやっても食べなかったりすると不安になってしまいます。実際のところどうなのかということを相談できるような場所があればと思います。

（金子）それは区役所などに…。

（A）近所で週１回ぐらいやっているところへは行っています。

（金子）週に１回、例えば午前中だけとか、そういう感じですか。

（A）そうです。そういう場所をもっと増やしてもらえれば良いと思います。

（金子）それは例えば民間の業者でもよろしいのですか。例えば１時間に 800 円とか 1,000 円とか、それぐらいの費用であれば。ベビーシッターのような形で応援に来るというものもあるわけです。ただ単に相談に乗ってもらえるような所という意味ですか。

（A）そうです。

（金子）安梅先生、どうですか。そういう所はありますね。

（安梅）保育士の団体で 24 時間対応する電話相談や、インターネットで親同士の情報交換というサイトもありますが、その方たちが 24 時間対応するサイトもあります。そういうものを利用していただければと思います。そういう情報がなかなかまだ行き届いていません。

（A）そういうものがあるとは知りませんでした。

（金子）きちんと相談の電話番号などが出ているわけでしょう。それを是非試みられると良いと思います。

地域から、或いは地域への相談や応援をしてもらうという、そういう文脈での子育て支援というのはいかがでしょうか。

（B）まだ子どもがいないので、そういうことをまだ真剣に考えたことはないですが、いた場合のことを想定してみると、あまり相談しないのではないかという気はします。というのは、今住んでいる所は双方の両親が近い所に住んでいるということや、知人・友人関係が多いので、子どもの問題で何か困ったことがあった場合は、区とか公の施設ではなくやはり知人の方に相談する機会が断然多くなってしまうのではないかと思います。なぜかというと、区の施設も利用する価値はあると思いますが、知人などの方が情報源として多少信頼できるという部分がひとつのポイントになってくると思います。

私は転勤族で、東京に数カ月前に戻ってきたばかりですが、前にいた地方の都市で暮らしていたときに、子どもの問題ではないのですが、ゴミ出しや近所の騒音問題ということで困った問題があっても、公の機関には特に相談せずに、内々で我慢していれば良いのかなというような形で考えていました。ですから、そういう施設があったとしても利用しないと思います。逆に、いまも話がありましたが、施設があるということを情報源として入手する手段がない、存在すら知らなかったというのが正直なところであります。そういうものがベースにあるから、区役所に行ってもわからないだろうからというので知り合いに頼むことになってしまうと思います。

（安梅）情報が信頼できないというのは、どんなところで感じられたのですか。

（B）一度経験して信頼できないということではないのですが、やはり最近のニュースなどを見ると、信じられないよう

な事件が非常に多くなってきていることが植え付けられてきてしまっているからです。ですから本当はそういうところがサービスの一環として本当にやってくれるということは間違いないのが前提条件としてあります。それはやはり信頼問題ということなので、それがベースのはずなのですが、病院でこんな事件があったとか、警察がこんなことをやったとか考えられない事件があるので、ひょっとするとという歪んだ見かたをどうしてもし兼ねないところがあります。万が一何かあるとやはり嫌だという逃げの姿勢になって、それならば知っている人の経験者の話を聞いた方が真実味もあるし、お互いに顔も知っていますから、こちらのことを考えて意見を言ってくれるのではないかという気がします。

（金子）相対的に比較すると、ご両親や友人・知人の方が、何も知らない民間の人よりも信用できるという感じですか。

（B）そうなってしまいます。

（金子）では、ご両親が近くにいないとか、友人・知人も転勤したばかりでいないようなところであれば、必然的に応援を得るというのはそういう民間や役所しかないでしょうけれども、それはまたちょっと違うのでしょうか。

（B）この前まで置かれた状況は、それに非常に近い状況だったと思います。そのときでも、やはり話は聞いてみたりとか動作としてはしていたかもしれませんが、結論としては、あまり頼らずに自分たちの手でなんとかしようという結論に至って、助けがあることを知なかったということもありますが、活用はしていませんでした。

（安梅）いろいろな事件が起こっていますが、最低限、公的施設や専門職がやっている部分は、質の保証というか絶対大丈夫というお墨付きにしなくてはいけないという動きにあるのです。そうしないと、何が本当なのか、口コミの情報は嘘でもしかたがないということがあります。マスコミの情報も、本当かなと思われるところはたくさんありますが、これが本当ですというものはきちんとつくっていかないと、混乱してしまいますね。それは公的施設や保育士・保健師の専門職がきちんとつくるものだというのをつくっていきたいなという動きなのです。

（B）先ほど話がありましたが、新聞に出た配偶者特別控除の問題など偏った意見がマスコミに出ることや、新聞などを見ても偏った方向でしか出てこなくて、正確な平等な意見というかたちの出方をしないので、いろいろなことに関して曲がった印象を、みんな何らかの形で受け止めてしまうので、何が本当なのかといった部分がどうしてもわかりづらくなってしまっているような気がします。

そういうものが歪んでしまっているような気がするので、それをなんとか是正し、マスコミや新聞もそうですが、今日の「少子化の問題」に関しても同じ部分があったり、根本的な部分があると思います。そういった部分が普通の人たちにわかるように、政治家などがかみ砕いて話をしてもらわないといけない気がします。

（金子）ご自身で子育てをずっとしてきて、地域からの応援がほしいという経験を含めて…。

（C）子どもが小さいときは実家の近くに住んでいました。やはり何かあって出掛けなければいけないときには、おじいちゃんやおばあちゃんに頼っていました。幼稚園に入るようになって、私が迎えに間に合わないというときには、子どもの方から「だれそれちゃんのうちに行きたい」とか「だれそれちゃんと遊びたい」という意志が出てくるので、お互いに預け合ったりして、幼稚園時代の友達とはいまだに親子ぐるみで付き合っています。ベビーシッターに来てもらった経験がないのですが、やはり子どもも人見知りをすると思いますし、いきなり用事ができて来てもらっても子どもがなつくかどうか。それと初対面ですから、どうしても他人という目で見てしまいます。そういう人を家の中に入れるという抵抗感もありますし、何回か会ってお互い馴染めるような状況があるといいと思います。

（金子）そうすると、業者としてやっているよりは、むしろ幼稚園の友達のお母さん同士で、お互いに融通し合うようなやり方が一番安心できるようなことですか。

（C）そうです。やはりお互いに気心が知れていて、子どもも知らない人に預けられるよりは、仲の良い友達やおじいちゃん・おばあちゃんと一緒にいたいという気持ちがあります。

（金子）それは住んでいらっしゃる地域の特徴みたいなものがあるでしょうか。山の手や下町に分けた場合には…。

（C）地域性というより、普段からの心掛けで仲良くしておくという意味では、地域性は特にないと思います。

（金子）幼稚園だとそんなに遠くに行かないから、預けやすいですね。

（D）そうですね。子育てしていて一番精神的に疲れるのが、病気のときも勿論ですが、普段ちょっとしたことで子どもとけんかしたり、子ども同士がげんかしているときに、気持ちをどこに持っていっていいかわからない。お互いにイライラがぶつかり合って本当にどうして良いかわからず、精神的に疲れてしまうことが時々あります。私が子どもの頃田舎に住んでいたので、ちょっと外に出れば近所のおじさんやおばさんがいて、「どうしたの」と声をかけてくれて気持ちがほぐれました。お母さんもそうだったと思いますが、近所の人と話をすると何か気持ちがほぐれて子どもとも仲良くできるという、そういう雰囲気があったと思います。

今は、マンションに住んでいて、ちょっと外に出るということがなかなかできません。出るときはお化粧をし、着替えして出なくてはいけなかったり、子どもの誘拐事件がうちの近くでも時々ありますので、１人で外に出すということができません。そういう時に、どういう方法があるかわかりませんが、ちょっと手を差し伸べてくれるような人が周りにいるとすごく助かります。

（金子）Cさんと同じで、幼稚園のときの友達とか、Dさん自身の友人とか、電話で話したりするということを今まで皆さんがやってこられたと思いますね。

（D）そうです。ただ、そういうときは電話するのもしづらかったりして、そのまま心の奥にしまい込んで、嫌な顔をしながらお互いに生活していくということが私の場合は多いです。
（金子）子どもに対してですか。
（D）はい。
（金子）先ほどのＡさんのように、近くに相談するところがあって、しかもプロで無料であるという相談機関があれば、利用したいということになるでしょうか。
（D）どうでしょう。日常では、プロの方に相談するほどのことは殆どありません。病気のときや、ほかの子と比べて異常があるときは利用したいと思いますが、日常の些細なことでは公共機関に相談するようなことはしないと思います。
（金子）いろいろ説明しないといけないうっとうしさがありますね。
（D）はい。
（金子）札幌では、高齢者向けの有償ボランティア組織を立ち上げたら、その４分の１ぐらいの仕事がベビーシッターの養成といううれしい悲鳴のところがあります。それは夫婦で子育てをしているのですが、たまたま夫婦で何処かに行かなければいけない場合に、３時間ぐらいベビーシッターをお願いするような扱いで、40～50代の子育て経験のある主婦の方が入り込んで３時間なら３時間面倒を見て、時給1,000円または1,500円を払うわけです。このようなビジネスは東京でもあると思いますが、ベビーシッターの利用を今まで考えたことはありますか。
（D）全くないです。
（金子）そこまでいらないというのは、「自分たちでできる」のと「他人が入ってくるのはどうも」というどちらの理由が大きいでしょうか。
（D）やはり他人が入ってくる方です。
（金子）自宅の中に。
（D）ええ、抵抗があります。
（金子）ホームヘルパーの場合も、地方に行くとそういう話は依然としてあります。知らない人が入ってくるのは嫌だというのがあるのですが、自分たちの代わりに知らないどこかのおばさんが入ってきて何かするということは、どこか耐えられないような気がするということですか。
（D）はい。
（金子）これからの問題でしょうが、いかがですか。
（E）私も９月に地方から東京に出てきたのですが、引っ越してきたとき、近所に挨拶に行ってもインターホンに出てくれなかったり、みんな警戒しているという感じで全然知り合いができません。いま、妊娠中ですが、これからのことを考えると、マンションは３階でエレベーターがありませんし、抱っこしたまま買い物に行くことを考えると憂鬱になります。晴れている日ならまだいいですが、雨や雪の日もあります。ですから、業者に食料品などは頼もうと決めています。
（金子）もう少したったら宅配のようなものをお考えですか。
（E）来年、子どもが生まれてからです。
（金子）そうすると、知り合いもいなければ、そういう相談ニーズは当然高くなるということですね。それには若干の費用が伴っても仕方がないということですね。
（E）はい。うちのマンションでは結構頼んでいる方もいるようです。玄関前にケースのようなものを置いてあるのをよく見かけます。ですから、１歳になるぐらいまでは仕方がないのかなと思っています。
（金子）同じ質問ですが、Ｆさんは共働きだったので、外部からの支援が必要だという経験はあると思いますが、いかがですか。
（F）私が勤めている会社は朝が早く、保育園は８時からだったので、近所の方に６年間保育園に連れて行ってもらいました。ただ、保育園が７時から始まれば私が連れて行くことができたのですが、金銭的に厳しかったので、できれば保育園の時間帯が早く始まれば良いなと思いました。
（金子）具体的に６時ぐらいからですか。
（F）せめて７時には入れるように…。８時だったのでどうしてもその１時間というのが大きかったです。生後60日から６年間保育園に預けてしまったので、先生もこんな小さな子を預かったことはないと驚いていました。
　今は一部の保育園で、専業主婦の方もたまに預けたり用事があるときだけということがあります。そういう時のためにショートステイのような形のところもできてきたようで、それはいいなと思っています。
（金子）お子さんはもうその対象ではなくなったのですね。
（F）はい。１年生ですから。
（金子）「一時預かりショートステイ」のようなところがあれば、利用しますか。
（F）普段、保育園に行っていますから、それは厳しいですが、自分が専業主婦だったら、預けて出かけたりしたいなと思います。

（金子） Gさん、いかがですか。
（G） 私もベビーシッターには抵抗がありますが、託児所がもっと増えてほしいと思います。１度デパートの中の託児所を利用したことはありますが、１時間800円でかなり安い値段なのですごく助かりました。できれば公共施設などにあるとすごく助かります。今はハローワークに失業保険を貰いに行っているのですが、子どもを連れて行くと、暇な主婦がお金を貰いに来ているような視線を感じるので、託児所が近くにあればいいなといつも思っています。後は出掛けるときも、行った先の駅などに託児所があればいいなと思っています。
（金子） 駅の託児所ってあまり聞かないですね。
（G） スポットで利用できるようなものが増えてくれたらすごくうれしいです。
（金子） 公共的な施設というと、あとは役所やどういうところがありますか。
（F） 私はハローワークです。
（金子） ベビーシッターに抵抗があるというのは、やはり知らない人やだれが来るかわからないということですか。いくらプロで資格を持っている人でも、ちょっとそれとは違うという感じですね。
（F） そうです。その人の家に行くのであればいいと思います。
（金子） 逆にですね。来てくれというわけですよね。
（H） 私はベビーシッターを10回ぐらい利用したことがあります。なるべく早く帰るようにしているのですが、どうしても仕事の関係で早く帰れないときは…。保育園は一応６時まで預かってくれます。生活スタイルは、私が保育園に連れていって、帰りに家内が迎えに行くのですが、家内がどうしても迎えに行けないときは私が仕事を抜け出して行くか、あるいはベビーシッターを頼むしかなかったのです。ですから、ベビーシッターは結構探しました。江戸川区に住んでいますが、３～４年前はあまりなくてやっと見つけました。そこがすごくいいと思っているのは、家内が正社員で働いていますから、区で金銭面を補助してくれます。１回預けると1,500円か別にチケットで出してくれます。そういうものをみんな利用すれば、金銭的にもいいと思います。
　確かに他人が家に入ってくるのは抵抗がありますが、ベビーシッターの認知が広まると抵抗がなくなる感じはします。あまり利用されていないから問題もありますが、ベビーシッターの社会的な立場や地位が低いと大変です。ベビーシッターもいろいろ問題を起こしたり、一時、粗悪な託児所のようなものがあって、問題が起こりましたが、もっと利用すれば問題も解決すると思います。
　ですから、ベビーシッターなどの施設が増えるのは非常に助かると思います。しかし、できれば保育園が…。私が預け始めたころには６時半までだったのですが、「エンゼルプラン」で延長保育が７時までできるようになり、ベビーシッターを雇う機会も減って助かりました。
　ですから、ベビーシッターを雇うにしても、区立の保育園に預けていますが、保育園とベビーシッターや託児所が連動しているといいのではないかと思います。保育園お勧めのベビーシッターのような…。これから娘も小学校に入りますが、小学校は３時ぐらいに終わってしまいます。そこから先がまた結構大変だと思います。ですから学童保育のようなものをもっと増やしてほしいと思います。
（金子） そういう場合に、ひとつは費用負担の問題がどうしても…。個人負担ですね。国が出すといっても限界がありますので、そういう子育て支援でいま言った学童保育のようなことで、もっと自治体などが充実させるときに、それならばもう少しぐらい自分の費用負担、税金などが増えてもいいということはいかがですか。
（F） それは増えていいと思います。
（金子） 増えた分が全部子育てなら子育てに使うということが大事な部分はありますでしょう。
（F） 確かにそれはあります。せっかく高い税金を出しているのだから…。収入が減るのは皆さん大変だと思いますが、それでも日本は諸外国に比べると贅沢だと思います。ある程度収入を減らすとか税金を多く払っても、その辺は充実して欲しいと思います。
（金子） 税金をどのくらい多く払ってもいいようなことがありますか。例えば、消費税だけいうといま５％です。多くの場合、福祉が充実している国は消費税が25％ぐらいです。デンマークでも…。
（F） 消費税が増えるというのは低所得者につらいです。累進課税と違って、消費税が増えるのは確かにつらいものがあります。５％でもつらい気もしますが。
（金子） では、累進課税でお金持ち、例えば、野球の松井選手のように７億円でニューヨークヤンキースに行く者から半分取れとか…。
（F） 低所得者からすると、それは大歓迎です。
（金子） そうも言えないですね。
（F） 言えないですよね。
（金子） どのあたりが一番いいのでしょうか。例えば、５％というのは非常に低いわけですね。でも、いきなり25％も不可能ですから、そのあたりの判断をどこでどういうふうにするか、そちらの方の判断もまだ実はついていません。
（F） アメリカのように、全部が全部、個人でやっていかなくてはいけないというのは…。やはりヨーロッパ型のように、

みんなが税金をたくさん払っているのだから仕方がないかなという方がまだいいような気もします。
（金子）言うとおりです。アメリカは健康保険も全部個人でやらないといけない。最終的には収入と、負担の問題がどうしてもこのテーマにかかってくるわけです。
Ｅさんは去年までパラサイトシングルだと言っていて、そういうときに少子化というのは、たぶん目や耳に入ってきていたのだろうと思いますが、ご自身は何かお感じになっていたことはありますか。自分はパラサイトシングルで、新聞やテレビは少子化といっていることに対して…。
（Ｅ）やはり結婚が遅くなると、どうしても子どもを産める限界もありますし、結婚もあまり考えていなくてこの年まできたようなところがあります。かなりマスコミなどに影響されているところはあります。ある程度自分の時間を謳歌して、40歳過ぎでも高齢出産可能ということをテレビでやっていますから、まだ大丈夫というところがあり、私の友だちもあと延ばしになって、結婚も遅くなって子どもも１人できるかどうかという感じです。今になると早く結婚しておけばよかったと思っています。
（金子）費用負担の問題についてお聞きしたいと思います。私は長い間、一つはみんなで支えないと、特に教育費の負担に耐えられない家が出てきて、耐えられないところと耐えるところでの差が大きくなってきていると思いますので、教育費の負担については、みんなで支えあった方がいいだろうということを言っています。
介護保険というのは親が死んでいても生きていても、40歳になったら保険料を払うものです。札幌でいうと毎月2,900円払います。その同じ理屈を、子どもがいてもいなくても「子育て基金」という名称で、30歳過ぎたらみんなで払って、子育ての家族を支援する。産む、産まないの自由はありますが、次の世代はみんなで育てるというようなことを考えたらいいのではないかと長い間言ってきているのですが、そういう考え方についてはいかがでしょうか。基本的には、介護保険と同じような考え方です。
（Ａ）そういう考え方があるということは初めて聞きました。
（金子）まだあまり公には言っていないのですが。介護保険と同じことを子ども向けにもした方がいいし、それをやらないと少子化対策はなかなかできないのではないかということです。
（Ａ）都内で子どもを育てていこうとすると、教育問題で私立の学校に入れるとかなりの授業料がかかるという話を聞きますし、周りが私立に入れるようであれば自分の子どもも入れたいし…。そうすると教育費の負担が大変なので、いまいったような支援をしていただけるものがあればいいなと思います。
（金子）自分も含めて負担はするけれども、何かの形で戻ってくる部分を増やしていく、子育ての家には増やしていく。先程の専業主婦優遇をやめる代わりに、子育てしているところをもっと社会的に支援するような仕組みをつくらないと帳尻が合わないのではないかという発想なのですね。
（Ｂ）いい制度だと思います。共済制度のような形ですが、助け合い運動のような形のものをもっといろいろな種類でつくってもいいのではないかと思います。ただ、それが少子化の歯止めになるかどうかというのは、ちょっとわかりません。
（金子）もちろん。ですから、最初にお尋ねした、男性の働き方を見直して時短を勧めればいいということではたぶんうまくいかないと思うので、もっと違った方法を考えるひとつとして、介護保険と同じような理屈を込めて、上を見るけれど下も見るというような一部として、私はここ数年言っているわけです。いま言われたように効果があるかどうかはわかりません。
（Ｂ）そういう意味ではかえって、上だけよりも下の方を見る、若年層を見るという話であれば、先ほど皆さんの意見を伺って僕もちょっと認識が新たになったのですが、ベビーシッター制度といったものに対する共済制度のようなものはがあって良いような気もします。また、幼稚園、保育園の部分に関係する共済制度のようなものがもっと充実していると認知度合いも変わると思いますし、利用度合いや社会的な立場も変わってくると思うので、そういった方にも目を向けてもいいのではないかと思います。
（金子）教育費の負担というのは非常に大きくて、私は娘が２人いて、大学の３年生と１年生ですが、今年４月に下の子が私立大学に入り、２人の前期の授業料と入学金、自動車学校の入学金が30万円別にかかって瞬間的に150万円消える。それだけ非常に負担が重たくなるわけです。６歳ぐらいならまだいいのですが。これは、今のところ親しか払わないのですが、子どもがいなければ一銭もいらないわけですから、そういうことで帳尻が合うのかどうかよくわからないのでそういう話もするわけですが。
Ｃさんは、間もなく塾など教育費の問題が具体的に出てくると思いますが。
（Ｃ）40歳以上になったら介護保険を払うというのは、やはり自分がいずれ使うかもしれないということで払っているわけです。子どもがいない人にそういうものを払ってくださいというのは、ちょっと無理な話ではないかという感じがします。
（金子）私の理屈は、いなくても他のところに子どもがいて、それを育てて、子どもは次の年金や健康保険のファンドになるわけで、育てなくても子どもの世話にはなるわけだからいいではないかという話なのです。
（Ｃ）今度、児童手当も小学校３年生まで貰えるということになっていますし、特定控除がなくなってしまうのではない

かとすごく心配していたのですが、存続というのでホットしました。なるべく学生のいる家庭にとっては、どうして特定控除をなくそうという話になったのかすごく不思議でした。やはりそういうものを残さないと、非常に教育費はかかってきますから。

（金子）一番かかるのは大学生ですね、金額でいえば。小学校よりも。

（C）大学生は下宿や自宅通学の問題などいろいろありますね。

（金子）教育の機会の問題で、子どものニーズがありますから、無理やり自宅通学というわけにはいかないところがあるので、基本的には、東京に出して一人暮らしをさせると、年間250万円ぐらいかかります。４年間で1,000万円。

（C）その世代の親は、ちょっと危ない世代ですね。50歳前後は、ちょっと先が見えないというか…。

（金子）我々ぐらいの世代ですけどね。それは非常に大変なので、むしろ私たちの感じでいうと、小学生がいるから扶養控除ではなくて、大学生の家が一番大変だろうという計測なのです。

（C）大学生も貰えますよ、23歳まで。

（金子）若干ですけどね。ところが、私のところもそうですが、仕送りが足りないのでみんなアルバイトをして、大学生が一番勉強をしないわけです。そうすると、税金を使う…。

（C）奨学金を貰うとか、いろいろありますね。

（金子）それも枠があって、半分も貰えないので…。ですからアルバイトに熱心になる分だけ学校に出てこなくなって、税金でやっている割にはなかなか人が育たないというジレンマがあり、何かそういうところをもっとしないと…。学力の低下というのは小学校、中学校というよりも、大学が一番目立つのではないかという危機感を持っています。

（C）ゆとり教育もそうですが、やはり皆さん不安に思っていて、私の子どもは私立の中学に行っているのですが、土曜日も授業はありますし、学校の先生と話してもいろいろと考えているのはわかります。いま学力が落ちているのに、なぜゆとりなのか不思議です。一番勉強させなければいけないときに、何故させないのだろうと思います。

例えば子どもの私立の中学ですと、特待生制度というのがあります。上位10人までは月謝がただになるというのがありますし、大学の方もそういうことをやっていただければ、成績優秀者に対してすごく励みになるのではないかと思います。まずは学校のあり方ということです。

（金子）動機付けとしても10人ではつらいものがあるという気がします。むしろ、授業料より生活費が足りないという学生が多いです。

（D）いま話が出ましたが、学力低下というのは、子どもが６年生と３年生なので実感しています。公立の小学校に通っていて、学校では基礎的な部分も全く身につかないので、仕方なく上の子どもは塾に通わせるようにしました。月に１万円とか２万円の出費です。お稽古事も２人それぞれやらせていますので、月に何万円も出てしまいます。公立の中学校に行かせますが、その上を目指すとなると中学に入っても塾に通わせなければいけませんので、生活費の中からやり繰りして塾の費用を出さなければいけないということになって、ますます生活は苦しくなる一方だと感じています。

公立の小学校や中学校がしっかり基礎的なことを教えてくれれば、塾にも通う必要はないわけですから、そういうことをしっかりやっていただかないと、子育てしていく親としては不安ですし、これから子どもを育てていく人たちもそういう面を考えると不安になってしまい、子どもはこのくらいでやめようという感じになってしまうのではないかという気がします。

（金子）その通りだと思いますが、その上に高校と大学があって、母親は自分と同じぐらいの学校にはやりたいと思うので、いまは大学に行く時代ですが、そこが非常にお金が掛かりすぎて大変だという。けれども、誰も応援してくれないから、本人がアルバイトで稼ぎ、学校には来ない、それでどんどん成績が下がるという、私立も公立も同じような現象があります。それは別の意味で大変だと思いますが、そういうものに対して、先ほど申し上げたような基金から少し支援するなり、あるいは、厚生労働省の方は高校生以上の本人１人当たり50万円を限度に無利子で貸付して、卒業したら働いて本人に返済させるという制度を考えているのです。年間50万円ですから月に４万円ぐらいにはなるので、これは結構楽にはなると思います。ただ高校３年間、大学４年間にそれを全部使うと、それは膨大な借金を国に対して抱えてしまうので、また働き始めてからの返済が大変でしょうけれども…。

とにかくいろいろな工夫をして、負担を社会化して、社会的に負担を軽くするシステムをつくらないと、もっと少子化がひどくなって需要がそれだけ減って、マーケットが縮小し、企業の業績が落ちてくるわけです。企業の業績が落ちてくると失業者が増えるという悪循環の中に入りしまうと思うわけです。ですから、どこかで食い止めなければいけないということで、こういう仕事をしています。

Ｅさん、いかがですか。いま、お子さんがお腹にいるということで、間もなく具体的に負担の問題も含めて出てくるのでしょうが。

（E）教育費に関してはまだピンときていませんが、先ほど、先生が言ったシステムは、子どもがいない人には、強制的かどうかわからないのですが、負担というのは難しいのではないかと思います。もし自分が独身だったとしたら、かなり抵抗があって絶対出さないという感じになると思いますが、子どものいる人だけなら私は賛成です。

（金子）私はむしろ逆で、子どもがいないからそれぐらい出した方がいい。あなただって、他の子どものお世話になる

からという理屈なのです。子どもができたら自分で出すのは当然であって、それは生活費など全部自分で出しているわけだから、子どもがいない人は何も出さないのはおかしいのではないかという話をしているのです。親がいてもいなくても等しく介護保険を払うという理屈はそういうところです。

(E) だけど、何となく…。

(金子) そこのところをいろいろ話をしながら、専業主婦を優遇するというような意見に対してはそういうことを言っているのです。優遇ではなくなるということは、逆にいうと子育てをもっと優遇しなさいという話で、バーター取引のような感じの話になるかもしれませんが…。いろいろな工夫をとにかくしなければいけないということで、そのうちの一つなのです。

だれも指示していなくて、公的ではないですよ。ただ、そういうことも含めて議論する時期にきているということです。そうしないと、払わない方が楽に決まっているわけですから、みんな払わなかったら子育てする人だけがわりを食って、気づいてみたら自分には貯金が残らない。子育てしなかった人はその分の貯金が必ず残るのです。大学生を１人育て上げると3,000万円かかります。いなければ一銭もいらないわけです。

そうすると、やはり産まなかったからといって次の世代のことを知らん顔するというのも、何か変ではないかということです。だから、シングルの人はもちろんそういうような、いま、Eさんが言ったような意見が結構多いのです。ただ、そのところから始めて、議論をいろいろやっていくということです。

(E) 逆に、子どもがいない人は出さなくていいということになると、極端にいうと、それだったらもう子どもはいらないという人も出てきそうで恐いですよね。

(金子) そうすると、みんなが困って先ほど言ったように商品を買う人がどんどん減ってきますから、あなたが働いている職場も潰れますよ、潰れたら失業しますという話をもっと言い続けることが必要になってくるわけです。だから、みんな労働者として、あるいは消費者として子どもを産み育てるということで妊娠、出産をするわけではないけれども、結果としては子どもとはそういう存在なので、子どもがある程度生まれないと物が売れなくなって、サービスが売れなくなって、困るのは働いている人そのもので、子どももちろん困りますけどね。

だからそういう理屈を、私は最初に自己紹介したように社会のあり方と個人の生き方、両方を見なければいけない学問なので、ここ数年間いろいろなところでそういう話をして意見をいただいているわけです。

(佐藤:事務局) 補足させていただきますと、先生の提案で、CさんやEさんは子どものいない家庭からお金を拠出するというのは、いわば強制するということで同意を得られないのではないかという。それはなぜですか。何か不公平とかそういうことはありますか。

(C) 介護保険であれば、いずれ自分も使うかもしれないのです。

(金子) 基本的には、25年ぐらいは使えないわけです。

(C) でも年を取ったとき、特にシングルの人はこれからどうなるかわからないので、そういうときに使えるということがあります。でも、これから子どもを持つかどうかわからない人に子どものための税金を払ってくださいというのは、やはり気分的に納得いかないと思います。いずれ自分が使うものだったら、やはりそれは払っておきましょうと、保険みたいに思います。

(金子) 例えば、Cさんのご亭主が仮に某食品会社でミルクを作っているという仕事をしていても、今までは150万人生まれていて、今は120万人でやがて100万人になると、当然、会社の業績は落ちますから失業の危機がありますよという場合でも、やはりそういうふうなお考えですか。

(C) それは会社のやり方だと思います。某食品会社…。

(金子) 某食品会社は関係ないのですが、そういう子ども向けの商品を作っている会社で働いている人にとっては、子どもがいなくなるというのは死活問題ですから、社会全体でもっと子どもが減らないような工夫をするために、いろいろな人に聞くと負担が重たいというのが一番大きく出ているので、その負担を個人化しないで社会化しようという手段として、いま、私が言っているようなことがあるわけですが、やはり不公平という感じですか。

(C) 不公平というか、気持ちの問題ですね。やはり、いない方に将来子どもを持つかどうかわからないのに負担をしてくださいということは…。先ほど、先生はいずれ他人の子どもの世話になると言っていましたが、はたして本当にそういうふうになるのかどうか。

(金子) あなたが70歳になったときに入院したら、看護婦さんが30歳、40歳の人が来るので、必ずお世話になるわけです。

(C) ただ、その医療に関してはこちらが負担するわけですよね。ただでやってもらっているわけではないですね。

(金子) そうではなくて、その看護婦さんを育てた人は親で、親が育てたと。

(C) そういう意味ですか。

(金子) そういう意味です。そのことに対して…。

(C) 医療の行為に対しては、こちらが負担します。

(金子) それはもちろんです。医者などが40歳まで専門家として育ったことに対しての大半は親の投資なのです。3,000

万円使ったから医者になれたわけだから、そういうような理屈です。
(C) ちょっと、そのあたりはよくわからないですね。育ててもらった相手の親の恩に関して、負担をしなければならないということですか。
(金子) 要するに、子どもがいるとみんな一生涯の稼ぎが２億円しかないわけですから。
(C) でも、子どもを持つというのは、子どもを持ちたいと思っているわけです。
(金子) もちろんですが、結果的には子どもは消費者側にも回るし、働く側にも回るわけですから、ただ単に自分のものではないわけです。Cさんの子どもはCさんだけの子どもではなくて社会の一員になるわけですから、親の世代やおじいさん、ばあさんの世代をいずれ担うわけです、当然ながら。だから、年金を払う側に回るのです。
(C) それは税金を払っている場合ですね。今のフリーターのような人たちは、そうやって所得税などを払っていないわけですから。
(金子) まあフリーターはね。だから、そのあたりを今のままでやると、とにかくどんどん子どもが減ってきて、社会全体がうまくいかなくなったことに対して、違った手を打ちましょうと。働き方を見直すだけではだめだという話に大体なったので、いろいろな工夫の一つとして、そういうことも言っているということです。
(C) それではたして少子化に歯止めがかかるか、今はわかりません。
(金子) それはやってみないとわかりません。
(C) 景気との問題にもよりますね、住宅事情とか、いろいろなことがありますでしょう。ですから、一概にそれをやったから皆さんが子どもをどんどん産んでくれるとは、わからないわけです。
(金子) それはやったことがないのでわからないですね。労働時間の短縮と同じ理屈です。
(F) 私もその制度がもしあれば嬉しいですが、やはり自分が子どもを産んでなかったら、そんなことは知ったことではないと思ってしまうかもしれません。
(金子) その場合に、知ったことではないと思って 70 歳になったとき、あるいは 65 歳になったときに、年金制度が壊れてもそれもしかたがないということになりますか。
(F) たぶん、今はその場のことしか考えていないので、あまり先がどうこうというのはまだ見えていないのですが。
(金子) いずれ考えなければいけない年齢になりますね、当然ながら。あと 10 年も経てば…。
(F) そうです。先ほどの例で医者の話をしましたが、40 歳まで育てて医者になって。でも、いま医者になってもうかっているではないかという感じに思ってしまうので。
(金子) 別に医者だけではないのですが。
(F) 例えばの話なのですが。ですから、親がそこまで育ててお金を出したのだけれど、いま、そういう社会になっているのだからいいではないかという感じに思って聞いてしまったのですが。
(金子) まあ、違う事例をたくさん出せますけど。医者は別として。Gさん、いかがですか。
(G) 将来的にそれだけお金がかかるといわれても、子どもはまだ１歳なので、いまいちピンとこないですが、やはり今、産むか産まないか瀬戸際に立っているような人たちとそういう話をすると、乳幼児の医療助成とか、託児所、保育園の待機幼児が多いとか、もっと身近な社会基盤のようなものがしっかりしていれば、もう少し増えるのではないかという気がします。
(金子) 一番身近なところでもっとやってくれという、それは政府が今ずっと練っていることです。大きくは少子化の原因は２つあって、１つは未婚率が上がってきたということと、もう１つは既婚者が子どもを産まなくなってきたということです。いま言ったようなことは既婚者向けの対策なのです。１人を２人にするには、やはり待機幼児をゼロにするとか、そういう保育園なりをもっときちんとするというようなことを国は一生懸命「エンゼルプラン」でやってきたわけですが、使った金ほど効果がなくて、どんどん子どもは減ってきているのです。

ですから、もう１つは未婚率が上がってきたことに対して、個人の自由であるから、それを結婚しなさいという話にはならないのですが、次の世代を育てる側に回ってくれという理屈は成り立つだろうと思います。それで、私は今のようなことを言っているわけです。Hさん、どうですか。
(H) 私も若いときに結婚したので、やはり非常に苦しいですね。片や親元から通って、仕事はきちんとしている。収入は全部自分のもので、ブランド品などをたくさん持っている。こちらは全然ぜいたくはできないません。ですから、先ほど先生が提案されたように、子どものいない、産むか産まないかわからない人も、他人の子どものために税金を負担するようなことは非常に賛成です。というのは、やはり子どものいる側からすると、子どものいない人はぜいたくばかりして、という不公平感が常にあるわけです。お互い助け合いですから、その辺もあってしかるべきだと思います。

確かに、子どもを産まないのになぜ他人のために負担しなければいけないのだという考えはもっともなのですが、そういう考え方自体が、我々の世代あると思うのです。ある意味道徳的なもので、みんなのため、人のためのような道徳的なところが、我々は欠如している世代だと思うのです。そういうものも、学生のころから教育で教わったこともないですし、教育などでも、これからの世代ですから少し遅いかもしれませんが、やはり助け合うという道徳のようなところもしっかり教えていかなければいけないというのはあります。

（金子）Ｅさん、いかがですか。今のＨさんの…。
（Ｅ）その意見もわかるのですが、何となく…。
（Ｂ）人のために金を出すのは嫌ですね。
（佐藤）子どものいる方の負担を軽減するために、先ほどＣさんが言ったような、最初は心配したけれどもという、特定扶養控除ですが、児童手当は手厚くやっています。けれども、私も金子先生と意見がぴったりというわけではないですが、金子先生の言った提案は、長期的に見ると子どものない家庭も老齢世代になると、だれが保険料を払っているのかというとそれは子ども世代だというパターンです。ただ、そういう人も「強制的に入りましょう」というときに、子どもがいる家庭はこういう優遇をしようというのですが、何かペナルティーのような、要するに子どもを産んでない…。産んでいる人はもちろん保険料を払うのです。産んでない方については、確かにあそこの家庭は大学まで「大変だ、大変だ」と言って、子どもがいない世代まで負担させていると思い、それは子どものいない家庭から見ると、子育てについての価値観というか、子育てしていない方が、それは私たちだって税金を払っているしと。子どもを産んで大学までというのは、何か苦しむために産んでいるわけでもないし、それはそれなりに子どものいる家庭はいる家庭なりに苦しみもあり、喜びもあります。産むか産まないかは自由なわけですから、それをあなたのところは子どもがいないからといって、保険料を一斉に拠出しましょうといっても、その辺の人生観というのでしょうか、そういうものがバックにあって、先ほどから抵抗感を言われているのかなと…。
（Ｃ）そうです。子どもを産む産まないというのは、それぞれの家庭の自由な考え方です。確かに大学生が２人いて、非常に負担が多いというのはわかるのですが、逆に子どもに楽しませてもらっている。お金では買えないような喜びもあると思います。子どもを持つ喜びというのももちろんあるわけですから、一概に言えないと思います。子どもがいないから負担しなさいというのは、やはりそれはその方たちの考え方なので、そういう考え方を否定するような感じがします。民主主義からちょっとはずれるような。
（金子）そうではなくて、例えば消費税は５％だけれども、もっと増やさなければ子どもに対する支援のお金も出てこないということで、10％にすると、先ほどＨさんが言ったように、同じ比率で税金を払うので貧しい人は困るわけで、それはそれで、民主主義ではないという意見はあるわけです。

だからといって、松井選手から半分取れというわけにもいかないということもあるので、そのあたりは何が公平なのかということをいろいろなレベルで議論しなければいけない。少なくとも今のような幼稚園や保育園に手厚い援助をすればなんとかなるという、子育て支援だけではうまくいかないだろうというところがあって、負担はみんながしないことにはこのままではお金がなくなる。それならどこから取るか。消費税で取ろうとすると、Ｈさんが言ったように、まずは年金暮らしの人が一番困るわけです。同じ税率で取り上げる。だからといって金持ちからみんな取れというわけにはいかない。そうすると、理屈としては、子どもがいてもいなくても、次の世代にお世話になるのは変わらないので、介護保険のような2,000円か3,000円を負担してもらってはどうかという話を私は言っているわけです。

別の理屈で言うと、専業主婦は優遇されていたからといって、今度その優遇措置をやめる。やめた瞬間に専業主婦だった人は年間30万円ぐらい負担が増えるわけです。１万3,300円の年金の掛金を払って、かつ38万円の控除がなくなりますから、税金が４万円ぐらい増える。それは働いている人と同じ扱いになるという理屈なので、優遇はされないということが出てきて、公平性の問題が潜んでいるということです。いろいろなところで公平に負担して、公平に益を得る、受益者になるということの組み換えをすることにつながってくるだろうということになると思います。

介護保険も、Ｃさんがいずれ自分に戻ってくるからと言われましたが、両親が４人いる人の介護保険の払い方と、４人ともいない人の気持ちは全く違うわけです。
（Ｃ）やはり自分で使えるのではないですか。自分の介護のために、いずれ自分が…。
（金子）けれども、親にもそれは戻ってきている人もたくさんいるわけです。親がいる場合は。親がいない人にも強制的に取っているわけですから、それは不公平だという異論は立ち上げる前にずいぶんあったわけです。そのときはあなたが言うように、あなただっていずれお世話になるからという話をして平等に負担する、親がいてもいなくても負担するということを決めたのです。国民も合意しました。それは40歳になると自動的に給料から天引きされるわけです。ですから、負担のあり方と、戻ってくる受益のあり方をいろいろなところで考えるきっかけとして、この少子化が今あるという、そういうことなのです。
（佐藤）先生と、若干ニュアンスが違うのは、介護保険で介護の社会化というか、みんなで面倒をみる世の中になったといっても、実際には私的扶養の部分があるわけです。ですから、子どものいない家庭からすると、子育ての苦労はしていないけれども、将来子どもに面倒をみてもらうとか、いろいろなことでというのはない。例えば年を取ってから子どもがいるところは、親不孝でないかぎり、何らかの形で面倒をみてもらう。そうすると、何かペナルティー的に取られるという抵抗感というのはある程度出てくるという感じがします。
（金子）要するに、負担がいずれ増えるという時代である。どこから負担を求めるかという話だと思います。消費税からでももちろんかまわないけれども、消費税からだと今のような話が必ずくるので、所得税を上げるかというと、所得がある人はいいけれども、ない人はどうするのかとか、社会的に見ると、年金制度・健康保険制度・介護保険制度など

のようなものも含めて維持していくという我々の世代の義務がありますから、そのためにはいろいろな負担をこれから求めざるをえない。それをいかに公平にやるか、そういうことだと思います。

それでは、時間になりましたので、終わりにしたいと思います。長時間ありがとうございました。

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」
東京グループ面談(第2回)
日 時 ： 2002年12月14日(土)17:00～19:00
場 所 ： セブンシティ「銀杏の間」

(安梅:司会) 自己紹介を兼ねて、どんな問題意識でここに参加していただいたかをお伺いします。では、Aさんからお願いします。
(A･31･女･既･共･1) 今年の５月に子どもを出産後３カ月で職場に復帰して、現在は保育園に預けています。実際周りにも子どもを持ったあとに職場復帰をする人が多く、そういった面から、自分が実際に子どもを育てている中で、なぜ少子化が来てしまったのだろうということを考えてみたかったので、今回参加しました。
(B･31･男･既･共･1) 今年の７月に１人目の子どもが生まれて、今、４カ月、もうすぐ５カ月になります。来年の４月から保育園に預けて、共働きの生活になります。今回参加するにあたっての問題意識ですが、今、少子化というものと、高齢化を迎える方が本当に多くなってくる中で、いろいろな社会負担の増額という問題がありますので、どうすれば少しでも楽にみんながより住みやすい生活ができていくのか。子どもが生まれたことでそれを自分の問題意識としてとらえていくきっかけになりましたので、今回は、それを具体的なこういう場でもう少し深めていければと思います。
(C･36･女･既･共･1) 小学校２年生の男の子が１人います。８年以上前に出産をして、子どもは０歳保育から６年間保育園に行って、１年生からは学童クラブに通うという生活をしています。私自身が最初は正社員で働いてきましたが、夫もサラリーマンで、やはり子育てと仕事と家庭と全部をうまくやっていくことを考えたときに、私自身の勤務形態を正社員から契約社員、契約社員から独立へと変えてきています。自分の仕事のためではなくて、子育てのため、やむを得ず勤務形態を変えてきた経緯があります。同じように子育てと仕事を両立しながら、頑張ってきた友人・知人のケースも多く、あとは子供が小学校に入って、お母さんが働いている、働いていないに限らず、いろいろなかたちで子育てをする方と話す機会が増えたことで、考えることが多々ありましたので参加しました。
(D･32･女･既･共･0) 今、結婚して丸３年経ったところです。現在、私、主人、主人の母親と３人で、二世帯住居で暮らしています。主人は普通のサラリーマンで、私は派遣で、現在も働いています。一応、２人の生活が一段落した３年というところで、これから子どもを産むかどうするかという選択のところに来たので、そういったところを考えたいと思って参加しました。
(E･39･女･既･専･1) ２歳半になる男の子が１人います。現在は専業主婦をしていますが、本当は産休を取って、途中までは会社に復帰する予定だったのですが、くじけてしまいまして専業主婦になってしまいました。こちらのインタビューに参加しようと思ったきっかけは、専業主婦の目から見て、今の子育てにおける社会制度の優しくない面というものに直面して、もっとこういう制度があったら、もっとこういうことがあったらいいという問題というか悩みがたくさんあって、なかなか発言する場もなかったので、ぜひこういう場を借りて、皆様のご意見も伺いながら、何か改善できることがあればいいと思って参加しました。
(F･34･女･既･専･2) 家族は主人と３歳９カ月の娘と２歳２カ月の娘２人と私の母と、完全な二世帯ではないですが、３階建てで一緒に同居しています。私自身20代はずっと新宿で仕事をしていました。結婚を機に辞めて、出産を急いで、すぐに１人目を産んで、１歳半違いで２人目を産みました。仕事はその間、専業主婦でしていないのですが、それは主人と話し合った結果、私が子育てに専念するということでやっています。でも、やはり専業主婦だけにどうしても社会とのかかわりがあまりなくなってしまいますので、企業とか国とかでモニターがありますので、子育て半分、そういうのにもちょっと参加をしたりしています。本日は、自分なりの生き方や子育てについて考えたいと思いまして参加しました。
(G･34･男･既･専･2) 家族は妻が専業主婦、子どもが今、幼稚園に２人いるという構成図です。私自身は転勤族で、先月初めに大阪から越してきたところで、東京の事情は正直よくわかっていないという状況ではあります。この座談会に出たのは転勤族ということで、正直、子育てということでは妻に負担をかけているということがある程度前提になっており、また仕事的に年金に関係していることもありまして、少子化でお金が回らなくなっているというところは実感しているところで、参加しました。
(H･35･女･既･専･0) 今は主人と２人で子どもはいません。母と今まで３人で暮らしていました。母が子ども好きで「早く子どもが欲しい」と言われて、産もうと思っていました。ずっと仕事を続けていたのですが、その矢先に母が病気になり、介護で辞めざるをえなくなりました。ずっと社会とつながっていたいということで仕事は辞めたくなかったのですが、介護をするのにどうしても休みが取得できず辞めなければなりませんでした。今はもう手助けをしてくれる母もいなくなって、子どもを１人で育てられるかなという不安もあったので、子育てをしている皆様の意見を聞こうと思って応募しました。
(安梅) 本日は時間が限られているので、大きく３つくらいのポイントに絞って伺えたらと思います。１点目は、「何が問題だから少子化になってしまうのか」という原因に関して、どう考えているか。それから第２点目は、「どうしたらいいと考えられるか」という対応策に関して、こんなサービスがあるといいなということでもかまいませんし、こんな制

度があればもっと楽なのにとか、こんなことが足りないからダメなのだとか、そういう忌憚のないご意見を伺いたい。それからかなり大上段にかまえた質問になりますが、３点目は「日本の国、ひいては世界の国のみんなが、楽しく、健やかに子育て、子育ちができるためにはどうしたらいいのか」で私が小泉総理大臣ならこうするよというところについてご意見を伺えたらと思います。ではまず１点目の「何が問題だから少子化になってしまう」のかについて、どんなことでも結構ですが、ご意見をいただけませんか。

(H) やはり、お金がかかるからではないでしょうか。１人の子どもを育てるには、今の時代にはお金がかかりますよね。そうすると、うちの場合も共稼ぎで働かないと１人の子どもすら育てていけないかなというところで。

(安梅) 強くうなずいている方が何人かいらっしゃいますが。お金が一番のネックでしょうか。他にはどんなことがありますか。

(D) 私も子どもがいないのですが、あまりにもいろいろな不安な情報が入りすぎてくるというのがあると思います。例えば子どもを狙った事件の多発や、子育てのストレスからの虐待など、悪い面の情報ばかり入ってくると、自分が産んで大丈夫かなと心配になり、すぐにほしいという気持ちになれない。

(H) 身近には子育てに対して嫌な情報ばかりで、あまり楽しいという情報がない。

(安梅) お２人とも今、たまたま子どもがいない状態でのご意見ですが、いらっしゃる方はそれに対してどうですか。

(A) 今の職場の年下の女性たちには、子どもを持ちたいという気持ちがない感じです。子どもと触れ合う機会もないですし。結局、そういったいろいろな悪い情報がどんどん入ってくるし、実際うちの会社でも女の子はほとんど独身です。まず、結婚をしたいというのもないし、当然、みんな女の子が「自分に奥さんが欲しい」と言うのです。やはり同じように働いていても出産は女性しかできないので仕方がないのですが、どうしてもそれ以外の負担というのがかかってきてしまっているというので、みんな躊躇しているということがかなりあります。

(安梅) そうですね。働きながら、ということではどうでしょう。

(C) 確かに、８年育ててきたのでお金はかかると思います。ただ、それはすごく一方的な情報であって、かからない子育てもいくらでもあります。今はお金をかけることがいいという一方的な考え、例えば子どもは私立に行くのがいいとか、いいブランドの服を買ってあげるのが普通だとか、そういう情報に私たち自身が惑わされて、そうならなければいけないのではないかと画一的になっていることを感じるところもあります。だから意外とかからない選択もできなくはないというのが本音です。あとは、それ以上に、もしお金が必要なのであれば、奥さんが働くという選択があると思うのですが、それに対して本当に子どもが小さい時期には今までどおり働くというのは絶対に不可能に近いと思うのです。それに対して企業が「イエス」と言わない、そこが私は一番問題だと思うのです。だから、「前は育児休業を認めていなかったのが、認められるようになってよかった」と言っていましたが、実際は使わせてくれない。出すと結局は首になってしまう。または、遠回しに「どこかへ行ったら？」と言われてやむなく取らない人がたくさんいるわけです。それが問題になって、一応、取れるようになって、また企業によっては３年取れるようにはなりました。実際、３年取れるような企業では３年取らせてもらっても、本当は３年も休まずに２年くらいから細々と復職したいと思うわけです。そうしないで３年も休むと、仕事は絶対に追いつかないのです。でも、それに対しても企業は柔軟性がない。そこで結局、３年して復帰したときに「君は使えないから」と切られる。そういうことがあるので、子育て中の女性に対して働き方を、例えば80％の時間でもいい、お給料が減ってもいい、もちろんこれは子育てに限らず介護でもそうだと思いますが、そういうことで柔軟性を持たせることができればもっといろいろなことがうまく回るのではないかと私は思います。

(安梅) 制度としてそういうことをきちんとやる必要があるということですね。

(E) 実は結婚10年目でやっと子どもに恵まれました。正直、もうできないのではないかと諦めていたときに、子どもを授かって産んだわけです。産んでみて辛いこともありますが、楽しいです。でも、子どもを持っている人には、この日本はあまり優しくない社会だというのが本音ではあります。例えば、私はお腹が大きくても働いていたのですが、シルバーシートが目の前にあっても譲ってもらえなかったということがあります。また、子どもを産む前には産婦人科に通いましたが、保険が利きません。こういうのも保険診療で、是非、賄っていただけるような制度にしていただきたい。私自身は不妊治療もしましたが保険が利きませんでした。これも大変な費用がかかりました。産まれてからは、これもベビーカーを押しましたが、バリアフリーになっていません。とても動かしにくくて、とても悲しかったです。どうしてこんなところに段差があるのだろう。どうしてこんなところに階段があるのだろうと。でも、それはそういう立場になってみて、初めてわかったことです。ですから介護されている方、ご老人の方にもとても住みにくい世の中になっていると思います。小児科の先生もはっきり言って、減っています。病院すら今潰れている状況だったりします。悪いことばかりですが。そういうことがあるので、もっと国として、まず私は、お医者様に保険治療で診ていただけるような制度にしてほしいということ、もっと、小児科の先生に手厚くしてほしいということがあります。実は、都立の病院が１つ、潰れてしまったのです。このとき私は潰してほしくないと署名運動もして、都知事にもメールを打ったのですが、担当の方から一方的に「もう閉院です」というお返事しかいただけませんでした。やはり行政こそ、赤字をしてでも門戸を広げていってほしい。それができるのが行政ではないかと思います。

もう少し言いますと、実は幼稚園も減っているような状況です。近くの私立の幼稚園に今年は２倍というところがたくさん出てきてしまいました。その原因を聞いたら、ほかの幼稚園が閉園になったという結果で、幼稚園浪人にうちの

子はなってしまうのではないかという心配もあります。また、公立について定員割れをしたところはどんどん減らされていく状況にあります。これも定員割れでも門戸を広げてほしいと思います。うちのそばは今３年保育が主流ですが、公立は２年保育しかやらない状況なので、できれば３年保育にしていただきたい。

いったいどこにこの気持ちをぶつけたらいいのかよくわかりませんが、改善してほしい面が多々あるなと思います。ただ、今、行政がいろいろ考えてくださっている部分もあります。子育て支援とかで、自分自身で積極的に出かけたり、児童館のサークルに入ってお友達を作って、なるべく同じ悩みを持つお母さんたちと話し合う努力をして、自分なりの子育てを自分で楽しんでいきたいと思ってはいます。いかんせん現実がこうなので、なかなか本当に楽しいと思える瞬間が半々かなというところです。この先、産んでよかったと思うところはたくさん出てくると思いますが、正直な気持ち、もう１人欲しいかというと、年齢的なこともありますが、考えさせられてしまうような状況です。ただ、主人がとても協力的なので、その点は助かっています。ですから、もしご出産されたときには、自分ばかりで悩まないで、育てるにあたってはご主人にもいろいろ手伝ってもらう面も多々あると思いますので、男性方の力にぜひ期待したいと私は思っています。

（金子：サブ司会） 小児科の開業医の先生が減ってきたというのは、少子化だから小児科でやっていけないというのと小児科の先生がいなくなると子育てがしづらくなって少子化が進行するといういたちごっこです。今の幼稚園の減少もそうです。このあたり、人為的になかなかくい止められないところがあります。小児科の専門を選ぶ学生も減ってきて、産婦人科を選ぶ学生も減ってきてという、職業選択の問題まできている状況です。

（E） 小児科の先生方や学生さんが選択しやすくなるように、小児科のレセプトを手厚くするような制度としてやってほしいです。

（安梅） 多少です。でも、難しいですね。何か、今、男性に熱いコールがありましたが。

（B） 少子化の要因としては、確かに経済的な負担はまちがいなくあると思います。実際に生んでからと、生む前にどれくらい費用がかかるかという見通しが立ちにくいところがあります。でも先ほどＣさんがおっしゃるように、実際に生んでみると、私は目黒区ですが、意外と病院の費用やいろいろな面で行政面での補助や経済的な援助を受けられることに驚きました。でも実際、これから20年という長いスパンで見たときには、教育で、保育園に入れるかどうかわからない。入れなかったらそれなりに手を打つ、そういうのもお金がかかるということで、確かに経済的なものはまちがいなくあります。もう１つは大人の内面的な問題で、自分の自由というか、自分が大切という感覚が、昔の親世代よりも強いですから。子どもを生むとまちがいなく、自分の自由な時間があればそのうちの半分は当然削られてしまうのが目に見えているわけで、そうならないためにはどうするかといえば子どもを生まない、あるいは結婚をしないというのが、１つの選択肢として考えられる。だから、そういう選択をあえてする人も中にはいます。あと、子どもが少ないというのは、１つには子どもがかわいい、生んでみたいと思わないということです。なぜ、思わないかというと、子どもと接する機会を大人自身が失っていると思うのです。実際に生んで久しぶりに、何十年ぶりかに自分の子ども時代を思い出すとか、そういう感覚を自分の中に芽生えさせることができる。逆に、自分の周りに小さな赤ちゃんとか学齢期の子どもがいないので、子どものかわいさとか夢みがちな感じが想像できないのです。もっと周りにそういう楽しい子どものコミュニケーションが広がっていれば、多少、経済的なコストは覚悟してでも子育てをしてみたいという情熱に変わるのではないかと思います。それから、経済的なこと以外にも、結婚するまでなら２人だけですが、子どもが生まれると親が絡んできます。保育園の送り迎えがある。仕事があって定時で終わらない場合、親に面倒をみてもらう。休みの日に２人で出かけなければならないときに、親に来てもらう。要するに、夫と妻以外の人間関係が広がっていってしまう。そうすると、いくら親戚とはいえいろいろややこしい問題が最後にはなきにしもあらずですから、そういうお金に換算できないようなコストもある程度ブレーキになるところがあると思います。

（G） 私自身は子どもができたことで、子どもがいることはすごくいいと思います。自分自身がいやされることも感じますし、子どもがいることで自分も成長できていると思います。あまりきれいごとを言っていると、妻から「何を言っているの、私が頑張っているから」と言われそうですが。それはそれとして、子どもがいることのプラス面は、すごくあります。これまで６年ほど大阪での子育てでしたが、僕が想像するに東京で子どもを育てるというのは非常に大変なことなのだろうと思います。妻が家にいるという環境もあるかと思いますが、おそらく子育てをするのであれば大阪の方がはるかに楽だと思います。これにはいろいろな要因があって、例えば東京よりも大阪の方が経済圏も含めて小さいので、会社に行って帰ってくる時間が短いということもあるでしょう。それから、物価の水準も全然違う。例えば、大阪であれば幼稚園の入園金が５～６万円ですむけれども、東京の私立であれば最低10万円はかかるとか、もっと高いところも普通にあるとか。あとは食費なども全然違うということがあります。おそらく大阪のいいところは、これは関西人の特性かもしれませんが、気どらないというところがあります。午前中、幼稚園のクリスマス会があって行ってきましたが、子どもにきれいな格好をさせて…。大阪だと気どらないため、すごく楽ということがあります。親切な面でも、例えばベビーカーでタクシーに乗ったとすると、大阪では運転手さんは必ず下りて後ろから開けて出してくれますが、東京ではそういう経験をしたことがありません。それから、子どもを抱っこして電車に乗っていると、私は何回か席を譲られました。先ほど、席を譲ってくれないという話がありましたが。妻が子どもを連れてベビーカーを背負ってで階段を上っていたら、ある年輩の女性が一番下まで行って「とても見ていられないわ」といって、走ってきて手伝ってく

れたとか、そういう雰囲気が関西にはありました。その点からすると、大阪は東京に比べると子どもを育てやすい状況があるかなと感じました。今、経済は東京一極集中で、大阪の有名企業なども、会社の看板としては大阪の企業でも実質は東京に進出していて、社長さんはたぶん東京にいる方が多いのだろうという状態ですと、みんな東京に行かざるをえない。当然、隣の人も何をやっているかわからないという状況で子育てをしなければいけないので。とりとめがない話にはなっていますが、東京自体子育てをするには大変な環境にあるということは思います。

(F) 私は結婚して、すぐに子どもを作りました。主人がシステムエンジニアをしていまして、ものすごい労働時間で、本当に家にいないのです。朝、普通に出かけて、帰りは終電で帰ってくると午前１時半くらいですが、それでも早い方です。何日も泊まり込んでということがあって、会社はみなそれが普通なのです。それで残業が全部つくかといえば、組合の方がうるさいらしくて残業時間も 100 時間を超えるとカットです。以前は、100 時間はついていたのですが、もう 100 時間どころか残業代も数時間さえもつけられなくて、主人は５時半にタイムカードを押して、それからずっと仕事をする。土日も出勤で、本当に休みがない状態です。主人がそういう状態なので、話し合って小さいうちは私がなるべく家庭に専念することにしたのです。主人の会社の人全部ほとんどがみんなそういう長時間労働をしているわけで、本当に家にいない。主人は別に子育てが嫌いではないし、子どもも好きだし、家にいれば必ず子どもの面倒はみてくれるし、家事も手伝ってくれます。でも、子どもといる時間がまずないです。ですから今、リストラなどで残業が減っているとはいうものの、うちの主人の会社のようにすごい残業で、それも残業 100 時間、200 時間あたりまえという会社はかなりあると思うのです。会社が帰してくれないと家にもいないわけで、主人が子育てをしたくても家にいない状態なので、その辺は企業も考えてほしいと思いました。私自身も１人目はどうにか自分で子育てできたのですが、２人目となると専業主婦でも、どうしても家族の協力が必要です。そういう面で主人は最初からあてにならなかったのですが、私の母も仕事をしているのですが近くにいたので、お願いして、面倒をみてもらったりしてという感じです。よく男性の育児参加などと言いますが、会社自体がそういう状況だととてもではないけれども子育てできない。公園へ行っても、旦那さんがいない人は２人目をためらっている方が多いです。私自身は、どうしても兄弟が欲しいとは思いませんでしたが。主人の方は兄弟が３人いて「兄弟がいた方がいい」とか「子どもは１人ではなく２人、３人ほしい」というので、産んだのです。２人いると大変さは２倍ですが、その分、だんだん成長してきて３歳と２歳になって、性格の違いとか、兄弟のおもしろさを、私自身はひとりっ子で知らなかったので感じることがあります。

(金子) ９月 20 日に厚生労働省が「少子化対策案プラスワン」というものを出しました。資料が届いていると思います。最初に、「男の働き方を見直しましょう」と、要するにもっと短く働くように言われているのです。今のＦさんのように、現実はそれをかなり裏切るものです。普通は過労死というのは、だいたい 80 時間が一つの基準なので、もし 100 時間を超えているのなら当然、認定されるくらいにすさまじい。

(F) 本当に、主人が死んだら訴えようと思っています。主人の会社では過労死で何人も死んでいるのです。でも、会社としては残業の記録が残っていないわけです。土日もタイムカードは押していないから、出勤しているのに、そこで何かあっても会社には出勤していないことになってしまうのです。主人は 36 歳で、働き盛りだからという部分もありますが…。皆さんが知っている企業ですが、そういうところはそれを疑ってしまいます。上司も、見て見ぬふりをしているのだか、何だかよくわかりませんが。

(金子) すさまじい勤務実態ですね。そういうときに、働き方を変えましょうと言われても、それは無理という感じですか。

(F) 主人も本当に疲れ果てているときもあって、転職した方がいいのかとも思ったのですが、子ども２人いると、今どき転職もなかなか難しいです。一応、主人なりに部署の異動願いを受けたりして、今、少しずつ考えている状態です。

(A) 実は私もシステムエンジニアなのです。本当はいけないのですが、妊娠中も深夜残業はあたりまえだったのです。それで、産休は出産の６週間前から取れるのですが、仕事の関係もあって１カ月前まで働いて、産休明け、３週間後に自分がメインでやっていたプロジェクトのスタートが決まっていたため、「どうしても復帰しろ」と言われたのです。でもとてもまだ首も据わらない状態で、復帰が難しかったので「では辞める」という話をしたら、会社の方で１カ月だけ延ばすという話で折りあいがついたのです。会社も私が妊娠・出産をするというのがきっかけで、初めて女性部会を立ち上げて、女性の働き方を考えたわけです。女性も男性も差がない仕事で、女性でも毎日のように残業をしています。そこで、そういう意識もきっかけになって、そういった女性の働き方をようやくうちの会社も、私が踏み台となって考え始めた形でなっています。今、実際に仕事に復帰して育児時間を１時間取れるので、早く帰っています。早く帰った分は土日出勤するのです。土日はたまたま業種が違うので、子供を夫の方に見てもらっているという状況です。それで、その職種の大変さはすごくわかります。

(F) 月、１日休めればいい方で。月、１日もないときもあります。本当にハードです。

(金子) 国際競争の中で生き残らなければならないというのは、そこまで働かなくてはならないのでしょうか。

(A) 社内でリストラしているので、そのしわ寄せがきていることもあります。どうしても期限が決まっていて、何月何日からそのシステムがスタートしなければならないということになると、それに合わせるために１カ月くらい前からほとんど泊まり込みになってしまうのです。一方では、女性の労働で深夜労働の解禁をしている半面、一方で子育てとの両立というので、私も実際、すごく職場の人に私ができない分をみんなに振り分けてやってもらっている状況がどうし

てもあります。やはり職場に多少理解があるところだったので、続けられているというところはあります。結局、育児休暇は１カ月だけ取って復帰したのですが、育児休暇は１回取ったらもう取れないので、ある程度、仕事が落ち着いたら分割して２～３回くらい取れるようになってくれるといいと思います。賃金の関係で１回だけときいていますが、正直、お金はその分はいらないので、育児休暇も例えば１年とか２年とか取れるのであれば、３カ月取って、３カ月復帰して、時間が余ればまた３カ月とるというかたちに制度が変わってくれることを、すごく今、望んでいます。

（安梅）さて、少子化の原因に関して、どう考えているか、困っているかということを今いろいろ挙げてもらっているのですが、他にもありますか。よろしいでしょうか。

では、２番目の質問に移ります。どのようにしていったらいいだろうか。困ったところを裏返せばいいという部分もありますが、具体的に対策として、例えば地域でこんなサービスが必要だとか、制度としてこんなことが必要だとか、どんどん思いついたことを挙げていただけますか。

（H）今は高齢化社会になってきています。昔のおばあちゃん、おじいちゃんの知恵とかをもっと社会や地域で生かして、もっと自然な形で子育てができたらいいと思います。自分にも、昔は隣のおばさんが悪いことをしたら、子どもを叱ってくれたとか、遊んでくれたりという憶えがあるのです。理想をいえば、お年寄りが増えていて、元気なお年寄りもたくさんいますので、それを生かして、もっと地域や社会に参加できればいいかなと思います。

（安梅）具体的にはどうしたらいいでしょうか。

（E）ある都市でやっていたのですが、おじいちゃま、おばあちゃまたちが、定期的に保育園なり幼稚園に訪れて、先生とは別に遊んでくださるのです。先生ではないのですが、一緒に遊んでくださるという保育園か幼稚園かがありました。区か市か忘れましたがそういう制度をとっているところがあって、これはいいと思いました。行政も、区なり市でだいぶバラツキがあると思います。そういう面では一本化してほしい。この区ではこうして、この市ではこうやっているというバラツキがすごく見えます。同じ東京都の中でも、ある区はやって、ある区はやらないというのがあります。本当に元気なおじいちゃま、おばあちゃま、知恵を持っている方、お子さんが好きな方、たくさんいらっしゃると思います。本当に近所のおばあちゃまが遊びにきたという感覚で、保育園なり幼稚園なり小学校に定期的に訪れるという制度を作っていただけたら、本当にうれしいと思います。

（C）今、おっしゃったことですが、私は渋谷区ですが、保育ママさんという制度があります。うちの保育園でも保育ママさんがすごく活躍されています。子育てが一段落した、40代くらいの方、60代くらいのお孫さんがいる世代の方が何人も登録していらっしゃって、お迎えに行ったりします。もちろんそれは区の制度で、保育園に何人と決まっていて、その人数はすごく少ないです。保育ママさんの争いがあって大変です。その辺は融通が利いてたくさんいればいいなと思いながら、あまり言ってはいけないのでしょうが、そういう方々が本当に困ったお母さんには影で手助けしてくださっているのです。「どうしてもみられないときには見てあげるから、声をかけてね。そういう人はいくらでもいるから」と。それで土曜日、どうしても出勤になってしまったのだけど、だれもいないというときには、ママさんの家に電話をしてみてもらうことが、私もありました。うちの子どもは今、小学校で学童クラブに行っています。週休２日になって土曜日に学校がなくなったのですが、土日働いている親はいくらでもいるわけです。行き場がなくなっているので、学童館で土曜日も預かりますというときに、今度は「職員は休みだから出しません」と言われるのです。そういうときにお年寄りの方が地域のボランティアで、子どもたちも「シルバーさん」と呼んでいるのですが、おじいちゃん、おばあちゃんが来て、事故のときの責任は負えないとかいろいろあるのですが、おじいちゃん、おばあちゃんがその辺で囲碁を打ちながら、自分たちで遊んで、危険なことをすればどなられ、ご飯の食べ方が悪ければおばあちゃんに叱られみたいな、そういうところがあるのです。そういうことで、積極的に取り入れている自治体があるのです。それがもっともっと広がって、例えばたまたま子育てで、少子化が問題になっている都市部だから積極的にやっているのか、たまたま子どもが少ないから行き届いているのかということではなくて、それが地域でバランスよくいけばいいのではないかと思います。

（金子）その場合、バランスよくいく方法というのは何でしょうか。例えば少しボランティアだけでなくて、有償ボランティアという形で若干みんなで負担をするとか、もっと議員さんたちが頑張って全国的にそういう制度を作るのか、どのようにするのがよいでしょうか。

（C）そういうことに関しては、おそらく保育行政にかかわる区や自治体の考え方によるところが大きいと思うのです。だから、同じ東京都の中でも、同じ職場にいても、保育時間が６時15分までのところもあれば７時15分もあって一律ではありません。23区どこも一緒ではなくて、区が自主的に決めていることです。早朝保育もそうですし、土日もそうです。そこの自治体がどれだけ問題として真剣に取り上げているかということだと思います。先ほどの育児休暇もそうですが、あとから２～３カ月休みが取れる制度を会社がもしＯＫしてくださったとしても、保育園は親が１カ月休むと、親が家にいるいうことで、通っている子は退園処分になり、２人目、３人目を産むときに必ずそうなります。それで本当にやめなければいけないお家もたくさんあって、そのために上の子、下の子、次の子が全部違う保育園に行っているお家もいくらでもあるのです。そういうところで、なぜ、融通が利かないのかなと思うところがすごくあります。

（D）私は荒川区在住です。荒川区は引っ越ししてきて驚いたのですが、すごく福祉に力を入れている区です。今、都内でもバラツキがあるとおっしゃったのですが、荒川区はかなりいい方だと思います。それで特に、小さい子に対する福

祉と老人に対する福祉と両方２本立てでやっているのですが、先ほどバランスよくという話があったように、例えばおじいちゃん、おばあちゃんのシルバーセンターのボランティアを募集しているのです。でも、逆に保育園とか、おっしゃったような子育てをしたり、赤ちゃんのことを助けてあげるボランティアの募集は見たことがないのです。だから、逆に60歳、65歳を過ぎてもインターネットできる人もたくさんいますし、新聞もみんな読んでいます。だから、もっと高齢者の人で、パワーをもてあましているよりは何かお役に立てればという人がいると思います。そういう若いお母さんを助けるためのボランティアとか、赤ちゃんの面倒を一人でみきれない人の手助けといったものをもっと募集したらいいのではないかと思います。

(A) 私は都内に勤務で、家は横浜なのですが、横浜は子育てサポートシステムがあって、１時間800円で登録している一般市民のお家の人が預かってくれるのです。事前に会員登録を区役所に行ってやるのです。そうすると、近所の方を紹介してくれる。例えば「今日、遅くなるから保育園にお迎えに行ってください」というと、その人が１時間800円で自分のお家に預かってくれるのです。それは近所の人とも知り合いになれますし、わりと子育てが終わった自分の母親よりも上の世代とか母親世代の人たちがやってくださるので、結構、この制度は便利なシステムだと思っています。でも、都内はそういう制度がないようです。実際、子育てが終わっていて、おじいちゃんおばあちゃんで住んでいる人はほとんどが一戸建てで、家も余っているので、何人もその家に子どもたちがいて夜遅くても預かってくれているのです。結構、こういう制度が全国的に広がるのもいいのではないかと思います。あと私は働いていますが、働いている人はそういった制度があるかをすごく調べると思うのです。でも、働いていない専業主婦の方が、子どもと触れる時間が多い分、結構、子育てがつらいと思う人が多いと思うのです。だから、そういう人たちも利用できるような仕組みが広がれば、もっと子どもがほしくなっていくのではないかと思うのです。働く方は必死なので、何とか預かってくれるところを見つけなければというのがあるのです。子どもを育てている人も、女だから子どもが産めるから子どもを育てられるかというと、全くそういうことはないと思うのです。実際、友達も結構ブルーになっていたりとかもするので、そういう人たちも利用できるような制度があれば、そういう人たちの声を生かして作るのが一番いいのではないかと思います。

(安梅) 専業主婦の方が利用しにくいという状況は、どうやったら解消しますか。

(E) やはり制度の充実と行政のアピールでしょうか。

(A) 私も産休中、２カ月間だけ専業主婦をしていました。外に出ていない分、外から情報が入らない。インターネットとかが家にあればいいのですが、それがない場合は月に１回来る広報を待っているという状況だと思うのです。行政レベルでもそうでしょうが、民間レベルでも、収入の面もありますから低料金でないといけないので、そういったサービスはどうしても働いている人優先の制度に実際はなっていると思うのです。でも、これまでの調査結果でも、専業主婦の人の方がより子育ての辛さを感じることがグラフにありましたし、テレビでも専業主婦の方が孤独になるという報道もあったのです。私は仕事が辛いのですが、子育て以上に仕事で辛い面があるから、もう１人の自分に切り替えができるので、子育てがやっていけるというところも正直あるのです。切り替えができない専業主婦の人、私もいつかは、専業主婦になってしまうかもしれないので、そういった状況は、もし自分が２人目を考えたときに、仕事をいつか辞めざるをえなくなるときまでにそういった制度があってほしいなと、今からお願いをしたいと思います。

(金子) 今のお話、大変に興味深く伺いました。専業主婦が実は辛い。そのとおりだと思います。例えば一方で、この数日新聞を見ると、優遇をしていたから優遇をやめるというのが同時にくるのです。税金も１年間で４～５万円くらい増えて、間もなく個人年金の掛け金を払わざるをえなくなると、合わせて30万円くらいの負担が増えるわけです。それはこれまで専業主婦を優遇していたという評価があり、今後は優遇しないからそうすることになるわけです。その一方で、つらい思いを専業主婦がしているのではないかということになると、評価と一致しない気がします。Eさんは専業主婦の立場から見てどうですか。一方では「優遇だ」と言われ、他方ではAさんのように「辛いのはきっと専業主婦だ」と言われてどうのように感じますか。

(E) そういう声を励みにしています。「本当に頑張っているわね」と言ってくださるお母様とかの意見、近所のおばさまの方の声を励みにしている。そういう一言一言が胸にズシンとくると思います。今回の税制の改正を見ても、本当にがく然としました。社会基盤の悪しきリストラに見事にはまったという感じがします。専業主婦にとっては、本当に悲しいかぎりです。優遇されているとは思えないのですが。

(金子) Fさんは、優遇されているからやめるという意見の出し方についてはいかがですか。。

(F) 私自身働いていたので、専業主婦で立場は違いますが、どうでしょうか。子育ての大変さは、公園に行けばみんな専業主婦で、専業主婦どうしの情報交換はありますが、やはり何とかちゃんのママというのがいやな人はいやだと思うのです。名前で呼ばれないとか。何が原因かというと自分自身の問題なのです。私も専業主婦の輪にずっと入っているというのは、私自身もストレスが逆にたまるのです。自分も子育てをしているし、相手の子育ての悩みとかを聞くと通じる部分もあるのですが、そういうことばかりを聞いていると自分自身もストレスがたまるのです。やはり自分も仕事をしていたので、自分でありたいという部分もあるのです。それはやはり、子育て以外に自分で見つけようといろいろやっているわけです。働き方も、会社でなくても働こうと思えばどういう働き方でもあると思うのです。やはり一番大事なのは、自分自身がしっかりしているということです。やはりストレスのはけ口がそちらにいくと、子どもに対して虐待をするとかあります。だから、それを考えると、税金とかの面では何とも言えないのですが、ちょっと難しい。結

局、お金で優遇する、お金があれば何とかというのではなくて、それ以外の精神的な面のケアがあれば、それこそ子育ってかけようによってはいくらでもかけられるし、うまくすれば全然フリーマーケットで服も買えば問題がないし。だから、何でもかんでもお金で解決しようとしている。国もそうだし、自分たちにもそういった面があるかもしれませんが。何でも世の中、今はお金お金で、子どもたちが育っていくのもそうなっています。例えば塾に行って、お金をあげていればその辺のコンビニにしゃがみ込んでおでん食べたりとか、お金さえ渡しておけば済むという感覚が何かできている。そして、それを強く否定できない世の中になっているというのが根本的なところの一つでもあると思うのです。

（金子）それはよくわかるのですが、皆さん方が40代後半くらいになって、子どもが大学に入るという年齢になったときには、やはりお金がいるのです。大学を４年出すと1,000万円くらいは必ずいるのです。我々はそれで飯を食っているのですが。実は１年間に150万円くらい生活費と授業料、入学金でいるのです。これが非常に重たい。若いときは、今、おっしゃったようなことは当然ありますが、18歳になったときに、どうしても親と同じく子どもが「大学に行きたい」と言えば、それは親としては行かせてやりたいと思いますので。そうすると、必ず1,000万円はかかる。２人だったらと、なります。ここのところを、もう少し長い目で見た場合に負担が重いという気がする。それは今のところ、親しか出せないので、無理してでも出してやる。そういうことまで含めて、精神的な支援はもちろん大事だけれども、どこかでもっと具体的な露骨な、負担をどうするかまで考えておかないとうまくいかないことが多いかなという気がします。

（A）昔のように必ず給料が上がっているわけではないので、そういうことで中学、高校、大学と私たちは行けたけれども、私たちの子どもが行けるとは限らないので。

（金子）でも、たぶん行きたいというのは増えると思います。競争が高くないので、選ばなければ、すでにどこかには行けるわけです。選べば大変でしょうが、選ばなければ４年間行ける。そういうニーズを子どもが持ったときに、親としては「あなたは、だめよ」とはなかなか言いにくいとは思います。

（A）それもあって働くというのもあります。

（金子）亭主だけでなくて、２人で働いて、とにかくとなる。

（A）結局、どうしても２人で働いた方が１人で働いた方がお金にもなる。それもあるのが正直なところです。

（安梅）負担ということを、先ほど、Ｂさんが触れていましたが、解決方法としてはどんなことがありますか。

（B）目黒区についてですが、もう少し予算を増やしてほしい。うちの場合まだ５歳ですから。現実問題として、来年の４月１日に入れるかどうかも非常に不確定な状況です。役所の受付に行くと、待機人数がグラフになって出ているのです。私の同僚が渋谷区なのですが、申し込みに行ったときに「入れるかどうか非常に不安なので」と事務所と話したときに、後ろに貼ってあるグラフを見て「これだけいるのです。入れるかどうかなかなかわかりません」という話をしたのです。その人はどうしても働かないと大変で、家計が非常に厳しい状況の中におられるので、「もし入れなかったらどうしたらいいのか」と聞いたら、「生活保護がありますから」と言われた。それを聞いてすごくショックを受けて、自宅に帰る道で泣きながら帰った、そういう経験をされた方もいます。

うちは来年の４月ですが、もうすぐ申し込みをして、入れるかどうかはわからないのです。定員が少なくて、定員オーバーすると、区内でも遠くの保育園とかに運がよければ入れるけれども、それでも入れないと１年先送りになる。１年先送りしても入れればいいのですが、今度は０歳に比べて１歳は競争率が高くなるという事情があって、悪循環なのです。

ですから、もう少し予算的に増やして、職員や保育園の施設を増やして、もう少しサービスを減らさないでほしいということです。保育園もそうですが、保育ママの制度もありますが、そういう個別に対応できるような、そういう保育園の一般的な制度以外に、それを補完できるものが組み込まれるシステムがほしいと思います。

（金子）私は、本業はどちらかというと高齢化の方ですが、例えば高齢者の方でいうと、介護保険によって、在宅支援ではなくて施設のニーズがすごく大きいわけです。そうすると何があるかというと、特養という施設を造れというニーズが強くなってきていて、同じ自治体に高齢化のための施設を造れという圧力が結構あり、一方で、今おっしゃったように保育所がまだ足りない。結局、お金は限られているし、今回の国家予算を見ると半分は借金です。そういうときに保育予算を増やしてくれといっても、それはじいさん、ばあさんたちのこういうニーズがあるからという話になってきて、結局はどこかで切るなり半分に減らすしかない。

もう一つの手は、みんなで自分たちの負担を増やすということをやるかどうかです。それについてはいかがですか。

（B）そうですね。２つあります。１つは自分たちの負担をもう少し増やす。その一方で、今の問題についていえば、高齢者は増えてきているし、社会的コストも高くなってきている。一方で、子どもは少ないし、だけども子どもをみる人が少ない。だから、過剰部分と不足部分が分極してしまっているのです。これも発想の転換ですが、予算を２つ付けるのではなくて、１つで兼ねられるような形でオーバーラップできる点があると思います。そうすれば予算も２倍かかるところが1.5倍とか、1.3倍ですむかもしれない。そういう形で縮小できるのではないか。利点的にはそういうことです。

（金子）今、社会保険で個人負担を増やすということですが、税金ではなくて社会保険の方がいいですか。例えば、よく言われるのが消費税は５％と非常に低いので、15％くらいにして、５％を福祉目的税のように限定的に使うという話

が一方であるわけです。そうすると貧しいほど負担が大きい。
（B） そう考えると、保険的な項目の方がいいですね。
（金子） その負担の仕方も非常に難しいですね。一般的に負担を増やすのはいいのですが、税金で行くのか保険で行くのかだけでもなかなか決着はつかない。
（E） でも、課税最低限の人たちはもっと下げるという話があります。
（金子） １人、300万円を200万円にするとか。でも消費税だったら。
（E） 消費税を導入した時点で、福祉に使うということで、ずっと前３％になったときにそういう目的で使いますと言いながら、また足りないから５％、足りないから10％、またまた増えて15％かと。そういうのをずっと言い続けて、結局、ちゃんとしたところには使われていないのではないか。「その会計報告をしてみろ」と。「だったら、道路を造るのであれば子どもたちにもっと使って」と言いたいです。「課税最低限を下げろ」と言いたいです。今回、それが上らなかったのがおかしいと思います。それで、配偶者特別控除だけが廃止されてしまって。何か、取りやすいところから取られてしまっているという気がします。
（C） 消費税に関しても、一律５％を 10～15％に上げれば、一定の税額の算出は簡単なように見えるのですが、なぜかというと、今、普通に私たちは買い物をしていますが、一般の小売り商店は経営が楽ではないですね。大手スーパーも出てきて、たくさん大型店がありますから。そういうところが消費税を別でとるとお客様がつかないというので、そこで負担をするのです。もちろん税金を納めるときには、きちんと規定を出すものだから結局自腹負担をしていたりします。そういうところですごく不公平というか、間違っているなと思うところがあるのです。その辺も、庶民の生活レベルを知らずに見ている方々からみれば、５％を15％すれば、10％分上がるというところ、でも本当に導入して、普通のパン屋さんが100円のパンを買うのに「では15円」と言ったところで、「では、ダイエーの方が安いわ」ということになって、それで中小企業が倒産になる。絶対にそれが起きる。
（D） 消費税はすべてのものにかかるわけですね。毎日食べる物やだれでも必要なもの、だから特別に必要な物にだけかけるというのも一つのアイデアではないですか。
（金子） そういうことになりますが。では、特別にどういう品目がと、おそらくなかなか合意するのが難しい。食料品は安くするとか、そういう話を実際にやっているところはありますが。
（H） 介護保険料だって結局は40歳以上と決まりましたが、あれも問題があります。
（金子） あれも最初に導入するときに、親がいる人と不幸にして亡くなった人が同じなのかという議論をずっとして、結局、一緒にするとなった。今でも「不公平だ」とおっしゃる方がいます。
（H） なかなかものごとは公平にはいかない。
（金子） どこかでやらないとますます信用できなくなる。哲学の問題のようなところがあるでしょうが。ただ、嘆いてもしょうがないので。
（安梅） どんなサービスが必要か。先ほどの問題点を挙げられた中で、子育てが楽しく思えないということを挙げていらっしゃいました。そういうことを解決するためには、どういう仕組みがあると思いますか。
（B） 核家族化していますからこれはしょうがないのでは。一つの具体的な自分の生活の場の中で、子どもという生の、泣いたり笑ったりとかを見る機会がないし、今、少子化でますますなくなってどんどん縮小してしまっていますから。今、具体的に子どもを身近に感じるというのは、実際に生まれるまではなかなか難しいと思うのです。むしろ自分で、主体的に、例えば児童館やいろいろな子どものサークルにかかわっている人は別ですが、だいたいそういう人は少ないですから、楽しく思えるというのは難しいのではないでしょうか。
（金子） 楽しくない記事が多いですね。
（B） そうです。そういう先入観で染まってますから。
（G） 我々の親の世代とかは、もっと子育てを楽しく感じていたのでしょうか。
（F） あまり、そんなことも考えていなかったのではないのでしょうか。考える間もなかった。だから今は恵まれているといえば、恵まれているのかもしれない。
（D） 子どもの数が７～８人と、多いです。
（E） わけがわからないうちに、子育てが終わっていた。
（D） でも、今は１人でもすごく大変という、何かその辺も変ですね。
（E） 核家族化ではなかったから、おじいちゃん、おばあちゃんの面倒で、子どものことなどどうしていたか忘れたわと。
（金子） １つには、おそらく介護があまりなかった。早く死んでいたので。それで介護の負担がない分だけ、７人いてもそのうち２人は結核などで死んでいたので。そういうこともあったわけです。
（安梅） お姉ちゃんが見てくれたということもあってサポートがあったのです。
（金子） 介護の問題は長寿化して初めて出てきたので。ある時代までは介護の対象者になる人が非常に少なかった。そういうことがあります。
（D） お友達で、31歳で専業主婦の人がいるのです。その人は唯一、周りで、子育てが楽しいと言っている人です。「どうして？」と聞いたら、上の子が５歳で、下の子が３歳ですが、まず自分の母親と同居している。そうすると男性がい

て申し訳ないのですが「旦那さんのお母さんに子どもを見てもらうのより、自分のお母さんと自分と子どもたち４人で出かけられる方が楽しい」といってました。例えば旦那さんのお母さんが「これを子どもに着せてあげてとか、これで遊ばせて」と買ってきても、だいたい気に入らないことが多いけれども、自分の母親だったら何かを買ってくれるというなら、一緒に行ってその場で選んで買ってもらえると。だから、その人はすごく恵まれているというか。先ほどあったように、子どもができると親とかそういう絡みもあるけれども、旦那さんのお母さんがいてくれるよりも自分の母親がいてくれた方がいいなというのが女性の正直なところなのではないでしょうか。

（金子）亭主はいやがるでしょうが。そのあたりは永遠のテーマですね。

（E）嫁と姑問題。

（金子）本業が高齢者なので、高齢者のことを調べると、皆さん方が思っていらっしゃる以上に、孫の面倒をみたくないという方が多いのです。先ほど、Bさんがおっしゃったように、親の生き方の中で、自由時間を重視するというのは、我々の世代の親父、もう上の世代でも多くなってきている。だから、60 代同士で一緒に旅行に行くと、「月に１～２回は孫が来てもいいけれども、とてもではないけれども毎日はとんでもない」というおばあさんが結構多いわけです。そうすると 30 代の方々が親に頼んで、50～60 代で応援してもらうということ自体が間もなく壊れるのではないかという気がします。だから年寄りの立場からすると、もっと違った制度を考えていかないと。ボランティアのような形で自分の親とか亭主の親に頼めばいいということは、もうできないのではないかと思います。

（F）でも、今、公園に行くと、専業主婦の人が多いです。私は仕事をしていますが。私は近所に母が住んでいます。私もひとりっ子なので母にお願いして、仕事の合間に見てくれていました。２人になってからは落ち着いたので、結局、実家を建て直して一緒に同居しているのです。母は仕事があると出かけますが、空いていれば孫を見てくれるという感じです。母は「自分が子育てをしていたときは必死だったけれども、やはり孫は違う」と言うのです。自分も旅行へ行ったり、仕事をするけれども、孫の面倒をみること自体は生き甲斐というか、それはまた全然違うものみたいです。私自身は協力してもらっているので、何らかの形で私も母にと思います。例えばこれから母が寝たきりになったりした場合には、もちろん介護が来るわけですが、その辺はうまく助け合ってやっていこうと思います。やはり専業主婦の人は、どちらかの実家や自分の兄弟がいる方はそこに預けます。どうしても核家族化なので、専業主婦の方は身内だと思います。今は、それぞれ親も働いている世代ですから、それもなかなか難しくなっているとは思いますが。

（安梅）この件に関して言い残したことはないですか。

（A）私は子育てが結構、楽しいのです。働いていることもありますが。辞めてしまおうかと思ったくらい楽しいのです。今、お座りとかもできて、反応してくれるのですごく楽しい。私の場合、両方の実家が遠いのです。それで頼らざるを得ないときは、実家の母に電話をして新幹線に乗ってきてもらってと、最初の２カ月くらいはそうでした。里帰りもしなかったので。実際、頼れるうちは頼った方がいいとは思いました。ただ、今後、子どもがまだ一人前になる前、親が自分に頼るようになったときにどうしようかというのはあると思います。晩婚化で子どもを持つ年齢も遅くなって、それが遅くなるほど両方が一度にのしかかってくる。実際に、私の会社の大先輩の女性も結婚をしていますが、子どもは持たないで 50 代なのです。自分の親の介護のために子どもを諦めた。親がずっと前から病気だったのです。今後は、子どもが欲しくない理由の中に、親の介護も出てきてしまうこともあると思うのです。両方をうまくやっていかないと。少子化しかだけの問題ではなくなってきている。これだけ寿命が長くなると、結局、若いときの寿命が長くなってくれればいいですが。30 代が 40 年くらいあればいいですが。70～90 代という、後ろの動けない年代がどんどん増えているばかりなので、その辺はこれから大変だというのがあります。

（安梅）健康寿命は延びているのですけどね。

（A）子どもを産む年齢も、もっと 20 代が 20 年くらいあれば、いつ産んでも、あと５年後くらいでもいいかとありますが、そこのところはどうしても限られているので。

（金子）対策は２つあると思います。１つは、結婚されている方々の子育てを支援する対策。これはずっとこれまで議論になってきたのです。もう１つ少子化の原因は、未婚率が上がってきたというのが非常に大きいわけです。これについては対策の打ちようがない。日本は芸能人、安室も松田聖子も、結婚する瞬間は結婚の関係で産む。未婚の母にはならないわけです。産んで半年くらい経ったら離婚をして、あとは夫はいらない。芸能人でさえそれですから、ましてや普通の人は未婚の母にならないので、どうしても結婚する人は減ると子どもも減る、という因果関係があるわけです。でも、８年間、エンゼルプランでとにかく子育て支援をずっとやってきたということは、既婚者の応援をしてきた。ここまで来たのですが、どうしてもくい止められないので、もう１つ手つかずの未婚率が上がってきたことをどうするか。どのように考えたらいいか。それは、例えば男が悪いとか女が悪いとか、魅力がないとかの話にもなりますが、笑ってすませる場合ではなさそうな気がするので、そのことの対策は皆さん方にお考えがあれば、ぜひ聞かせてほしいのです。

（F）私の友達も 30 代半ばになってきましたが、独身が多いです。やはり女性でも経済力があるのです。マンションを持っているのはあたりまえです。独身でそれなりに勤めていて、かなりお給料ももらってボーナスも貰ってというと…。結婚して、一緒に共働きができればいいですが、例えば自分が辞めた場合は、旦那さんのお給料で今度はやっていかなければいけなくなる。「とてもではないけれど、私はイヤだ」という友達が多いのです。旦那さんのお給料の中でも、細々とやる努力はしたくないようで「それなら共働きで家事は半分ね」という人が多い。男性の価値観もいろいろあると思

いますが。それを考えるとパラサイトシングルではないですが、私自身も20代は独身だったので、親から離れられないというか、精神的に自立していなかったと思うのです。結婚して子どもを生むということは、子どもの面倒を今度は自分がみなくてはいけない。今までは親に自分の面倒をみてもらっていたのが、自分でみなければいけないとなると、やはりそこでみんな尻込みしてしまうことが。子どもを生むという面でも結婚という面でも、精神的にそれだけ余裕がないというか、自立していないという面があると思います。

(G) 未婚率はこれからもっと上がると思います。学校を卒業しても、全然、就職もできないし。我々の世代はバブルの恩恵もあり、仕事が少なくともありましたから。今の学生さん、若い人には仕事もない。やはり男性、僕らの感覚から言うと、ある程度、稼げている状態ではないと、とても結婚しようという気にはならない。それからすると、もっと未婚率は上がると思います。昔、もっと結婚していたというのは、社会に出る年齢も早かったというのもある。昔なら高等学校を出て働きに行けば、４～５年もすれば、恋人もできて結婚もするだろうという。それが22～23歳で、仕事もあるかどうかわからないとなると結婚ができるわけがない。

(金子) 未婚率が上がって、子どもが減ってくると、ますます就職ができない。企業の業績は落ちてくるので、人減らしはするけれども、雇ってくれないという悪循環が始まる。もう始まったという気がします。そのあたり、結局はどうかと。

(D) 結婚をすると、必ず「どこに住もうか」という話になると思うのです。だから、住宅に関しての手当ももう少し考えないといけないと思います。例えば最初は賃貸とか、一緒に住むことになれば新築にしようとか、絶対にそういう話になると思うのです。そうすると１人でいた方が家賃も安くて済むし、１人の方がローンもなくて済むしと。一緒に住んで、一緒に家を買って、そこに一緒に住もうという気持ちになりづらい。だから住宅手当の部分も、未婚率を下げるためにも考えた方がいいと思います。

(金子) その手当てはだれがしたらいいですか。先ほどの話になりますが。

(D) 例えば賃貸であれば、すごく具体的になりますが、契約をするときのお金をそれほどかからないようにするとか、更新するときかからないようにするとか、敷金は行政が面倒をみるとか、不動産屋さんが、そんなにもうけなければいいと思います。

(金子) 広い意味で、建設関係で今１割くらいが働いていて、１割くらいのＧＮＰがあるわけです。つまり、600万人がそれで飯を食っているわけです。それは例えばミサワホームとかライオンズマンションなど全部合わせて120万戸ほど供給しているわけです。それが、600万人を支えるわけですが、少子化になってもっとこれがひどくなると新築の需要も減ってくる。結局、親のどちらかは家を持っていますから、増改築でいいわけです。そうすると3,000万円の新築費用ではなくて500万円くらいで済むのです。当然、建築業界はうまくいかなくて、売上が減って、雇用する人間を減らさざるをえないので、たぶんリストラが始まって失業率が上がる、こちらはこちらで悪循環が始まる気がします。

(A) そうなると、日本の土地の面積と比例すると、日本は人口がかなり多すぎると思うのです。だから、そういうところから考えると、この少子化はある意味で、いい傾向でもないけれども、これが一番つらいときで、これが落ち着けばもう少しゆとりの生活になるのかなと思います。だから、現状のまま何かを維持しながら何かをしようというのは無理があると思うのです。どこかで何かをしていかなければいけない。リストラもそういうもののはじめだと思いますが。実は、うちの弟は30歳ですが、独身で家にいます。しかも、働いていなくて海外に留学している、それも親が出しているのです。私はいつも怒るのですが。親が結局、独身でいる面倒を全部みている。食事から何から、デイサービスではないけれどもみています。各家庭がそうしてしまっているのです。私は大学で、東京で一人暮らしを始めて、そのまま就職をしたのです。寂しいな、結婚したいと思っていたらちょうど相手がいたのでしたのですが。そういった、昔は、家を出ようというのがあったのですが、今はみんな「いいよ、いいよ」になってしまっているところがあるのが一つの原因だと思うのです。「なぜ、結婚しないの」と言いながらも、しなくてもいいという環境を親が作ってしまっていて、子どももそこに乗っかってしまっている。だから、勘当くらいする親は今はいないのです。

(H) 昔は女の人は働くところがあまりなかったから、逆に、結婚をしないと生きていけなかった。今は生活力があるから、なまじ男の人と結婚するくらいならとしなくてもよいという人が増えたのではないかと思います。

(A) 今後定年が延長され、65歳、70歳まで上がるとなったら、親に収入があるから、ますます未婚率は上がると思います。その親の子どもたちは当然、40歳くらいで家にいて、親は70歳で、まだ働いていられるとなると。結婚しない人も増えると思います。だって、楽ですから。

(H) 今の親の世代は結構お金持ちです。年金も、結構、今はある。

(金子) 残念ながら我々はそういうのは無いわけです。

(安梅) 時間がないので、次に行きます。では少子化に対してどうしたらいいか。皆さんが小泉さんだったらどのような政策をとるかというのを、お聞かせください。

(A) 少子化、どうしたらいいでしょうか。　一人一人がもっと…。企業の偉いさんもそうですが、結局、今、国を動かしている人やトップの人は、奥さんがだいたい専業主婦だと思うのです。自分で子どもを育てたことがないから、痛みがわからないと思うのです。だから、そういう人たちがいろいろ決めるのではなくて、実際、困っている人たちが、もっと政策を行政の区レベルでもいいので話して決められるような、意見をもっととり上げてくれるような仕組みを作っ

てほしい。上の偉い人たちだけで話をしていても、ただ単に机上の論議だけで終わる気がします。実際、もう何年も対策プランを立てても、何の効果も上がらずどんどん悪くなるばかりなので。結局、現実的に考えられない人たちが、こうだろうとしか考えていないので。こういう場もそうですが、直に反映できる制度があれば。例えばそういう意味で、インターネットで都知事にメールしたということのもありますが、そういう仕組みが何かないかなというのがあります。

（金子）ポイントは４つあります。先ほど、申し上げたように、１つは既婚者の子育て支援策をどうしていくか。それと未婚者が増えたことによって、少子化に対して何かあるかないか。それで次は、負担の問題をどう考えていくか。負担をしたくないという意見もあるし、もっと負担をしてもいいけれども、その場合は税金でいくのか社会保険でいくのかという具体的な選択肢があって、情報がどういう形で公開されるのかしないのか。そのあたりまでを具体的に取り込んでいかないと、結局は思いつきになって、声の大きい人が何か言ったらそうなるけれどもうまくいかないということの繰り返しが続くのではないかという気がします。

（B）政策ですから、わかりやすさが一番だと思います。既婚者に対する支援として、とりあえず子どもが産まれた時点で、例えば1,000万円なら1,000万円を支給する。あるいは2,000万円でもいいですが。そうすると、例えば子どもの洋服とか子どものアパレル業界に波及需要が出ます。あるいは子どものテーマパークに波及需要がありますから、その面で経済活性化があるでしょう。ですから、1,000万円、2,000万円のインセンティブをつける。例えば原資については、例えば税金や社会保険でもいいですが、宝くじの益金、あのようなものの一部を子どもが生まれた家に回す、そういう形で。宝くじを買う人は多いですから。

（金子）北海道だけではないと思いますが、３人目から、出生に30万円とか50万円を支給する自治体が結構あります。それは焼け石に水なのです。３人目からですから。もらって引っ越す人が結構いるます。なかなか30～50万円ではインセンティブにはならないようです。

（B）だから地域別ではなくて、国ベースで。人によってはパチンコとか、自分のレジャーに使ってしまうかもしれないので、使途を明らかにするとか、特定口座を作ったらいいと思います。

（金子）僕は生まれたときではなくて、大学生になったときのお金が大変なので。そこのところの支援がもっと厚い方がいいという気がします。生まれたときに1,000万円貰って何となく使ってしまうのではないですか。

（B）でも、例えば1,000万円あげることによって、ある程度、少子化がくい止められるかもしれない。費用負担の問題もありますが。いかに少子化をくい止めるかという観点から考えれば、子どもを生ませるためのインセンティブとして1,000万円は、ある程度は有効ではないかと思うのです。

（金子）お金の問題ではないという意見は必ず出てきますが、そこまで踏み切れば大きいです。でも、できる状況ではないと思います。なかなかそういう話をしても、産めない人はどうするのかとか、そういう話が必ず出てきます。差別だとか。そのあたりが恐ろしいので。

（B）それはそれでほかの政策とうまく整合する形になればいいですね。

（C）私は、基本的にまず、今までの親世代以上が考えている老後は年金だけで生活できるという考え方自体をきっちり改めるべきだと思います。あれは微々たるお小遣い程度のもの、あれは生活資金ではない。あとは税制の負担とか社会保険の負担に関しても、変な話、例えば子育て中はお金がかかると言うけれども、子育てしない方はあまり実感がない。実感がない方は実感がないままで一生が終わるかというと、自分の親の負担をしてみたり、介護が出てきて、やはりこれはおかしいと思ったりする。長いスパンで見たときに、波があるわけです。自分が負担をしている額が多いと感じるのか、ああ、助かったと感じるのか。それは目先のことだけで多い少ないという議論だけをするのは無駄だと思うのです。そのことを考えながら、私が提案をするとしたら、一般企業、あとは普通の財団法人すべてそうですが、定年制を長くすることは絶対になしで、逆にむしろ短いくらいでもいい、55歳定年でもいいと思います。そういうことに対して国が推奨すべきだと思います。というのは、自分は働きながら見ていると、60歳以上、会社に来ているのだか来ていないのだかわからないような人の役員報酬に莫大な額を払っているわけです。それは前からの規定だったり、顧問は何人いなければいけないという決まりがあるのです。でも、そういったお金を年に数千万円も払うのであれば、それで今、本当に家族を支えなければいけない人たち、自立しなければいけない若い世代の人を何人雇用できるだろうと思うわけです。シフトしてすぐは大変だと思います。60歳まで働けると思ったのが、55歳となると、今後どうなるのだということはあるでしょうが、でも改革をするときには、いつも過渡期があるのは仕方のないことであって、今度そうやって働く期間が短くなることで、例えば55歳以降の自分の過ごし方について考える機会が増える。例えばそれまでお金を貯めて、自分のやりたい人生を過ごすのか、余力があるから、例えば普通に今までどおりの会社で、企業に縛られて働けないかもしれないけれども、今の自分にできる働き方を探してみるとか。それが地域に対する有償ボランティアであったり、無償のボランティアであったり、そういった形で人生の考え方を変えていくこともいいのではないかと私は思います。それで若い人たちの働く機会が増えれば、それによって家庭を持とうと思うのか、自立して、これから女性もそうですが、一緒に男性と結婚して生活を作っていこうと思うのか、そういう意識を上げることにもつながっていくので、このことが提案できればいいのかと思うことがあります。

（D）私は、子どもが増えるためには妊娠をして出産をしなければいけないので、まずそこの部分をサポートするために、シルバーパスのような、例えばマタニティパスとかベイビーパスというものを作ったらいいのではないかと思います。

具体的には例えば「都バス」だと、70歳以上の人は１年間1,000円で乗り放題なのです。だから、赤ちゃんを抱っこしている人は1,000円で乗り放題といった、そういうベイビーパスとか、お腹大きい人は例えばタクシーに乗るときにいくらかパーセント割引になるとか、まず、妊娠して出産しなければ子どもは増えないわけですから、そこの部分をもう少しサポートしてあげたらいいと思います。何パーセント割引とかバスが1,000円で乗り放題ということであれば、それほど壮大なことではなさそうなので、意外と実現できそうかなと思います。

(E) 私はあまりいい案は浮かばないのですが、私が総理だったら、限られた予算の中でもう少しうまいお金の使い方をしていきたいと思います。それが具体的にどう分配したらいいかまでは浮かびませんが。例えば銀行を１つ助けるのであれば、それを子育て、あるいは少子化対策に回していただけたら大変にありがたいと思います。足りないから消費税を上げるというのではなくて、限られた国庫の予算の中で、子どもなり、高齢者にかける割合をもっと手厚くしてもらいたいと思います。これは個人的な趣味の範囲になるかもしれませんが、私の周りでは未婚者の方が多いので、なるべくいい男性といい女性がいたら、お節介かもしれませんがキューピッド役をかってでることにしています。例えば、１件成立したら特典が付いてくるというようなキューピッド特典のようなもの、お金でなくてもいいのですが。お金、お金と浅ましいかもしれませんが、キューピッド特典という特典があってもいいかなという気もしてきました。情報公開の面については、税金の使い道は、ちゃんと最後まで報告してほしいです。予算がこうなりましたという記事はよく見ますが、では実際、どれだけ使いましたという報告を、私たち国民納税者は本当に受けているのだろうかとも感じます。それはマスコミの報道の仕方とか、自分の情報の取り入れ方の不足かもしれませんが、それがされていないような気がするので、是非、そういう情報公開、収支決算は、国民にわかりやすくできる制度を作りたいと思います。

(F) 保育園を増やすというのも１つの案だと思いますが、私自身はできれば小さいうちは子育てに専念できる環境が必要だと考えているので私が職を離れました。でも働くこと自体は、お金だけではなくて生き甲斐とかいろいろあると思うのです。それを考えると、やはり働き方がもっと多様になればいい。例えば、会社に勤めているといろいろなリスクがあると思いますが、子育て中は働き方を変えたりとか、もう少し柔軟に、会社に勤めなくても仕事ができるとか、自分自身でやれる範囲でできたらいいと思います。子育て半分仕事半分でもいいし、子育て８割、仕事２割でもいいのです。私自身、仕事したいという気持ちがあり、それは子育てがいやというのではなくて、自分自身を持っていたいという面もあるからです。専業主婦が楽しくて、ずっと子育てをするという人もいると思います。でも、ちょっと仕事がしたいと思ったときに仕事ができる環境があるといいなと思います。先ほど言っていたお金の問題ですが、大学はかかると思います。私はなるべく小さいうちに貯めようと思っています。でも、共働きではないので、主人の中から節約したり何なりしなくてはいけないのです。うちの子は来年、幼稚園ですが、すごく入るのが大変です。私立の、超有名な幼稚園ではないのですが、それでも倍率がすごいのです。上の子は早生まれで２年保育にしたのでなかなか入れなくて、ものすごく幼稚園が高倍率なのです。定員割れの幼稚園はつぶれていっている。３年があたりまえと言われましたが、入るのが大変で、なおかつ月に３万5,000円くらいかかるのです。補助が数千円か出ると区では言っていますが、例えば隣の私立の幼稚園の場合は格差があります。うちの場合は３万5,000円払って、なおかつ補助が数千円か出るのですが、隣の区では区立と同じお金で行けるのです。だから、6,000 円くらいの負担です。同じ幼稚園へ通っていても、自分の区の幼稚園とその他の区の幼稚園は違うわけです。今後下の子を３年保育に入れるとすると、「３万5,000円×２」で、月に幼稚園で７万円かかるわけです。そうするとお母さんたちは皆、子供が幼稚園の間は、パートに出るとか働きに出るという感じなのです。そのように子育てはお金がかかるなと実感しています。私自身も働き方をこれから少しずつ考えて、なるべく家庭も大事にしたいけれども、その中で少しずつ、自分自身もそういう準備をしなければいけないなという段階です。あとは無駄な公共事業、例えば公園をひっくり返してまた造ってみたりとか、うちの近所には多いです。それならもう少し公園を充実させるとか、押す信号を見やすくするとか、そういうところにお金をかけてほしいと思います。

(G) ちょっと乱暴な議論かもしれませんが、少子化の問題というのは、あるいは東京一極集中の問題だと思います。例えば保育園の数が足りない、入りたいけれども入れない。これは全部、東京の行政がすべてある限界にきているのかなと思います。当面、この問題を解決したくても、お金に限界があるので。私が小泉総理ならという題目ですので、東京に政治から経済から全部一極集中をして、ある意味東京でないと企業活動も何も成り立たない。人もこれについてくるということなので、石原慎太郎知事の考え方と逆をいくと思いますが、これは遷都かなと思っています。お金がないということであれば、役所を他にもっていっても結構だと思います。お金を作っていただければ、今、地方で建設業の方もまだ飯が食えるのではないか。行政がいけば企業は必ずついていきますので、そうすると東京ももう少し余裕が出てくるのではないか。そうすると、保育園が足りないという問題ももう少し解決してくれるのではないかというのがひとつです。もう少し現実的な話をすると、やはりフルタイムで働くというモデルが限界にきていると思います。かといって、これも民間企業に「あなた、やりなさい」といっても、生死がかかっていまして、要は、最後は倒産です。それがないところというと、やはり行政、お役所ではないか。キャリア官僚の方、彼らもメチャクチャ忙しい。毎晩、タクシーでしか家に帰れないという方も大勢いらっしゃるわけです。その方から、こういう子育て支援を実践していただくのがまずは早いのかなと。そういう方が出てくれば、もう少し考え方も変わってくる。

(金子) 報道はしたのですが、マスコミは絶対にできないです。11時ころに記事を書いているわけですから。だから、

できないことが書いてある、そういう印象が強いです。
（H） 私は突飛な案ですが、ポイント制にして、例えば子どもを産んだら100ポイントを与える。それを子どもが大学に行くときに、使いたい人はそのポイントを使って優遇されていくとか、親の介護に持っている人はポイントを使えたら使う。自分たちが子どもを産んだことによってプラス特典があって、使いたいときにその特典が使えるような何かがあればいいと思うのです。産みたくても産めない人もいるので、子どもを生んだだけというのではなくて、一生を通じて、ポイントを稼いで、使えることがあって、相互に協力できればいいなどと思います。
（安梅） ありがとうございました。いろいろなおもしろいアイデアが出ました。大変に生き生きといろいろな楽しいお話を聞かせていただきました。ありがとうございます。せっかくのお時間を使われたので、是非、生かして皆様の声を伝えていきたいと思います。

「少子化の進行要因の分析及び各世代間における子育て支援方策に関する調査研究」
東京グループ面談（第3回）
日 時 ： 2002年12月15日（日）10:00～12:00
場 所 ： セブンシティ「銀杏の間」

（金子：司会） 私は、北海道大学で社会学という学問を受け持っており、具体的には、高齢社会の研究と高齢者の研究を長い間してきています。社会のあり方を考える学問なので、この数年は、高齢社会の一部に少子化があるということで、少子化のことも併せて研究をしています。今年の９月に札幌で、10月に福岡で、そして、今回、東京が３回目のグループインタビューです。どうぞよろしくお願いします。
（安梅：サブ司会） 私のバックグラウンドは、保健学・健康科学です。皆さんが、体の面だけではなく、精神的にもずっと健康で長生きするにはどうしたらいいか。また、子どもが健やかに地域で育っていくにはどのようなサービスや仕組みが必要かということを専門にしています。
（金子） 今年度は、少子化と子育て支援ということで、その傾向と対策を併せて研究するというプロジェクトの一環として、このグループインタビューをやっています。
それでは、簡単に自己紹介をお願いします。少子化について関心がありここに集まってこられたと思いますので、その理由を含めて、Ａさんからお願いいたします。
（A:38・女・既・共・1） 私は、現在はフルタイムで共働きをしています。勤めて17年になり５年前に娘を出産しました。
少子化については、ＤＩＮＫＳを長くしてきていたもので、身近な問題ではあり、自分がどちらかというと少子化に加担している方でやってきました。５年前に子どもに恵まれて、子どもを抱えながら働いていくことに対して世の中が無理解だとか、子どもができたことで辞めてしまう同僚を見てきていろいろ感じることがありました。
この先、子どもが小学校に入ると、どうなっていくのかすごく不安もあり、いい機会ですので、いろいろ思ったことは申し上げていきたいと思っています。
（B:30・女・既・専・0） 私は、今年の春まで正社員で７年間働いた会社を辞めて専業主婦をやっています。子どもはいませんが、お腹の中に子どもがいて、来年出産予定です。
結婚してから共働きでやってきたのですが、子どものいない夫婦だけの時間というのは、とても自由で、ある程度お金もあって、その生活をなかなか捨てられなかったことが正直なところです。しばらく子どものいない生活を送ってきましたが、妊娠してこの先のことは考えられない状況なのですが、２人ぐらいを目標に家計のプランともかみ合わせながら考えていきたいと思います。
（C:38・女・既・共・0） 私は、働いて15年目になります。結婚は、10年目になります。典型的なＤＩＮＫＳの家庭として年に３回ぐらい主人と海外旅行や、温泉旅行を楽しんでいるうちに、子どもはいなくても２人の生活をエンジョイできればいいのではないかと思いつつ10年経ってしまいました。
親から孫の顔が見たいというプレッシャーがないものですから、このままで来たのですが、将来的なことを考えると、やはり、子どもがいないと寂しくなるのではないかとか、日本全体のことを考えても、これからどんどん少子化になっていくと思います。子どもが少なくなることで、国全体が悪くなってしまうのではないかという懸念があり、参加させていただいて、これからの自分の人生について考えてみようと思いました。
今はいろいろ任された仕事があり、仕事も楽しくなってきており、どうしても残業が多くなり、とても子育てができるような時間的な余裕はありません。また、同じ会社の子どもを持っている方々から、姑さんに預けてすごく大変だという話や、保育園にお金がかかるとか、そういう話を聞きますと、子どもを持つのは仕事をしていくうえで大変だと思います。その点もこれからどうしようかと考えているところです。
（D:38・女・既・共・1） 私も今の会社に10数年勤めています。去年の５月に出産をして、当初、会社との契約で３カ月後には復帰するはずだったのですが、子どもを見てもらえるところがなくてパート扱いにされました。保育園も４月からでないと入れないということで、地域に「ファミリーサポートセンター」や「保育ママさん」などの施設はあり利用しようと思いましたが、途中からはなかなか入れません。いろいろ探し保育園に４月から入れたものの、熱があるからお迎えに来てくださいとしょっちゅう言われて、その都度ベビーシッターを頼んだりして、とても大変な毎日を送っています。これからの未来が、少しでも良くなればいいなと思い参加させていただきました。
（E:38・女・既・専・1） 結婚15年目で、小学校２年生になる男の子がいます。なかなか子どもに恵まれなくて不妊治療もし、苦労して子どもを作ったのですが、それと同時に仕事は辞めました。それまでは、ピアノの講師をしていて、自由な時間でできましたので、子育てとの両立が可能でしたが、私の養育方針で子育てを選びました。
今、手が離れましたので、ホームヘルパーの資格を取ろうと思い勉強を始めたところです。両親は４人とも健在です。これからの高齢化に向けて勉強しておきたいことがたくさんあり参加させていただきました。
（金子） この数日、専業主婦家庭の優遇の問題なども新聞に出ているので、そういうお話も是非それぞれの立場からしていただきたいと思います。
（F:30・女・既・専・1） ２歳になる女の子が１人います。８年間働いてきましたが、出産と同時に家庭に入り専業主婦を

しています。そろそろもう１人ほしいと思っていますが、育てるのにお金がかかることと、主人の帰りが遅く両親も地方なので、これで子どもの数が増えるとまた自分の負担が増えるという問題があり、二の足を踏んでいる状態です。

皆さんの意見を聞き、自分の意見を申し上げて、子育ての環境が良くなっていったらいいと思い、参加させていただきました。

(G:35・男・既・専・1) 仕事を始めてから８年になり、家内は専業主婦で、５歳の娘がいます。私は、大学の事務をしており、毎年「18歳未満の人口減少の対策」を、職場全体で話し合っており、個人的にも興味があり、参加させていただきました。

家内は、10年間社会から離れているため、なかなか戻りたいけど戻れないという状況があるようです。

皆さんの意見を参考にさせていただき、私なりの意見も申し上げたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(H:34・男・既・専・2) 社会人11年目です。子どもは３歳の娘と１歳の息子がいます。結婚して５年目です。家庭の中では、３人目が欲しいなという気持ちはあるのですが、経済的なことや、いま以上に妻に負担をかけることを考えると、なかなか踏み切れません。そうしたことも踏まえて、自分の意見を言える場がないので参加させていただきました。

(I:32・男・既・共・1) 生命保険会社勤務で、勤務社労士です。家内は国立がんセンター勤務で、２歳７カ月の娘を「がんセンター」内の保育所に預けています。育児ということでは、比較的恵まれた環境あると思います。私は、もともとシルバー関係・高齢者畑の出身ですが、ここ２～３年少子化の問題を社内で研究をさせていただいています。

いろいろ言いたいこともあり、社内で言えないことや研究などもありますので、是非披露させていただければと思っています。

(金子) 皆様方、非常にいろいろな問題意識をお持ちで、我々もワクワクしていますが、時間が限られていますので、趣旨としては少子化とその対策ということですので、自由に意見を言っていただきながら、いくつかテーマだけは、こちらで絞らせていただきます。

まず、原因がわかれば対策も立てられるだろうと思いますが、今年６月に厚生労働省から対策の一番新しいものが出て、お手元に「少子化対策プラスワン」というものが届いていると思いますが、国が最も新しい対策として出しているもので、最初に書いてあることは、「男性の働き方を変えましょう」ということです。

その背景には、男性が働きすぎるので、子育ては妻の方にしわ寄せとして重い負担をかけてしまうからという認識があります。現状の認識と、働き方を変えるということが可能かどうかということも含めて、是非意見をいただきたいと思います。

まず、男性の働き方を変えようということなので、Ｉさんから、その点について、ご自身の立場や、あるいは仲間の方や、そういう経験も含めて、是非意見をいただきたいと思います。

(I) 数年前に、私があるアンケートをしたところ、１組当たりの出生人数が、基本的に銀行・保険会社・証券などいわゆるホワイトカラーが低く、ブルーカラーが高いという結果が出ました。一方で、労働時間を見ると、銀行・保険会社・証券は、長く午前様は当たり前で、12時前に帰ることはあり得ないということで、労働時間と出生率は、比例しているということがわかりました。

もう１つ、会社の何万というデータを見ると、10月生まれの子どもが多い。これは、科学的な根拠がないので、社内の資料として使用していますが、労働時間と休暇がどうも比例しているようです。世界的にも見ても、他の先進国も共通の悩みで、ドイツのホワイトカラー層は、日本のホワイトカラーよりも働いています。やはり、そういう人たちは「少子」もしくは「生まれない」ということで、その対策は、根本的に労働時間をどうするかというところに来ているのではないかとは思います。

労働時間をどう変えていくかについては、政策的なこともあるでしょうし、かなり強硬なカンフル剤が必要になるのではないかと思います。ニュージーランドがいい例ですが、ホワイトカラーについても、「９時前には必ず帰る。それを超えたら、厳しい刑罰が待っている」そのぐらい厳しいものが必要になると思います。

(金子) そのとおりだと思いますが、問題は、いま出てきたホワイトカラーだけではなく、他のところでも男性の長時間勤務は当たり前になっていて、それに対して、何も手を打てない、個人ではどうにもならないという諦めのようなものがあると思います。そのあたりをどうしたらいいのかというのがないままに、「とにかく男性は早く帰りなさい」というのが国から出されて、非常に戸惑っている感じです。

Ｉさんとしては、具体的な資料も持っていますので、一言で言うと、いかがでしょうか。厚生労働省がそういうことを言っても、「できないのではないか」という感じですか。

(I) 私は、「頑張ろう」という掛け声があっても、何も変わらないだろうと思います。労働基準監督署がかなり強硬に発動するとか、勧告などをしなければ変わらないと考えています。

(金子) これを作るときに、厚生労働省で話をしたのですが、「あなた方が７時か８時に帰れば、国民はみんな帰ることができる」と言ったら、自分たちは忙しいので無理だと言いながらこれを出さざるをえないというジレンマがあるようです。

(H) やはり、早く帰れれば、それなりに子育てに協力もできると思います。そういった希望もありますが、やはりそこはジレンマで、企業に勤めている以上は、お金を貰っており、働けばそれなりに生活にもプラスになっていくというこ

ともありますから、仕事を簡単に切り上げて帰れないのが現状です。仕事は、山のようにありますので難しいと思います。

子どもは２人いますが、私が勤めている会社は柔軟で、有給休暇も取りやすい環境です。子どもが生まれた時は、当然休暇をもらいましたし、子どもが生まれる日には、当日電話をして病院に駆けつけました。やはり、自分の中で何となく周りに迷惑をかけているということと、企業風土なのか、一般的な考え方なのかわかりませんが、休むことに対して抵抗があり、世の中の考え方が変わらないと難しいと思います。

あと、住宅事情があると思います。私は、住まいは浦和で会社は東京ですので、通勤に１時間半かかります。行き帰りが自由にできないというのも、ひとつ問題のような気もします。

(金子) 世の中が時短になればいいですけれども、そこだけ切り取って考えると、国際競争で負けられないといった会社もたくさんあるし、そういう意味では、もっと働けという方向に走っているような気がします。人は減らしながら「もっと働いてくれ。」のようなことがあるので、なかなか時短を速やかにというようにならない気がします。もっと包括的な方法を考えていかないといけないだろうという気がします。

(G) 職場が大学勤務なので、比較的自由な時間が取りやすいことと、休暇なども取りやすいという状況にあります。メーカーの営業をやっている大学の同期などに聞きますと、リストラで人が減らされて、その分仕事が倍になって毎日午前様になり、しかも家が遠いという状況ですと、働き方を自分で工夫しようと思ってもやはり難しいと思います。ただ単に働き方を見直そうということでは難しいし、景気の動向も関係してくるのではないかと思います。

(金子) 私も大学で働いているので、入学試験の時にどれくらい受けに来てくれるかと悩みます。周囲に私立大学の先生方もたくさんいて話を聞くと、本当に大変な時期だと言っており、それはそれでつらい思いをみんなしているわけです。

男性の方々の意見を伺いましたが、女性の方からも、男の働き方を変えるというような厚生労働省の方向性が、うまくいけばいいけれどもなかなかという意見もあるかと思います。妻の立場から夫の働き方を見ていかがですか。

(F) 主人は公務員です。公務員のイメージは、定時で帰って休みも多くいという感じがあると思うのですが、結婚したら休みもないし、帰りも遅い時は12時前になったり、朝も６時半ごろには家を出て行きます。

(金子) 地方公務員ですか、国家公務員ですか。

(F) 国家公務員です。子どもと１週間会わないということも結構あり、たまに土曜日にいたりすると「あれ？」という感じで、子どもも寄りつかなくなってしまっています。いけないと思いつつ、自分自身ではどうにもならない、従っていくしかないのかなと思っています。

(金子) 子どもが生まれてからも、ほとんど自分でひとりで。ご亭主はノータッチですね。

(F) お風呂もほとんど入れてもらえません。

(金子) もう、それでしかたがないという感じですか。

(F) 諦めました。

(金子) 専業主婦を選択するということですね。

(F) はい。

(金子) Eさん、いかがですか。

(E) 子育て期間における残業時間縮減ですが、主人は役職で残業をしても給料には関係ありません。役職に就く前は、残業時間がお金に換算されていましたので、家計がすごく助かっていたというのが本音です。ですから、残業時間を減らしていただくのはすごく妻としてはうれしいですが、収入が減ることも事実であり難しいところだと思います。

また、子どもが生まれたら、父親は誰もが最低５日間の休暇の取得というのは、漠然とした施策ですが、「子どもが生まれたら」というのはどれぐらいの期間なのかということです。赤ちゃんの間１年ぐらいとか。小学校に入学するまでは、すごく手がかかります。私は、両親と暮らしていませんので、私が病気になった時は、主人に休んでもらいます。妻のために休むのは格好悪いというので、適当な理由をつけて休むなど苦労をしています。５日間という日数は、どこから数字が出てきたのという感じもします。

(金子) ご亭主は、長時間勤務ですか。

(E) ９時までには帰ってきます。

(金子) それでも、９時ですか。

(D) 子どもを産んで、子育ては「こんなに大変だ。」というのを初めて実感しました。主人の仕事は夜勤もあり、夜勤の次は通常、労働時間の短縮や休みということであれば話がわかるのですが、朝まで仕事があっても、普通どおり９時に出社ということもあります。そういう会社の勤務形態について、厚生労働省がそれぞれの企業にきちんと…。

(金子) 指導するとか。

(D) もっとしっかりしていただきたいと、妻の立場からは思います。

(金子) 夜勤がない時の帰りの時間はどれくらいですか。

(D) 現場の仕事ですので、まちまちです。

(金子) 交替制で。

（D） そうです。日曜日が休みですが、仕事で疲れてぐったりしている姿を見ると、子育てを手伝ってもらう気持ちになれません。
（金子） 家にいても。
（D） はい。是非そういう基準の点検や、審査の方を平等にしていただきたいと思います。
（金子） とりあえず厚生労働省が音頭を取ってですか。
（D） そうですね、お願いしたいです。
（金子） 基本的にはもっと短く働けるような環境を作りましょうと、いう感じでしょうか。
（D） そうです。
（金子） 早く帰りなさい、「少子化対策プラスワン」に書いてあることを何かの形で実現する方向を目指したいという…。
（D） はい、そう願いたいです。
（金子） 会社がなかなか「うん」と言わないかもしれませんけど…。
（D） 今、転職も考えているみたいです。
（金子） 転職しても、働く時間はあまり変わらないと思います。むしろ長くなるという場合もあるでしょうから。
（D） そうですね。
（金子） Cさんはいかがでしょうか。
（C） 主人は、アメリカ系の銀行に勤めていましたが、今年の10月にリストラに遭って、今は資格取得のため勉強しています。また、最近ある会社からヘッドハンティングの話があり、面接を受けたりしています。私も香港系の会社に勤めていますので、２人とも外資系でした。主人が勤めていた時は、７時か８時には帰宅し食事も作ってくれました。「どうして早く帰れるの」と聞きますと、アメリカ人は家庭をすごく大切にしますので、朝は８時からプレパラトリーミーティングをやりながら、５時には仕事を切り上げて家族の団らんを大切にするという家庭が多く、その日のうちにしなくてもいい仕事は次の日にまわし、割り切って早く帰っていましたので、主人も早く帰してもらっていました。

子どもがいませんので、８時ぐらいから一緒に食事を用意したり、２人で話をする時間も１日３～４時間取れました。そういう意味では、日本の企業と違って時間はあり、国や会社がもっと男性に対して子育てに参加できるような環境を整備するのが良いと思います。

例えば、育児休暇や産休は、女性だけが取るものだと思っているところが多いですが、男性も育児休暇を取れるような制度を作り、子どもを保育園に送り迎えする時間を作ってあげられるような環境を国が働きかけることが一番だと思います。会社もそういう制度を作ったら、男性ももっと子育てに参加できるのではないかと思います。

主人が言うには、日本の典型的な家庭では、自分が仕事を切り上げて早く帰ると仕事をしていないように思われて恥ずかしいとか、奥さんが家にいて子育てをするもので、主人は働いてお金を稼いでくるものという、外国とは割り切り方が違うのではないかと言っています。男性が家にいることは恥ずかしいことではないし、奥さんが働いて稼いでもいいことです。温かく長い目で見てあげるような環境を作るのがいいと思います。

これから日本も多様化して、欧米化した方がいいということはないのですが、日本の典型的な、「男性は外で働いて、子育てに参加しないのは当然」という考え方を少しずつ変えていけるような社会を作っていけばいいと思います。
（金子） そのとおりだと思います。今回の「少子化対策プラスワン」の、育児休暇を男性も10%まで、女性は80%程度と、数字まで挙げて目標としたいということが出されているますが、これまでの発言からして、なかなか難しいのではないかという悲観的な見方がありますね。

育児休暇をもっと男性も取るように働きかけると言いましたけれども、より突っ込んで、どうしたらみんな取れるようになるとお考えでしょうか。
（C） だれか一人そういう方がいると他の人も取りやすくなるのではないかと思います。職場の方々がそれをサポートしてあげる環境を作ってあげることです。
（金子） ある本に、デンマークの事例があり、子どもが生まれて３年間は夫も定時に帰る義務があるということを法制化する。したがって、子どもが３歳までは、亭主も５時なら５時にきちんと帰る義務があって、その人の仕事は40代や50代の子育てと関係ない年齢の人が残業してカバーするということをやったらどうかという提案が書いてあります。私は、そのとおりだと思いますが、仮にそういうことを法律で明文化したらなりそうですか。
（C） いいと思います。
（金子） ３年間だけでもそうしなさいと…。
（C） そうですね。
（金子） 残業は、そのときはしなくていいけども、他の人たちがカバーすればいいという話ですね。
（C） そうです。
（金子） Bさん、いかがでしょうか。
（B） 主人が転職して２社目で、初めの会社はファミリーレストランの正社員で、24 時間営業の店で働いていました。夜勤もあれば昼間の勤務もあり、休みは平日が基本ですが、休みの曜日も全く決まっていない状況でした。私は、土・日曜日休みの会社に勤めていましたので、夫婦でありながら、全く家の中で顔を合わせない夫婦でした。顔を合わせな

かった日の最長は１週間で、私が出社した後に主人が帰ってきて寝るという生活がずっと続きました。「これは、おかしい」と、それこそ労働基準法に違反しているような働き方でしたし、冗談で私が会社を訴えようかと言ったこともありました。一店舗に社員が２人ぐらいしかいない体制ですので、そういう働き方を緩和することができなくて…。

これから子どもをつくろうかと考えたとき、主人が「今の働き方だと、絶対俺は子育てには一切かかわれないだろう。それは俺も嫌だ」と言いましたのが一番の理由で、今年の春に転職しました。いまは、土・日曜日休みの普通の勤務になり、今の状況なら少しは子どもことを考えられるということで、子づくりを考えはじめたというのが正直なところなのです。

私が勤めていた会社は、どんどん人員削減をしていて、育児休業の話も、就業規則で規定されているますが、実際は、「子どもができたら、辞めてね」という会社でした。ですから、育児休暇など、女性も取る前例がなければ、男性なんて以ってのほかという、考えの古い硬い会社でした。男性に対する優遇措置というのは、今後も事実上は難しいというのを実感しているところです。

（金子）先ほど申し上げた事例のように、生まれて３年間ぐらいは定時に帰ってもいいというようなことも無理な感じですか。

（B）主人が勤めている会社も、先輩が帰らなければ自分が帰れないような雰囲気があるらしいです。また、会議を夜の８時からやったりしますので、「子どもが小さいからなどという理由で早く帰らせてください」と言えません。自分が一番勤務期間が短いというのもありますが、とても言える立場ではないのが本音です。

（金子）１週間ぐらい前、作家の藤原伊織という人は、某広告代理店に勤めて小説を書いていた人ですが、「明日会議を11時からやるよ。」と言われたとき、「午前ですか？午後ですか？」と聞いていた、それぐらい激務だということを新聞に書いていました。

（A）主人も私も同じ大手化学メーカーの総合職で入社し、主人は役職付で残業手当はつきません。いま、子育てはどのようにしているかと言うと、朝、私が保育園に連れてい行って、帰りは、主人の方が私より早く帰ることが多いので、主人が迎えに行っている状況です。

（金子）若いときもそうですか。

（A）いまは、調査関係の部署にいますが、以前は現場に近いところにいて、研究職だったので、深夜まで働いていましたが、体を壊していまは比較的楽な部署にいます。そのせいか、役職になってからも、上を望むという感じが夫にはないようです。いまの役職で、ある程度の実績を上げて、会社に対して貢献していれば、家族を大事にしてもいいのではないかということで、「今日の仕事はここまで」という感じで割り切って帰ってきて娘の世話をしています。５年前に生まれてからずっとそういう生活をやっています。

中小企業も含めて、企業で働く人たちは、基本的に企業の業績や利益がどのくらい上がっているかといった個別の事情で、かなり働き方も違ってくると思います。ですから、国が一律に数値目標を出しても、個々の企業にとって「うちはそういう状況ではない、利益が上がっていない」と言われてしまえばどうしようもない。私の会社も、「少子化対策プラスワン」が出たときに話題になり、「この会社は、男性に育児にかかわらせるような余裕ってないよね」というのがみんなの意見でした。

ですから、本当に国が真剣に考えているのであれば、こういう数値目標は甘いなという気はします。本当に浸透させていきたいのであれば、企業が共働きの人を補助していく、あるいは男性の育児休暇を取った実績が一定以上の会社には報奨金を出すとか、税率を低くするなど、お金の外圧で企業を動かさないかぎり、変わらないのではないかと思います。

もっと広く考えると、国民の意識というか、日本はアメリカに次いでＧＤＰが世界第２位だと思いますが、そういう位置でいることに齷齪しているというか、「そんなに国力がすごくなくてもいいから、人間らしく生きられるような国にする」といった意識改革をしないかぎり、日本人はみんな働き蜂のままになってしまうので、国がその辺をもう少しリードすれば良いと思います。いままでの、「妻は専業主婦、夫は働き蜂でやっていく」というのは、少しずつ変わってきてはいますが、もっと変えていくために、それこそ首相自ら言ってもらうとか、何か世の中全体を変えるような雰囲気にもっていかないかぎり、数値目標をいくら掲げても達成はされないし、「まず隗から始めよ」という言葉があるように、「公務員からまずやれ」と。公務員が、「仕事を定時でやめ退社しています。民間企業もやりましょう」と言えば、民間企業も動くと思います。そういった努力をせずに言葉だけでやっていると、非常に上っ面で、企業はこういうものを出されても「うちはできないね」で終わってしまう。あまり意味がないのではないかなという気がします。

（金子）「アメとムチ」の手段というのは、いろいろあると思いますが、それは、あとで話題にしたいと思います。

働き方をお尋ねしたのは、実は、もう一方で私の本業である高齢者の社会参加の問題があって、もっと高齢者を活用したらいいじゃないかという意見があるわけです。もちろん、子育てにも、皆さん方の母親の世代がもっと若いお母さんたちの応援に回ったらどうだという意見と、職場でも、60歳で定年になった人がブラブラするのももったいないので、再度ワークシェアリングのような形で何かできないか。いずれにしても、残された社会資源である高齢者を、子育てでも仕事の現場でも、もっと活用できないかというアイデアもあって、それが、世代間協力ということで、シニアプランはもちろんそういうことを中心的に考える機関なものですから、次にそういう話をお尋ねしたいと思います。

「強制力がないから目標をいくら出してもうまくいかないよ」という話はそのとおりだと思いますが、働き方を少し見直す場合、ワークシェアリングで、同じ仕事を多くの人間で分け合うとして、そこにＯＢやＯＧが参入してくるとすると、仕事の時間はそれぞれ減るけれども当然収入も減るということになり兼ねないわけです。そういうワークシェアリングについて、いかがでしょうか。

(A) 私も、子どもが１歳までは短時間勤務をしていましたので、収入ダウンは一度経験をしています。それは、もう本人の割り切り方と思います。個人的なレベルでは、子どもが一定の年齢に育つまでは、短時間でもしかたないし、収入もその分減ってもしかたがない。その分、子どもと接する時間も長くなるのだからという、個人的な割り切りで乗り切ったような気がします。ですから、そこに抵抗感があるのであれば、長時間働いてしかも高齢者の方をお願いできるような、例えば、ワークシェアリングではないのですが、いま子どもを預けていて、保育園は７時15分までですが、それ以降残業でどうしても自分も夫も迎えに行けないというときは、高齢者の方の「ふれあいサービス」を利用しています。

これは、高齢者の方が保育園に迎えに行って、その方が自宅で子どもを見てくれるというサービスです。そういう家庭と職場での高齢者のフォローの両方活用すれば、うまくいくのではないかと思います。職場でも、高齢者は再登録して短時間勤務や産休に入っている方の仕事をその方が埋めることは可能だと思います。

また、専門性のある仕事をしていた場合、単純に業務が置き換わらない場合もありますので、そういったデータベースをどうやって作るのかなというのはあります。自分の仕事の単純業務はやってもらったとしても、頭脳労働は誰がやるか。ですから、在宅勤務でフォローするとか、仕組みをきちっと作っていかないと、高齢者の方を入れれば済むということにはならないと思います。

(金子) Ｅさんだったと思いますが、労働時間が減ることで収入が減ることは困ると言っていたと思いますが、ワークシェアリングというのは、基本的に、短く働く代わりに１人分の収入は減るだろうという部分を想定しているところが多いと思います。でも、何かの形で働く時間を短くした方がいいということであれば、いかがでしょうか。収入と労働時間の関係というのは…。

(E) やはり収入が減るのは深刻な問題ですのでが、ワークシェアリングをするのであれば「私が我慢しますよ」ということになると思います。

(金子) いまの状態で、ワークシェアリングをするとそういう現象が必ず起きるので、社会全体の負担を増やし、その分をワークシェアリングに振り分けて、労働時間はある程度減っても収入が減らないように保障するという手があるわけです。例えば、みんなが「うん」と言えば、消費税を上げて、消費税の一部をワークシェアリングする会社に回すということは、政策としては可能なわけです。そういう方向性はいかがでしょうか。

(E) 消費税を増やすのは、すごく反対です。３％から５％にあっという間に上げられてしまっていますし、介護保険でも、弱者からでも回収するようになっています。そういう方法は、すごく反対で、税金を集めることばかり考えないで、無駄使いをなくしていただきたい。いままで無駄に使っていたものを振り分ける。そういう考え方にしていったらいいのではないかと思います。

(金子) おそらく、その無駄使いの中身をそれぞれの人が違ったふうに考えているだろうと思うのですが、どういうところが無駄使いだと思いますか。

(E) ストレートに言いますと、軍事費です。軍隊を持たない国であるのに、そういうものを法制化して税から取っているというのはすごく憤りを感じますし、細かいところで言いうと、年末になると無駄に道路を掘りくり返しています。私は、車に乗りますので、すごく腹が立ちます。なぜこんな時期に道路を掘りくり返さなければいけないのか。たぶん、予算の関係で、次年度の予算をもらうために余った分を使っていると思います。そういうところを探したら、たくさんあります。ですから、課税をするのではなく、無駄をなくして回していただきたいと考えます。

(金子) 男性の方々はいかがですか。自分の仕事を考えた場合、ワークシェアリングは可能でしょうか。

(I) 2000年にオランダに行って、オランダ型ワークシェアリングを見てきました。事務職については、ワークシェアリングはできていました。ただ、「裁量労働者についてはワークシェアリングはできません」ということでした。私も契約上、裁量労働になっていて、ほとんど労働基準法などが適用されない労働者です。自分の仕事が分けられるかというとわけられません。ただ、他の職種もそうだと思いますが、事務関係はワークシェアリングが可能ではないかと考えています。オランダ型ワークシェアリングをそのまま日本に持ち込むのは、不可能だと思いますが、日本型ワークシェアリングで考えればいいのではないでしょうか。

一方で、給与・社会保障・雇用保険などの問題で、現在パートには雇用保険、厚生年金、健康保険など未熟なところがあります。それを整備して、給与についても多少補填があれば、住居の問題なども解決し、最低限の生活は営めるのではないかと思います。

生産性という観点では、ワークシェアリングは、一般的に向上し、時間が短いので集中してでき生産性は落ちないと思います。企業の国際競争力という点でも、問題ないと思っています。

(金子) 通常の事務職、ルーティンワークのワークシェアリングは可能だろう。しかし、専門的なところが、なかなかワークシェアリングできないのではないかという不安が残ると思いますが、それについてはいかがですか。

(I) 私の会社でも、外資でやっているところはあります。ドイツ人や、アナリスト・ファンドマネージャーなどがいま

すが、どう見ても分けられないです。本人の裁量で頑張っている世界ですので、それが企業の競争力の源ですから、そういう人たちは諦めてもらうしかない。ただ、事務関係については、ワークシェアリングは可能だと思います。

ストップウォッチを持ってタイムスタディを取ると、非常に無駄なところが多いです。８時間労働していますけど、ストップウォッチで見てみると、どうも３時間ぐらいで終わりそうなところもあります。

（金子）Ｈさん、ワークシェアリングについていかがですか。

（H）考え方が難しいという気がします。理想的でいい発想という気はしますが、実際、自分の実務に当てはめてみたとき、可能かと言うと、なかなか難しいところがあります。入社して数年の若い社員の仕事を分けるのは、可能かもしれませんが、ある程度責任を持っている人の仕事を分けるとなると、結局自分でもう一度チェックしなければいけない。どっちに責任を持たせるかというと、やはり自分が見なければいけないというのもあると思います。

また、専門的な仕事になると分けられないから、自分がそれを最後までやらなければいけないと思いますし、なかなか難しいと思います。

（金子）Ｇさん、どうですか。

（G）自分の仕事のスタイルが大学の就職部ですので、30 代の我々のスタッフは、例えば、カウンセリングなど専門的な仕事をやりたいのですが、実際の働き方は９時から６時ごろまでは受付に学生が相談に来ます。それは、書類の受付やカウンセリングなどで、ずっと学生と接していますので、机に座って落ち着いて専門的なことをやりたくてもできない状況です。

一方、役職定年で部長職が終わって 65 歳までいる方が職場内にいますが、部長職に就いた方に、「書類の手続きだけだから、受付をお願いします」とは、言えない雰囲気もあります。

専門的か事務的かというところで、事務的な部分でやっていただくことはたくさんあると思いますし、我々の業務の中ではかなり事務的なことで時間が取られている部分があるので、できればそういうところはワークシェアリングに振り分けたい気持ちはあります。また、先ほど言っていたお金の部分ですが、自分が共働きであれば多少年収が下がってもいいですが、いまは残業も付かないし、１人の収入でやっているという立場では収入ダウンは厳しい感じはします。

（金子）この１週間、専業主婦優遇を見直して、配偶者特別控除の 38 万円（最高）をなくしていくということが話題になっています。結局国の収入が乏しくなったので、実質的に増税路線になる形で、配偶者特別控除を廃止すると、５万円ぐらい税金が増えることになります。

それから、専業主婦としても年金の掛け金を払う方向に行くと思いますので、おそらく 30 万円ぐらい主婦としては出費が増えるわけです。専業主婦は優遇されているという評価の中で優遇をやめるという建前で出てきた政策のひとつなのです。Ｆさん、専業主婦として優遇といわれた場合、いかがでしょうか。

（F）優遇という実感ないです。

（金子）控除が 38 万円あるわけで、それを全部やめる。

（F）収入がないのに、５万円持っていかれてもというのが本音で、働いていれば多少税金を払うのは義務だとは思うのですが、小さい子どもを抱えて働くというのは本当に厳しい状況です。なかなか企業も採用してくれないですし、そこで税金だけ取っていこうというのは厳しいです。

（金子）優遇というようにお感じにならない。Ｅさんはいかがですか。

（E）同じです。

（金子）そうすると、具体的には、国が言っていることに対して、どこが優遇されていないという感じでしょうか。配偶者特別控除は廃止して、国の収入を増やしていろいろなところに回すということを言って、その一部は「子育て支援」に回るかもしれません。少子化対策で 2,500 億円は付けるという話は出ているわけですが、そういうことを考えてもやはり優遇というようには感じないですか。

（E）感じたことはありません。

（金子）Ｄさん、いかがですか。働いている立場で専業主婦の方の優遇という問題について。

（D）優遇という感じはしません。専業主婦に課税するという制度はひどいと思います。

（金子）やはり、専業主婦の方は働いていないからという理由でしょうか。

（D）そうです。

（金子）では、優遇ではないわけですね、現状は。

（D）はい。

（金子）働いている側は、自分で税金や年金を払ったりしている。それは、当然ででしょうか。

（D）当然だと思います。

（金子）Ｃさん、いかがですか。

（C）専業主婦というのは立派な職業の一つだと思います。家にいて家庭を守って子どもを育てて、教育や躾などいろいろやっています。それで立派な子どもを育てれば、社会にも還元でき、収入が主人の分しかないのに、その方々の優遇措置を取り上げてしまうのは反対です。

もっと他のところで税金を削るべきだと思います。例えば、先ほど言っていたワークシェアリングの観点からは、天

下りの方がたくさんいると思うのですが、ある一定の年齢で辞めていただき、経験や知識は豊富だと思いますのでうまく活用させていただいて、少しでも男性が早く帰れるようにするという意味では良いと思います。全部が全部元官僚の方を天下りさせるのではなく、ごく一部の優秀な方を活用すれば社会全体にとっても良いのではないかと思います。

(金子) Bさん、いかがですか。

(B) 私は、正直言って専業主婦になりたくてなったのではなく、主人があまりにも激務で、夫婦の時間が持てないため、やむを得ない選択で会社を辞めたというのが正直なところです。

最近の配偶者特別控除の件など、すごく興味を持ってニュースなどを見ているのですが、やはり優遇されているという実感はないですし、国の方は、少子化対策として予算を計上しても、具体的にそれを何に使ってくれるのかよくわかりません。例えば、子どもを預ける施設をつくってくれた場合、こちらは増税になるわけですから、家計の負担も大きくなりますし、国が何か用意してくれたことを金銭的に利用できるかが疑問になります。

(金子) たぶん、できないでしょうね。

(B) ですから、優遇されているという実感は、本当にないです。

(金子) Aさんはいかがですか。

(A) 私は、皆さんと違う感じ方かもしれませんが、「私、会社を辞めるわ、夫の扶養に入った方が楽だから…」という友人が多かったので、そういう考え方は受け付けられません。やはり日本の税制は、男性が仕事に専念でき、それだけの収入が保証される税制で来たのではないかなと思います。専業主婦の方も、そういう意味で扶養に入って税金を控除されるという仕組みのような気はします。ですから、私も共働きで税金を払っているわけです。なぜ世の中にこれだけ貢献しているのにという感覚があります。例えば、子どもを育てることに関して何らかの援助があるのは当然だと思いますし、本来、世の中で力を生かした方がいいような女性の方まで家庭に入っているような気がします。

ですから、配偶者特別控除も給与収入が103万円以下という限度があるから、仕事はここまでででという派遣の社員の方などがたくさんいます。限度がやはり女性の社会進出を堰き止めていると思いますし、専業主婦の方だって働きたいと思っている方はいます。そういう方にもっと機会を与えるという意味で、意識を変えていただきたいと思います。

中国は、男性も女性も同等に働くような世の中ですが、日本は、男性が働いて女性は働かないという風習がありましたが、最近は働く女性が多くなってきていますので、もっと平均化されて、みんなの負担が同じようになっていくのが理想的だと思います。

子育てに関しても、女性の仕事ではなく男性もかかわるというように平均化されるべきです。そのために税金を使ってほしいと思います。子育て支援という意味でも、男性に対する援助のようなものも含めて、世の中を平均化できるようになっていけば良いと思います。

(金子) 専業主婦はおおよそ1,000万人います。のんびりしている方もいますが、一方では、住民運動・市民運動・消費者運動などをやっている主力は、実は専業主婦です。こういう人たちが全然いなくなって、会社だけに、それこそ朝８時から夕方７時まで閉じこめられると、市民運動も住民運動も何も出てこないという、別のマイナス、社会全体として問題があって、なかなかそのあたりの評価のしかたが難しいなという感じがします。

私たちが研究しているかぎりでは、少子化の原因には２つあって、１つは既婚者が子どもを産まなくなった、あるいは産み育てるのが非常に難しくなったので、既婚者の子どもの数が減ってきた。これに対して、どのような対策をしようかということがあります。日本の場合、「エンゼルプラン」という形で８年間、主に保育・育児支援という形でずっと行われてきた政策があります。

もう１つは、既婚者の支援だけでは、少子化対策がうまくいかない理由は、未婚率が上がってきたということがあるわけです。これは、結婚の自由・出産の自由・個人の自由などの問題で、原因はわかっているけれども、未婚者対策ということは口に出せないままずっと来たという歴史があります。それで、これからの時間は、できたら両方とも、こうしたらいいのではないかということを、ご自身の経験も踏まえて話し合っていきたいと思います。

既婚者の子育て支援は、保育園を中心としたさまざまな施策があるが、未婚者については何も手を打てなかったという歴史があります。しかし、全体として子どもが減ってきたのは事実で、このままだともっともっと減ってくることも事実なので、そのあたりをこうしたらいいという話に是非向けていただきたいと思います。

(I) 私は、社宅住まいをしていますが、６割は子どもがいない世帯です。いたとしても、女の子が多い。女の子が生まれるの確率が高いのは、科学的根拠でいわゆるダイオキシンの問題があり、男子はそういうものに弱いそうです。その辺に問題があるのではないのかなと思います。社会的な要因より環境的要因だと思いますので、そこを解決していく必要があると思います。

(金子) 環境問題ですね。

(I) そうです。

(金子) 環境ホルモンということでしょうか。

(I) ２点目の未婚者対策ですが、今年、厚生労働省が官製お見合いに対して、自治体に補助金を出しますということであり、かなり苦情があったようです。個人的に言わせてもらえば、大きなお世話だと思います。ただ、結婚しないということについて何も策を講じないのは、それはそれで問題だと思います。

（金子）お見合いに税金を出すということについては、反対意見が多かったのではないかと思いますが、だからといって、日本の場合、結婚しないと子どもを産まないという文化なので、産む瞬間は結婚しています。産んですぐ離婚するのですが、産んだときは未婚の母ではない。日本の女性はは、スウェーデンやデンマークのように、常時半分以上未婚の母にはならないだろうと思うので、国がお見合いさせるという理屈はよくわかるわけです。税金を使っていいのかという問題はもちろんありますが、国民性の違いが非常にはっきりしているので、未婚の母も認めればいいじゃないかと言われても、実際にはみんな嫌だと言うし、なかなか難しいと思います。

（H）既婚者の子どもが少なくなったという意味では、大きな目で見ると、核家族が一番の原因ではないかという気は何となくしています。昔は、子どもがたくさんいましたが、今は少ない。やはり、親と一緒に住んでいないから子育てが大変だとか、奥さんが働けないということもあると思います。先ほど、私自身の話もしましたが、３人目はきついなというのは、見てくれる人がいないのと、子ども１人にかかる教育費がかかりすぎる。そういう意味では、経済的な面と、子どもを見てくれる環境ということが一番大きいと思います。

未婚者が増えているというのは、難しい問題ですが、一人でいる方がやりたいこともできるし、経済的にも楽だし、結婚しなくても付き合っているということで心も満たされるというのもあると思います。こればかりは強制はできませんが、子どもが少なくなると、日本経済などへの影響という意味では、考え方を変える何かがあった方が良い気がします。ただ、具体的な話はちょっと…。

（金子）日本経済が悪くなる場合、勤めている会社の業績が落ちてきて商品が売れなくなります。大学なども、学生が来なくなるのでまさしく目に見えるわけですが、一般企業でも、少子化によってマーケットが萎んでくると、それをお客さんに考えている企業の業績は必ず落ちてきて、リストラが始まって何割かが解雇になるということになる筈です。

例えば、某出版会社は、受験産業で有名ですが、少子化によって参考書が売れなくなった。大学共通模擬試験の受験者が激減して、昨年とうとう取りやめたのです。それと同時に、リストラがあって４割が解雇されました。その中には、当然ＤＩＮＫＳの人もパラサイトシングルの人も入っているわけです。

一流企業に入っているつもりが、結果的には…。それが積もり積もって、経済の状態が悪くなるのだろうと、私などは考えますので、やはり何か手を打てることは打った方がいいだろうという気がするわけですが、なかなか答えが見えてこない。そういうことを感じます。

Ｈさんが、出生率の低下の原因で、ひとつは核家族だというのは、裏返して見ると家族内で手伝ってくれる人がいないということがあります。露骨に言うと、おじさん、おばさんのような人がいなくなった。そういうことであれば、ワークシェアリングの地域版で、地域の中で近所の人やいろいろなサービス支援センターの人などが臨時的に支援に回るという仕組みはかなり作られているので、そういうものをもっと進めていけば何とかなるという感じはしませんか。

（H）ベビーシッターを頼もうと思ったこともありました。ただ、金銭的に余裕がない。

（金子）金銭の問題がある。経済的にと言いましたね。

（H）はい。

（金子）それが非常に格安だったら、当然おばあさんが手伝ってくれる分、近所のベビーシッターの方が手伝ってくれることに対してはそれほど違和感はないですか。

（H）はい。

（金子）知り合いの方がいいですか、知り合いでない方がいいですか。

（H）できれば、知り合いの方がいいと思います。

（金子）少子化が直に来ていると思いますけどいかがですか。

（G）学生を見ていると、やはり人間関係が希薄と言いますか、ちょっと嫌なことがあるとすぐ離れていってしまうということがあります。私は、就職部にいますが、仕事をしない学生が本当に増えていて、４～５人に１人はフリーターという状況です。なぜかなと言うと、自分の親の世代を見て、親がリストラされたり、結婚生活で苦労しているのを見たりすると、自分は苦労して定職に就かなくても、15万円ぐらいの給料が貰えるという状況を見ていると、やはり「楽な方を選ぶ」という傾向があるような気がします。

学生と話していると、どうしても、自分が「うちは35年もローンだぜ」などという苦労話をしてしまうものですから、どちらかというと楽しい話をするというよりは、結婚生活などの苦労話をしてしまう。そこで、「結婚って楽しくないじゃないか」というイメージ的なものがあって、結婚しなくてもいいという感じになってしまう気もしています。

（金子）フリーターの15万円は、個人ひとりでは生活できるでしょうけど、結婚したら…。

（G）だめでしょうね。「10年経っても20年経ってもフリーターをやっていては、ボーナスも出ないよ」なんて話はするのですが、今やりたいことがないというので、「夢もない、学生時代に楽しいことは何もない」という感じです。

（金子）不況、不況と言われるけれども、就職部で仕事をされていたら、求人の数が減ってきたのは感じられますか。

（G）職種を選ばなければ求人数自体は横ばいで、仕事はありますが、価値観がだいぶ自分の頃とは違っています。自分の時は、大手企業に入ってバリバリ仕事したいなというところもあったのですが、例えば、内定を大手メーカーと、創立２年のベンチャー企業のどちらを選ぶかと言うとベンチャー企業を選びます。僕らと価値観がだいぶ変わってきた感じがします。

（金子）男も女も同じですか。
（G）そうです。女性も一緒です。やはり、私の兄が30代後半ですがまだ子どもがいません。仕事が一番乗っている時期で預けるところもないということで…。先日、新聞を見ていたら、早稲田大学が学内に保育所を設けられるそうで、今までは、スタッフ用の保育園だったのがこれからは大学に社会人の人も入って来るので、そのための保育園を作るという記事が載っていました。民間だと、某出版会社の保育所が社内にあったり、そういう環境づくりは必要かと思います。
（金子）Ｆさん、既婚者向け・未婚者向けの２通りのご意見をお願いします。
（F）未婚の問題は、私の妹は29歳でまだ結婚していません。Gさんが言ったような理由と一緒で、今の若い人は、定職を持たずにフリーターが本当に多いと思います。私の弟も24歳ですが、職を転々としています。私の年代だと、男性は余程のことがないかぎり辞めないという意識がありました。今の若い人は、気に入らないとすぐ辞めてしまう。そんなに会社に対して拘りがないように思っているようです。定職を持っていないと経済的な不安もあり、女性も結婚して安心という意識が薄れてきて、未婚の問題につながっていると思います。
（金子）定職を持たないということと不況ということは、あまり関係がないような感じですか。
（F）価値観だと思います。
（金子）価値観ですね、Gさんが言ったように、求人数はそこそこある。しかし、気に入った会社、仕事の内容がどうも自分に合わないということだったら、フリーターでいいよということですね。
（G）そうです。
（金子）そうすると、経済的な元気がついても、ただそれだけではフリーターが減るということはないかもしれません。価値観がそこまで変わっているということであれば…。
（G）いま、１～２年生向けに職業観を育成するという授業がどこの大学も増えてきています。先日、ＮＨＫのドキュメンタリーで、高校卒の就職が大学卒よりも厳しい状況との報道をみました。高校の総合的な学習を入れていくことも必要ではないかと感じました。
（金子）Ｆさん、既婚者向けの子育て支援についていかがですか。
（F）子どもが少なくなっているというのは、子育てしにくい環境というのが一番だと思います。私は、練馬区に住んでいますが、武蔵関に子育てを終えた50代・60代の方々がボランティアで、一日中小さい子どもを持った親子を対象に自宅を開放しています。子どもを見てもらっているお母さん同士が、お茶を飲んだり情報交換したりという場があるのですが、そういう場所をもっとシニアの方々に提供していただければ、子どもも増えていくのではないかと思います。
（金子）先ほど、Ｈさんが核家族だから応援する手がないということと同じですね。
（F）そうです。
（金子）地域の中で応援する手を増やしていって欲しいですか。
（F）はい。
（金子）増やしていくためには、ボランティアに期待するというのは、当然限界があるだろうから。
（F）そうですね、国がもっと…。
（金子）何らかの報酬を援助するとか。
（F）そういうことをもっとバックアップして欲しいです。
（金子）その援助の資金というのは、どうしましょうか。それは、Ｅさんが言ったように、やり繰りするべきであるという話でしょうか。あるいは、消費税がいま５％ですが、それを上げて、その分を子育て支援に回すとか、いろいろな手があるわけですが、いかがですか。
（F）天下り企業は多いと思います。主人の勤めている会社もたくさんいます。その方の給料を支払うために、商品販売のノルマを課せられて、自腹を切ってノルマを達成して、その利益で天下りの方に給料が行くというシステムなのです。雑誌などでも取り上げられたと思いますが、そういうものをなくしていったらいいのではないかと思います。
（金子）特に、みんなで負担するということではなくて。
（F）はい。
（金子）Ｅさん、いかがでしょうか。
（E）少子化対策と言われているのですが、少子化問題や結婚しないというのは、今の時代にすごく即していると思います。これから戦争をなくしましょうということで、戦争で人口が減ることもないですし、医療が発達していますので、亡くなる方がすごく少なくないます。
　少子化対策で、「どんどん子どもを増やしましょう」というので、子どもを増やすと、その子どもたちは減らないわけです。少しは減るかもしれませんが、どんどん減らない時代になってきています。例えば、これから80～90年後に、その子たちがおじいちゃん、おばあちゃんになったころ、そのときの対策はどうするのということを考えると、今よりもっと深刻になるのではないかと、私は、察します。確かに一時期よりは減っているかもしれませんが、環境問題ではないですけど、子どもを少なくしていく時代になってきているのではないかと思います。
　ですから、政策で子どもを増やすというのは、男性の就業時間の問題や、女性の社会進出を手助けするということを

進めていただければいいと思います。子どもを増やさなければいけないというところに結び付くのかどうかというのが、すごく疑問に思います。
（金子）Ｅさんのご主人の会社は、何か物を作って売っているところですか。
（Ｅ）不動産です。
（金子）そうすると、少子化によって売りにくくなる。売れなくなるということは、見えるわけですね。
（Ｅ）はい。
（金子）そうすると、会社の業績が落ち込み必ずリストラが始まって、失業率が上がってという一方の読みがあるわけです。それについていかがですか。子どもが少なくなって当然だと言う考え方なら、そこまでのリスクが見えていかないと、当然という答えがなかなか説得力を持たないだろうと思うのですが、いかがですか。
（Ｅ）だからといって、開発を続けていくのかと言うとそうではないです。
（金子）開発を続けていかないと、不動産業務はやっていけない。会社自体が成り立たないですね。成り立たなければ、従業員は３分の１若しくは半分はいらないという話になって、リストラ組に入るかもしれないという危険性があると思いますが、それは、いかがですか。そういう問題が、必ず少子化には付きまとうというように、私は、思うわけです。では、未婚者対策は、いまの話であればいらないわけですね。対策は必要ないということになりますか。
（Ｅ）対策というか、増やさない時代なのではないかなと感じます。
（金子）私が、今、危惧しているようなことを、もっと考えていただいたらいいかもしれませんね。自分の職業・会社・勤務にいずれ影響が出てくるだろうと…。
（Ｅ）目先はそうですが、逆に質問しますが、今の子どもたちがおじいちゃん、おばあちゃんになった時代のことはどうなるのですか。減らないわけですから…。
（金子）もうかなり減っているわけです。かなり減っている中で。
（Ｅ）減る要因がないわけですよね、なくなってきているわけですから。
（金子）子どもはどんどん減っている。
（Ｅ）減ったままで、今の状態のまま持ち上がって老人になるのですから。
（金子）その間、何十年かは経済構造も職業構造も変わってきて、今の子どもの話よりも、我々の次の世代や、次の次の世代の働き方も含めて、かなり変わる筈です。
それでは、Ｄさんいかがですか。
（Ｄ）未婚者に関しては、本人の自由なので、親に勉強しろと言われても自分の気持ち次第ですから、「お見合いしろ」とか「結婚しろ」と言われても本人の自由なので、それは、周りがとやかく言うことではないと思います。
（金子）どうにもならないということですね。
（Ｄ）はい。
（金子）既婚者対策で、何か希望はありますか。
（Ｄ）子どもをもう１人ほしいなと思っても、今の保育サービスが充実していないので、もう一歩踏み出せない状態にあります。子どもがほしいという人に対してだけでいいので、そういう設備をもう少し充実させていただきたいと思います。
（金子）もう少し具体的に、どういう保育サービスを充実したらいいでしょうか。
（Ｄ）シニアの方に協力してもらいたいです。ベビーシッターだと入会金と年会費だけで５万円ぐらいかかって、その都度１時間1,500円かかり、とても何のために働いているのかというのがあるので、できればボランティアにお願したいです。
（金子）シニアのボランティアがいいですか。
（Ｄ）はい。見ていただければすごくありがたいです。
（金子）もうひとつ、ベビーシッターの費用をみんなで薄く広く支える手もあるわけですが…。
介護保険と同じことを子育て保険のような形で提唱しているのですが、介護保険の場合は、40歳を過ぎたら、自分の親が生きていても死んでいてもとにかく、札幌だと毎月2,900円ぐらい払うわけです。それと同じで、30歳を過ぎたら子育て基金として、子育てのために産んでも産まなくても2,000円ぐらい払って、その一部をベビーシッターの費用がいる人に支援したり、大学に入る時に基金から支援するということを言っているわけですが、そういう考え方についていかがですか。
（Ｄ）賛成です。
（金子）その場合は、介護保険と同じ理屈なので、産まない人も払うということになるのですが、それはいかがですか。自分は産まなくても、次の世代のことをみんなで支え合う…。
（Ｄ）やはり産まない方も登録していただければいいと思います。
（金子）その中から持ってくれば、別にシニアのボランティアだけに期待しなくても、もっとベビーシッターで働く人も増えるわけですね。それに対して、みんなで支払うという仕組みを作ればそれはそれでいいと思いますが…。
（Ｄ）明るい未来につながると思います。

（金子）既婚者の子育て支援になると思いますが。
（D）思います。
（金子）Cさんは、今のところ子どもはいませんが、そういう制度についていかがでしょうか。
（C）日本では、ベビーシッターや保育園に高いお金を払って、自分たちの給料がなくなったりして、すごく考えさせられてしまうような社会だと思います。アメリカは、高校生や大学生がバイト感覚で１時間５ドル、日本円で600円ぐらいで子どもを預かってくれます。確かに、若い学生に子どもを見てもらうというのは不安な点もありますが、幼児虐待もなくうまくいっていると思いますので、日本も学生を利用したり、安く預けられるところを探していけるような社会をつくっていただきたいと思います。

また、香港によく行きますが、中国人は、すごく家庭を大切にしていて、女性はみんな働きに出ています。食事を作っている暇はないので、稼いだお金で家族全員が外で食事をしています。外食では、栄養が偏ったりするので問題があるかもしれませんが、奥さんが働けるように、「アマさん」というメイドを安い時給で雇えるということもあります。日本は、もっと安いベビーシッターやメイドを雇えるような環境づくりをしていただきたいと思います。

練馬区の例が出ていましたが、中国人の方は、近所の子ども５～６人をボランティアが面倒を見ている家庭がたくさんありますので、そういうのも地域ぐるみでやっていけるようにしたらいいのではないかなと思います。

それから、既婚者で子どもがほしい人が、なかなか子どもができなくて不妊治療を受けているという話を友達からよく聞くのですが、確かに、つらいのと時間がかかり、お金が膨大にかかるといいます。保険でカバーできるようなシステムを作ってあげて、不妊治療の負担が軽減できればいいと思います。これは、精神的にも肉体的にもすごく苦痛なものだと聞いていますので、そういうところを国は援助してあげればいいのではないかなと思います。

２点目の、未婚者が多いと言うことですが、私の会社の女性も30代後半から50代で結婚してない方はたくさんいます。ひとつは、自分の給料で十分食べていけることや、一人の方が気楽で何の制約もないということで、仕事の方を重点的に考えている方が多いと思います。私も、結婚して思ったのですが、男性の考え方がわかって視野が広がるということと、主人の友達や家族と合う機会があり煩わしいこともありますが楽しいことも多いです。そういう意味で、もっと視野を広げて、結婚したらこういういいこともあるとか、子どもを持ったら、子育ては大変だけど子どもと一緒に自分が成長していけるといういい面もたくさんあると思います。

経済的負担ばかり頭の中に入れないで、精神的にもっと自分が成長していけるようにし、意識改革を若い人の間で植え付けていけるようなことを考えればいいと思います。たぶん、文部科学省などの教育の問題にも絡んでくると思いますが、日本の社会が、少子化で数十年か後にはこうなっていくだろうけども、もっと結婚や子どもを育てることに対していいこともあるということを、今の学生に教えればいいのではないかと思います。

中国は、今ひとりっ子を奨励しています。日本と逆パターンですが、これ以上人口が増えるといろいろな面で問題が出てきます。社会主義、共産主義の国であり、学校で徹底的に教え込んで子どもは１人以上産まない。もし産んだ場合は罰金を科し、２人目も女の子だったら農村に養子にやるなど厳しすぎますが、それを徹底しているところもあります。日本も、それほど厳しくなくてもいいと思いますが、個人の意思も尊重しながら、ある程度学校で教育していったらいいのではないかと思います。
（金子）お見合いに国が税金を使うというのはいかがですか。
（C）税金でそこまでする必要はないという気がしますが、あまりにも結婚しない人が多い場合は仕方ないと思います。
（金子）農村では、花嫁対策として自治体がやっているところもありますが…。
（C）それは奨励していいと思います。
（金子）Bさん、いかがでしょうか。
（B）未婚の方の例ですが、私は28歳で結婚したのですが、これでも友人の中でトップの結婚でした。いまだに結婚など全く考えない友達が多く、正社員で働いていようがフリーターで働いていようが、いまはお金も適度にあって自由ですし、結婚したら男性の労働時間が長くて家事を分担するということが難しい時代です。そうすると女性にほとんど家事や雑用などが降りかかってきて、結婚するメリットを感じない友達が非常に多いわけです。

特に、男性のフリーターの立場では、結婚なんて考えつかないと思いますが、本人の意識が第一だと思います。親の育て方の影響もあると思います。

昔は、学校を出たら会社に入って、ある程度働いたら結婚するというのが当たり前でしたが、今は、フリーターで家でブラブラして自由な生活を送っていてもとがめない親が、とても増えていると思います。私の実家は、働かないなんてとんでもないという家でしたので、フリーターは経験せずに正社員をやってきました。そういった親の世代の考え方が変わってきているのも大きい原因ではないか思います。
（金子）ちょっと手の打ちようがないなということですか、未婚者については…。
（B）はい。
（金子）既婚者はいかがですか。
（B）子どもを預ける施設の費用が、非常に高いということがネックになります。私は働きたいタイプなので、お腹の中の子どもが来年生まれたら施設に預けようと思っていますが、子どもを預けて、私の給料を全部施設に支払うことにな

ったら、ほんとうに働く意味があるだろうかと考えてしまいます。

もちろん、子どもとふれ合う時間が長ければ長いほど良いとは思いますが、メリハリをつけて、子育て中であっても外に出ていろいろな情報を得たり、赤ちゃんのときでも、お母さんが１人になる時間というのも大事だと思います。ですから、私も預けて働きたい気持ちがあっても、金銭的な面でどうなるかという不安はあります。

それから、住宅事情ですが、一戸建てで狭い土地に無理矢理建てたような家ですので、２人目を考えたとき、子どもが大きくなって場合、部屋を別々にすることはとてもできない間取りです。そういうことを考えると、子どもを２人以上持つのは非常に不安になります。また、双方の両親も商売をやっていますので、預けたりできる状況ではありません。その辺が、この先子どもを何人持とうかということで、一番気になるところです。

（金子）子育て費用を、自分で稼いだ分からほとんど保育園やベビーシッターに払うことについて、いろいろ考えることがあるということでしたが、その部を先ほど私が言ったような、30歳以上はみんな介護保険と同じような理屈で別枠で用意して、子育て費用の一部を賄うというアイデアについてはいかがですか。

（B）とてもありがたいと思います。ただ、子どもを持たない方からも徴収するような制度ですと、子どもを持たない方からどのくらい反感をかうか予想はつきません。そういった制度を作ることで、金銭的に子どもを持った方が得というと言葉は変ですが、ＤＩＮＫＳの方などに少し植え付けるというか、そういったきっかけのひとつにはなると思います。

（金子）介護保険制度を作るときも、親がいる人は当然にしても、親がいない人からも同じ金額を取るのはおかしいという意見はありました。介護保険の場合は、20年経ったらあなたも対象になるという理屈があるわけですが、子育ての場合は…。

（B）一生対象にならない人もいると思います。

（金子）長い目で見ると、年金の支払いに回ってくれるとか、健康保険をかけてくれるので、子どもがいないとどうにもならないから、広く見ると戻ってくるのですが、介護保険のように自分も対象になるというように直接考えにくいので、そのあたりはストレートに同じではありません。しかし、そういうことを含めて、いま言ったように、パラサイトシングルやＤＩＮＫＳの方にも、もっと子どものことを考えてもらうきっかけにはなると思います。

（B）私は介護保険を払っていませんが、高齢者のことを考えていかなければいけないという意識させられていることもありますで、意識改革という面では有効だと思います。

（金子）Ａさんお願いします。

（A）ＣさんとＢさんが言ったことに近いと思いますが、基本的に子どもを産む産まないとか、結婚するしないというのは、最終的には個人の判断だし、したいと思ってもいい相手がいなかったりするかもしれません。そこに国が介入してくるのはどうかなと思いますので、税金を使ってお見合いさせるというのは疑問に思います。

私は入社して26歳のときに結婚して、それからＤＩＮＫＳが長くて、子どもを産んだのは33歳の時です。26歳でなぜ結婚したかというと、同期が結婚したり、会社の仲間もみんな結婚してしまい、その勢いに乗って何となく手短に相手を決めてしまったということです。

「結婚って、いいわよ」など、周りに言ってくれる人がいると自分もそういう気になる。Ｇさんが言ったように、周りが「結婚もなかなか捨てたものないし、ひとりもいいけど結婚はもっといいわよ」と言われたら、「じゃ、この人でもいいかな」という感じで結婚してしまうものなのかもしれません。今の世の中は、ひとりでいることがいいような風潮になりつつあるので、余計結婚に夢が持てなくなっているような気もします。何か結婚に夢が持てるようなことができればいいのではないかと思います。

その一方で、私も結婚してから、ひとりになりたいとか、子どもができてからも、夫や子どもと離れて、「お願いだから、１泊２日、私を自由にして…」と思ったことが何度もありますので、自由を得られるサービスがあったらほしい気がします。

未婚の方に関しては、結婚に対するいいイメージを植え付けてあげられるような、精神的な意味での政策が取れればいいと思います。それから、子どもを産む産まないに関しては、やはり産みたいけどできない方もいると思うので、Ｃさんが言った不妊治療をある程度国が援助すべきであって、保険で対応するべきではないと思います。

義理の妹は子どもがほしくて、激務の金融機関を辞めて専業主婦になりましたが、なかなか子どもができません。不妊治療もしているのですが、弟だけの収入だとちょっときついからどうしようか悩んでいるという話を聞きます。不妊治療の費用負担を国が援助することは、少子化に貢献すると思います。

また、子どもを産んでからの不安が非常にあると思います。私も、ＤＩＮＫＳの時は、「一生子どもは持たない。それで何か言われるのだったら、その分税金という形で社会に貢献すればそれでいいんでしょ」という考えがありました。先程、金子先生が言ったように、子どもというのは、次世代の日本のためには必要なものだと思いますし、企業活動もそれに支えられている部分があるというのは非常に感じますので、当然子どもは必要と思います。

ただ、個人の自由をあまり妨げてはいけないので、ある程度ペイすれば自分は子どもを産まないという選択ができる自由を持たせる税制だったら良いと思います。

消費税は、あまりに一律すぎてどうかなと思います。いまの５％を引上げると、日本の国力自体が、少子化などのためだけではなく、経済的に落ち込むような気がしますので、消費税を上げるのは反対です。税金の無駄使いを抑えて、

介護保険のように負担税のようなもので、子どもを産まない自由を選ぶ代わりに税金を払いますとか、結婚しない自由を選ぶ代わりにその分社会に貢献しますという税制があってもいいと思います。それが、社会人として権利を行使する以上当然の義務という気はします。

あと、保育料が高いというイメージは意外とそうでもないと思います。税金を払っている金額と比例していますので、収入が少ない人は１万円ぐらいでいいし、収入が多くて税金もたくさん払っている人は月５万円というように差があります。

ですから、一概に保育園の預ける費用が高くてためらっている人がいるのであれば、それは誤った情報ではないかと思います。子どもを産んでわかったことですが、産む前は保育料がすごく高いのではないかと思っていたのですが、そんなに負担ではありませんでした。また、先ほどの「ふれあいサービス」だと１時間800円です。高齢者の方が見てくれて800円というのは非常に安くて入会金なども入りません。そういうサービスがあるということをもっと周知宣伝していった方がいいと思います。

それから、病児保育と小学校に入ってからの保育に関しての視点が非常に抜けているというのが感じられます。病児保育に関しては、病児保育施設は非常に少ないし、周りで働いている友人などから子どもの病気が一番困ると話をよく聞きます。不安で働けないという人もいますので、保育園が病児保育施設を併設してもらえると、仕事を休まずに済むので不安もなくなるのではないかと思います。

それから、小学校ですが、小学校に入ると、突然厚生労働省の所管から文部科学省の所管になってしまい、子育てのフォローが途切れてしまっています。小学校の低学年までは、ある程度親が残業しても児童を預かってくれるなどの仕組みづくりをしてほしい。そのためには、小学校が、文部科学省を離れて厚生労働省などと助け合って、小学校の保育施設のようなものをつくっていただいただくような視点を持っていただければと思います。

（金子） 不妊治療で出産している子どもは１万人ぐらいいます。いま、120万人生まれていますから、120万人のうち１万人が不妊治療で生まれていることになります。そこのところを保険で面倒見るということになる思います。しかし、保険を使えば、もっと不妊治療に出掛ける方は多くなるだろうと思います。

ちょうど時間になりましたので、これで終わりたいと思いますが、最後にどうしてもこれだけ言いたいというのがありますか。男性に、一言「イエス・ノー」かでお聞きしたいのですが、介護保険と同じようなバージョンで、子育て基金のような制度をつくることに対してはいかがでしょうか。

（I） 介護保険が措置から契約になりました。自己の権利意識が高まるという点では、イエスです。ただ、方式として「基金がいいか」「税方式がいいか」というと、税方式がいいと思います。

（金子） 所得税か何かで。

（I） 目的税です。

（金子） Hさん、いかがですか。

（H） 子どもが２人いますので歓迎します。

（金子） Gさん、いかがですか。

（G） 税金という形より、保険でやった方がいいと思います。

（金子） 介護保険のような感じで…。

（G） そうです。配偶者特別控除の件もそうですが、税制が30代から40代にかけて一番お金が必要な家庭に負担がかかってくるような感じがするので、これ以上税金という形でやると、税に対するイメージが悪くなるので、保険の方がいいという気はします。

（金子） 貴重な意見をいただきましてありがとうございました。

（佐藤：事務局） どうも長い間ありがとうございました。

第4部　付属資料

資料1　グループインタビュー参加者属性一覧

資料2　アンケート調査票

資料3　少子化対策プラスワン(要点)

資料 1

グループインタビュー参加者属性一覧

			札幌第1回	札幌第2回	札幌第3回	札幌小計	福岡第1回	福岡第2回	福岡第3回	福岡小計	東京第1回	東京第2回	東京第3回	東京小計	総合計
子供なし	既婚(共働き)	男　性				0				0				0	0
		女　性	1		1	2	1	1	1	3		1	1	2	7
	既婚(女性は専業主婦)	男　性				0	1			1	1			1	2
		女　性	1		1	2	1			1	1	1	1	3	6
	独身	男　性	2	1		3		1		1				0	4
		女　性		2	1	3	1	2	2	5				0	8
	子供なし小計		4	3	3	10	4	4	3	11	2	2	2	6	27
子供1人	既婚(共働き)	男　性	1			1				0		1	1	2	3
		女　性	1			1	1	1	1	3	1	2	2	5	9
	既婚(女性は専業主婦)	男　性	1	1	1	3		1	1	2	2		1	3	8
		女　性	1		2	3				0	2	1	2	5	8
	独身	男　性		1		1				0				0	1
		女　性	1			1				0				0	1
	子供1人小計		5	2	3	10	1	2	2	5	5	4	6	15	30
子供2人以上	既婚(共働き)	男　性				0	1			1				0	1
		女　性		1	2	3		1	2	3				0	6
	既婚(女性は専業主婦)	男　性				0				0		1	1	2	2
		女　性		1		1	2	1	1	4	1	1		2	7
	独身	男　性				0				0				0	0
		女　性				0				0				0	0
	子供2人以上小計		0	2	2	4	3	2	3	8	1	2	1	4	16
総合計			9	7	8	24	8	8	8	24	8	8	9	25	73

資料 2

＜座談会(グループインタビュー)直後のアンケート調査について＞

この度は少子化に関する座談会(グループインタビュー)にご参加いただき誠にありがとうございます。座談会を踏まえて皆様のご意見を改めてお聞きしたく実施するものであります。

本調査で少子社会とは、「出生率が低下し、子どもの数が減ることにより、将来的には高齢化率が非常に高くなるとともに、人口規模が縮小していく社会」を意味しています。

あなたのお考えに最も当てはまるものを1つだけ選んで、その数字を○で囲んでいただきます。なお、「その他」を選択した場合には具体的にご記入ください。

なお調査の結果は全てコンピューターにより数字で処理されますので、皆様のお名前が出ることはありませんのでご安心下さい。

(注…回答者数73名　数字はパーセント表示　NAは無回答)

問1 あなたは出生率の低下により子どもの数が少なくなってきている「少子化」について関心がありますか。

1. 非常に関心がある	43.8	2. 多少関心がある	53.4	3. あまり関心はない	1.4
4. 全く関心はない	1.4	5. 分からない	0.0		
				NA	0.0

問2 少子化は(A)経済成長が鈍化したり、地域社会の活力が低下し、現役世代の税や保険料負担が増えるという意見と、(B)住宅事情を好転させ、受験競争を緩和させ、通勤通学の混雑を解消するという意見があります。

あなたは(A)(B)のどちらに近いですか。

1. 全く(A)に近い	49.3	2. やや(A)に近い	34.2	3. やや(B)に近い	11.0
4. 全く(B)に近い	1.4	5. 分からない	4.1		
				NA	0.0

問3 出生率が低下している原因をどのようにお考えですか

1. 個人の結婚観、価値観の変化	49.3	
2. 子育てと仕事の両立の負担感	21.9	
3. 育児の心理的・肉体的負担・不安感	11.0	
4. 子育て費用の増大	12.3	
5. その他(　　)	4.1	
6. 分からない	1.4	
		NA 0.0

問4 晩婚化の理由をどのようにお考えですか

1. 独身生活の方が自由である	21.9	
2. 仕事を持つ女性が増えて女性の経済力が向上した	34.2	
3. 仕事のためには独身の方がよい	1.4	
4. 家事・育児に対する負担感、拘束感が大きい	19.2	
5. 結婚しないことについての世間のこだわりが少なくなった	13.7	
6. 親離れができていない	4.1	
7. その他(　　)	2.7	
8. 分からない	2.7	
		NA 0.0

問 5　夫婦の出生力の低下の背景として考えられる要因はどのようにお考えですか

1. 都市部において一貫就業するなど女性の就労形態の変化による影響が大きい	24.7
2. 育児に対する心理的・肉体的負担による影響が大きい	27.4
3. 教育費などの経済的負担による影響が大きい	41.1
4. 年齢的な理由による影響が大きい	4.1
5. その他(　　)	1.4
6. 分からない	1.4
NA	0.0

問 6　「結婚したら子供を持つべきだ」という考え方についてどのようにお考えですか

1. そう思う	21.9	2. そう思わない	26.0	3. どちらとも言えない	50.7	4. 分からない	1.4
NA	0.0						

問 7　結婚したら「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方についてどのようにお考えですか

1. 同感する	2.7	2. 同感しない	52.1	3. どちらとも言えない	43.8	4. 分からない	1.4
NA	0.0						

問 8　女性が報酬をともなう職業(パート・アルバイトを含む)をもつことについてお尋ねします。

1. 女性は職業をもたない方がよい。	0.0
2. 結婚するまでは、職業をもつ方がよい	2.7
3. 子どもができるまでは、職業をもつ方がよい	11.0
4. 子どもができたら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつ方がよい	31.5
5. 子どもができても、ずっと職業を続ける方がよい	37.0
6. その他(　　)	15.1
7. 分からない	2.7
NA	0.0

問 9　少子化対策を行うことについてどのようにお考えですか

1. 結婚・出産そのものを奨励し少子化を解消すべきである	13.7
2. 結婚・出産を阻む要因を取り除くような環境整備をすべきである	78.1
3. 結婚・出産は個人の問題なので少子化対策は行うべきでない	8.2
4. その他(　　)	0.0
5. 分からない	0.0
NA	0.0

問 10　出生率低下の原因は、未婚率の上昇と既婚者の出生数の減少に大別されます。かりに少子化対策を立てるとすれば、優先して働きかける対象としてあなたはどちらを選びますか。

1. まず未婚者対策	23.3	2. まず既婚者対策	76.7		
NA	0.0				

＜未婚者対策を選ばれた方のみ＞

副問 10-1　どのような働きかけですか

n = 17	最優先	まあ優先	あまり優先せず	全く優先せず	
1. 子育ての楽しさや充実感を伝える	1 64.7	2 17.6	3 17.6	4 0.0	NA 0.0
2. 子育ての家族的意義を伝える	1 17.6	2 70.6	3 11.8	4 0.0	NA 0.0
3. 子育ての社会的意義を伝える	1 29.4	2 58.8	3 11.8	4 0.0	NA 0.0
4. 子育ての地球的意義を伝える	1 11.8	2 47.1	3 35.3	4 5.9	NA 0.0

＜既婚者対策を選ばれた方のみ＞

副問 10-2 どのような働きかけですか

n = 56	最優先		まあ優先		あまり優先せず		全く優先せず		
1. 行政による子育て支援環境の意義	1	64.3	2	33.9	3	0.0	4	0.0	NA 1.8
2. 子育て負担の社会的理解及び支援	1	53.6	2	41.1	3	1.8	4	0.0	NA 3.6
3. 家族内部における子育て協力の意義	1	25.0	2	57.1	3	14.3	4	1.8	NA 1.8
4. 地域内部における子育て支援の意義	1	17.9	2	64.3	3	12.5	4	1.8	NA 3.6

問 11 子育ての負担が大きいから、子どもを産むことへの手控えが進み、日本社会は少子化になったという意見があります。まず子育てに伴う経済的負担に対して、どう考えますか。

1. 自分で産んだ人は自分で育てることが当然だ	23.3
2. 子育てにはたくさんのお金がかかるので、社会的支援は当然だ	72.6
3. 分からない	4.1
NA	0.0

問 12 問 11 の設問趣旨を踏まえて、子育てに伴う時間的負担についてはどう考えますか

1. 自分で産んだ人は自分で育てることが当然だ	23.3
2. 子育てにはたくさんの時間がかかるので、社会的支援は当然だ	69.9
3. 分からない	6.8
NA	0.0

問 13 問 11 の設問趣旨を踏まえて、子育てに伴う精神的・肉体的負担についてはどう考えますか

1. 自分で産んだ人は自分で育てることが当然だ	21.9
2. 子育て期の精神的肉体的負担は大変なので、社会的支援は当然だ	72.6
3. 分からない	5.5
NA	0.0

問 14 親が乳幼児期に子供を自分で育てることと、保育施設で専門の保育士が育てることは同じでしょうか。

1. まったく違う	39.7	2. やや違う	42.5	3. やや同じ	5.5
4. まったく同じ	5.5	5. 分からない	6.8		
NA	0.0				

問 15 あなたは 3 歳までの子どもの成育にとって理想的な育児環境をどう考えられますか。

1. 親が中心になって育てる	2. 保育施設が中心になって育てる	3. 親も保育施設も使い分ける
30.1	0.0	23.3
4. 親も保育施設も地域の協力も得る	5. 分からない	
45.2	1.4	
NA	0.0	

問 16 介護保険では自分の親が亡くなっていても40歳以上の人は保険料を支払いますが、子どもがいない人も30歳を過ぎたら「少子化対策」の一環として社会全体で支えるために、介護保険程度の費用負担をすることはいかがでしょうか。

1. まったく賛成	16.4	2. まあ賛成	53.4	3. やや反対	12.3
4. まったく反対	8.2	5. 分からない	9.6		
NA	0.0				

問 17　父親の育児への参加をどのようにお考えですか

1. 母親と育児を分担して積極的に参加すべきである	57.5
2. 父親は外で働き、母親が育児に専念すべきである	1.4
3. 父親は時間の許す範囲内で育児に参加すればよい	37.0
4. その他(　　)	1.4
5. 分からない	2.7
NA	0.0

問 18　子育てを各世代が協力して支援するべきとの趣旨から、子育てを終えた高齢者世代がボランティアとして子育て(例　保育施設への送迎代行)に参加するということはいかがでしょうか。

1. まったく賛成	54.8	2. まあ賛成	35.6	3. やや反対	4.1
4. まったく反対	0.0	5. 分からない	5.5	NA	0.0

問 19　仮に行政が少子化対策を行う場合、重点的に取り組む対策はどのようにお考えですか

	最優先		まあ優先		あまり優先せず		全く優先せず		
1. 保育サービスの充実	1	65.8	2	31.5	3	1.4	4	0.0	NA 1.4
2. 児童手当の充実	1	50.7	2	31.5	3	12.3	4	4.1	NA 1.4
3. 育児休業制度の充実	1	56.2	2	34.2	3	8.2	4	0.0	NA 1.4
4. 出産・子育て後に再就職しやすくする	1	56.2	2	34.2	3	6.8	4	0.0	NA 2.7
5. 奨学金など教育費負担の軽減	1	37.0	2	52.1	3	9.6	4	0.0	NA 1.4
6. いじめの防止など教育環境の整備	1	23.3	2	41.1	3	32.9	4	1.4	NA 1.4
7. 住宅環境の整備	1	16.4	2	43.8	3	34.2	4	2.7	NA 2.7
8. 子の扶養控除額の引き上げなど税制面の優遇	1	45.2	2	42.5	3	11.0	4	1.4	NA 0.0
9. その他(　　)	0.0								
10. 分からない	0.0								

問 20　「今の世の中では、誰に頼ったらいいのか、本当は誰にもわからない」という意見には賛成ですか、反対ですか。

1. 賛成	9.6	2. まあ賛成	47.9	3. やや反対	21.9
4. 反対	8.2	5. 分からない	12.3	NA	0.0

問 21　「年金や医療など現代社会の仕組みは大変複雑で、それが今後どのようにして動いていくのかということには、われわれ一般の人間にはとても分からない」という考えには賛成ですか、反対ですか。

1. 賛成	17.8	2. まあ賛成	39.7	3. やや反対	20.5
4. 反対	13.7	5. 分からない	8.2	NA	0.0

問 22　「自分はこの世の中でどういう役割を果たせばよいかが分からない。自分が生きていることにいったい何の意味があるのだろう」という考えには賛成ですか、反対ですか。

1. 賛成	5.5	2. まあ賛成	12.3	3. やや反対	20.5
4. 反対	46.6	5. 分からない	15.1	NA	0.0

最後にご自身のことについてお聞かせ下さい

問 23　性別

1. 男　28.8　　2. 女　71.2　　NA　0.0

問 24　年齢はおいくつですか。

1. 30-34 歳　47.9　　2. 35-39 歳　50.7　　3. 40 歳以上　1.4

NA　0.0

問 25　現在の家族の形態は次のどれにあたりますか。

1. 一人暮らし　11.0　2. 夫婦のみ二人暮らし　20.5 3. 夫婦と未婚の子どもで暮らしている　57.5
4. 親と同居している(未婚・既婚を問わず)　5.5　5. その他　5.5

NA　0.0

問 26　未婚の子どもは何人いますか。

1. 0人　37.0　　2. 1人　38.4　　3. 2人　13.7
4. 3人　6.8　　5. 4人以上　1.4

NA　0.0

問 27　あなたのお住まいは持ち家ですか。

1. 親の持ち家に同居　4.1　　2. 自分の持ち家　37.0　　3. 家賃を払っている民間借家、アパート、マンション　37.0
4. 社宅　17.8　　5. 公営住宅　1.4　　6. その他　2.7

NA　0.0

問 28　現在のお仕事は何ですか。

1. 会社・商店の経営者　4.1　　2. 会社・商店の家族従業員　2.7　　3. 会社員　39.7
4. 公務員　4.1　　5. アルバイト・パート　11.0　　6. 専業主婦　26.0
7. その他(　　)　12.3

NA　0.0

問 29　最後に行かれた学校は何ですか。

1. 中学校　0.0　　2. 高等学校　9.6　　3. 短大・専修学校　37.0
4. 大学・大学院　53.4　　5. その他(　　)　0.0

NA　0.0

問 30　過去 1 年のお宅(生計をともにされているご家族)の収入はどれくらいになりますか。

1. 200 万円未満　2.7　　2. 200－399 万円　13.7　　3. 400－599 万円　27.4
4. 600－999 万円　43.8　　5. 1000 万円以上　12.3

NA　0.0

長時間どうもありがとうございました。

資料３

少子化対策プラスワン

（要点）

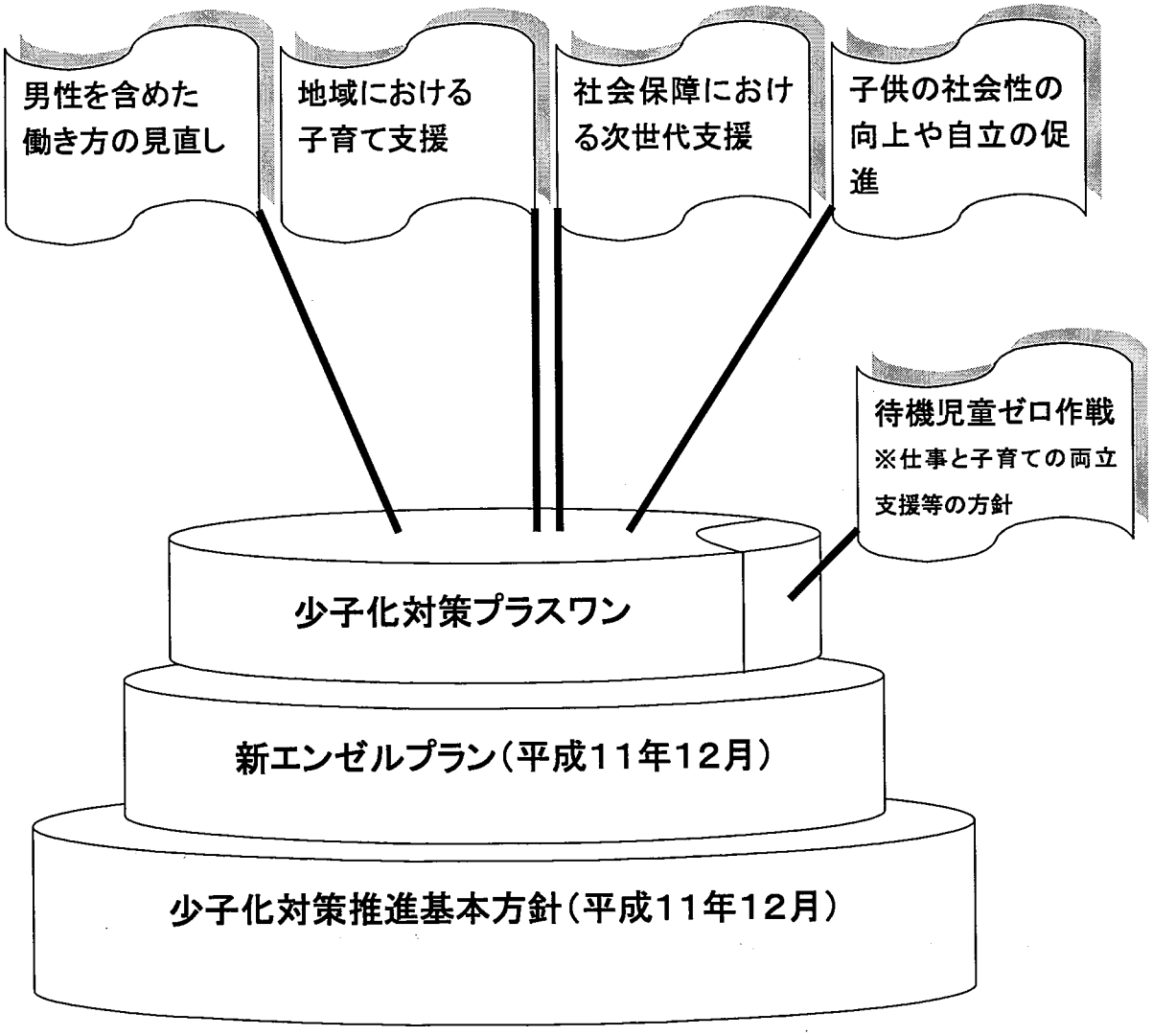
平成１４年９月２０日

厚生労働省

基本的考え方

○「夫婦出生力の低下」という新たな現象を踏まえ、少子化の流れを変えるため、少子化対策推進基本方針の下で、もう一段の少子化対策を推進。

○「子育てと仕事の両立支援」が中心であった従前の対策に加え、「男性を含めた働き方の見直し」など4つの柱に沿った対策を総合的かつ計画的に推進。



主な取組

すべての働きながら子どもを育てている人のために

1　男性を含めた働き方の見直し、多様な働き方の実現

○子育て期間における残業時間の縮減

○子どもが生まれたら父親誰もが最低5日間の休暇の取得

○短時間正社員制度の普及

2　仕事と子育ての両立の推進

○育児休業取得率（男性 10%、女性 80%）、子どもの看護休暇制度の普及率（25%）、小学校就学の始期までの勤務時間短縮等の措置の普及率（25%）として、具体的目標を設定

○目標達成に向け、様々な促進策を展開

3　保育サービス等の充実

○待機児童ゼロ作戦の推進

○パートタイムなどで働いている方々のための新しい「特定保育事業」（※）の創設

※週2～3日、午前又は午後のみの利用といった柔軟な保育サービスを提供

○保育ママについて、利用者の必要に応じた、利用日数・時間の弾力化

子育てしているすべての家庭のために

1　地域の様々な子育て支援サービスの推進とネットワークづくりの導入

○子育て中の親が集まる「つどいの場」づくり、地域の高齢者や子育て経験のある方等による子育て支援を推進

○「子育て支援相談員」による子育て支援情報の発信

○子どもとサービスをつなぐ「子育て支援委員会」の小学校区単位での設置

2　子育てを支援する生活環境の整備（子育てバリアフリー）

○公共施設等への託児室、授乳コーナー、乳幼児に配慮したトイレの設置促進

○「子育てバリアフリー」マップの作成、配布

3　社会保障における「次世代」支援

○年金制度における配慮（年金額計算における育児期間への配慮の検討）

4　教育に伴う経済的負担の軽減

○若者が自立して学べるようにするための奨学金制度の充実

次世代を育む親となるために

1　親になるための出会い、ふれあい

○中高生の赤ちゃんとのふれあいの場の拡充

2　子どもの生きる力の育成と子育てに関する理解の促進

○体験活動や世代間交流の推進

3　若者の安定就労や自立した生活の促進

○若年者に対する職業体験機会の提供、職業訓練の推進、就労支援など

4　子どもの健康と安心・安全の確保

○食を通じた家族形成や人間性の育成（食育）

○安全で快適な「いいお産」の普及

5　不妊治療

○子どもを産みたい方々に対する不妊治療対策の充実と支援の在り方の検討

今後の推進方策

国

- ○少子化対策の具体的検討を行うために「少子化対策推進本部」を厚生労働省に設置する。
- ○少子化対策をもう一段推進し、対策の基本的な枠組みや、特に「働き方の見直し」等直ちに着手すべき課題について、立法措置を視野に入れて検討を行い、年末までに結論を得る。

地　域

- ○地方公共団体における行動計画の策定等

企　業

- ○推進委員会の設置や行動計画の策定（※）

（※）「多様就業型ワークシェアリング」も視野に入れる。

少子化社会への対応を進める際の留意点

～「少子化社会を考える懇談会」中間とりまとめ（平成14年9月13日）抜粋～

①「子どもにとっての幸せの視点で」

子どもの数だけを問題にするのではなく、子どもが心身ともに健やかに育つための支援という観点で取り組むこと。

②「産む産まないは個人の選択」

子どもを産むか産まないかは個人の選択にゆだねるべきことであり、子どもを持つ意志のない人、子どもを産みたくても産めない人を心理的に追いつめることになってはならないこと。

③「多様な家庭の形態や生き方に配慮」

共働き家庭や片働き家庭、ひとり親家庭など多様な形態の家族が存在していることや、結婚するしない、子どもを持つ持たないなどといった多様な生き方があり、これらを尊重すること。

財団法人シニアプラン開発機構は…

厚生労働省、厚生年金基金連合会および民間企業の協力により昭和62年11月に設立された財団です。当財団では、おおむね50才以上の企業在職者及び企業退職者の方々を〈シニア〉と位置付け、豊かな人生経験を持ち、広範な分野で活躍できるこの年代の方々がその持てる力を活かして、充実したシニア生活を送るためのシステム〈シニアプラン〉を企画開発し、社会に提案しています。

【主な事業】

○サラリーマンの生きがい、社会活動、生涯学習等の研究
○年金生活設計（ＰＬＰ）セミナーの研究開発
○企業の雇用制度・福祉制度に関する研究調査
○シニアプランフォーラム等、豊かなシニアライフに向けた啓発活動

少子化の進行要因の分析及び各世代間における
子育て支援方策に関する調査研究

平成15年5月

財団法人　シニアプラン開発機構

〒160-0023　東京都新宿区西新宿4-34-1　　東京年金基金センター２階

TEL：03-5371-2022

FAX：03-5371-2100

http://www.senior.or.jp